奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成6年度

1995年

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成6年度

1995年

奈良市教育委員会

1　井泉ＳＸ01

2　濠ＳＤ07と溝ＳＤ06

藤尾城跡　全景

1　和琴　　上板表面

上板裏面

序

本報告書は平成６年度に奈良市教育委員会が行なった42件の埋蔵文化財発掘調査についての概要報告を集録したものです。調査は、平城京跡をはじめとして寺院跡、古墳時代の館跡、室町時代の山城跡など多岐にわたっており、いずれも奈良市の歴史を考える上で重要な多くの成果を得ることができたと考えます。

これらの調査はいずれも開発事業の伴う調査ですが、近年の発掘調査は、件数の増加もさることながら調査対象地が市内の各所に及ぶようになってきております。奈良市には、市の中心部を占める平城京跡のみならず各所に遺跡があることはよく知られているところであり、市街地に集中していた開発が、周辺地域に広範に及んだ結果でありましょう。今後は平城京域の保全とともに、これまでともすれば手薄になりがちであった京周辺の遺跡についても保存・保護・活用について十分な議論を行なっていかなければならないと考えております。

さて、本年度の調査は、平城京跡では西大寺駅南土地区画整理事業やＪＲ奈良駅周辺土地区画整理事業に伴う大規模な発掘調査により、当時の宅地内の様相について大きな成果を得ることが出来ました。史跡大安寺旧境内では、５年に及ぶ杉山古墳・杉山瓦窯の調査が終了し、今後の史跡整備を進めるうえでの貴重な資料を数多く得たところです。また南紀寺遺跡では古墳時代の豪族の館の一端を、柳生の藤尾城跡では中世山城の様相を明らかにするなど特筆すべき成果を得ております。これらの調査成果が学術研究の資料として、また埋蔵文化財に対する理解を深めていただくうえの一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査と本書の作成にあったて、御指導、御協力いただきました奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会をはじめとする関係諸機関の方々、調査に御理解と御協力をいただいた土地所有者の方々に対しまして心より御礼申し上げます。

平成７年３月

奈良市教育委員会

教育長　河合　利一

例　言

1　本書は、平成６年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告を集録したものである。また昨年度に実施した発掘調査のうち平城京286-1・286-2・290・291次調査、南紀寺遺跡第４次調査、藤尾城跡第１次調査を併せて掲載した。

なお、本年度の発掘調査のうち平城京東市跡推定地第16次調査は別に概要報告書を刊行した。また、平城京第282・299・310・318・320・322・323・324次、薬師寺旧境内第６次調査については来年度に、大安寺第65次調査（史跡大安寺旧境内保存整備事業に関わる大安寺杉山瓦窯跡発掘調査）と、平城京第321次調査（史跡朱雀大路跡保存整備事業）の２件については整備事業完了時に報告する予定である。

2　発掘調査は下記の体制で実施し、各調査の担当者は発掘調査一覧に示した。

社会教育部文化財課　　課長　安田龍太郎　主幹　森川倫秀

埋蔵文化財調査センター　所長　吉川邦彦　　主任　杉村武史　西崎卓哉

技術吏員　中井　公　篠原豊一　立石堅志　三好美穂

森下浩行　鐘方正樹　武田和哉　松浦五輪美

安井宣也　秋山成人　池田裕英　原田憲二郎

久保邦江　久保清子　宮崎正裕　中島和彦

奈良市研修生　程林泉（西安市文物保護考古所 助理研究員）

3　発掘調査と本書の作成にあたり奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会など関係諸機関から御指導と御協力をいただいた。記して感謝します。

4　発掘調査と出土遺物整理作業には、下記の方々の協力があった。

荒川　茂	稲岡賢一	植本武義	梅木繁一	奥田秀吉	金戸康子
木村喜代之	木村嘉宏	小西綾子	小西貢造	高橋敬輔	塩野谷八十布
瀧田　勘	多久裕三	田口奈美江	辰田吉弘	辻　俊浩	中村繁夫
林　健太郎	原田章英	藤沢辰雄	松田十三日	松村茂治	松本　威
福田米光	山原　明	吉村　章	浅田直美	今中博幸	岩下和江
浦本由紀子	大谷哲也	奥田維子	越智かすみ	小野直美	加藤美穂
角谷和美	金　秉三	久保友樹子	斉藤和子	佐伯全子	沢田　勝
澁谷富子	新谷弘美	芹川順子	芹川直子	芹野恒代	高木輝美
田島千津子	谷口　緑	田林香織	手塚真理	戸島美智代	中川裕美子
中桐知博	中島満寿江	坂東剛子	久富正登	藤井健太	松尾史子
松岡愛子	松山径子	虫明富美	村田真一	村松京子	八木健一郎
山前智敬	山崎裕子	山村光子	吉野康子	太田正人	

5　各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した、遺跡ごとの通算次数である。

6　本書の執筆は埋蔵文化財調査センター職員が分担して行い、文末に分責を明らかにした。

7　平城京第286-2次調査、第307次調査、南紀寺遺跡第４次調査の出土遺物については、下記の方々から科学分析の報告をいただいた。記して感謝いたします。

花粉分析・寄生虫卵分析	金原正明（天理参考館）
	金原正子　中村亮仁（古環境研究所）
珪藻遺骸分析	清水　晃（奈良女子大学）
炭素年代測定	株式会社　古環境研究所

8　平城京第314・317次調査出土木簡の解読にあたっては奈良国立文化財研究所　舘野和己氏　渡辺晃広氏の方々の御教示をいただいた。

平城京第317次出土の和琴については奈良大学学長　水野正好氏、奈良国立文化財研究所　町田章氏　金子裕之氏　小林謙一氏　光谷拓実氏　上原真人氏の方々のご教示をいただいた。

平城京第291次調査出土軒瓦の同笵関係調査については奈良国立文化財研究所　花谷浩氏の御協力をいただいた。

藤尾城第１～３次調査にあたっては奈良女子大学教授　村田修三氏、帝塚山短期大学教授　安彦勘吾氏、国立歴史民俗博物館助手　千田嘉博氏、京都大学文学部聴講生　永井隆之氏、奈良狭川家第16代当主　狭川雄作氏、中墓寺住職　中川直也氏、奈良市下狭川町　辻寛子氏の方々から御指導、御教示、資料閲覧等の協力をいただいた。

以上の方々から御教示と御協力をいただいた。記して感謝いたします。

9　本書で使用した遺構の分類記号や遺物の名称、型式は奈良国立文化財研究所および奈良市教育委員会の刊行物に準拠している。ただし、遺構番号は各調査ごとに付した仮番号である。

10　本書の遺構図、土層図に示した座標値は国土調査法に定める国土方眼第Ⅵ座標系によっている。標高は海抜高である。

11　本書の編集は、安田龍太郎の指導のもとに埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て中島和彦が担当した。

本　文　目　次

Ⅰ　平城京跡の調査

1　近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査……1

（1）平城京右京二条三坊三坪の調査　第286-1次 ……3

（2）平城京右京二条三坊四坪・菅原東遺跡の調査　第293次 ……10

奈良市菅原東遺跡出土試料の放射性炭素年代測定　株式会社　古環境研究所 ……12

（3）平城京右京二条三坊六坪の調査　第286-2・292-1次 ……20

第283次・第292次調査における花粉分析・寄生虫卵分析　金原正明 金原正子 …30

（4）平城京右京二条三坊十坪の調査　第317次 ……32

（5）平城京右京二条三坊十一坪の調査　第292-1・2次 ……38

2　ＪＲ奈良駅周辺土地区画整理事業に伴う調査……44

（1）平城京左京四条五坊四坪の調査　第306次 ……45

（2）平城京左京四条五坊六坪の調査　第311次 ……46

3　平城京左京四条四坊二坪の調査　第290次 ……51

4　平城京右京三条一坊十四坪の調査　第291次 ……53

5　平城京左京五条五坊十坪の調査　第294次 ……55

6　平城京左京五条四坊・東四坊大路の調査　第295次 ……56

7　平城京外　東堀河の調査　第296次 ……57

8　平城京右京八条・西二坊大路の調査　第297次 ……59

9　平城京左京五条五坊十五坪の調査　第298次 ……60

10　平城京左京九条四坊・九条大路の調査　第300次 ……61

11　平城京左京四条三坊十四坪の調査　第301次 ……66

12　平城京左京五条五坊九坪の調査　第302次 ……67

13　平城京右京三条三坊四坪の調査　第303次 ……70

14　平城京右京四条三坊十四坪の調査　第304次 ……71

15　平城京左京八条二坊四坪の調査　第305次 ……72

16　平城京左京一条四坊五坪の調査　第307次 ……73

第307次調査における花粉分析・寄生虫卵分析　金原正明　金原正子 ……77

17　平城京左京五条六坊三坪の調査　第308次 ……78

18　平城京左京四条一坊十六坪の調査　第309次 ……80

19　平城京朱雀大路・左京三条一坊三坪の調査　第312次 ……83

20　平城京左京五条五坊六坪・東五坊坊間路の調査　第313次 ……86

21　平城京左京四条三坊十坪　第314次 ……88

22　平城京左京三条四坊六坪の調査　第315次 ……98

23　平城京左京五条一坊十五坪・東一坊大路の調査　第316次……101
24　平城京右京二条二坊七坪の調査　第319次……104

Ⅱ　寺院跡の調査
1　史跡大安寺旧境内の調査……107
（1）第66次調査……108
（2）第67次調査……110
2　新薬師寺旧境内の調査……113
（1）第6次調査……114
（2）第7次調査……116
（3）第8次調査……117
3　元興寺旧境内の調査　第41次……118
4　菅原寺旧境内の調査　第2次……120
5　薬師寺旧境内の調査　第7次……122

Ⅲ　その他の調査
1　南紀寺遺跡の調査　第4次……123
南紀寺遺跡　第4次調査における花粉分析・寄生虫卵分析
金原正明　金原正子　中村亮仁……135
井泉ＳＸ01および濠ＳＤ07の珪藻遺骸　清水　晃……137
2　奈良柳生カントリークラブ造成に伴う調査……139
（1）藤尾城跡の調査　第1次……141
（2）藤尾城跡の調査　第2・3次……156
（3）ヲシヨジ古墳群の調査……163
3　東紀寺遺跡の調査　第2次……172
4　五ッ塚古墳群の調査……173

Ⅳ　小規模確認調査・試掘調査・工事立会
1　小規模確認調査・試掘調査……183
2　工事立会……184

付図
1　南紀寺遺跡第4次発掘調査遺構平面図（1／50）
2　南紀寺遺跡第4次発掘調査井泉ＳＸ01平面・立面図（1／20）
3　五ッ塚古墳群墳丘測量図（1／200）

図　版　目　次

巻首図版１　南紀寺遺跡　第４次　井泉ＳＸ01・濠ＳＤ07と溝ＳＤ06

巻首図版２　藤尾城跡　第１次　藤尾城跡全景

巻首図版３　平城京右京二条三坊十坪　第317次調査　和琴

図版１　平城京右京二条三坊三坪　第286-1次　（１）

図版２　平城京右京二条三坊三坪　第286-1次　（２）

図版３　平城京右京二条三坊三坪　第286-1次　（３）

図版４　平城京右京二条三坊三坪　第286-1次　（４）

図版５　平城京右京二条三坊四坪・第293次　（１）

図版６　平城京右京二条三坊四坪・第293次　（２）

図版７　平城京右京二条三坊四坪・第293次　（３）

図版８　平城京右京二条三坊四坪・第293次　（４）

図版９　平城京右京二条三坊四坪・第293次　（５）

図版10　平城京右京二条三坊四坪・第293次　（６）

図版11　平城京右京二条三坊四坪・第293次　（７）

図版12　平城京右京二条三坊四坪・第293次　（８）

図版13　平城京右京二条三坊六坪・第286-2・292-1次　（１）

図版14　平城京右京二条三坊六坪・第286-2・292-1次　（２）

図版15　平城京右京二条三坊六坪・第286-2・292-1次　（３）

図版16　平城京右京二条三坊六坪　第286-2・292-1次　（４）

図版17　平城京右京二条三坊六坪　第286-2・292-1次　（５）

図版18　平城京右京二条三坊六坪　第286-2・292-1次　（６）

図版19　平城京右京二条三坊六坪　第286-2・292-1次　（７）

図版20　平城京右京二条三坊六坪　第286-2・292-1次　（８）

図版21　平城京右京二条三坊六坪　第286-2・292-1次　（９）

図版22　平城京右京二条三坊六坪　第286-2・292-1次　(10)

図版23　平城京右京二条三坊十坪　第317次　（１）

図版24　平城京右京二条三坊十坪　第317次　（２）

図版25　平城京右京二条三坊十坪　第317次　（３）

図版26　平城京右京二条三坊十坪　第317次　（４）

図版27　平城京右京二条三坊十一坪　第292-1・2次　（１）

図版28　平城京右京二条三坊十一坪　第292-1・2次　（２）

図版29　平城京右京二条三坊十一坪　第292-1・2次　（３）

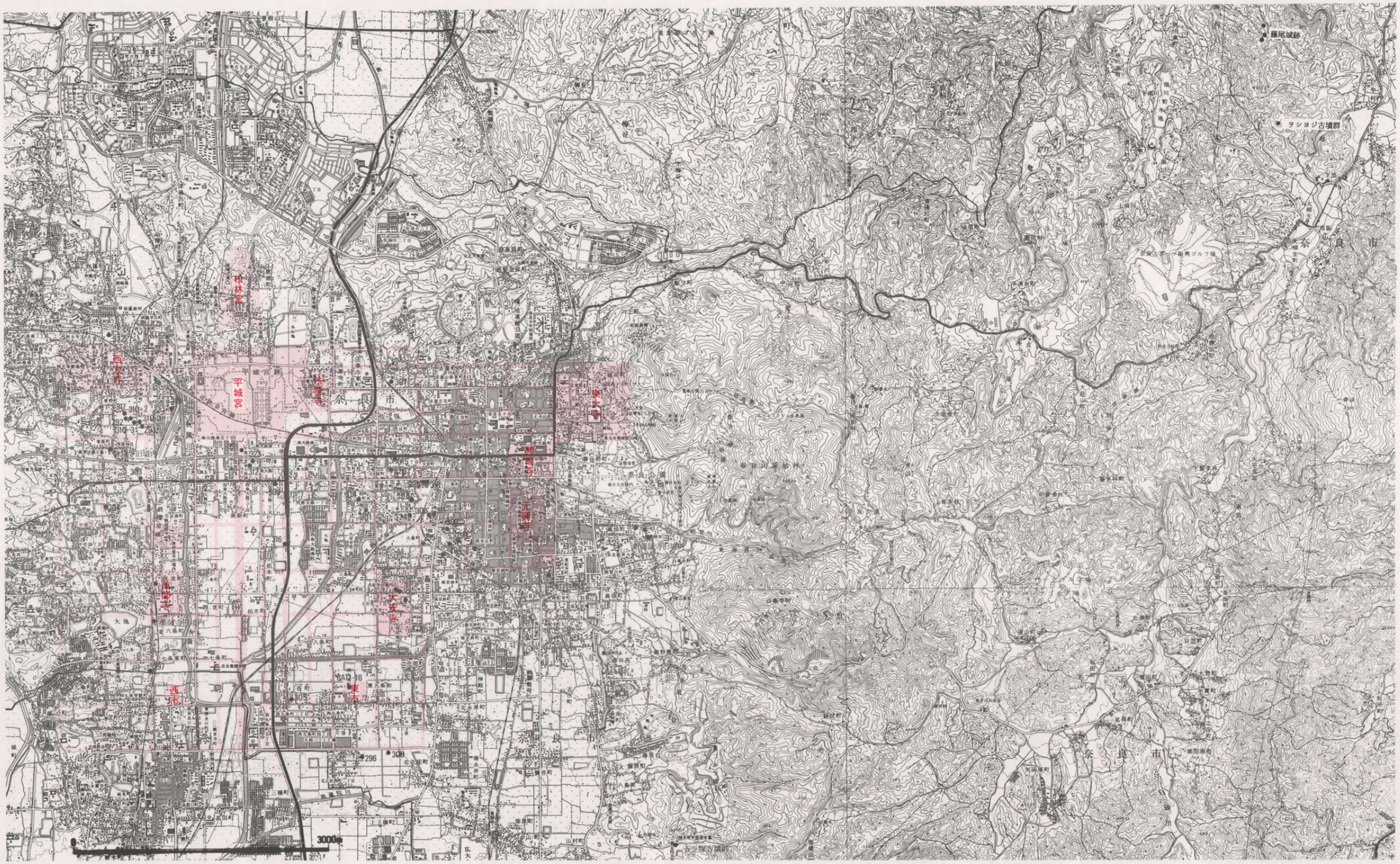
図版30　平城京左京四条五坊四坪　第306次

図版31　平城京左京四条五坊六坪　第311次　（1）
図版32　平城京左京四条五坊六坪　第311次　（2）
図版33　平城京左京四条五坊六坪　第311次　（3）
図版34　平城京左京四条四坊二坪　第290次
図版35　平城京右京三条一坊十四坪　第291次
図版36　平城京左京五条五坊十坪　第294次
図版37　平城京左京五条四坊・東四坊大路　第295次
図版38　平城京外　東堀河　第296次
図版39　平城京右京八条・西二坊大路　第297次
図版40　平城京左京五条五坊十五坪　第298次
図版41　平城京左京九条四坊・九条大路　第300次　（1）
図版42　平城京左京九条四坊・九条大路　第300次　（2）
図版43　平城京左京九条四坊・九条大路　第300次　（3）
図版44　平城京左京九条四坊・九条大路　第300次　（4）
図版45　平城京左京九条四坊・九条大路　第300次　（5）
図版46　平城京左京四条三坊十四坪　第301次
図版47　平城京左京五条五坊九坪　第302次　（1）
図版48　平城京左京五条五坊九坪　第302次　（2）
図版49　平城京右京三条三坊四坪　第303次　（1）
図版50　平城京右京三条三坊四坪　第303次　（2）
図版51　平城京右京四条三坊十四坪　第304次
図版52　平城京左京八条二坊四坪　第305次
図版53　平城京左京一条四坊五坪　第307次　（1）
図版54　平城京左京一条四坊五坪　第307次　（2）
図版55　平城京左京五条六坊三坪　第308次
図版56　平城京左京四条一坊十六坪　第309次
図版57　平城京朱雀大路・左京三条一坊三坪　第312次　（1）
図版58　平城京朱雀大路・左京三条一坊三坪　第312次　（2）
図版59　平城京左京五条五坊六坪・東五坊坊間路　第313次　（1）
図版60　平城京左京五条五坊六坪・東五坊坊間路　第313次　（2）
図版61　平城京左京四条三坊十坪　第314次　（1）
図版62　平城京左京四条三坊十坪　第314次　（2）
図版63　平城京左京四条三坊十坪　第314次　（3）
図版64　平城京左京四条三坊十坪　第314次　（4）
図版65　平城京左京四条三坊十坪　第314次　（5）
図版66　平城京左京三条四坊六坪　第315次　（1）
図版67　平城京左京三条四坊六坪　第315次　（2）
図版68　平城京左京五条一坊十五坪・東一坊大路　第316次　（1）
図版69　平城京左京五条一坊十五坪・東一坊大路　第316次　（2）
図版70　平城京左京五条一坊十五坪・東一坊大路　第316次　（3）
図版71　平城京右京二条二坊七坪　第319次

図版 72　史跡大安寺旧境内　第66次　（1）
図版 73　史跡大安寺旧境内　第66次　（2）
図版 74　史跡大安寺旧境内　第67次
図版 75　新薬師寺旧境内　第６次
図版 76　新薬師寺旧境内　第７次
図版 77　新薬師寺旧境内　第８次
図版 78　元興寺旧境内　第41次
図版 79　菅原寺旧境内　第２次　（1）
図版 80　菅原寺旧境内　第２次　（2）
図版 81　薬師寺旧境内　第７次
図版 82　南紀寺遺跡　第４次　（1）
図版 83　南紀寺遺跡　第４次　（2）
図版 84　南紀寺遺跡　第４次　（3）
図版 85　南紀寺遺跡　第４次　（4）
図版 86　南紀寺遺跡　第４次　（5）
図版 87　南紀寺遺跡　第４次　（6）
図版 88　南紀寺遺跡　第４次　（7）
図版 89　南紀寺遺跡　第４次　（8）
図版 90　南紀寺遺跡　第４次　（9）
図版 91　藤尾城跡　第１次　（1）
図版 92　藤尾城跡　第１次　（2）
図版 93　藤尾城跡　第１次　（3）
図版 94　藤尾城跡　第１次　（4）
図版 95　藤尾城跡　第１次　（5）
図版 96　藤尾城跡　第１次　（6）
図版 97　藤尾城跡　第１次　（7）
図版 98　藤尾城跡　第１次　（8）
図版 99　藤尾城跡　第１次　（9）
図版100　藤尾城跡　第１次　(10)
図版101　藤尾城跡　第１次　(11)
図版102　藤尾城跡　第１次　(12)
図版103　藤尾城跡　第１次　(13)
図版104　藤尾城跡　第１次　(14)
図版105　藤尾城跡　第１次　(15)
図版106　藤尾城跡　第１次　(16)
図版107　藤尾城跡　第１次　(17)
図版108　藤尾城跡　第１次　(18)
図版109　藤尾城跡　第２・３次　（1）
図版110　藤尾城跡　第２・３次　（2）
図版111　藤尾城跡　第２・３次　（3）
図版112　藤尾城跡　第２・３次　（4）
図版113　藤尾城跡　第２・３次　（5）
図版114　ヲシヨジ古墳群　（1）
図版115　ヲシヨジ古墳群　（2）
図版116　東紀寺遺跡　第２次
図版117　五ッ塚古墳群　（1）
図版118　五ッ塚古墳群　（2）
図版119　五ッ塚古墳群　（3）
図版120　五ッ塚古墳群　（4）

次数	遺跡名	調査地	調査期間	面積	届出者・届出内容	担当者
292	平城京右京二条三坊六坪・十一坪	菅原町279、280、282、283～286	6・4・14～6・9・22	3300㎡	奈良市長／近鉄西大寺駅南土地区画整理事業	中井　久保邦原田
293	平城京右京二条三坊四坪・菅原東遺跡	菅原町181-1、182-1、174-1・4、175	6・4・14～6・9・9	3900㎡	〃	中井　久保邦鐘方　久保清
294	平城京左京五条五坊十坪	西木辻町31-7、34-2・6 37-1	6・4・21～6・5・14	125㎡	積水ハウス㈱／共同住宅建設	中島
295	平城京左京五条四坊・東四坊大路	大森町字売ウリ田74-1、75	6・4・20～6・5・20	334㎡	岡田キヌエ／共同住宅建設	池田
296	平城京外　東堀河	北之庄西町１丁目２－３・７	6・4・21～6・4・29	162㎡	㈱柏原鉄工所／工場建設	宮崎
297	平城京右京八条・西二坊大路	七条１丁目508-1 509-2の一部	6・5・10～6・6・1	224㎡	吉田弥嗣郎／共同住宅建設	立石
298	平城京左京五条五坊十五坪	西木辻町28番地	6・5・12～6・5・31	100㎡	奈良市長／幼稚園園舎改築	宮崎
299	平城京左京四条五坊一坪	三条本町28-1・2	6・5・23～6・7・29	1155㎡	奈良市長／ＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業	三好　武田
300	平城京左京九条四坊・九条大路	北之庄町672-1他	6・6・2～6・8・2	518㎡	関西電力㈱奈良支店／電力供給変電所建設	中島
301	平城京左京四条三坊十四坪	三条檜町392-1	6・6・1～6・6・22	320㎡	田村義春／共同住宅建設	池田
302	平城京左京五条五坊九坪	大森町36-1	6・6・28～6・8・18	900㎡	㈱レック／共同住宅建設	立石
303	平城京右京三条三坊四坪	宝来1丁目66-1・67-1	6・6・15～6・7・8	250㎡	東中高太郎／共同住宅建設	秋山
304	平城京右京四条三坊十四坪	平松１丁目838	6・6・20～6・6・27	75㎡	藤沢九五良／共同住宅建設	松浦
305	平城京左京八条二坊四坪	杏町82番地	6・7・7～6・8・3	125㎡	奈良市長／市営住宅立替	池田
306	平城京左京四条五坊四坪	三条本町264-1 265-1・2	6・7・26～6・8・15	315㎡	奈良市長／ＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業	三好　武田
307	平城京左京一条四坊五坪	法蓮町561-3、564-1、565、562-1、567-1の一部	6・8・4～6・8・19	175㎡	伝宝商事 京阪奈不動産／分譲住宅	秋山
308	平城京左京五条六坊三坪	西木辻町109-3他	6・8・8～6・9・14	320㎡	㈱朝日住建／共同住宅建設	宮崎
309	平城京左京四条一坊十六坪	四条大路2丁目827-2	6・8・17～6・9・12	168㎡	藤原電気工業㈱／事務所ビル建設	森下
310	平城京右京二条三坊三坪・六坪	菅原町184、186、194、203、204、206-1、207、208	6・9・12～7・3・17	5100㎡	奈良市長／近鉄西大寺駅南土地区画整理事業	中井　鐘方久保邦　原田久保清
311	平城京左京四条五坊六坪	三条本町333-1他	6・9・12～6・11・29	1050㎡	奈良市長／ＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業	三好　武田
312	平城京朱雀大路・左京三条一坊三坪	三条大路３丁目450他	6・9・19～6・10・11	221㎡	三和住宅㈱／分譲住宅	森下
313	平城京左京五条五坊六坪・東五坊坊間路	西木辻町67番地	6・10・11～6・11・7	260㎡	奈良市長／中学校図書館改築	秋山
314	平城京左京四条三坊十坪	三条栄町185-4他	6・10・25～6・12・22	1178㎡	近鉄不動産㈱／共同住宅建設	松浦
315	平城京左京三条四坊六坪	大宮町3丁目155-1・7	6・11・14～6・11・30	150㎡	中井一男／医院事務所ビル建設	秋山
316	平城京左京五条一坊十五坪東一坊大路	柏木町555-1他	6・11・14～6・12・13	360㎡	㈱ライダースパブリシティ住宅展示場	立石
317	平城京右京二条三坊十坪	青野町43-1、46-1、4749	6・12・7～7・3・3	1300㎡	奈良市長／近鉄西大寺駅南土地区画整理事業	中井　原田
318	平城京左京四条五坊一坪・四坊十五坪	三条本町26他 三条宮前町306	6・12・5～7・3・23	1930㎡	奈良市長／ＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業	三好　松浦武田
319	平城京右京二条二坊七坪	西大寺国見町１丁目2137-60・63	6・12・20～7・1・25	462㎡	近鉄不動産／共同住宅建設	立石
320	平城京左京三条四坊五坪	大宮町３丁目175-1他	7・1・5～7・2・3	450㎡	㈱熊谷組奈良営業所／共同住宅建設	篠原
321	史跡平城京　朱雀大路跡	二条大路南３丁目119-1他	7・2・16～7・3・31	800㎡	奈良市長／史跡朱雀大路跡保存整備事業	立石　宮崎
322	平城京右京北辺三坊七坪・八坪	西大寺北町２丁目452-4・5、455-1、403他	7・2・20～7・3・31	811㎡	兼松都市開発㈱／共同住宅建設	秋山
323	平城京左京三条一坊三坪	三条大路470、471-1・	7・2・27～7・3・24	225㎡	日本石油㈱大阪支店／給油所建設	宮崎
324	平城京左京四条四坊十三坪	三条大宮町236-1他	7・3・6～7・3・27	544㎡	奈良市長／ＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業	三好　松浦
6ATI16	平城京　東市跡推定地	杏町581	6・11・17～6・12・27	310㎡	奈良市長／重要遺跡確認緊急調査	池田
6BDA65	史跡大安寺旧境内・杉山古墳・杉山瓦窯	大安寺４丁目1119	6・8・12～6・12・14	110㎡	奈良市長／史跡整備	中島　宮崎
6BDA66	史跡大安寺旧境内	大安寺１丁目７番地１号	6・10・5～6・10・20	92㎡	奈良市長／下水道建設	松浦
6BDA67	史跡大安寺旧境内	大安寺４丁目1115	7・2・10～7・2・23	36㎡	永保則和／個人住宅建設	池田
6BSY 6	新薬師寺旧境内	高畑町1378番地	6・4・6～6・4・19	58㎡	奥景由／個人住宅建設	宮崎
6BSY 7	新薬師寺旧境内	高畑町1357番地	6・8・22～6・8・26	20㎡	柴岡與志夫／個人住宅建設	三好
6BSY 8	新薬師寺旧境内	高畑町1340-1	7・1・9～7・1・19	37㎡	牧野興司／個人住宅建設	池田
6BGG41	元興寺旧境内	芝新屋町21-5	6・4・15～6・4・20	7.5㎡	吉川恵次郎／個人住宅建設	森下
6BKK 2	菅原寺旧境内	菅原町516-1・2・3番地	6・9・5～6・10・1	100㎡	山田法胤／喜光寺庫裏建設	秋山
6BYS 6	薬師寺旧境内	西の京町字金岡408	7・2・27～7・3・9	60㎡	近畿日本鉄道㈱／近鉄西の京駅駅舎地下化工事	篠原
6BYS 7	薬師寺旧境内	西の京町417-3番地	7・3・15～7・3・22	22㎡	奈良市長／市道西の京六条線改良工事	篠原
9CFO 2	藤尾城跡	下狭川町字タゲ2714他	6・4・1～6・4・27	198㎡	箕面観光開発㈱／奈良柳生ＣＣ造成	松浦　武田
9CFO 3	藤尾城跡	下狭川町字薬師堂2712他	6・4・1～6・4・27	100㎡	〃	〃
4PWS 1	ヲシヨジ古墳群	大柳生町字ヲシヨジ4807他	6・5・12～6・6・6	40㎡	〃	森下　松浦武田
4PHK 2	東紀寺遺跡	紀寺町567-2	6・7・18～6・8・1	108㎡	奈良市長／梅園地区住環境整備事業	秋山
4PIZ 1	五ッ塚古墳群	山町989	6・12・9～7・3・14	96㎡	奈良市長／ 市道南部478号線改良工事	森下 宮崎

平成６年度　発掘調査一覧



平成６年度　発掘調査位置図（１／50000）

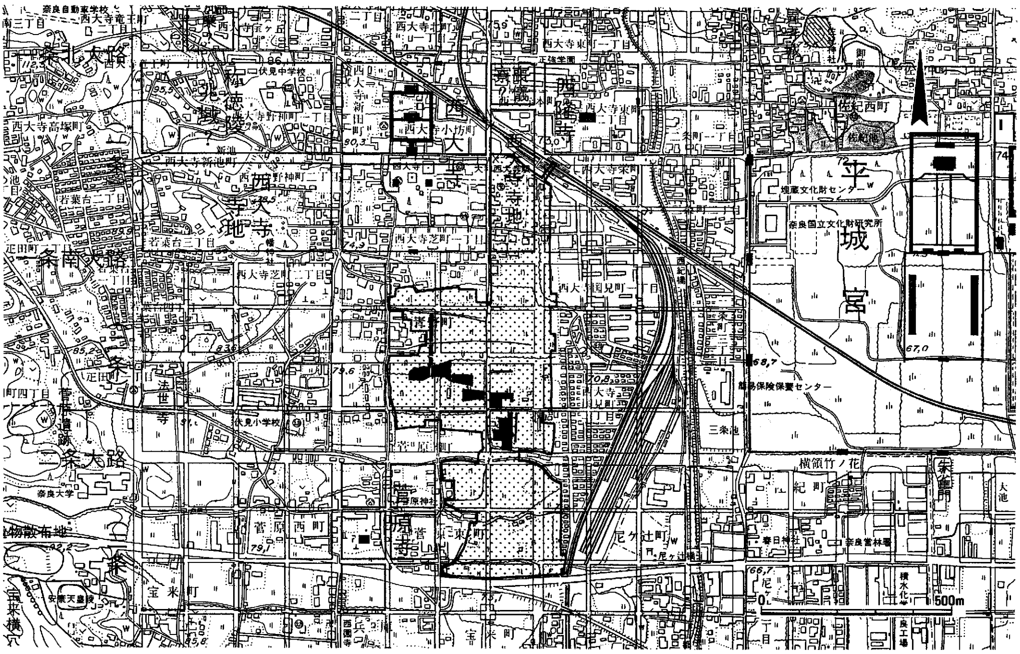
Ⅰ　平城京跡の調査

1　近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査

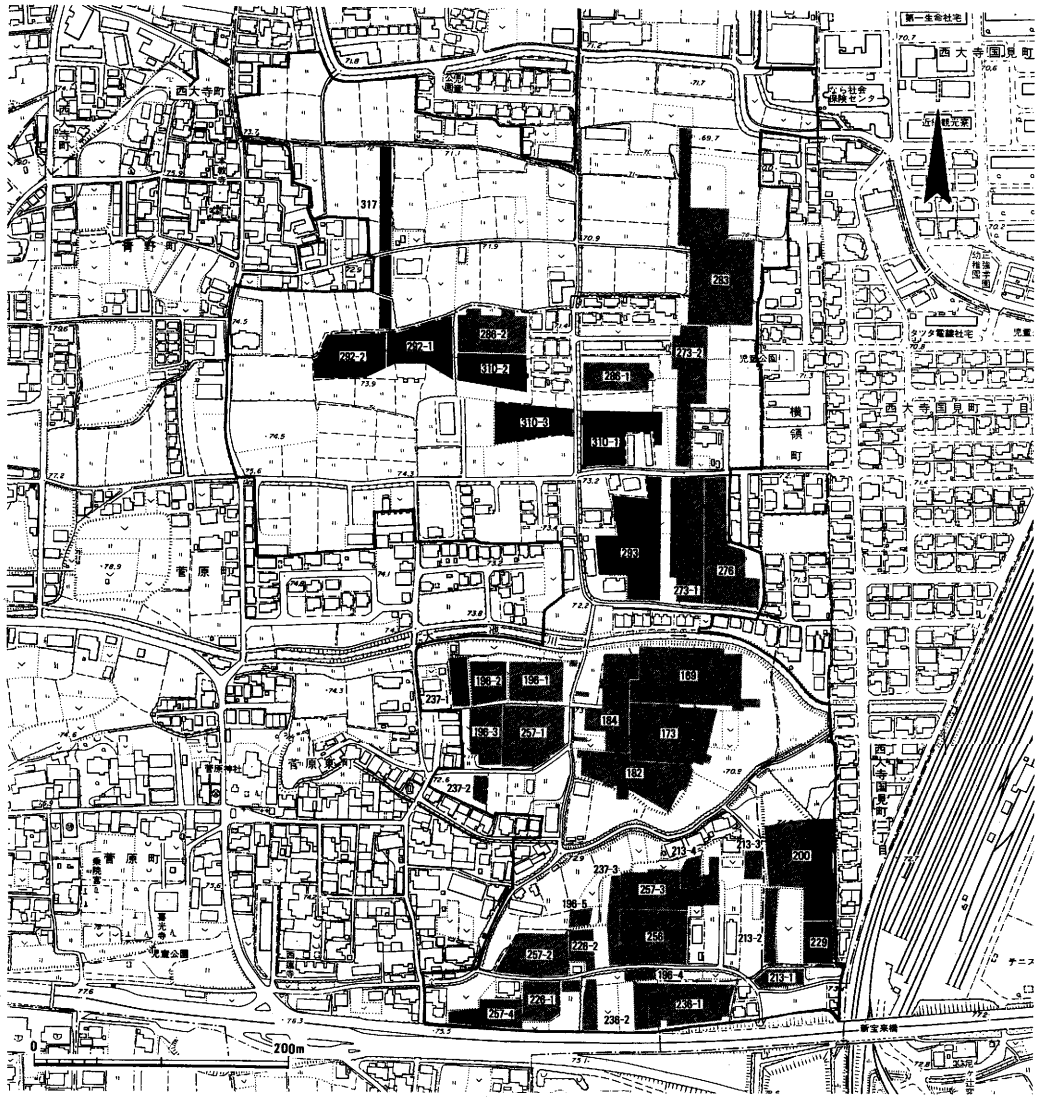
奈良市教育委員会では、奈良市が進める近鉄西大寺駅南土地区画整理事業（総面積約32万㎡）に伴って、昭和63年度から事業地内の発掘調査を継続している。本年度は一覧に示した７件（計13,600㎡）の調査を行い、初年度からの合計調査面積は60,798㎡に達した。

本年度の調査地は、平城京右京二条三坊三・四・六・十・十一坪の五つの坪にわたる。四坪では前年度に、坪内北東の一画で内部に多数の甕を据えた建物群を確認している。今回さらに、坪内南西部に塀で囲まれたコの字型配置建物群の区画があることが判明し、坪内部の様相がほぼ明らかになった。加えて、同調査区の下層からは縄文時代中期の石器が多数出土した。砕片が大半で、製作跡であることが推察でき、思わぬ成果であった（293次）。六・十・十一坪の調査では、六・十一坪坪境小路と二条条間路を確認した。調査地の辺りはわずかに小高い丘陵上にあたるが、両者はここでは切通しになっていたことが知られた。条坊施工実態の一側面を窺う新知見である（292・317次）。また、十坪内で発見した奈良時代の井戸のひとつでは、和琴の一部を枠材に転用していた。正倉院宝物を除けば、同時代の実用の和琴は稀有な例である。極めて貴重な資料を入手した（317次）。

なお、昨年度未報告であった 286次調査（三・六坪）の概要を併せて収録したが、本年度の310次調査（三・六坪）については来年度に報告する予定である。



平成６年度の調査地と周辺の条坊（１／20,000　網目の範囲が土地区画整理事業予定地）



発掘調査地位置図（1／6,000　数字は調査次数）

調査年度	調査次数	遺跡名	調査地地番	調査面積	備考
平成5年度	286－1	平城京右京二条三坊三坪	奈良市菅原町194・195	1,488㎡	本概要報告書掲載
	286－2	平城京右京二条三坊六坪	奈良市菅原町201・202	1,682㎡	本概要報告書掲載
平成6年度	292－1	平城京右京二条三坊六坪	奈良市菅原町282・283・284	1,600㎡	本概要報告書掲載
	292－2	平城京右京二条三坊十一坪	奈良市菅原町279・280・285・286	1,700㎡	本概要報告書掲載
	293	平城京右京二条三坊四坪	奈良市菅原町174-1・174-4・175・181-1・182-1	3,900㎡	本概要報告書掲載
	310－1	平城京右京二条三坊三坪	奈良市菅原町184・186・194	1,850㎡	平成7年度報告予定
	310－2	平城京右京二条三坊六坪	奈良市菅原町203・204	1,450㎡	平成7年度報告予定
	310－3	平城京右京二条三坊六坪	奈良市菅原町206-1・207・208	1,800㎡	平成7年度報告予定
	317	平城京右京二条三坊十坪	奈良市青野町43-1・46-1・47・49	1,300㎡	本概要報告書掲載

平成6年度発掘調査および本概要報告書掲載調査一覧

(1) 平城京右京二条三坊三坪の調査　第286－1次

Ⅰ　はじめに

右京三条二坊三坪では平成5年度に第273－2、283、286－1次調査を、平成6年度には第310－1次調査を実施した。このうち第273－2、283次調査についてはすでに報告しており、ここでは第286－1次調査の概要を報告する。第310－1次調査の概要は来年度に報告する予定である。これまでの調査で、三坪内を南北に4分割して利用されていた時期があることが判明しており、第286－1次調査ではさらに東西にも分割されていたのかどうかを解明する手掛かりが得られるものと期待された。

Ⅱ　検出遺構

調査地周辺は南、西から北、東に向かって緩く傾斜し、低い段をつけて水田化されている。このため調査区の南西では地表面から約0.3m（標高71.80m）で奈良時代の遺構面に達するのに対して、北東では約0.5m（標高71.40m）と深くなる。堆積土層は北東で耕作土下に灰色砂質土（旧耕土）、明黄褐色粘質土、茶灰褐色粘質土と続き黄灰色シルトあるいは茶灰色砂の遺構検出面となる。

主な検出遺構には古墳時代の溝1条、奈良～平安時代にかけての掘立柱建物12棟、掘立柱塀1条、井戸3基、土器埋納遺構1基、土坑3がある。掘立柱建物及び井戸の概要については一覧表にまとめておいた。

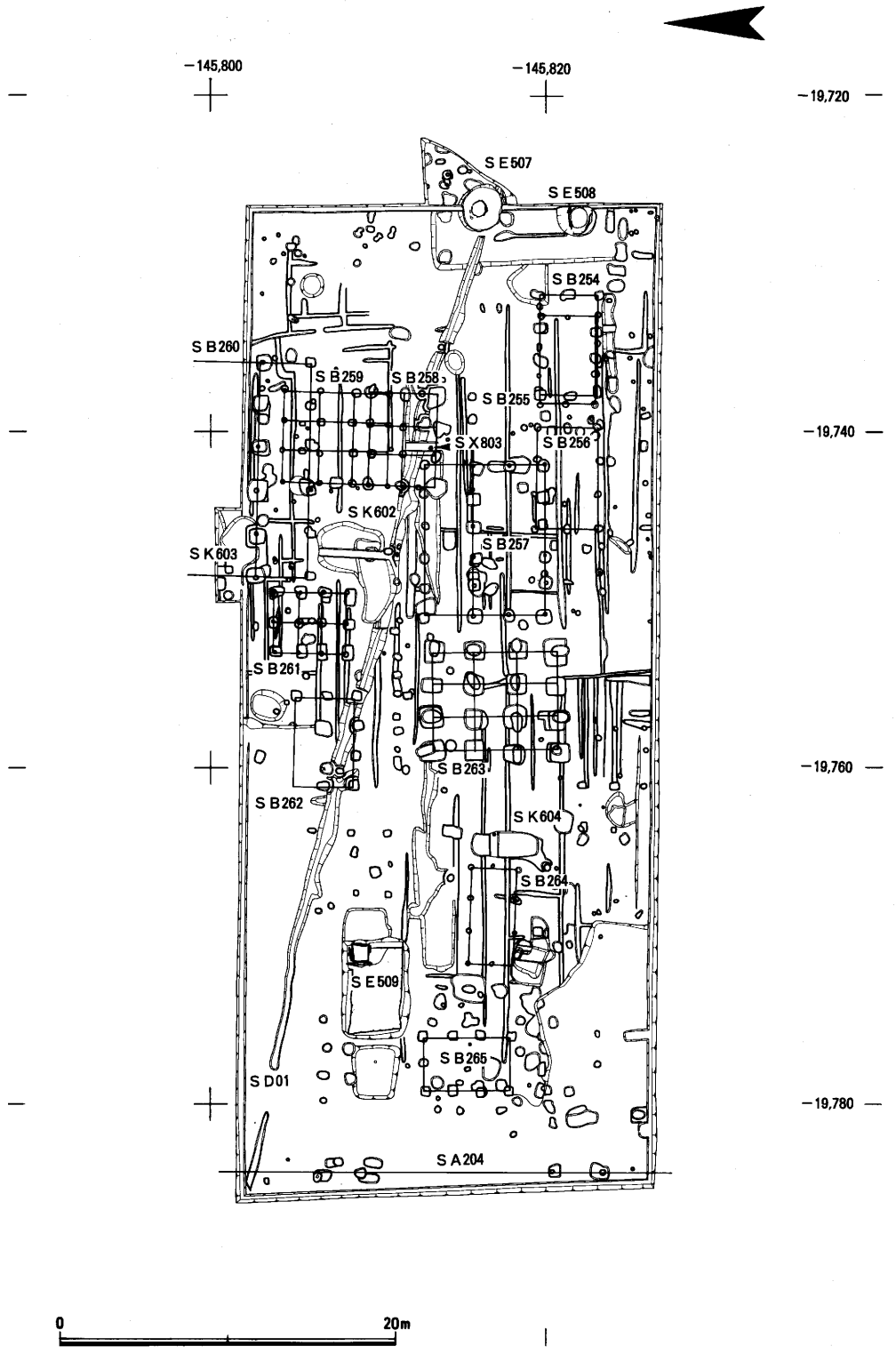
古墳時代の遺構

ＳＤ01　北に対して西へ約75°振れる斜行の素掘り溝である。幅0.7～0.9mで深さは約0.3m。第273－2次調査区でも検出しており、それと合わせて全長105m以上となる。埋土から布留式土器が少量出土した。周辺の調査区においてもこのような斜行する溝を検出しており、布留式期には何らかの大きな区画が存在していた可能性が高い。

奈良～平安時代の遺構

昨年度に報告した第273－2次調査区の成果を基にして三坪内での遺構の変遷を考えてみたい。なお、第273－2次調査で想定したＢ期に相当する遺構を今回の調査区内では明確にできないため、Ｂ期については言及しない。そして新たに平安時代後半の遺構を確認したため、これをＥ期として記述する。

Ａ期　条坊の道路心から割付けて遺構を配置する。坪の四周には塀がめぐり、塀ＳＡ204はその西辺である。総柱建物ＳＢ263が南北1／2分割線に南辺を揃えて建つ。これと坪内の東西にほぼ対称的な位置にも総柱建物ＳＢ228があり興味深い。建物ＳＢ258の南辺が建物ＳＢ263の北辺と揃い、建物ＳＢ262の東辺が建物ＳＢ263の中軸で揃う。建物ＳＢ263の北辺と建物ＳＢ262の南辺との距離は15尺（4.5m）である。土器埋納遺構ＳＸ803は土師器



第286−1次調査　遺構平面図（1／400）

杯Aの上に土師器杯A蓋をかぶせて埋納するもので、掘形は不手際により検出できなかった。杯A内に内容物はないものの、出土位置がSB258の出入口付近である点や他の類例との比較から、これは胞衣壷であると推定したい。SK603、SK604は平城Ⅱ～Ⅲの遺物を包含する土坑で、A期の遺構群の廃絶時期を示していると思われる。

C期　坪の四周をめぐる塀がなくなり、坪の端から割付けて遺構を配置する。南北1/2分割線に南辺を揃える建物SB254、256が東西に並び建つ。その北側には南に廂の付く建物SB260がある。

D期　坪の端から割付けて遺構を配置するが、大きく二群に分かれる。その一つは建物SB264、265、井戸SE509の一群で、2つの建物は南辺を揃え15尺（4.5m）離れてL字形に配置される。井戸SE509の構造は方形縦板組隅柱横桟留である。掘形内には井戸枠の外側四周を取り囲むような状態で別の井戸枠部材が廃棄されていた。それらの内訳は隅柱部材2本、横桟部材8本、不明木製品を含む縦板多数であり、横桟部材の一本は連子窓枠の転用であった。さらに、掘形に対して井戸枠が西端に片寄り、東側の掘形埋土が明確に2層に分かれる点から、同じ位置に井戸が重複して構築されていたことが判明した。枠内からは奈良時代後半の土器とともに軒丸瓦6307B1点が出土している。もう一つの一群

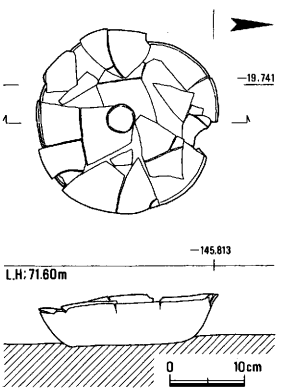
遺構番号	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長m(尺)	梁間全長m(尺)	桁行柱間寸法(m)	梁間柱間寸法(m)	廂の出(m)	備考
SB254	東西	3×2	6(20)	3.6(12)	2.1-1.8-2.1	1.8等間		
SB255	東西	3×2	5.4(18)	3.4	1.8等間	1.7等間		
SB256	東西	3×2	6.3(21)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		SB257よりも古い
SB257	東西	5×2	9.0(30)	4.3(14)	1.8等間	2.15等間	北3.0	
SB258	東西	3×2	5.4(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		総柱建物
SB259	南北	3×3	6.3(21)	5.4(18)	2.1等間	1.8等間		総柱建物
SB260	東西	5×1以上	13		2.6等間		南3.3	
SB261	南北	3×2	4.2(14)	3.6(12)	1.4等間	1.8等間		総柱建物
SB262	東西	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
SB263	南北	3×3	7.2(24)	6.3(21)	2.4等間	2.1等間		総柱建物
SB264	東西	3×2	5.7	2.8	1.9等間	1.4等間		
SB265	南北	3×2	5.4(18)	3.2	1.8等間	1.6等間		

掘立柱建物、塀一覧表

遺構番号	掘形			枠			主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	平面形・構造	内法(m)	水溜・濾過装置等		
SE507	円形	東西2.7 南北2.6	0.9	円形 縦板組太枘留	0.8		曲物蓋1（枠内）	縦板12枚組
SE508	円形	南北2.3	1.0	楕円形 曲物積上？	東西1.2 南北1.0		櫛1（枠内）	井戸枠は腐朽
SE509	隅丸方形	東西3.4 南北2.7	1.55	方形 縦板組隅柱横桟留	東西1.1 南北1.04	底に礫敷	糸巻き1、箸1 横櫛2、曲物2（枠内） 柄杓1 和同開珎1（掘方）	同位置に重複して枠を改築

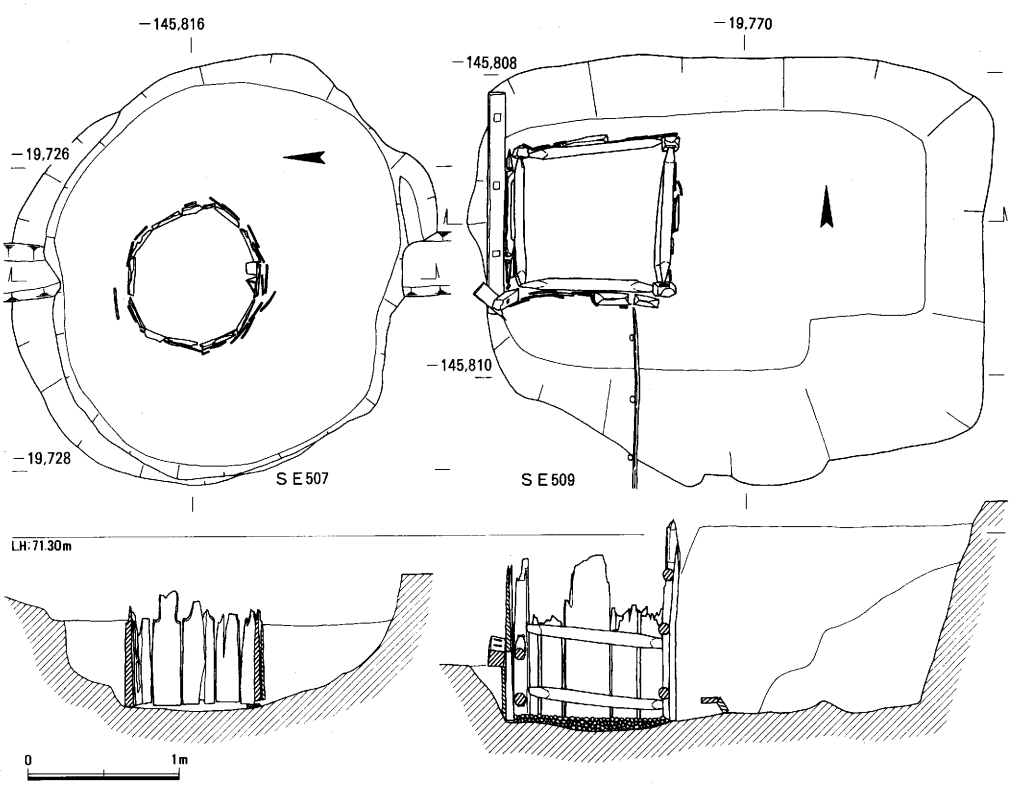
井戸一覧表

は建物ＳＢ257、261、井戸ＳＥ507、土坑ＳＫ602である。北に廂のつく建物ＳＢ257とこれから北に15尺（4.5m）離れた総柱建物ＳＢ261がＬ字形に配置される。土坑ＳＫ602は建物ＳＢ261の南東隅を取り巻くように掘削されており、奈良時代後半の遺物が出土している。井戸ＳＥ507は円形縦板組の構造で、遺存の悪い縦板上端の一部に太枘穴の痕跡が残るものがあり、縦板の結合には太枘が使用されたことがわかる。出土遺物から奈良時代後半に構築され、その廃棄は９世紀にまで下がる可能性がある。これら二つの遺構群の間には空閑地があり、東西１／４分割線がそこに位置する点からみて、坪内西半部の少なくとも北側においては東西１／４の区画を想定できよう。

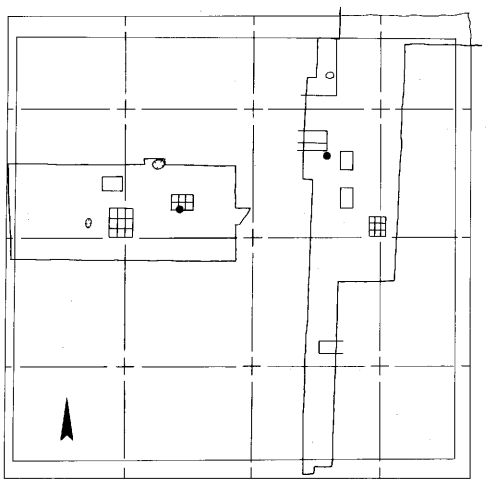


土器埋納遺構ＳＸ803（１／10）

Ｅ期　調査地周辺には平安時代の遺構も広がっていることが明らかになりつつあり、当該時期の遺構をＥ期にあてる。総柱建物ＳＢ259とその南辺から30尺（９ｍ）南に離れて建物ＳＢ255がＬ字形に配置される。そして、建物ＳＢ255の東辺から東に15尺（4.5m）離れた位置には井戸ＳＥ508がある。井戸枠はほとんど腐朽していたが、平面楕円形の曲物の痕跡と目地を塞

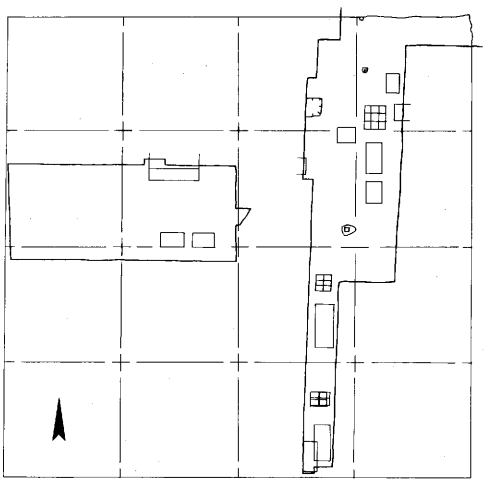


井戸ＳＥ507・509平面・断面図（１／40）

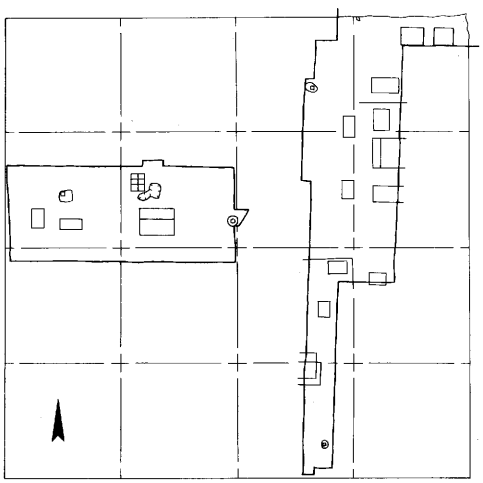


● 胞衣壷

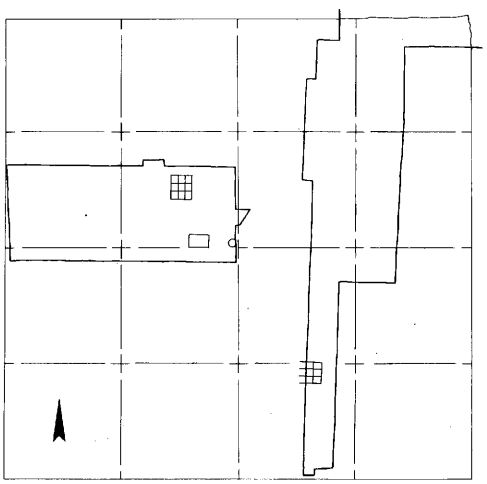
A　期



C　期



D　期



E　期

三坪内遺構変遷概念図

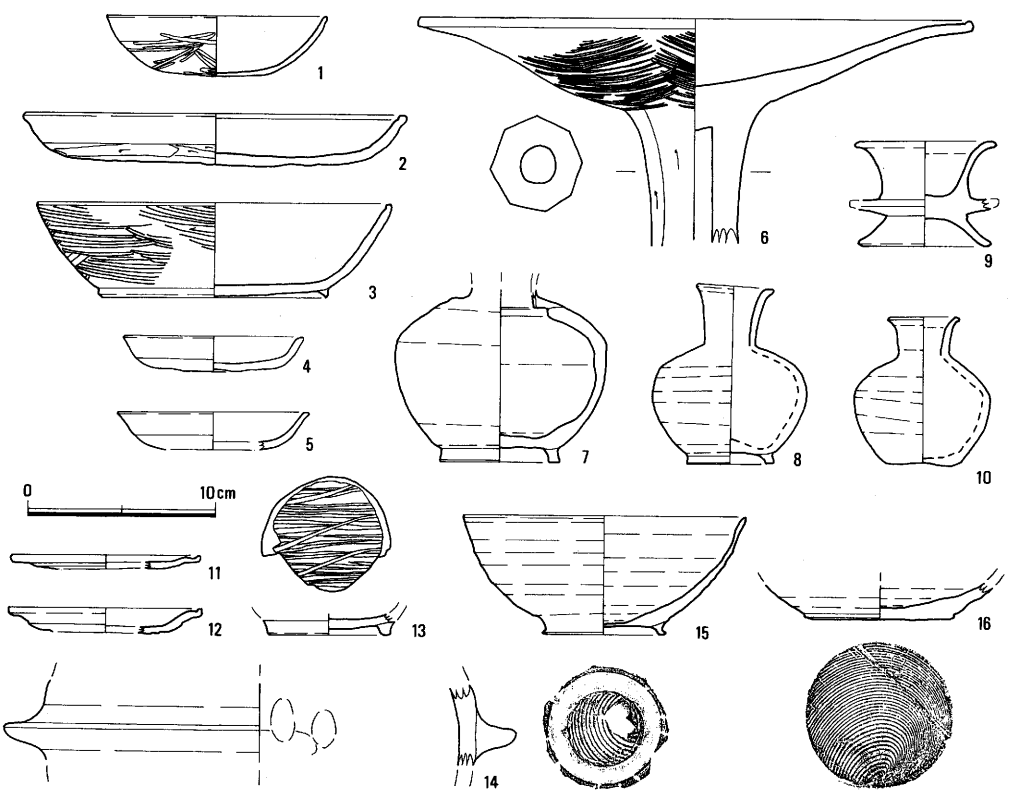
いだと思われる板材が認められた。おそらく曲物を積み上げたような構造であったろう。11世紀中頃の遺物が出土しており、遺構の存続時期の一端がうかがえる。また、第273－2次調査区の建物ＳＢ213を当該期の遺構に変更する。

Ⅲ　出土遺物

土器類　土器類は遺物整理箱で15箱分出土している。このうち井戸ＳＥ507～509、土坑ＳＫ602出土の主な土器についてその概要を報告する。

1～8は井戸ＳＥ509、9は土坑ＳＫ602、10は井戸ＳＥ507、11～16は井戸ＳＥ508出土土器である。このうち、1～6、11・12・14は土師器、7～10・15・16は須恵器、13は黒色土器Ｂ類である。1（椀）の外面には荒いヘラミガキがある。2（皿）は底部にケズリを行う。3（杯）の外面はケズリの後に密にヘラミガキを行う。6（高杯）は脚部から杯部の外面にかけてケズリを行い、脚部を八角形に面取りするとともに杯部外面にヘラミガキを行う。9（托）はロクロナデによって仕上げられ、胎土の色調が乳白色を呈する。15・16（椀）はロクロナデによって仕上げられ、底部に糸切り痕が残る。15の底部には糸切りの後に高台を貼り付ける。　（鐘方正樹）

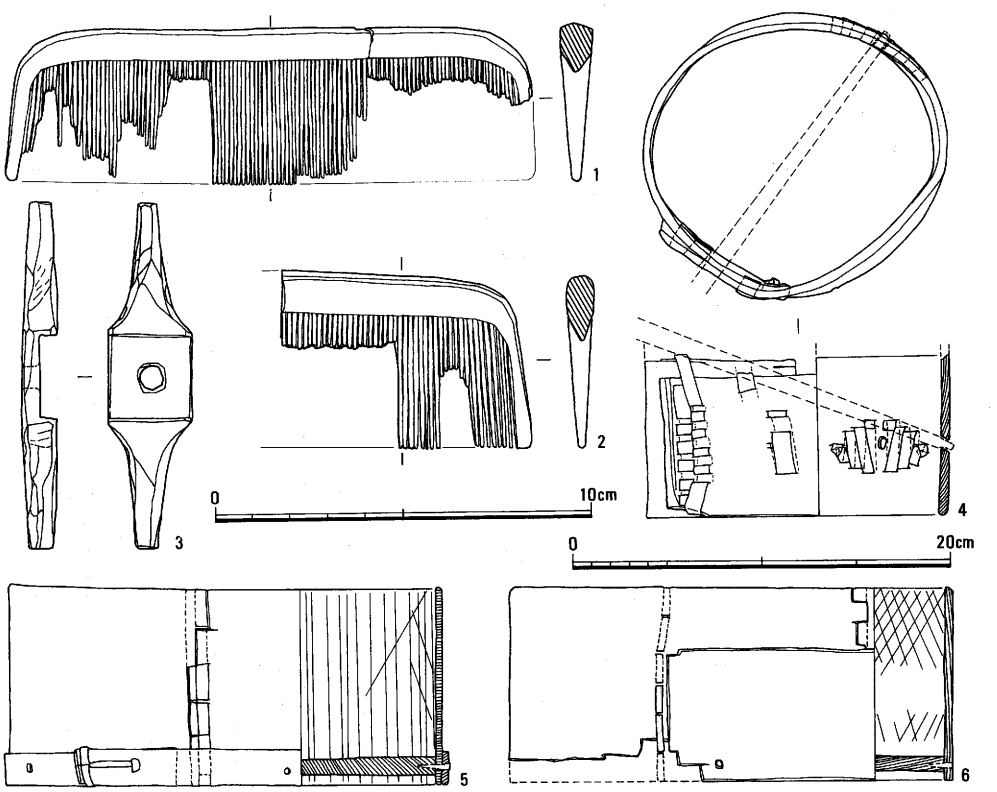
瓦類　瓦類は遺物整理箱で11箱分が出土しており、その大半が丸瓦、平瓦である。その



出土土器実測図（1～8　ＳＥ509、9　ＳＫ602、10　ＳＥ507、11～16　ＳＥ508　1／4）

他に軒丸瓦４点、軒平瓦３点、塼４点がある。軒丸瓦の型式の内訳は6225Ｃ１点、6307Ｂ１点、巴文軒丸瓦１点、型式不明１点である。軒丸瓦の型式の内訳は6663Ｃ２点、平安時代以降の軒平瓦１点である。（原田憲二郎）

木製品　１～６は奈良時代の井戸ＳＥ509から出土した。１・２は肩部が丸みをもつ横櫛で、稜線と平行に歯の切り通し線がある。２つの脊断面は柳葉形である。歯数は３㎝あたり１が21本、２が27本である。３は小型糸巻の横木である。４は柄杓身の円形曲物である。側板の上辺と柄を欠くため全容は不明であるが、側板中央に柄の先端を内側から斜めに差し込む小穴があり、穴の周囲は樺皮紐を巻いて補強されている。側板の底周縁は木釘穴がない。径15㎝、残存高8.3㎝。５・６は円形曲物で、底板以外の側板は破片である。共に　径23㎝、高さ10.3㎝の容器に復元できる。５は底周縁を幅２㎝の箍で補強している。底板の木釘数は５が５本、６が８本である。底板径は５が22.5㎝、６が21.5㎝で、５は側板の厚さ分小さい。５が身で６が蓋の可能性もある。１～３・５・６は枠内、４は掘形出土である。他にＳＥ507から曲物片、ＳＥ508から横櫛片が出土した。（久保邦江、篠原豊一）



井戸ＳＥ509出土木製品（１～３が1／2、４～６が1／4）

(2)　平城京右京二条三坊四坪・菅原東遺跡の調査　第293次

Ⅰ　はじめに

調査区は、昨年度調査の第273－1次調査区の西側に隣接して、3箇所、計3900㎡を設定した。調査区は四坪の西半部にあたり、平成5年度に行なった第273－1・276次調査と合わせると四坪の大半を調査したことになる。今回の調査では、四坪の西半の様相が明らかになったほかに、縄文時代から中世までの遺構があることを確認した。これまでの調査で、大池川以南には縄文時代の遺構が広範囲で存在することを確認していたが、今回の調査結果から、大池川以北にも縄文時代の遺構が拡がっていることが明らかになった。

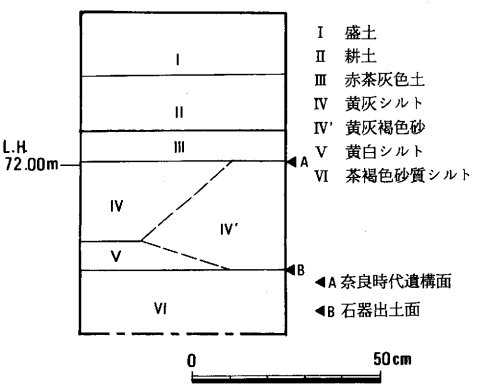
Ⅱ　検出遺構

調査地は南から北に下がる低丘陵の東斜面にあたる。発掘区の基本的な層序は、盛土、黒灰色土（耕土）、赤灰色土（0.2m）と続き、地表下0.4mで黄灰色シルトもしくは黄灰褐色砂に達する。古墳時代と奈良時代の遺構はこの上面で検出した。検出面の標高は71.5～72.0mである。さらにその下には、黄白色シルト（0.07m）、茶褐色砂質シルト（0.15m）が堆積し、その両層からは縄文時代の石器と炭化物が出土した。

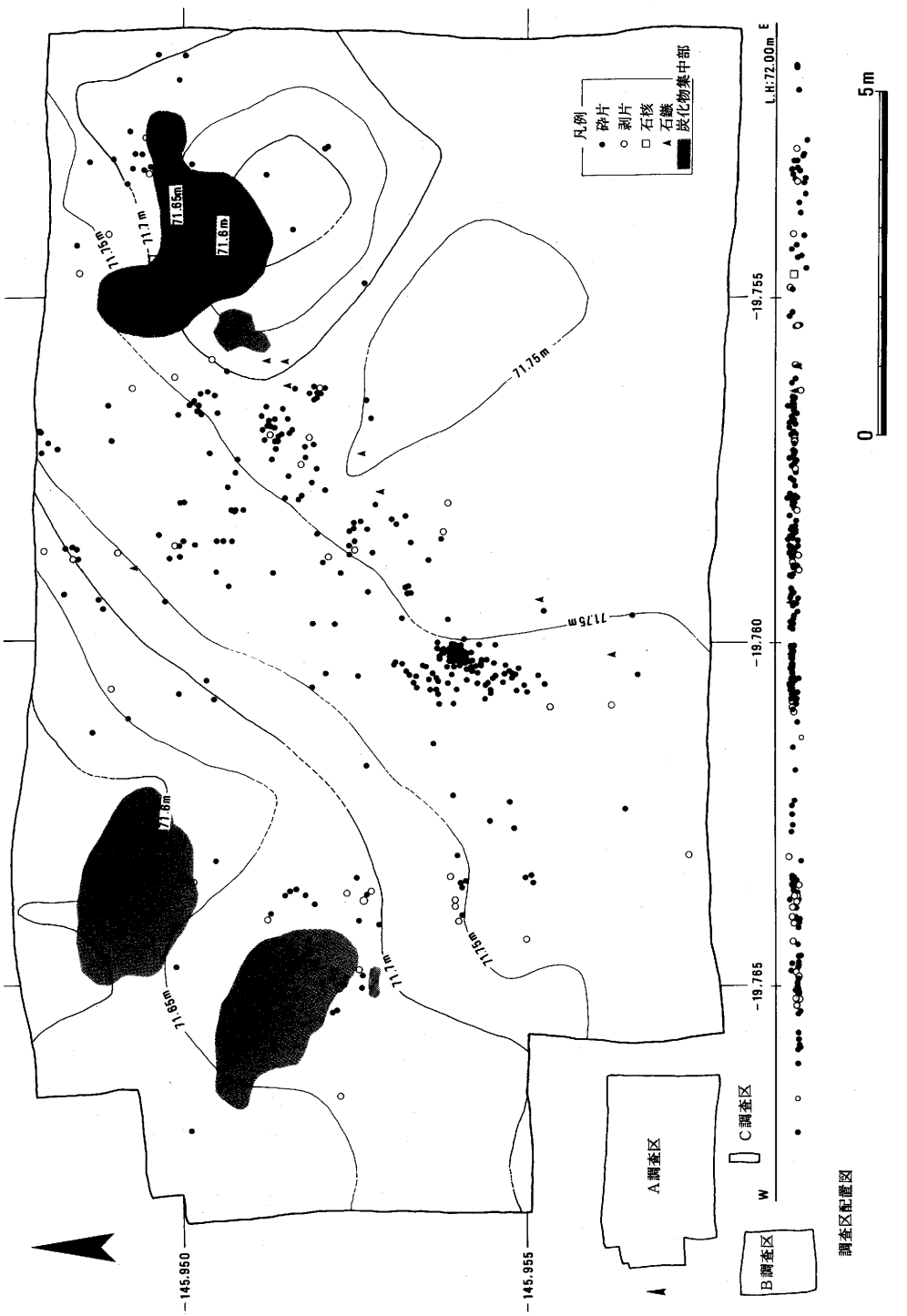
検出した遺構は、縄文時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代のものがある。以下、各時代ごとに主なものについてのみ記す。

縄文時代の遺構　発掘区西の張り出し南半でサヌカイト製の石器が数点出土した。石器が出土した地点を中心にA～C調査区の3箇所合計215㎡を下層調査範囲として設定した。その結果、明確な縄文時代の遺構は検出できなかったが、縄文時代の石器・炭化物が集中する部分を確認した。石器が出土したのは、黄白シルトと茶褐色シルト層で、特に両層の境界から多量に出土した。最も面積の広いA調査区の内は北西方向と南東方向に下降する谷地形にあたり、その間の北東から南東にかけての幅2～5mの稜線上（71.70～71.75m）で比較的多く石器が出土している。特に調査区中央に石器ブロックと認定できる集中部が存在する。石器は合計424点出土した。製品は石鏃8点、楔形石器1点のみで、他に石核1点、剥片36点・砕片378点である。

炭化物は全体的に混じっているが、特に密度が高い部分には石器出土分布図の網目部分の3箇所がある。炭化物集中部分は石器が多く出土する地点とは一致せず、それより低いところにある。



第293次調査　土層柱状図　(1／20)



第293調査　下層調査区（A調査区）石器出土分布図（1／100）

炭化物集中部分と分布を同じくして、土器片・焼土を検出した。土器片はいずれも小片で表面がかなり風化しており、時期を決定しがたい。

1993年度に調査した第257－2次調査でも同様に石器と炭化物の集中部を確認している。この調査の際は、石鏃・楔形石器のほかに、スクレイパー・石錐・打欠石錐などが出土しており、それと比較すると今回の調査で出土した石器は単純な石器組成であるといえる。

また、第257－2次調査で出土した炭化物で放射性炭素年代測定を行った。結果は4540±120(B.C.2590) という値を得た[1)]。今回の調査でも同様に炭化物で年代測定を行った結果、下記のように4290±105yr(B.C.2340) という年代値を得た。今回の調査の結果のほうが250年程時期が下ることになるが、いずれも縄文時代中期に相当する。石器と炭化物と土器片が一緒に出土するという状況は同じであるが、その一方、先述の石器組成の違いや、石鏃の形態においても共通性が見いだせない点などの問題がある。この2つの調査で得た結果が、相互に関連性を持つものか否か、今後の周辺の調査に期待されるところである。

(久保邦江)

奈良市菅原東遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

菅原東遺跡から出土した試料について年代測定を行った。その結果を次表に示す。なお年代値は1950年よりの年数（B.P.）である。

年代は国際慣例にしたがって計算され、同位体分別効果の影響を補正してある。誤差は1標準偏差で示してある。

年代測定は、試料から木炭をピッキングし、アルカリ・酸処理を施したのちに実施された。

表　菅原東遺跡出土試料の放射性炭素年代測定結果

試料　No.	出土地点	種類	年代値	測定コード
No.1	奈良市菅原町	炭化物	4290±105yr(B.C.2340)	JAS180

第293次調査　遺構平面図（1／400）

0　40m

−19,760　−19,740　−19,720　−19,700

−145,980　−145,960　−145,940　−145,920　−145,900

赤線は下層調査区

第293次調査区

第273−1調査区

SB242 SB226 SB238 SA211 SF901 SA212 SB225 SD112 SB214 SB239 SB215 SB248 SB230 SB250 SB249 SB247 SB206 SB221 SB236 SB246 SA232 SB245 SB235 SB244 SD111 SD115 SE505 SB256 SK06 SA266 SA261 SK05 SB258 SB255 SE508 SB265 SA239 SB264 SB254 SB257 SB253 SA262 SB267 SA280 SB252 SD109 SB268 SB251 SA263 SB273 SK604 SB270 SB269 SB271 SB275 SB283 SA276 SB274 SD114 SD113 SB277 SB279 SB282 SB281 SE506 SK602 SK601 SB272 SB278 SE507 SB280 SE508 SK602 SD106 SA202 SD102

古墳時代の遺構　古墳時代前期後半の土坑２を検出した。ＳＫ05は平面が径1.0ｍ、深さ0.45ｍの円形掘形の土坑である。掘形底から布留式土器が出土した。ＳＫ06は平面が径2.4ｍ、深さ1.5ｍの円形掘形の土坑である。掘形底から布留式土器が出土した。

奈良時代の遺構　道路側溝１条、掘立柱建物40棟、掘立柱塀７条、築地塀１条、井戸４基、溝５条、土坑４を検出した。これまで調査した分と合わせると四坪内では道路２条、掘立柱建物68棟、掘立柱塀11条、築地塀２条、門１棟、井戸９基、溝11条、土器埋納土坑１、土坑４を検出したことになる。四坪全体の時期変遷については検討を進めている。

条坊関係遺構　三・四坪坪境小路南側溝ＳＤ102、坪の北辺を区画する築地塀ＳＡ202とその雨落溝ＳＤ206、ＳＤ102とＳＤ206をつなぐ暗渠ＳＤ111がある。南側溝ＳＤ102は南岸から3.0ｍ分まで検出した。深さは0.2ｍで、埋土から墨書土器、軒丸瓦6314Ｅ１点、軒平瓦6710Ｃ２点が出土した。築地塀ＳＡ202の基底幅は2.4ｍである。雨落溝ＳＤ206は西側で深く掘り込まれている。その深さは0.77ｍで、埋土から軒平瓦6663Ｃ１点、6710Ｃ２点が出土した。暗渠ＳＤ111は幅0.45～0.65ｍ、深さ0.28ｍの素掘溝で、底には木樋の痕跡が残っていた。

掘立柱建物・塀　掘立柱建物40棟、掘立柱塀７条を検出した。今回検出した建物の規模や寸法等については一覧表にまとめた。重複関係が認められるものにはＳＢ245→ＳＢ246・ＳＢ273→ＳＡ263・ＳＢ282→ＳＢ277→ＳＢ279がある。柱筋を揃えて建つ建物は、坪の北西では同規模の建物ＳＢ278とＳＢ279が左右対称に東西に並んで建つ。ＳＢ279は柱の抜取り穴に多量の炭と焼土が入っていることから火災で燃えた可能性がある。坪の南西には整然とコの字型に配置された建物が建てられる時期がある。ＳＡ262・263によって囲まれた区画内の中心部分にはＳＢ254とＳＢ255が西側柱筋を揃えて南北に並ぶ。その西側にはＳＢ251・252・253が東側柱筋を揃えて南北に並ぶ。ＳＢ252の北側柱筋はＳＢ254の南廂とも柱筋を揃えている。中心より東側にはＳＢ257とＳＢ258が南北に並ぶ。

ＳＤ109・112～114　坪内を南北に区画する東西溝ＳＤ109は最大幅3.3ｍ、深さ0.2～0.5ｍの素掘溝で、第273－1・276次調査分と合わせて長さ88ｍ分を検出した。溝は坪の西端まで続くと考えられる。埋土から奈良時代末頃の土器、墨書土器、土錘、軒平瓦6225Ａ、軒平瓦6685Ａ・6710Ｃ・6801Ａが各１点、鉄釘、砥石が出土した。重複関係からＳＢ248・254・261・ＳＡ262・ＳＢ264・268よりも新しい。ＳＤ109の南に平行する東西溝ＳＤ112は幅1.5ｍ、深さ0.27ｍの素掘溝である。溝は西発掘区まで続いてこない。埋土から多量の奈良時代後半の土器、軒丸瓦6311Ｂと6710Ｃが各１点出土した。坪の北西部の南北溝ＳＤ113は最大幅が7.7ｍ、深さ0.4ｍの素掘溝で、溝の西岸はあふれて拡がっている。おそらく坪の北端まで続くと考えられる。埋土からは奈良時代の土器、墨書土器、土錘、軒平瓦6710Ｃ２点、鉄釘、砥石が出土した。重複関係からＳＢ278より古く、ＳＥ507・508、ＳＫ602

遺構番号	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長m（尺）	梁間全長m（尺）	桁行柱間寸法(m)	梁間柱間寸法(m)	廂の出(m)	備　考
ＳＡ212	東西	19	40.8(136)	1.8~2.1(6~7)				
ＳＢ214	東西	5×3	9.6(32)	7.2(24)	2.4等間	2.1等間	南3.0	甕据付痕19個
ＳＢ215	東西	5×2	12.0(40)	45.0(15)	2.4等間	2.25等間		
ＳＢ221	南北	3×2	4.2(14)	7.2(24)	2.1等間	2.4等間		
ＳＢ225	東西	5×3	12.75(42.5)	8.4(28)	2.55等間	2.7等間	南3.0	甕据付痕５個
ＳＢ230	南北	5×2	12.0(40)	4.8(16)	2.4等間	2.4等間		間仕切りあり、甕据付痕15個
ＳＢ236	南北	3×2	4.95(16.5)	3.9(13)	1.65等間	1.95等間		総柱建物
ＳＢ244	東西	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
ＳＢ245	東西	3以上×2	6.0(20)	3.9(13)	3.0等間	1.95等間		根石５～23個を敷いている
ＳＢ246	南北	3×2	4.5(15)	3.3(11)	1.5等間	1.65等間		
ＳＢ247	南北	5×1	12.0(40)		2.4等間			SB230と同一建物になる可能性あり
ＳＢ248	南北	4×3	9.0(30)	6.3(21)	2.25等間	2.1等間	西2.1	
ＳＢ249	南北	3×1以上	5.85(19.5)		1.95等間			
ＳＢ250	東西	2以上×2	2.1(7)	3.3(11)	2.1等間	1.65等間		
ＳＢ251	南北	3×2	4.95(16.5)	3.9(13)	1.65等間	1.95等間		総柱建物・SB252と柱筋揃える
ＳＢ252	南北	3×2	4.95(16.5)	3.9(13)	1.65等間	1.95等間		総柱建物・SB251・SB254の南廂と柱筋揃える
ＳＢ253	南北	1以上×2		4.8(16)		2.4等間		SB251・252と東側柱筋揃える
ＳＢ254	東西	5×3	7.2(24)	4.8(16)	2.4等間	2.4等間	南3.0	SB255と西側柱筋揃える
ＳＢ255	東西	5×3	11.55(38.5)	8.4(28)	※	2.55等間	北3.3	※西から2.4-2.4-2.25×3
ＳＢ256	東西	5×2	10.5(35)	4.5(15)	※	2.25等間	西2.4	※西から2.1-2.1-1.95-1.95
ＳＢ257	南北	5×2以上	10.5(35)	2.1(7)	2.1等間	2.1等間		南側柱とSB255の北廂の柱筋揃える
ＳＢ258	南北	3×1以上	5.4(18)		1.8等間			北側柱筋とSB255の南側柱筋揃える
ＳＡ259	南北	5？	10.95(36.5)	北から2.25-2.25-4.3-2.15				SB255から東へ2.15m
ＳＡ260	南北	5	10.95(36.5)	北から1.15-1.95-2.25-1.8-1.65-2.15				SB255から西へ1.65m
ＳＡ261	東西	7	15.45(51.5)	西から2.25-2.1-2.25×3-2.1-2.25				SB255から南へ3.6m
ＳＡ262	南北	10以上	24.0(80)		2.4等間			
ＳＢ263	東西	16以上	35.7(119)		2.1・2.4			西から５間目のみ2.1m
ＳＢ264	南北	4×2	9.0(30)	4.2(14)	2.25等間	2.1等間		
ＳＢ265	南北	7×3以上	17.7(59)	5.85(19.5)	2.4等間	2.7等間	※	※ 北 3.0・南 2.7・ 西 3.15 三面廂付建物
ＳＡ266	南北	3	7.2(24)		2.4等間			
ＳＢ267	南北	3×1以上	6.3(21)		2.1等間			
ＳＢ268	南北	3×2以上	6.3(21)	3.3(11)	2.1等間	1.65等間		
ＳＢ269		2以上×1以上	1.8(6)		1.8等間			
ＳＢ270	南北	2以上×2	2.4(8)	4.8(16)	2.4等間	2.4等間		
ＳＢ271	東西	3×3	4.95(16.5)	5.85(19.5)	1.65等間	1.95等間	南1.95	
ＳＢ272		2×1以上	3.6(18)		1.8等間			
ＳＢ273	南北	2×1	5.1(17)	4.8(16)	2.1-3.0	4.8等間		壁のない建物？・SB274と東側柱筋揃える
ＳＢ274		1？×1	4.8(16)	2.4(8)	4.8等間	2.4等間		壁のない建物？・SB273と東側柱筋揃える
ＳＢ275	東西	4×2	9.0(30)	3.6(12)	2.25等間	1.8等間		
ＳＡ276	東西	6以上	12.75以上(42.5)		西から1.95×2-2.1-2.25-2.25-2.25			柱間不揃い
ＳＢ277	東西	7以上×4	14.55(48.5)	10.2(34)	2.25等間	2.1等間	北・南・西3	三面廂付建物
ＳＢ278	南北	5×3	12.0(40)	7.5(25)	2.4等間	2.4等間	西2.7	SB279と柱筋を揃えて左右対称に建つ
ＳＢ279	南北	5×3	12.0(40)	7.5(25)	2.4等間	2.4等間	東2.7	柱抜き取り穴に多量の炭と焼土入る
ＳＢ280	南北	2以上×2	1.8(6)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
ＳＢ281	東西	3×2	4.5(15)	3.3(11)	1.5等間	1.35等間		
ＳＢ282	南北	3×2	5.85(19.5)	3.9(13)	1.95等間	1.95等間		
ＳＢ283	南北	2×2	3.9	3.0	1.95等間	1.5等間		

掘立柱建物・塀一覧表

遺構番号	掘形			枠			主要出土遺物	備　考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	平面形・構造	内法(m)	水溜・濾過装置等		
ＳＥ505	隅丸方形	東西4.2 南北4.3	1.2	方形横板組	1.2	礫	曲物底板・櫛	転用材の使用、礫敷の範囲が枠の位置とずれる。
ＳＥ506	隅丸長方形	東西1.9 南北1.6	2.13	方形縦板組隅柱横桟留	0.62	礫	曲物底板・軒平瓦6710C・672 1D・墨書土器	SB279より古く、SB282より新しい
ＳＥ507	隅丸方形	東西1.42 南北1.62	1.6	方形縦板組(枠の大部分は抜き取られている)	不明	長円形曲物２段(直径0.7m 短径0.4m、高さ0.3m)	独楽、箸、和銅開珎、墨書土器	下段曲物外面に「飯司」の墨書あり SD113より古くSK602より新しい
ＳＥ508	隅丸長方形	東西2.2 南北1.6以上	1.3	枠は抜き取られているので不明	不明		和銅開珎	SK602より古い
ＳＥ509	隅丸方形	東西2.05 南北2.15	1.57	方形の枠の痕跡が残る(枠は抜き取られている)	0.72			SK265より古い

井戸一覧表

よりも新しい。ＳＤ113の南端近くから西に向かう東西溝ＳＤ114は幅2.4ｍ、深さ0.3ｍの素掘溝である。埋土から奈良時代の土器が出土した。

ＳＥ505～509　今回検出した井戸には方形縦板組２基、方形横板組１基、枠が抜き取られたもの２基がある。井戸の規模、構造等は一覧表にしてまとめた。方形横板組の井戸ＳＥ505は、掘形底の礫敷と枠の位置がずれることから、一度作り変えられたものと考えられる。枠内から平安時代初頭の土器が出土した。方形縦板組の井戸ＳＥ506は、枠内から奈良時代中頃から後半にかけての土器が出土した。方形縦板組の井戸ＳＥ507の底には長円形の曲物が２段据えられていた。曲物の内面は煤が一面に付着していた。下段曲物の外面には「飯司」の墨書がある。抜き取り部分から奈良時代後半の土器が出土している。

ＳＫ601～604　ＳＫ601は平面が径2.2ｍ、深さ1.2ｍの２段掘りの土坑である。掘形底から奈良時代の土器が出土した。重複関係からＳＢ279よりも新しい。ＳＫ602は平面が南北2.0ｍ、東西1.0ｍ以上、深さ0.5ｍの隅丸方形掘形の土坑である。重複関係からＳＥ507よりも古くＳＥ508よりも新しい。ＳＫ603は南北3.2ｍ、東西8.7ｍ以上、深さ0.25ｍの溝状土坑である。埋土から奈良時代の土器、鉄釘と検出面直上から唐三彩陶枕の破片が出土した。重複関係からＳＢ278・ＳＤ113よりも古い。ＳＫ604は平面が南北3.2ｍ以上、東西7.3ｍ、深さ0.25ｍの隅丸長方形の土坑である。埋土最上層には多量の炭を含んだ土が部分的に拡がっている。埋土からは奈良時代前期から中頃にかけての土器、軒丸瓦6282Ｇ１点、鉄釘が出土した。重複関係からＳＢ270・271よりも古い。

今回検出した遺構には、重複関係・出土遺物・配置から５時期以上の変遷がある。時期が明らかなものは一覧表にした。奈良時代前半は坪の東半部同様、建物はまばらにしか建たないが、後半になると、坪の南西部は掘立柱塀によって囲まれ、その中にはコの字型に建物が配置される。その整然とした配置や規模は公の機関で見られるようなものであり、この坪の性格を考える上でも重要な意味を持つ。奈良時代末になると坪内は東西溝によって坪内が南北に区画される。

中世以降の遺構　河道ＳＤ115の南岸を検出した。岸には護岸用と見られる杭列があり、杭の根元からは皇宋通寶、埋土からは鎌倉から桃山時代にかけての陶磁器が出土した。

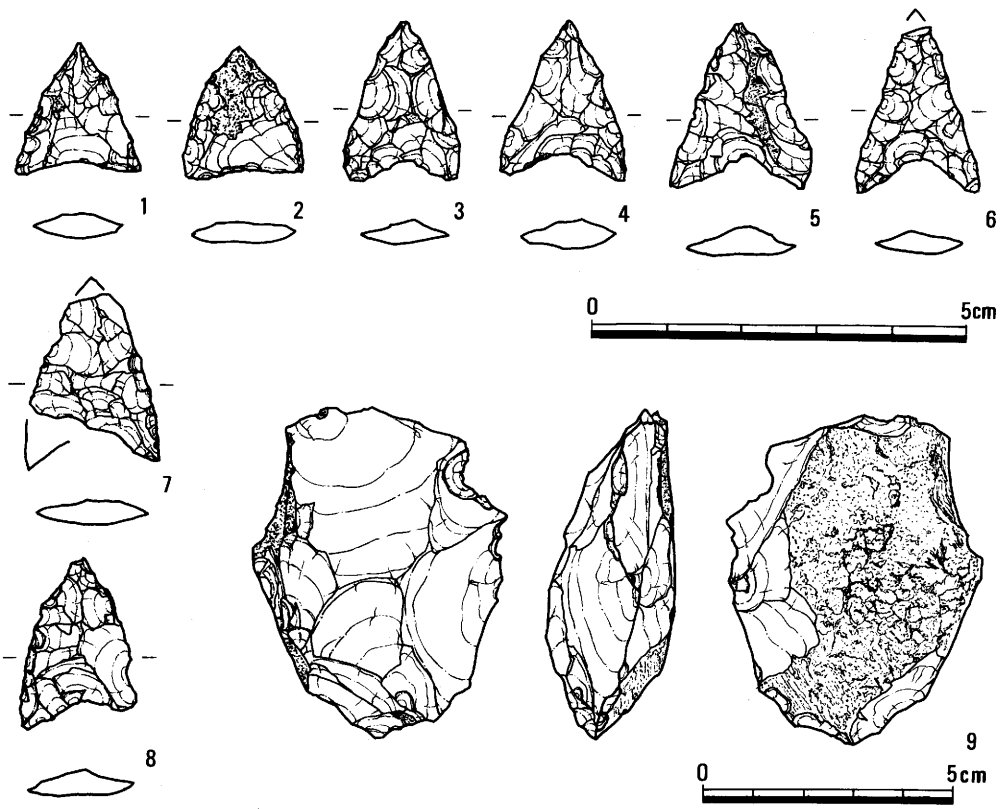
奈良時代前期～中期 →	奈良時代中頃～後半 →	奈良時代後半 →	奈良時代末 →	奈良時代末～平安
SB282 →	SB224・250・271・273 →	SB245・251・252・253 →	SB247・278・279 →	SB246
SK604	SB274・SE506	SB254・257・258・275	SD109・112	SE505
SB508→SK602→SE507→SD113		SB227・SA262・263・276		SK601
	SB264			

遺構時期区分表

Ⅲ　出土遺物

縄文時代の土器・石器、古墳時代の土器、奈良時代の瓦・土器・木製品・石製品・金属製品・銭貨、中世の銭貨がある。以下、種別ごとに主な遺物についてのみ報告する。

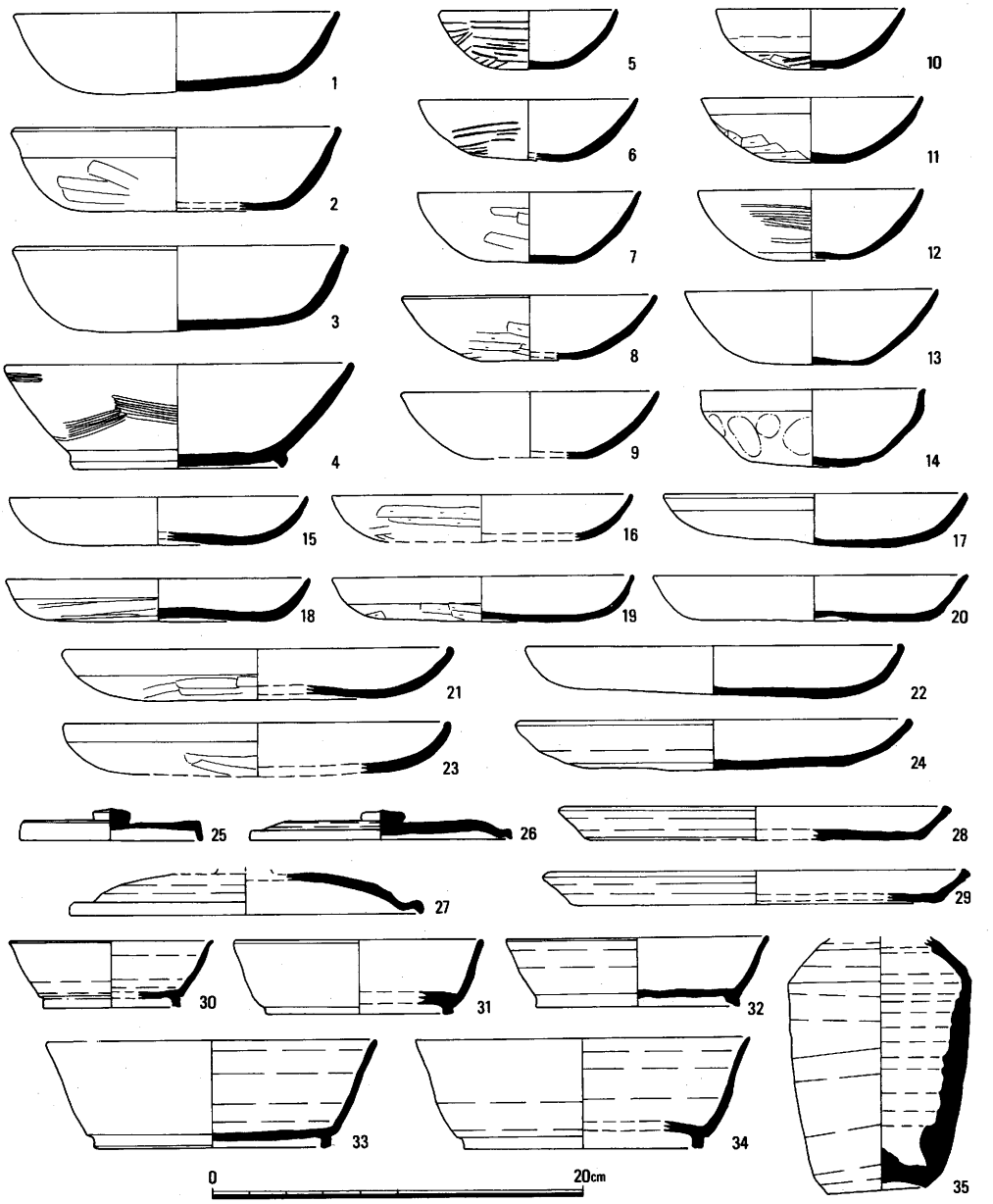
縄文時代の石器　黄白シルト層と茶褐色砂質シルト層から、全部で424点出土している。その内訳は石鏃８点、楔形石器１点、石核１点、剥片36点、砕片378点である。石材はすべてサヌカイトである。１～８は打製石鏃である。出土した石鏃はすべて凹基無茎鏃で、側縁が先端近くで角度を変えるいわゆる五角形鏃に属するものである。１・２は平面がほぼ正三角形で他と比較した場合、基部の抉りが浅い。１は大まかな調整を行なった後、微調整を行なっている。２は剥片の形態を生かし、特に腹面側では、側縁を小剥離で調整するのみで、基部は調整を加えていない。背面の上部には礫面が残存し、基部は大まかな剥離を行なった後微調整を施している。３～８は６が若干細身であるものの長幅比がおおよそ４：５のもので、ほぼ同様の形態であるといえる。７・８はいずれも片脚が折れているが、使用によってではなく製作段階で失敗したものであると考えられる。９は石核である。Ａ面では礫面を打面にし、周辺から中心に向かって剥片剥離作業を行なっている。この面



縄文時代石器　（1～8は 1／1 ・ 9は2／3）

ではほぼ全面に剥離されていることから剥片素材であるか母岩から礫面のある剥片を剥取した後であるのかは不明である。B面はほとんど礫面を残しており実測図左側縁と下部で小剥片を数枚剥取した痕跡をとどめている。（久保邦江）

瓦類　瓦類は遺物整理箱で45箱分出土した。出土瓦類の大半は丸瓦、平瓦であるが、軒丸瓦14点、軒平瓦49点、鬼瓦１点、塼43点がある。軒丸瓦の内訳は6225Ａ１点、6225種別



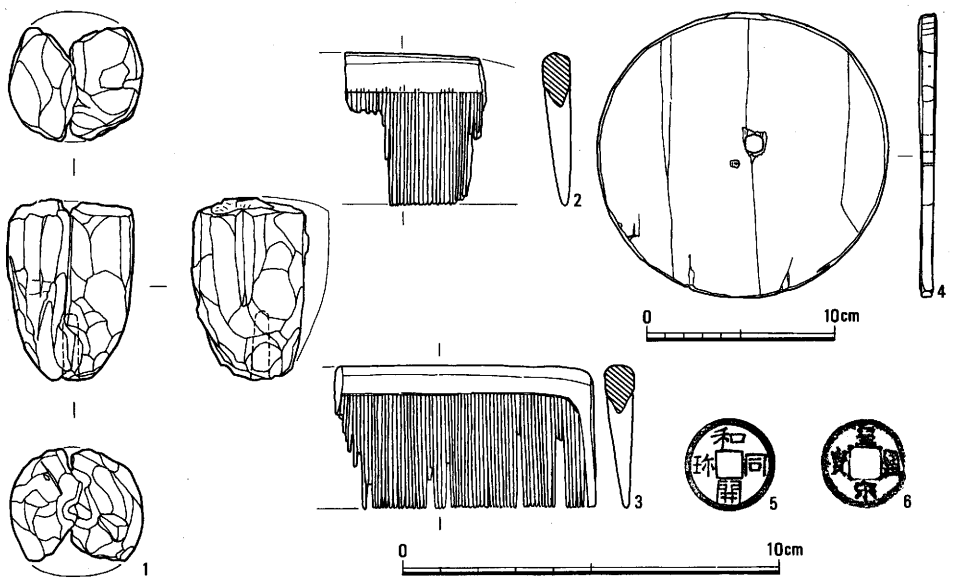
溝ＳＤ112　出土土器　（1／4）

別不明1点、6282種別不明2点、6282G1点、6291Ab1点、6311B2点、6314E1点、6316G1点、6316Ka1点、6316K1点、型式不明2点である。軒平瓦の内訳は6663C10点、6663C種別不明1点、6667C1点、6685A1点、6710C26点、6721D5点、6721E1点、6801A1点、型式不明3点である。四坪でこれまで出土した軒平瓦の中では、6710Cが出土軒平瓦全体の53%を占める。従来の調査では6316Gと6710Cが組み合う可能性が指摘されているが[2)]、この坪に関しては、軒丸瓦の中に集中する型式は見受けられない。いずれにせよ、この坪内では6710Cが主体的に用いられた建物があったことは指摘できよう。

土器類　本調査では遺物整理箱にして300箱の土器が出土している。図示したものはSD112から出土したもので、1～24が土師器、25～35が須恵器である。奈良時代後半のものと考えられる。また、特筆すべきものとしてSK603の検出面直上から唐三彩陶枕（絞胎陶）が出土している。墨書土器も数点出土しており、判読できるものとして「南」（SE506）、「舎」（SD109）、「及」（SD113）がある。

木製品　独楽・櫛・曲物・箸などがある。以下、井戸から出土した主なものについて報告する。

1は独楽である。全体に粗い面取り加工を行っている。上端の縁は斜めに面取りをし、中央がやや盛り上がるように加工し、下端は弾丸状に削っている。下端の中央には鉄芯を打ち込んでいたと考えられる。径3.3cm、高さ4.7cm。奈良時代の井戸SE507から出土。2・3は横櫛である。2は現存幅3.7cm、高さ4.0 cm、厚さ0.7cm。3cmあたりの歯数は30本である。ともにSE505の枠内から出土している。3は現存幅7.0cm、高さ3.8cm、厚さ0.7cm。3



出土木製品・銭貨　（4以外　1／2　・　4　1／4）

cmあたりの歯数は33本である。ともにＳＥ505の枠内から出土している。４は円板状のものであり、おそらく土器類などの蓋板として用いられたものであろう。中央には把手を付けたと思われる径１cmの円形の孔を開けている。径16.4cm、厚さ0.7cm。板目材を使用している。奈良末から平安初頭の井戸ＳＥ505の枠内から出土している。

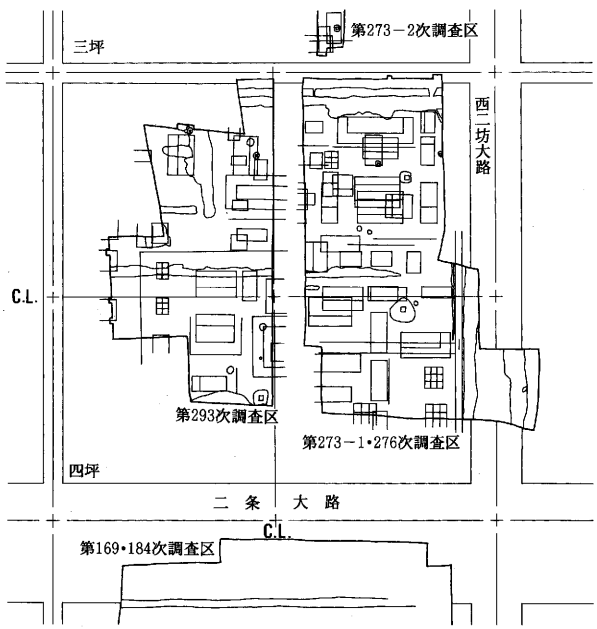
銭貨　５は奈良時代の和同開珎で、ＳＥ508から２点出土した。６は北宋銭の皇宋通寶で鎌倉～室町時代に流通していたと考えられるものである。ＳＤ115から出土した。

金属・石製品　溝・土坑・掘立柱建物の柱掘形・遺物包含層から鉄釘11点と溝・遺物包含層から砥石３点が出土している。　（原田憲二郎・池田裕英・久保邦江）

Ⅳ　まとめ

これまでの調査成果と合わせて四坪全体についてまとめる。四坪内は奈良時代前半には建物がまばらに建つのみであったが、奈良時代後半になると、坪内は掘立柱塀、坪内道路によって区画され、その内に建物が整然と建つ。特に坪の南西では、掘立柱塀に囲まれた中に、建物がコの字型に柱筋を揃えて配される。奈良末になると、それらの建物は廃され東西溝によって、坪内は二分割され、建物が柱筋を揃えて整然と建ち、西二坊大路に面して門が開く。特に坪の北東では、多量の甕を据付けた建物がコの字型に整然と建つ。平城京廃都後は、坪内の様相は一変し、建物がまばらになる。

四坪では、奈良時代後半以降坪の東半部では建物内に多数の甕が据え付けている例が多く見られる。甕の中身は不明であるが、このような数の多さは平城京内では他に例を見ない。一方坪の西半では見られないことから、坪の東と西とでは使い分けがあったものと考えられる。このような甕の数の多さに加えてこの時期の整然とした建物配置やさらに大路に面して門が開くことを考えると、ここが公的施設であった可能性が高いといえよう。　（久保清子）



四坪遺構概念図

1）「右京三条三坊七坪・菅原東の調査 第257－2」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』奈良市教育委員会 1994年
2）毛利光俊彦「第Ⅳ章 考察 1屋瓦 A平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮発掘調査報告ＸⅢ』奈良国立文化財研究所 1991

(3) 平城京右京二条三坊六坪の調査　第286－2・292－1次

Ⅰ　はじめに

右京二条三坊六坪では、今年度までに第286－2次、第292－1次、第310－2次、第310－3次の計4次にわたる調査を実施した。このうち今年度は、第286－2次、第292－1次調査の概要について報告する。調査は六坪の北辺中央から十一坪東辺にかけての範囲であるが、第292－1次調査区のうち十一坪内の調査概要は第292－2次調査とともに別項で報告する。また六坪中央部で行った第310－2次、第310－3次調査の概要については、次年度に報告を計画している。

Ⅱ　検出遺構

層序　調査区は、西から東に向かってなだらかに傾斜する低丘陵に位置する。調査区の基本的な層序は黒灰色土（耕土）、明灰色砂質土、灰褐色土と続き、黄白色土あるいは明青灰色土の地山の順である。この地山上面（標高72.7～71.9m）で、奈良・平安時代の遺構を検出した。また調査区北東部に灰褐色土と地山との間に赤茶褐色土、茶褐色砂質土が堆積している部分もある。

検出した遺構には、奈良時代以前の溝、奈良・平安時代の道路、溝、掘立柱建物、井戸、土坑がある。以下、主なものについて記す。

奈良時代以前の遺構　溝2条がある。2条とも出土遺物は無いが、重複関係、方位の振れなどから、奈良時代以前の遺構であることがわかる。

ＳＤ01　発掘区北東部で検出した北西から南東に向う素掘りの溝である。北西、南東ともに発掘区外へ続く。幅0.5～0.8m、検出面からの深さ約0.35m、長さ約26m分を検出した。断面形態はU字形を呈する。溝底は北西から南東へ向かって下り勾配である。埋土は暗灰色砂である。

ＳＤ02　ＳＤ01の南側で検出した北西から南東に向う素掘りの溝である。ＳＤ01と方位を合わせ並行する。北西、南東ともに発掘区外へ続く。幅0.5～0.7m、検出面からの深さ0.1～0.25mである。後世の削平のため、途切れている箇所もあるが、長さ約30m分を検出した。溝底は北西から南東へ向かって下り勾配である。埋土は暗茶褐色土である。

奈良・平安時代の遺構　道路3条、道路側溝5条、掘立柱建物52棟、井戸12基、土器埋納土坑1、土坑がある。なお掘立柱建物と井戸については一覧表にまとめた。

条坊関係遺構　二条条間路とその南側溝、右京二条三坊六・十一坪境小路とその両側溝、右京二条三坊六坪坪内通路とその両側溝がある。

ＳＦ0607　二条条間路である。路面幅約3m分、長さ約9.5m分を検出した。

ＳＤ102　二条条間路南側溝である。幅4～5m、検出面からの深さ約0.5mで、長さ約

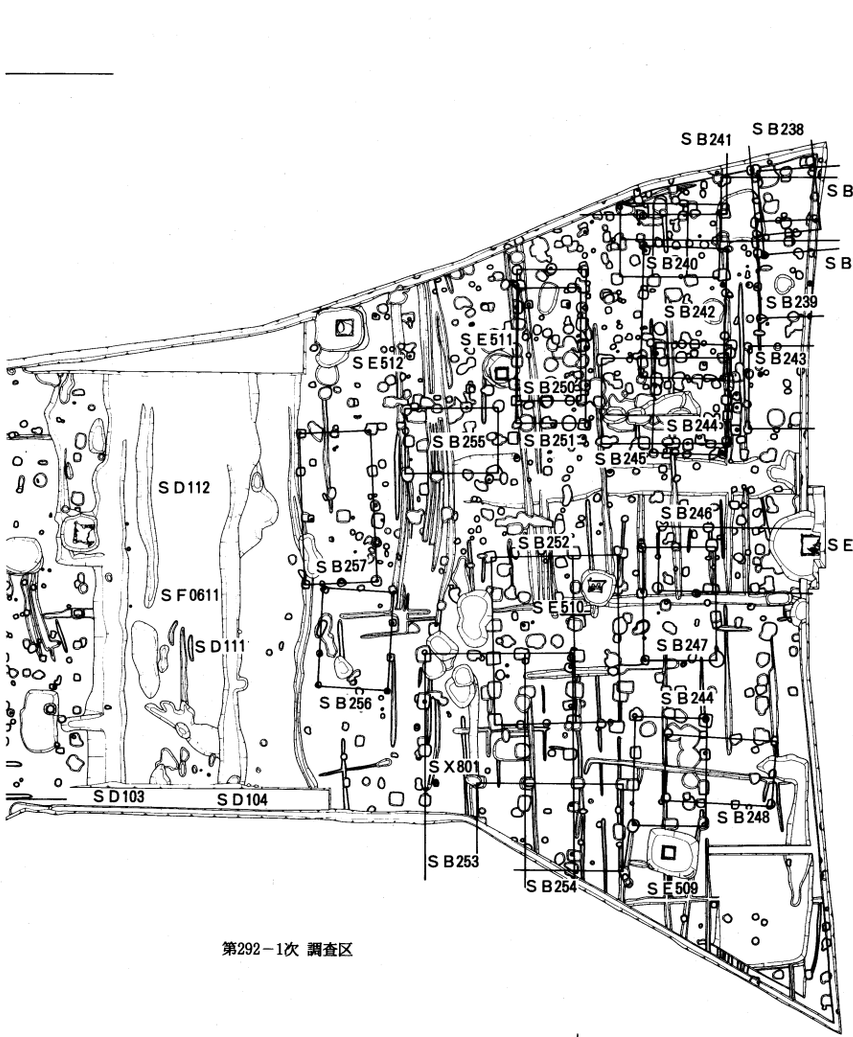
Y＝19,900

Y＝－19,860

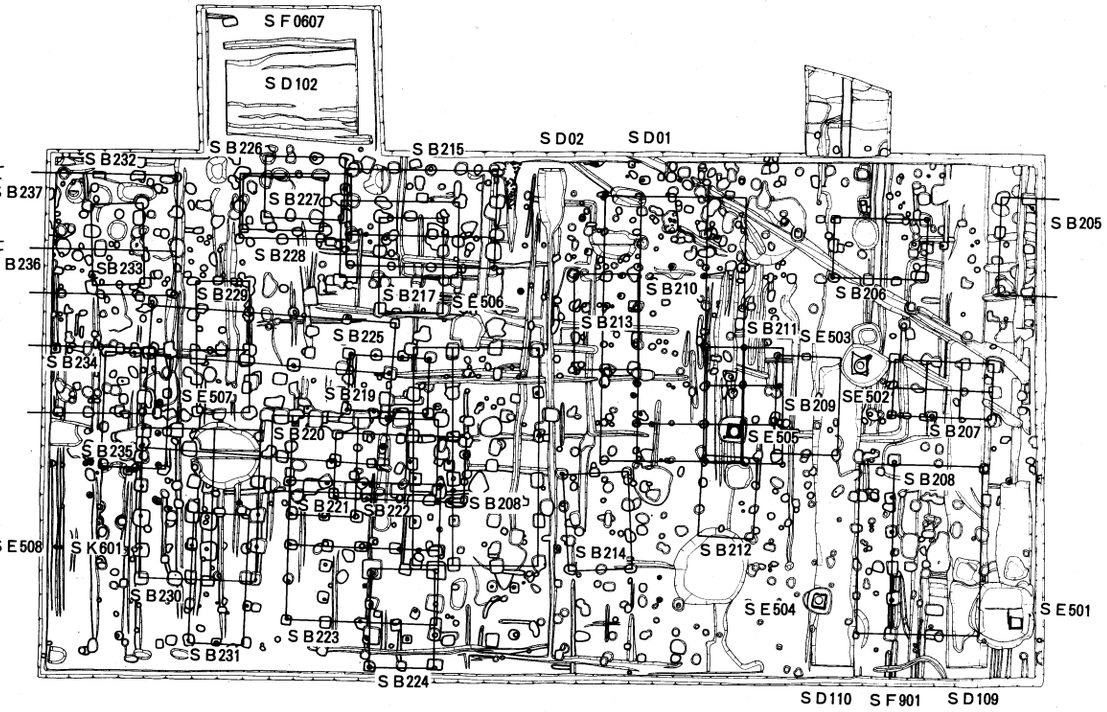
Y＝－19,820

X＝－145,760

X＝－145,800



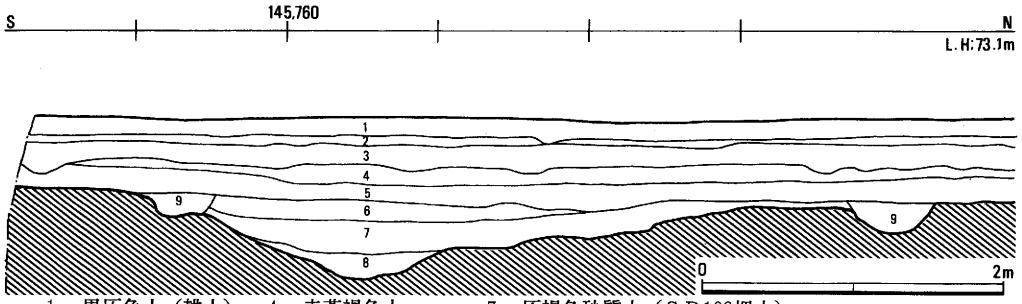
第292－1次 調査区



第286－2次 調査区

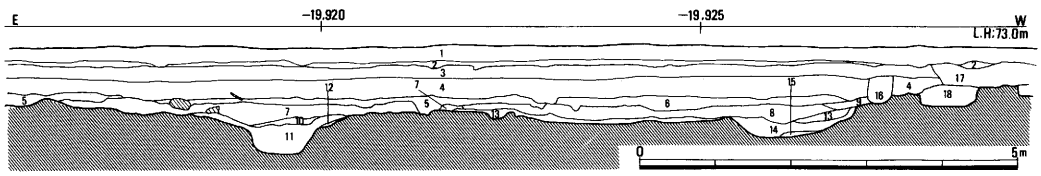
0　　40m

第286－2・第292－1次調査　遺構平面図（1／400）



1　黒灰色土（耕土）　4　赤茶褐色土　7　灰褐色砂質土（ＳＤ102埋土）
2　明灰色砂質土　5　茶褐色砂質土　8　暗灰色砂（ＳＤ102埋土）
3　灰褐色土　6　暗灰褐色砂質土　9　暗灰色砂質土

二条条間路南側溝ＳＤ102土層図（１／50）



1　黒灰色土（耕土）　5　淡灰褐色土　9　暗茶褐色土（黄白色の地山粘土ブロック多く含む）　13　茶褐色砂（ＳＤ103埋土）　17　暗灰褐色砂質土
2　明灰色砂質土　6　灰色砂質土（素掘溝）　10　暗灰褐色粘土（ＳＤ104埋土）　14　灰色砂　18　灰色砂質土
3　灰褐色土　7　灰色砂（ＳＤ104埋土）　11　暗灰色粘土（ＳＤ104埋土）　15　暗灰褐色土　（黄白色の地山粘土ブロック含む）
4　茶灰色土　8　暗灰色土　12　暗灰色粘土（明青灰色の地山粘土ブロック多く含む）　（スミ少量含む・ＳＤ103埋土）
16　灰褐色砂質土

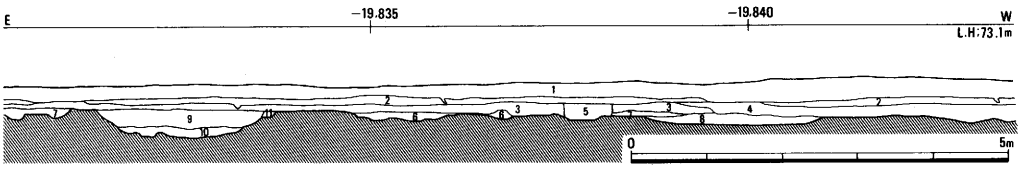
右京二条三坊六・十一坪坪境小路　西側溝ＳＤ103・東側溝ＳＤ104土層図（１／100）

9.5ｍ分を検出した。溝底は西から東へ向かって下り勾配である。埋土は上から順に暗灰褐色砂質土、灰褐色砂質土、暗灰色砂である。溝内埋土から奈良時代後半の土器が出土した。溝心の国土座標はＸ＝－145,760.500、Ｙ＝－19,867.000である。

ＳＦ0611　右京二条三坊六・十一坪境小路である。路面幅５～６ｍで、長さ約26ｍ分を検出した。周辺の地形からみて、この地点では西から東へ下る丘陵を南北に切り通して道路を造ったものとおもわれる。また路面直上には茶褐色砂が堆積しており、道路が廃絶した後、流路になったことがうかがえる。路面心の国土座標はＸ＝－145,799.500、Ｙ＝－19,922.850である。

ＳＤ103　右京二条三坊六・十一坪境小路西側溝である。幅約1.6ｍ、検出面からの深さ約0.4ｍで、長さ約25ｍ分を検出した。溝底は南から北へ向かって下り勾配である。埋土は上から順に灰褐色粗砂、灰色砂、暗灰褐色土である。溝内埋土から奈良時代から平安時代にかけての土器が出土した。溝心の国土座標はＸ＝－145,799.500、Ｙ＝－19,926.200である。

ＳＤ104　右京二条三坊六・十一坪境小路東側溝である。幅約2.2ｍ、検出面からの深さ約0.7ｍで、長さ約26ｍ分を検出した。溝底は南から北に向かって下り勾配である。埋土は上から順に灰色砂、暗灰褐色土、暗灰色粘土である。溝心の国土座標はＸ＝－145,799.500、Ｙ＝－19,919.500である。



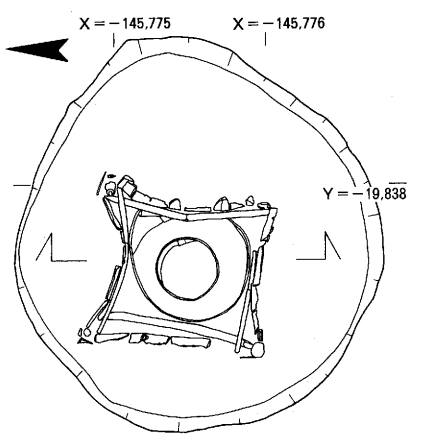
1 黒灰色土（耕土）　4 灰色砂質土（素堀溝埋土）　7 暗茶灰色砂質土　10 黄茶色砂質土（ＳＤ109埋土）
2 明灰色砂質土　5 暗青灰色砂質土　8 暗茶灰色土（ＳＤ110埋土）　11 暗茶褐色土
3 灰褐色土　6 茶灰色砂質土　9 茶褐色土（ＳＤ109埋土）

右京二条三坊六坪坪内道路　東側溝ＳＤ109・西側溝ＳＤ110土層図（１／100）

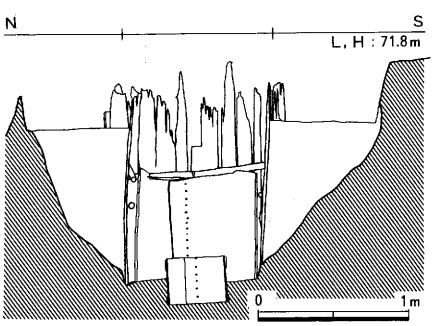
ＳＦ901　右京二条三坊六坪内の通路である。路面幅４～５ｍで、長さ約28ｍ分を検出した。路面心の国土座標はＸ＝－145,793.300、Ｙ＝－19,836.300である。坪内通路西側溝心と六・十一坪境小路東側溝心との距離は79.6ｍあり、坪を東西に三分割した場合の、東から三分の一の位置にあることがわかる。

ＳＤ109　右京二条三坊六坪坪内通路東側溝である。幅約2.4ｍ、検出面からの深さ約0.4ｍで、長さ約28ｍ分を検出した。溝底は南から北へ向かって下り勾配である。溝内埋土は上から順に茶褐色土、黄茶色砂質土である。溝内埋土から奈良時代後半の土器が出土した。溝心の国土座標はＸ＝－145,793.300、Ｙ＝－19,832.700である。

ＳＤ110　右京二条三坊六坪坪内通路西側溝である。幅約2.4ｍ、検出面からの深さ約0.2ｍで、長さ30ｍ分を検出した。溝底は南から北に向かって下り勾配である。溝内埋土は暗茶灰色土である。北端は二条条間路南側溝ＳＤ102に合流する。ＳＤ102とＳＤ110の合流点では、ＳＤ110の埋土の上にＳＤ102の埋土が堆積しており、ＳＤ110廃絶後にもＳＤ102は機能していたとおもわれる。溝内埋土から奈良時代後半の土器が出土した。溝心の国土座標はＸ＝－145,793.300、Ｙ＝－19,839.900である。



ＳＢ205～ＳＢ257　掘立柱建物を52棟検出した。うちＳＢ210、ＳＢ225は柱穴内出土土器から平安時代の掘立柱建物と考えられる。奈良時代の掘立柱建物は重複関係から５時期に分けることができる。遺構変遷の詳細については第310－2、第310－3次の調査成果とあわせて次年度に報告を計画している。



井戸ＳＥ502平面・断面図（１／50）

ＳＥ501～ＳＥ512　井戸を12基検出した。Ｓ

遺構番号	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長m（尺）	梁間全長m（尺）	桁行柱間寸法（m）	梁間柱間寸法（m）	廂の出（m）	備考
ＳＢ205		3×1以上	5.4(18)	1.8(6)以上	1.8等間	1.8		
ＳＢ206	東西	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
ＳＢ207	東西	3×2	5.4(18)	3.0(10)	1.8等間	1.5等間		総柱建物
ＳＢ208	南北	5×3	9.3(31)	6.6(22)	1.8−1.8−1.8−1.8−2.1	2.4等間	西1.8	西廂付
ＳＢ209	南北	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
ＳＢ210	南北	7×4	14.7(49)	7.8(26)	2.1等間	1.8等間	東2.1 西2.1	東・西廂付 南1間目間仕切り
ＳＢ211	南北	3×2	6.3(21)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		総柱建物
ＳＢ212	南北	3×(2)	4.5(15)	3.0(10)	1.5等間	(1.5等間)		
ＳＢ213	南北	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		ＳＢ210より古い
ＳＢ214	南北	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
ＳＢ215	東西	4×3	8.4(28)	5.4(18)	2.1等間	1.8等間	南1.8	南廂付　ＳＢ228より古い
ＳＢ216	東西	3×2	6.3(21)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		
ＳＢ217	南北	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		ＳＢ216より古い
ＳＢ218	南北	5×3	12(40)	7.2(24)	2.4等間	2.4等間	西2.4	西廂付
ＳＢ219	東西	3×2	4.5(15)	3.0(10)	1.5等間	1.5等間		ＳＢ220より古い
ＳＢ220	東西	4×2	9.6(32)	4.2(14)	2.4等間	2.1等間		ＳＢ222、ＳＢ223より古い
ＳＢ221	南北	3×2	5.4(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		ＳＢ220、ＳＢ223より古い
ＳＢ222	東西	4×2	7.2(24)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
ＳＢ223	東西	4×3	8.4(28)	7.5(25)	2.1等間	2.1等間	北3.3	北廂付　ＳＢ224より古い
ＳＢ224	南北	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		ＳＢ225より古い
ＳＢ225	東西	5×3	13.5(45)	7.5(25)	2.7等間	2.4等間	北2.7	北廂付
ＳＢ226	東西	3×2	4.5(15)	3.6(12)	1.5等間	1.8等間		ＳＢ215より古い
ＳＢ227	東西	3×2	4.5(15)	3.0(10)	1.5等間	1.5等間		
ＳＢ228	東西	3×2	6.3(21)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		
ＳＢ229	南北	4×2	7.2(24)	3.0(10)	1.8等間	1.5等間		北2間目間仕切り ＳＢ225より古い
ＳＢ230	南北	5×3	8.7(29)	6.6(22)	1.5−1.8−1.8−1.8−1.8	2.1等間	東2.4	東廂付 ＳＢ225、ＳＢ230より古い
ＳＢ231	南北	4×2	7.2(24)	3.0(10)	1.8等間	1.5等間		
ＳＢ232	東西	3以上×3	5.4(18)以上	6.6(22)	1.8等間	2.1等間	南2.4	南廂付
ＳＢ233	南北	3×2	4.5(15)	3.0(10)	1.5等間	1.5等間		
ＳＢ234	東西	3以上×(2)	5.4(18)以上	3.6(12)	1.8等間	(1.8等間)		
ＳＢ235	南北	3×2	6.3(21)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		ＳＢ234より古い
ＳＢ236		2以上×2	6.3(21)以上	4.8(16)	2.1等間	2.4等間		ＳＢ238、ＳＢ239より古い
ＳＢ237	東西	3以上×(2)	6.3(21)以上	3.6(12)	2.1等間	(1.8等間)		ＳＢ236、ＳＢ238、ＳＢ241 ＳＢ242より古い
ＳＢ238		2以上×2	4.5(15)以上	3.6(12)	1.5等間	1.8等間		
ＳＢ239	南北	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
ＳＢ240	東西	3×2	5.4(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		総柱建物 ＳＢ237、ＳＢ241より古い
ＳＢ241	東西	3以上×1以上	6.9(23)以上	1.8(6)以上	2.4−2.4−2.1	1.8		
ＳＢ242	南北	3×(2)	7.2(24)	4.8(16)	2.4等間	(2.4等間)		ＳＢ244より古い

掘立柱建物・塀一覧表(1)

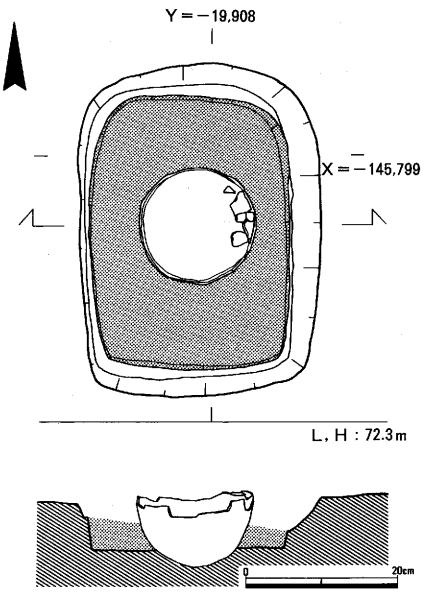
遺構番号	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長m(尺)	梁間全長m(尺)	桁行柱間寸法(m)	梁間柱間寸法(m)	廂の出(m)	備考
ＳＢ243	南北	3×1以上	4.5(15)	1.8(6)以上	1.5等間	1.8		
ＳＢ244	南北	3×2	6.3(21)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		
ＳＢ245	東西	3×2	7.2(24)	4.8(16)	2.4等間	2.4等間		
ＳＢ246	東西	2以上×2	5.4(18)以上	3.6(12)	2.7等間	1.8等間		
ＳＢ247	南北	3×2	6.3(21)	4.2(14)	1.8-1.8-2.7	2.1等間		ＳＢ246より古い
ＳＢ248	東西	3×2	6.3(21)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		
ＳＢ249	南北	3×2	6.3(21)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		
ＳＢ250	南北	3×2	6.3(21)	3.6(12)	2.1等間	1.8等間		ＳＢ251より古い
ＳＢ251	南北	4×2	8.4(28)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		
ＳＢ252	南北	5×4	9.3(31)	6.9(23)	2.1-1.8-1.8-1.8-1.8	1.5等間	東2.4	東廂付
ＳＢ253	南北	4以上×3	10.8(36)以上	8.1(27)	2.7等間	2.7等間	東2.7	東廂付　ＳＢ252より古い
ＳＢ254	東西	3×2	8.1(27)	4.8(16)	2.7等間	2.4等間		ＳＢ249より古い
ＳＢ255	東西	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8等間		
ＳＢ256	南北	3×2	5.4(18)	4.2(14)	1.8等間	2.1等間		
ＳＢ257	南北	4×2	8.4(28)	4.2(14)	2.1等間	2.1等間		

掘立柱建物・塀一覧表(2)

遺構番号	掘形			枠			主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	平面形・構造	内法(m)	水溜・濾過装置等		
ＳＥ501	隅丸方形	東西3.0 南北3.5	1.4	横桟留めのみ判明		方形板組水留め		側板はすべて抜きとられていた。
ＳＥ502	隅丸方形	東西2.3 南北2.0	1.3	外側方形縦板組横桟留め 内側円形曲物	0.8×1.1 径0.75	曲物	鎌の柄・紡輪 曲物柄杓	切り合い関係からＳＥ503より新しい。
ＳＥ503	隅丸方形	東西1.3 南北(1.4)	1.1			曲物		曲物のみ残存
ＳＥ504	隅丸方形	東西1.4 南北1.4	1.5	方形縦板組隅柱横桟留め	0.6×0.6	曲物		
ＳＥ505	隅丸方形	東西1.5 南北1.4	1.5	上段　方形横板組 下段 外側　円形縦板組 下段 内側　円形曲物	0.7×0.7 径0.6 径0.5	下段内側円形曲物内礫敷き		
ＳＥ506	隅丸方形	東西1.8 南北2.0	0.9			礫敷		枠はすべて抜きとられていた。
ＳＥ507	隅丸方形	東西2.0 南北1.9	1.5	縦板組ということのみ判明		礫敷		縦板のみ残存、他の枠材は抜きとられていた。
ＳＥ508	円形	(径3.8)	1.4	方形縦板組隅柱横桟留め	0.9×0.9			
ＳＥ509	隅丸方形	東西2.8 南北2.4	1.9	方形横板組横桟留め	0.68×0.68			
ＳＥ510	隅丸方形	東西1.9 南北1.9	1.9	方形縦板組隅柱横桟留め	0.90×0.62		斎串	
ＳＥ511	円形	径2.0	1.8	方形隅柱横桟留めのみ判明	(5.5)×5.5	方形板組水溜		側板はすべて抜きとられていた。
ＳＥ512	隅丸方形	東西2.8 南北2.4	1.5	方形縦板組隅柱横桟留め	0.95×0.95	曲物	素文鏡・銭貨	

井戸一覧表

E504・508・510・512は方形縦板組隅柱横桟留めの井戸である。ＳＥ502は方形縦板組横桟留めを外側枠とし、その内側に径約0.75m、高さ約0.7mの円形曲物を据え内側枠とする井戸である。ＳＥ505は上段が方形横板組、下段外側が円形縦板組、下段内側が円形曲物の井戸である。ＳＥ509は方形横板組横桟留めの井戸である。ＳＥ501・503・506・507・511は枠材が抜き取られていたため枠組の詳細は不明である。これらの井戸のうち、ＳＥ502、ＳＥ504からは平安時代の土器が出土した。



土器埋納土坑ＳＸ801（１／10）

ＳＫ601　東西約1.4m、南北約4.5mの平面形隅丸長方形の土坑である。検出面からの深さ約0.3mである。埋土から奈良時代中頃から後半にかけての土器が出土した。

ＳＸ801　土器埋納土坑である。掘形は東西約0.3m、南北約0.45mの平面長方形で、検出面からの深さ約0.06mである。坑内には土師器甕Ａが埋置されていたが、後世の削平のため上部は失なわれていた。土師器甕Ａ内部には土が充満しており、内容物は無かった。胞衣壺あるいは地鎮に関するものと考えられる。

Ⅲ　出土遺物

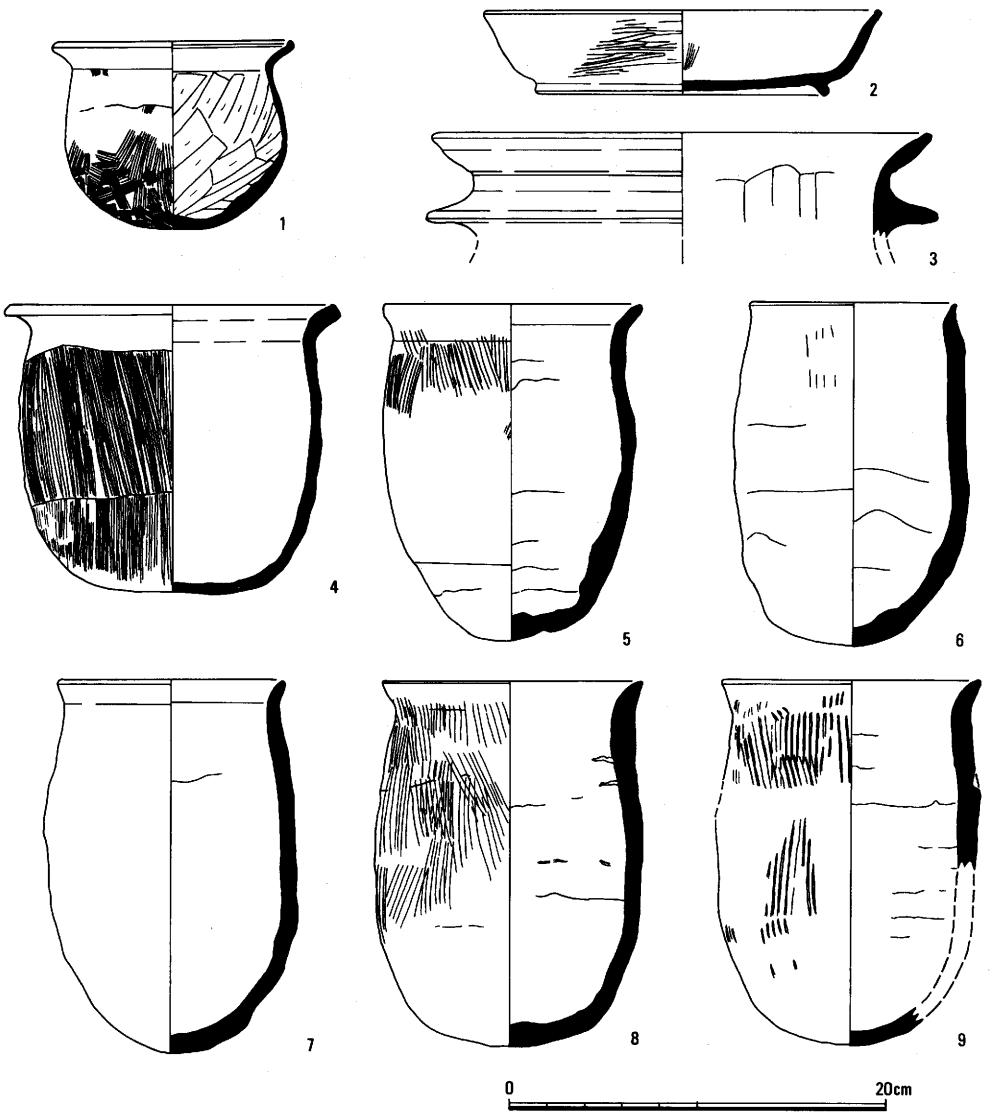
出土した遺物には奈良時代の瓦・土器・木製品・金属製品・銭貨、平安時代の瓦・土器・木製品・銭貨がある。以下、主なものについて報告する。

瓦類　丸瓦、平瓦が大半であるが、軒丸瓦31点、軒平瓦39点、鬼瓦２点、塼70点を含む。軒丸瓦の内訳は6133Ａ２点、6133Ｓ１点、6133種別不明１点、6139Ａ１点、6225Ａ１点、6225種別不明１点、6236Ａ２点、6272Ｂ１点、6275Ｂ１点、6278Ｃ１点、6279Ａｂ１点、6281種別不明１点、6285種別不明２点、6301Ｂ２点、6311Ｂ１点、6320Ａｂ１点、型式不明９点、平安以降２点である。軒平瓦の内訳は6641Ｃ５点、6641Ｅ２点、6641Ｆ２点、6643Ｃ１点、6647Ｅ１点、6663Ｃ１点、6663Ｊ１点、6664Ｃ２点、6664Ｄ１点、6671Ｋ２点、6685Ａ２点、6685Ｃ１点、6691Ａ１点、6694Ａ１点、6710Ａ１点、6721Ａ１点、6721Ｄ１点、6721種別不明２点、6732Ｋ１点、6732Ｎ１点、6732Ｑ１点、型式不明８点である。これらの軒瓦は、ＳＤ102から6275Ｂが、ＳＤ103から6225Ａ、6643Ｃ、6663Ｊ、6691Ａが、ＳＢ210の柱穴内から6641Ｃ２点、6732Ｑが、ＳＢ218の柱穴内から6641Ｅ、6710Ａが、ＳＢ225柱穴内から6311Ｂが、ＳＥ510枠内から6301Ｂ２点、6671Ｋ２点が、ＳＥ512掘形から6663Ｃ１点、6685Ａ１点が出土した。鬼瓦は２点ともに小破片であるが、うち１点は毛利光俊彦

氏分類の平城宮Ⅴ式A[1]と同笵である。　（原田憲二郎）

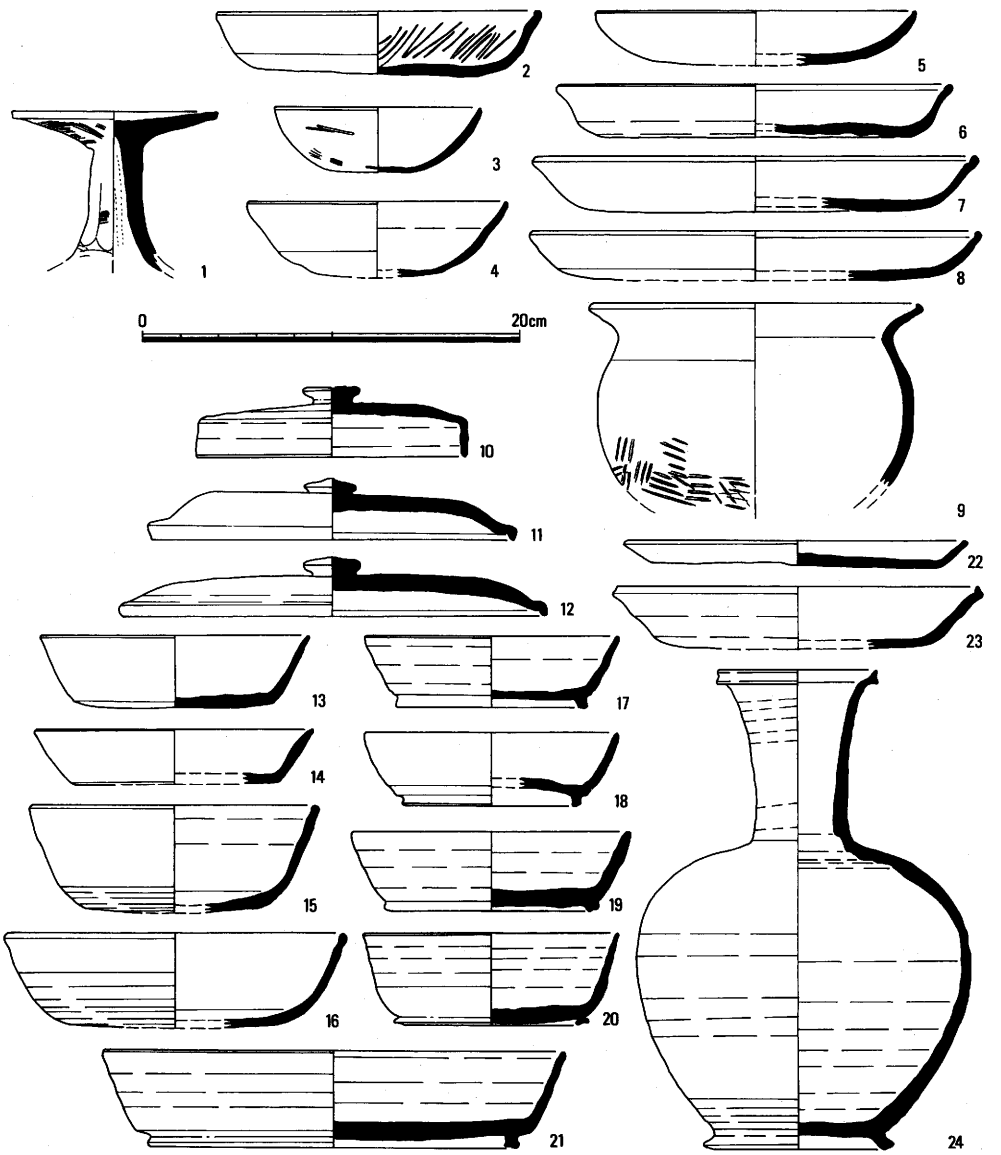
土器類　ここではＳＫ601、ＳＥ510出土土器と墨書・線刻土器について概述する。

ＳＫ601出土土器　図示したものは土師器であるが、特筆すべきものに５～９の甕Ｘがある。平城京左京一条三坊十五坪ＳＤ485に類例がみられ、製塩土器と考えられている[2]。いずれも口縁部を外反させ、底部を丸底につくる。胎土中には長石、石英などの砂粒を多く含む。法量は口径が11.0～13.6cm、器高が17.8～19.7cmで、体部の厚みは1.0～1.5cmである。外面は剥落の激しいものもあるが、はけ目で調整される。二次焼成の痕跡はみられない。内面には粘土帯の接合痕が明瞭に残る。製塩土器であれば、煎熬用と考えられよう[3]。



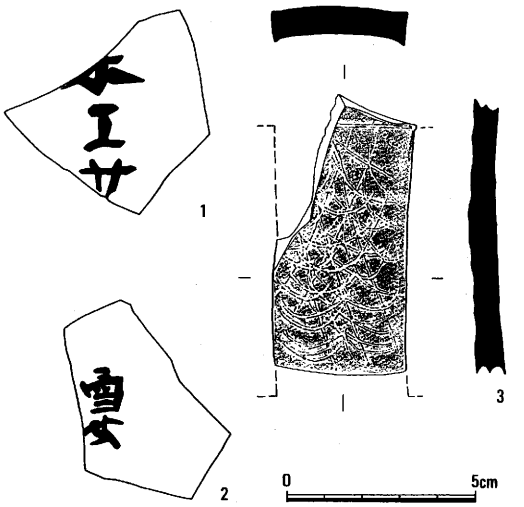
土坑ＳＫ601出土土器（１／４）

ＳＥ510出土土器　１～９が土師器、10～24が須恵器である。土師器にはミニチュア高杯（１）、杯Ａ（２）、椀Ａ（３・４）、皿Ａ（５～８）、甕Ａ（９）などがある。杯Ａ、皿Ａの外面の調整はいずれもｂ₀手法である。須恵器には、蓋（10～12）、杯Ａ（13・14）、杯Ｂ（17～20）、杯Ｃ（23）、杯Ｅ（15・16）、皿Ｂ（21）、皿Ｃ（22）、壺Ｌ（24）などがある。壺蓋（10）はＶ群土器である。杯Ｅはいずれも口縁端部を内側に巻き込み、体部下半を回転ヘラケズリした後、ヘラミガキする。壺Ｌは頸部の接合方法が三段構成のものである。これらの土器は、奈良時代中頃のものが混じるが、後半のものが主体である。



井戸ＳＥ510出土土器（１／４）

墨書・線刻土器　1はＳＤ104から、2・3はＳＤ103から出土したものである。1は杯蓋の頂部内面に「木工廾」、2は杯もしくは皿の底部外面に「雪女」と墨書されている。3は硯の脚部に鳥の羽根のような文様が線刻されたものである。胎土などの特徴からＶ群土器と考えられる。墨書土器にはこれら以外に判読できるものに、ＳＤ103から「本」、「東」、「衆」、「門□」、「器」、「西」が、ＳＥ510から「野」と記されたものが出土している。



墨書、線刻土器（1／2）

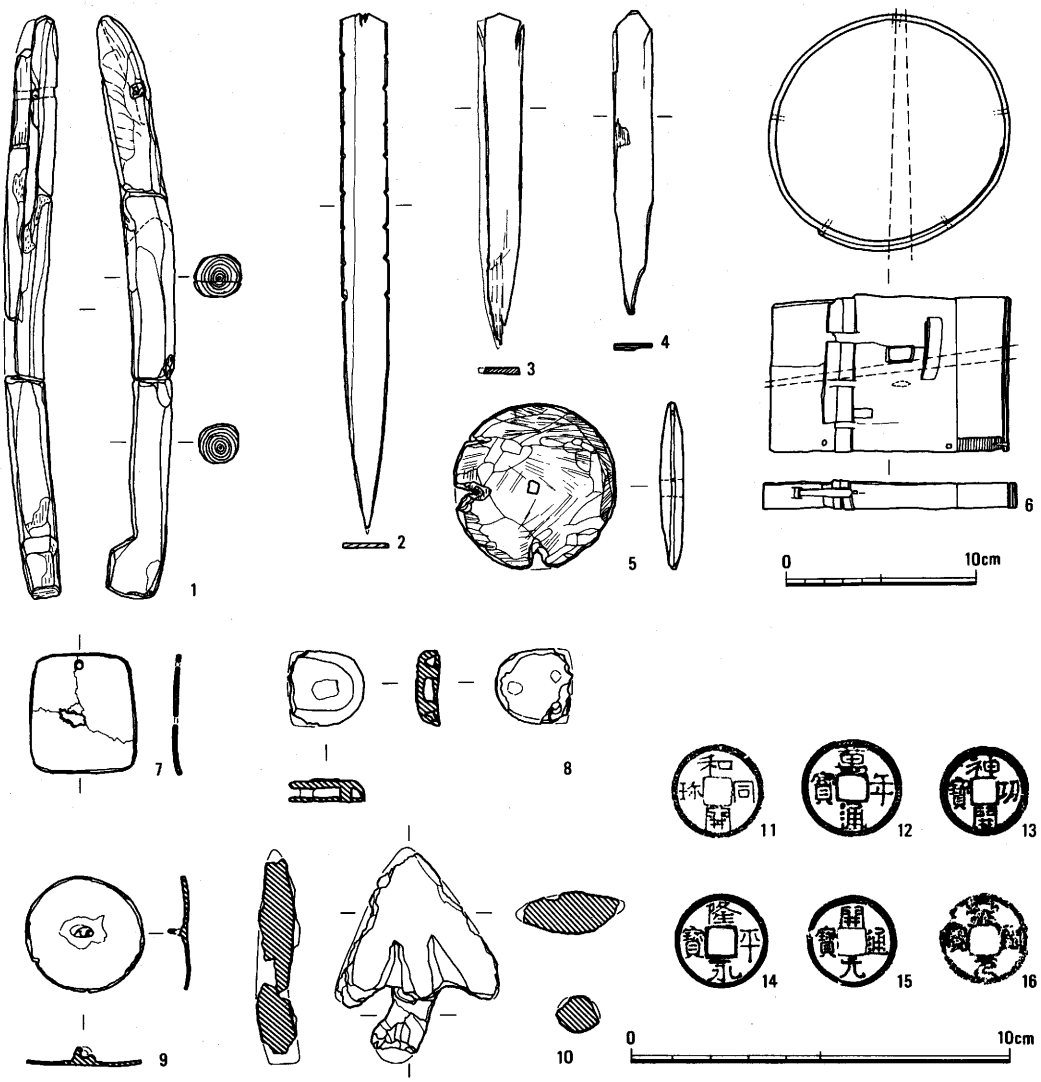
（池田裕英）

木製品　奈良時代と平安時代の井戸から出土したものが大半をしめる。以下、井戸出土遺物のうち主要なものについて記述する。

1は鎌の柄である。握り部分は直線的で柄元部分が刃先側に緩やかに曲がっている。柄元には長さ5.5㎝、幅0.5㎝の刃の装着孔があけられており、その上部に1箇所釘孔がある。柄尻は腹面側を削り残して鉤形に突起させている。ＳＥ502枠内から出土した。2～4は斎串である。2は上端が圭頭状で下端は剣先状になっており、両側面には左右対称位置にそれぞれ1.8㎝前後の間隔で8ヶ所の切り欠きがある。ＣⅣ型式[4]である。3・4はいずれも側面を割裂くように上端の木口から割れ目をいれる。ＣⅡ型式である。2・3はＳＥ512枠内から、4はＳＥ510枠内から出土した。5は紡輪である。中央に一辺6㎜の方形の孔が穿たれている。両面とも丁寧にケズられ、断面が凸レンズ状を呈する。ＳＥ502枠内から出土した。6は曲物柄杓である。側版の綴じ合わせは一列外4段綴じと一列内1段綴じによって2箇所で綴じられている。底板は5箇所の木釘で結合されている。側板の重合わせ部分の上半に方形の柄孔を穿ち、その相対する位置に楕円形の小孔を穿ち柄先を受ける柄孔にしている。別に下部に取りついていたと思われる箍も出土している。ＳＥ502枠内から出土した。

金属製品・銭貨　金属製品は瓔珞・帯金具・鏡・鉄鏃・鉄斧・鉄釘がある。

7は瓔珞である。佐波理鋺の破片を梯形に切断したものと考えられる。鋺の湾曲が残り、長辺方向・短辺方向ともに緩やかにしなっている。上端から2㎜下の中央に直径2㎜の円孔が穿たれている。ＳＢ229の柱掘形の埋土から出土した。8は銅製蛇尾である。三つの鋲を鋳出し、裏金具にとりつけるタイプである。9は銅鏡で素文鏡である。背面は縁を造り出さない薄い平板状で中央に鈕がつく。ＳＥ512枠内から出土した。10は尖頭状の鉄製



出土木製品（1／4）・金属製品・銭貨（1／2）

品である。鉄鏃の可能性があるが、錆化が著しく詳細は不明である。ＳＤ102から出土した。銭貨（11～16）は奈良時代のものと平安時代のものがある。奈良時代のものは和銅開珎７枚（ＳＤ103から５枚・ＳＤ112から１枚・遺物包含層から１枚）、萬年通寶１枚（ＳＤ103）、神功開寶３枚（ＳＤ103から２枚・ＳＥ512枠内から１枚）が出土した。平安時代のものは隆平永寶１枚（ＳＤ111）、開元通寶２枚（ＳＤ103から１枚・遺物包含層から１枚）、熙寧元寶１枚（遺物包含層）が出土した。（久保邦江）

1)毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦－8世紀を中心として－」『研究論集Ⅳ』奈良国立文化財研究所 1980

2)『奈良国立文化財研究所学報第23冊平城宮発掘調査報告Ⅵ－平城京左京一条三坊の調査－』奈良国立文化財研究所 1975

3)製塩土器については(財)大阪市文化財協会積山洋氏から御教示を頂いた。

4)奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代篇』の分類による。

第283次・第292次調査における花粉分析・寄生虫卵分析

天理大学附属天理参考館　金原正明　　古環境研究所　金原正子

第283次調査の西二坊大路西側溝の6試料・二条条間路南北側溝の7試料、第292次調査坪境小路東西側溝の8試料の計21点について、花粉分析・寄生虫卵分析を行い、周囲の植生と環境の復元を試みた。分析の結果、第283次調査の西二坊大路西側溝の4試料・二条条間路南側溝の1試料、第292次調査坪境小路東西側溝の4試料から、花粉・胞子と若干の寄生虫卵が検出された（図、花粉総数が基数）。

・第283次調査

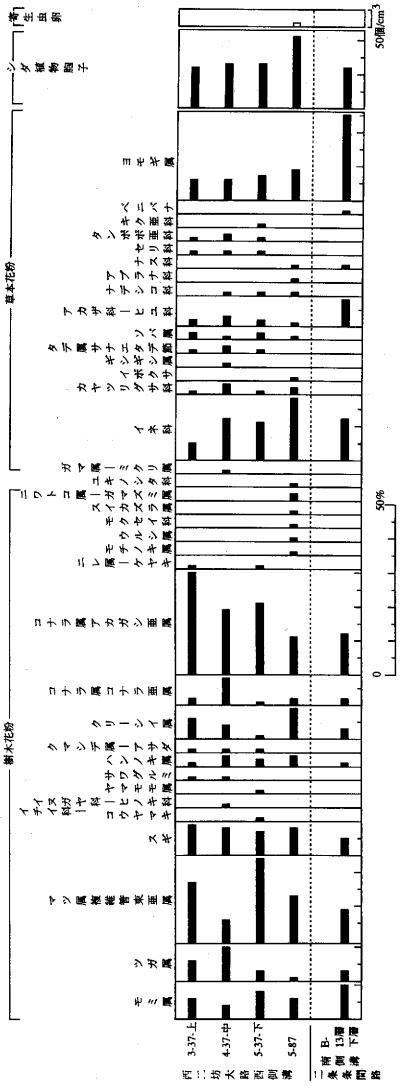
西二坊大路西側溝では、下位から上位にかけて樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属が増加する。マツ属複維管束亜属の出現率も高く、モミ属・ツガ属・スギ・クリ－シイ属・コナラ属コナラ亜属も出現する。草本花粉ではイネ科・ヨモギ属の出現率が高く、ソバ属が出現する。周囲の森林はコナラ属アカガシ亜属とマツ属複維管束亜属（アカマツ・クロマツ）を主としていたと推定され、森林への人為干渉の結果成立した途中相林であったと考えられる。二次遷移における照葉樹林要素をまじえたアカマツ－アラカシ群落（佐々木、1973）と同様なものであったと推定される。上位に向かってコナラ属アカガシ亜属が増加している。ソバ属が出現しており、周囲でソバに代表される畑作が盛行していたと推定される。西二坊大路西側溝は堆積物から出土する土器より平安時代後期の埋没ということであるから（調査担当者の教示）、周辺地域で10世紀以降にソバ栽培に代表される畑作が盛行することと（金原、1993）、時期的に矛盾しない。

二条条間路南側溝では、やや草本花粉が多く、ヨモギ属・イネ科・アカザ科－ヒユ科が優占する。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属・モミ属・マツ属複維管束亜属などが多い。周囲はヨモギ属などの繁茂する排水のよい乾燥地であったとみなされる。周辺の森林はコナラ属アカガシ亜属がかなり減少しており、モミ属・マツ属複維管束亜属などの針葉樹が比較的多かったようだ。

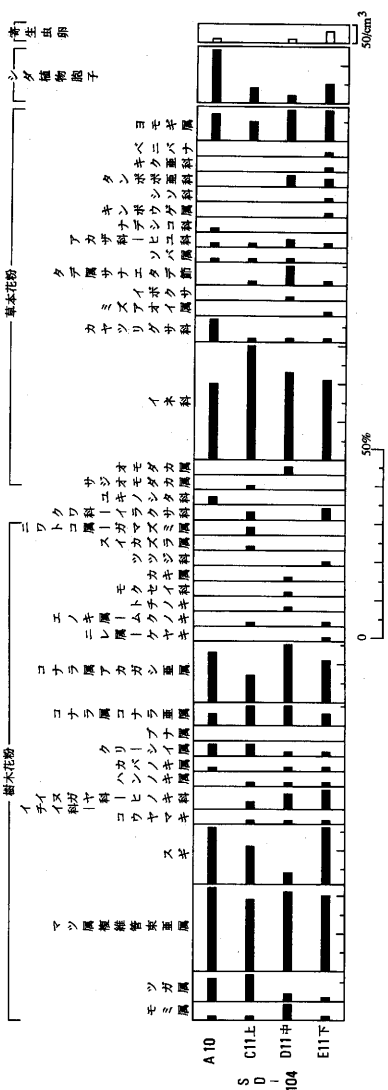
なお、寄生虫卵は各溝ともほとんど含まれていなかった。

・第292次調査

坪境小路東西側溝では、樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高い。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属の出現率が高く、コナラ属アカガシ亜属・スギ・コナラ属コナラ亜属・ツガ属の出現率もやや高い。草本花粉ではイネ科・ヨモギ属を主に栽培植物のソバ属が伴われる。周囲の森林は、マツ属複維管束亜属（アカマツ・クロマツ）が多く、人為干渉の結果生じた途中相林の様相であったと推定される。なお、第283次調査と同じく、照葉樹林要素をまじえたアカマツ－アラカシ群落であったと推定される。ソバ属花粉の出現から、



283次調査西二坊大路西側溝・二条条間路南側溝における花粉分析結果・寄生虫卵分析
(花粉総数が基数)



292次調査右京二条三坊六・十一坪坪境小路東側溝ＳＤ－104における花粉分析結果・寄生虫卵分析
(花粉総数が基数)

ソバに代表される畑作が盛行していたとみなされ、第283次調査の結果と同様に、溝の埋没時期の平安時代後期において周囲で畑作が盛行していたことが考えられる。

寄生虫卵が少量検出されているが、集落周辺汚染の範囲内と考えられる。人糞施肥に起因するかどうかは現状では判断できない。

(4) 平城京右京二条三坊十坪・二条条間路の調査　第317次

Ⅰ　はじめに

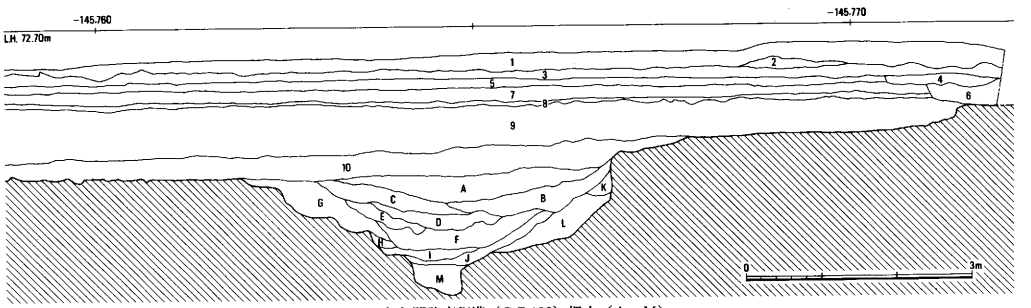
右京二条三坊十坪での調査は、今回がはじめてである。そこでまず、遺構の残存状態を広範囲で把握するために、坪の南北を縦断する細長い発掘区（南北約 133m、東西約10m）を東辺部に設定することにした。発掘区は途中で里道と水路とをまたぐため、これを避けて３分割し、北発掘区（78m）、中央発掘区（30m）、南発掘区（30m）とした。

Ⅱ　検出遺構

調査地は、西から東に張り出したなだらかな丘陵上にあたり、一面ごとに東にわずかずつ低い階段状の水田が連続している。調査の結果、遺構検出面である地山の上面は発掘区内では南西から北東に向かって緩やかに下降しており、発掘範囲が丘陵の北東斜面にあたることが知られた。斜面の傾斜は北発掘区内で顕著である。すなわち、同区南西部では耕作土（0.1m）・床土（0.1m）・茶灰色土（0.1m）と続きすぐに青灰色粘土の地山があらわれるが（上面の標高71.5m）、北東部では耕作土と床土の下に深さ約１m（計６層）の盛土と堆積土があって地山に達する（標高70.4m）。標高差は1.1mほどもある。

主な検出遺構は、二条条間路および南北両側溝と、十坪内の掘立柱塀２条、掘立柱建物９棟、井戸２基などである。ほとんどが奈良時代に構築されたものと思われる。

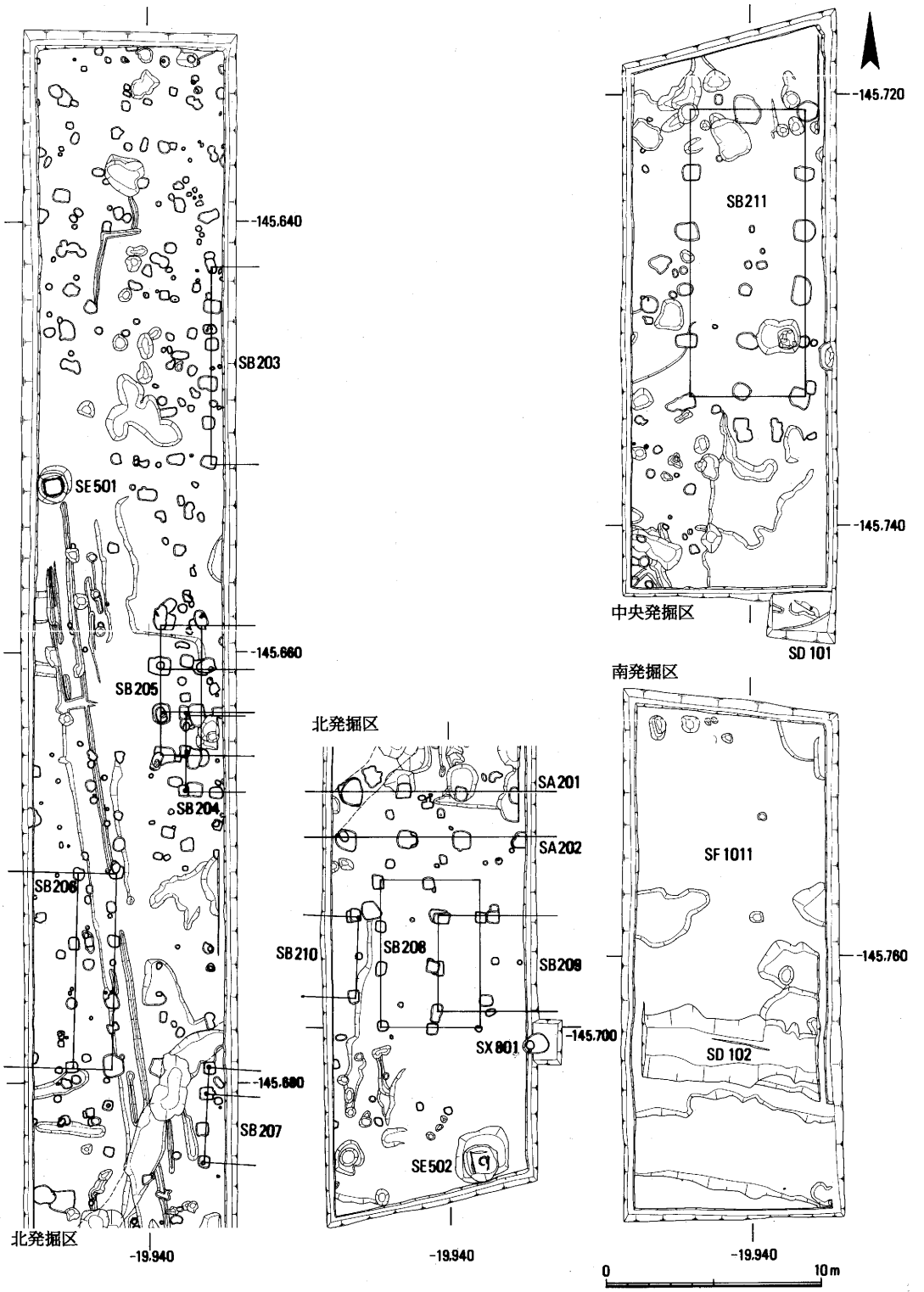
二条条間路ＳＦ1011　北側溝南岸が未確認で全幅は不明だが、南側溝北岸から北へ14.7mまで確認した。路面の標高は71.0～70.7mで、西から東へ緩やかに下降している。北側溝北岸沿いでの十坪の地山上面は標高71.5～71.2m、南側溝南岸沿いでの十一坪の地山上面は同71.7～71.6mで、路面は十坪の遺構面からは約0.5m、十一坪の遺構面からは0.9mも低いところにある。丘陵にかかる部分を切り通しにしていたのである。



※二条条間路南側溝（ＳＤ102）埋土（A～M）

1　暗灰褐色砂土（畑耕作土）
2　1・3混合土
3　黒褐色土（耕作土）
4　明灰褐色砂土
5　黄灰色粘土
6　明灰褐色砂土
7　茶灰色砂土
8　黄褐色粘土
9　灰色粘土
10　暗灰色砂土
A　灰色砂土
B　黒灰色粘土
C　灰色粘土・灰色砂混合土
D　灰色粘土・灰色砂・青灰色粘土混合土
E　青灰色粘土・灰色砂混合土
F　暗灰色粘土
G　青灰色粘土・灰色粘土・灰色砂混合土
H　灰色粘砂
I　灰色砂
J　灰色砂・灰色粘土混合土
K　灰色粘土
L　青灰色粘土・灰色粘土・灰色砂混合土
M　暗灰色粘土・灰色粗砂混合土

二条条間路・同南側溝（南発掘区東壁）土層図　(1／100)



第317次調査　遺構平面図（1／300）

二条条間路北側溝ＳＤ101　中央発掘区南端で北岸の一部を確認したのみで、規模は不明である。中央・南発掘区間約2.5ｍが未発掘で、この範囲内におさまる。

二条条間路南側溝ＳＤ102　幅2.7～3.5ｍ、条間路路面からの深さ1.2～1.5ｍの素掘り溝である。溝底は西から東に向かって下降する。溝内には灰色系の粘土と砂とが交互に堆積し、下層（土層図Ｉ・Ｊ・Ｍに対応）から土器と瓦がややまとまった数量出土した。土器は奈良時代の土師器・須恵器がほとんどだが、平安時代前期（９世紀後半）の緑釉陶器や平安時代後期（12世紀前半）の瓦器も少量ある。瓦には軒丸瓦6236Ａ・6278Ｃ・6279Ａ、軒平瓦6641Ｅがある。出土土器から、本溝がすくなくとも平安時代後期頃まで機能していたことが知られた。溝心の座標値は、Ｘ＝－145,764.380、Ｙ＝－19,940.000である。

ＳＡ201　東西３間（8.1ｍ）以上の塀で、発掘区外東西に続く。柱間は2.1ｍ等間。

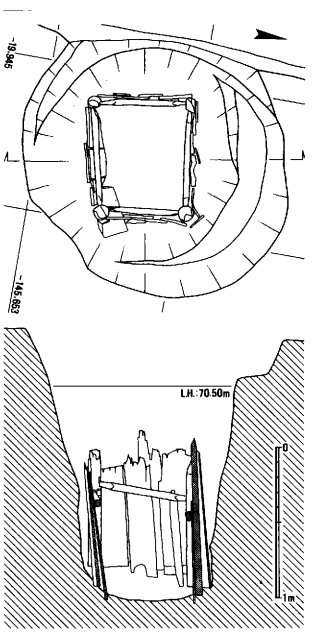
ＳＡ202　ＳＡ201と平行する東西３間（8.1ｍ）以上の塀で、発掘区外東西に続く。柱間2.1ｍ等間で、ＳＡ201と南北の柱筋が揃う。両者の間隔は2.1ｍである。

ＳＢ203　南北５間（9.0ｍ）の柱列で、南北棟建物の西側柱と考える。柱間1.8ｍ等間。

ＳＢ204　桁行１間（1.5ｍ）以上、梁間２間（3.6ｍ）の東西棟建物で、発掘区外東に続く。梁間は1.8ｍ等間である。重複関係からＳＢ205よりも古いことがわかる。

ＳＢ205　南北３間（6.3ｍ）、東西１間（1.8ｍ）以上の総柱建物とみられ、発掘区外東に続く。柱抜き取り穴から軒丸瓦6133Ａ・6139Ａ・6301Ｂ、軒平瓦6732Ｏが出土した。

ＳＢ206　南北３間（9.0ｍ）の柱列２列が東西1.8ｍの間隔で柱筋を揃えて並ぶが、ひとまずは南北棟建物の東廂部分にあたるものと考えておく。南北の柱間は3.0ｍ等間である。



井戸SE501平面・断面図(1／50)

ＳＢ207　南北３間（4.4ｍ）の柱列で、柱間は北から1.2－1.6－1.6ｍ。北廂付東西棟建物の西妻柱列と考えておく。

ＳＢ208　桁行３間（6.7ｍ）、梁間２間（4.6ｍ）の南北棟建物。削平され東側柱列の２柱穴を欠く。柱間は西側柱列が北から2.1－2.1－1.5ｍ、南妻柱列が2.3ｍ等間である。

ＳＢ209　桁行１間（2.5ｍ）以上、梁間２間（4.4ｍ）の東西棟建物で、発掘区外東に続く。梁間は2.2ｍ等間。

ＳＢ210　南北２間（3.6ｍ）の柱列で、東西棟建物の東妻柱列と考える。柱間は1.8ｍ等間である。

ＳＢ211　桁行５間（13.5ｍ）、梁間２間（5.4ｍ）の南北棟建物。柱間は桁行・梁間とも2.7ｍ等間。南妻から北１間目と２間目に間仕切りないしは床束の柱穴がある。

ＳＥ501　縦板組隅柱横桟留めの方形の井戸。掘形は東西

1.65m、南北1.8mの平面不整円形で、深さ1.8m。井戸枠は東西内法0.75m、南北内法0.65mで、底部から1.1mほどが残存する。隅柱は北東・南東・南西の3本が円柱、北西の1本が角柱で、南西隅柱には礎板を敷く。横桟は最下段1段分のみが残る。縦板は幅4～30cmで、東・西・南の3面は6～7枚、北面は多く11枚を使う。このうち北面の1枚は、和琴の上板を転用したものであった。枠内からは、奈良時代中頃と後半の土器や、木簡、独楽・横槌などの木製品が出土した。

ＳＥ502　横板組方形の井戸。掘形は一辺約2.4mの平面隅丸方形で、深さ1.2m。井戸枠は、ほとんどが抜き取られており、最下段がわずかに残るだけであった。内法一辺0.9mほどである。枠内底部から奈良時代中頃の土器が出土した。

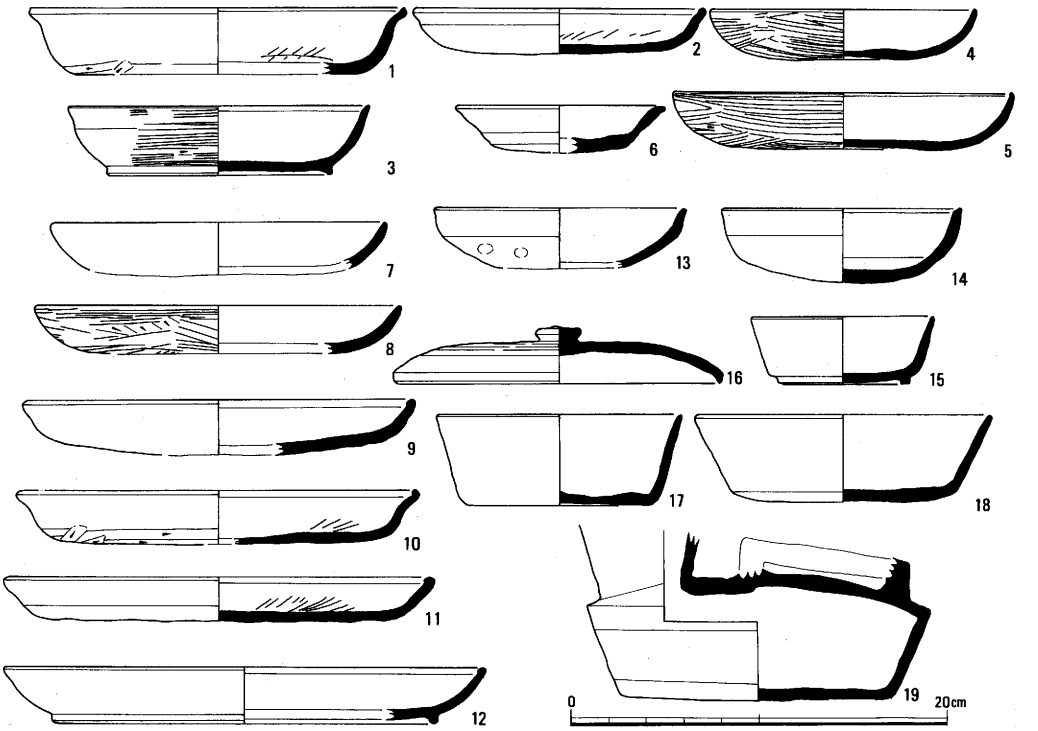
ＳＸ801　曲物を埋置した土坑。掘形は2段。上段は東西1.25m、南北0.95mの平面長円形で、深さ0.15m。さらに、坑内西寄りを径0.55mの平面円形で深さ0.25mほど掘り下げ、ここに底を抜いた曲物を据える。曲物は2段が残存する。ともに径38cm前後で、下段は完存し高23cm、上段は下端から8cmまで残る。曲物内から鎌倉時代初期（13世紀前半）の瓦器が、裏込めから鬼瓦（平城宮Ⅳ式Ｂ）が出土した。遺構の性格は不明である。

Ⅲ　出土遺物

瓦塼類と、井戸ＳＥ501から出土した土器・木簡・木製品について報告しておく。

瓦塼類　遺物整理箱で18箱分が出土した。大半は丸瓦・平瓦であるが、軒丸瓦14点、軒平瓦6点、鬼瓦1点、塼7点がある。軒丸瓦の内訳は6133Ａ1点、6133種別不明1点、6139Ａ1点、6225Ａ2点、6236Ａ1点、6278Ｃ1点、6279Ａ2点、6301Ｂ1点、6301種別不明1点、6313Ａ2点、型式不明1点である。軒平瓦は6641Ｅ1点、6663Ｃ1点、6721Ａ1点、6732Ｏ1点、6671Ｋ1点、型式不明1点である。鬼瓦は平城宮Ⅳ式Ｂに比定できる。塼はいずれも小片であるが、うち1点には緑釉がかかる。なお、遺構から出土したものは検出遺構本文中に明記してある。　（中井　公）

ＳＥ501出土土器　井戸枠内から土師器・須恵器が遺物整理箱で5箱分出土した。土師器には、杯Ａ（1・2）、杯Ｂ（3）、杯Ｅ（4・5）、皿Ａ（7～11）、皿Ｂ（12）、皿（6）、椀Ｃ（13・14）、高杯、壷Ａ、甕がある。杯・皿類は、口縁部内面に一段の斜放射状暗文が施されているものが多い。皿Ａは、法量によって2つ（皿ＡⅠ：口径20.6～22.8cm、器高2.15～2.9cm、皿ＡⅡ：口径17.8～19.5cm、器高2.5～2.75cm）に分けることができる。図示し得なかったが、皿ＡⅠのうち、底部外面に「甲」と読める文字が墨書きされているものが1点ある。須恵器には、杯Ａ（17・18）、杯Ｂ（15）、杯蓋（16）、皿Ｂ、平瓶（19）、壷Ａ、壷Ｂ、横瓶、甕Ａ、甕Ｂがある。杯・皿類は、底部外面をヘラ切りしたのちロクロケズリあるいは不定方向のナデで調整しているものが多い。これらの土器群は、平城宮土器Ⅲに属するものがほとんどであるが、Ⅳのものが若干混じる。　（三好美穂）



井戸ＳＥ501出土土器（１／４）

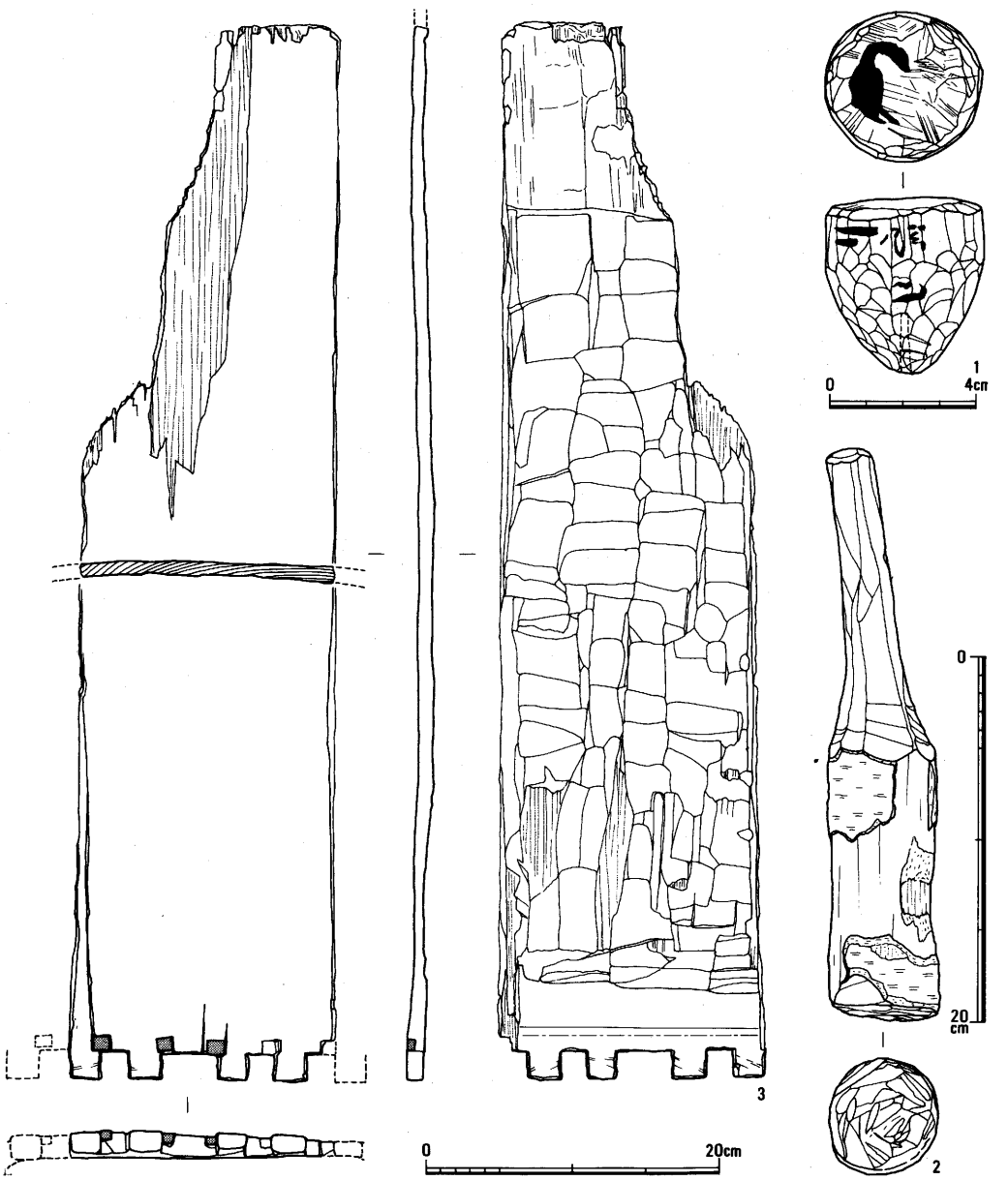
ＳＥ501 出土木簡　枠内から２点が出土した。ともに小片で、１点は表裏に「忍」と習書されている。いま１点も表裏に墨書きが残るが、判読できない。

ＳＥ501 出土木製品　枠内から独楽、横槌、棒状製品が出土した。また、井戸枠縦板の一枚は和琴の上板を転用したものであった。

独楽（１）　樹皮を剥いだ芯持材の一端を平坦にし、他端を弾丸状に細かく丁寧に削る。側面も細かく丁寧に削られ、平面が正円になっている。上端に軸棒はなく、下端中央には四角な鉄心を打ち込んだ穴が残っている。上面と側面に墨書があるが判読できない。径4.2㎝、残存高4.7㎝。

横槌（２）　樹皮が残る広葉樹の芯持材の両端を平坦にし、半身を次第に削り細めて柄とする。柄は身の打面を水平にするため柄尻が斜め上がりになる。身の下面中央に殴打痕跡が残る。全長31.0㎝、身径6.0㎝、柄径2.6㎝。

和琴（３）　上半の頭部と磯を欠くが、下半の尾部がよく遺存している。尾部の櫛形突起は方形で４箇所残っている。尾部に、通弦孔はない。上面は縦方向に丁寧に削られ、やや甲高になる。内面は尾端から6.5㎝までを平坦に削り、これより内側は手斧でドーム状に刳込み共鳴槽を作り出している。尾端から3.5㎝はいった内面には横一条のケビキがあり、その外側に仕切り板との接合痕跡が幅0.8㎝で残る。櫛形突起の間隔は１箇所が幅広になっており、この部分が琴の中軸と考えられる。上面の突起根元内側には中軸から左右



井戸ＳＥ501出土木製品（１が1／2、２が1／4、３が1／5）

対称位置に方形の刳込みが４㎝間隔で５箇所にある。この内の３箇所には賽目状の炭化材が埋め込まれていた。櫛形の角はすべて丁寧に面取りされている。炭化材の角と櫛形突起の外側には弦を掛けた痕跡が残っている。弦は突起に巻かれ、下から炭化材に掛けて張られていたことがわかる。この琴は上板上面がやや甲高になっていること、上板周縁に結合痕跡がないこと、仕切り板の位置などからみて六弦の和琴と考えられる。残存長72.0㎝、残存幅17.3㎝、厚さ1.0～1.3㎝、櫛形突起の幅は2.0㎝、出は1.6㎝ある。樹種はヒノキである。

（篠原豊一）

(5) 平城京右京二条三坊十一坪の調査　第292－1・2次

Ⅰ　はじめに

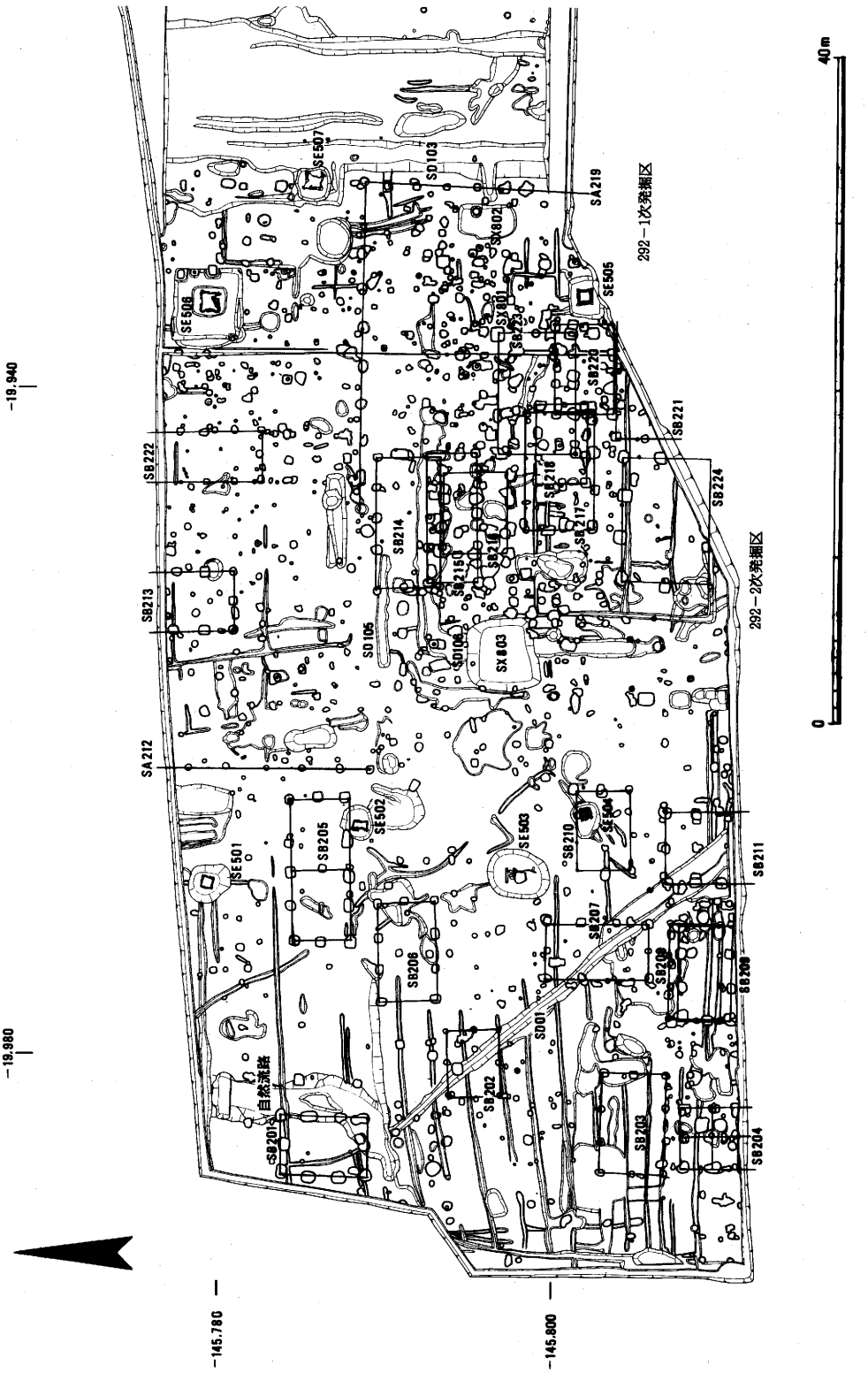
第292－1次では六坪から坪境小路をはさんで十一坪にかけて調査した。ここでは坪境小路の西側溝ＳＤ103より西側の地区について、隣接して行った第292－2次とあわせて十一坪の調査として報告する。両調査区は右京二条三坊十一坪の北東隅に位置する。

Ⅱ　検出遺構　発掘区の北西部は水田化のため段差があり、一段低くなっているが、旧地形が東に向かって緩く傾斜しているため東にいくにしたがって段差がなくなる。発掘区内の基本的な層序は南側では0.4～0.6ｍの耕作土を除けば黄白色土の地山となり、東半ではこの間に灰褐色土の遺物包含層がある。奈良時代の遺構面は地山の上面で、標高は西端で73.2ｍ、東端で72.6ｍである。以下時代ごとに主要な検出遺構について報告する。

古墳時代の遺構　素掘溝ＳＤ01がある。国土方眼方位に対して北で西に振れている。北端は水田の段差で削平され途切れており、南端は発掘区外に続く。幅0.4～0.8ｍ深さ0.4ｍ。断面は浅いＵ字形を呈する。埋土から６世紀前～中頃の土器が出土した。なお、発掘区の

遺構番号	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長ｍ（尺）	梁間全長ｍ（尺）	桁行柱間寸法（ｍ）	梁間柱間寸法（ｍ）	廂の出（ｍ）	備　考
ＳＢ201	南北	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8 等間		
ＳＢ202	東西	2×2	4.2(14)	3.3(11)	2.1等間	1.65等間		
ＳＢ203	東西	3×2	6.0(20)	3.9(13)	1.8-2.1-2.1	1.8 等間		
ＳＢ204	南北	2以上×2	3.6以上	3.6(12)	1.8等間	1.8 等間		総柱建物
ＳＢ205	東西	5×2	8.4(28)	3.6(12)	2.1等間	1.8 等間		間仕切あり
ＳＢ206	東西	3×2	6.0(20)	3.6(12)	1.8-2.1-2.1	1.8 等間		
ＳＢ207	南北	3×2	6.3(21)	3.3(11)	2.1等間	1.65等間		
ＳＢ208	東西	3×2	5.7(19)	3.0(10)	1.8-1.8-2.1	1.5 等間		
ＳＢ209	東西	3×2	5.7(19)	3.0(10)	1.8-1.8-2.1	1.5 等間		
ＳＢ210	東西	3×2	4.8(16)	3.3(11)	1.8-1.5-1.5	1.5-1.8		
ＳＢ211	南北	3以上×2	3.6(12)	4.2(14)	1.8等間	2.1 等間		
ＳＡ212	南北	5以上	10.8(36)		2.1-2.4-2.1 -2.4-1.8			
ＳＢ213	南北	3以上×2	3.6(12)	3.6(12)	1.8等間	1.8 等間		
ＳＢ214	東西	4×2	7.8(26)	3.6(12)	2.4-1.8-1.8 -1.8	1.8 等間		
ＳＢ215	東西	4×2	7.8(26)	3.0(10)	2.4-1.8-1.8 -1.8	1.5 等間		
ＳＢ216	東西	3×2	4.8(16)	4.2(14)	1.5-1.8-1.5	2.1 等間		
ＳＢ217	東西	3×2	6.6(22)	4.2(14)	2.1-2.4-2.1	2.1 等間		
ＳＢ218	東西	3×2	4.8(16)	3.0(10)	1.8-1.5-1.5	1.5 等間		
ＳＡ219	東西 9 南北 6以上		19.8(66)	9.9(33)	※1	※2		※1 2.1×4-2.4×3-2.1×2 ※2 1.5×2-1.8×2-1.5×2
ＳＢ220	東西	3×2	5.4(18)	3.6(12)	1.8等間	1.8 等間		
ＳＢ221	東西？	3以上×2以上	6.0(2.0)	1.8(６)	2.1-2.1-1.8	1.8		
ＳＢ222	南北	4以上×2	4.8(16)	3.0(10)	1.5-1.8-1.5	1.5 等間		
ＳＢ223	東西	3×2	7.2(24)	4.2(14)	2.1等間	2.1 等間		
ＳＢ224	東西	3×2	7.2(24)	4.8(16)	2.4等間	2.4 等間		

掘立柱建物・塀一覧表



第292－1・2次調査　遺構平面図（1／400）

北西隅の地下げされている部分で南北方向の自然流路を検出したが、表面の磨滅した土器の小片が出土しただけで時期を特定できる遺物がない。ＳＤ01との重複関係から古墳時代以前のものであると考えられる。

奈良時代の遺構　掘立柱建物19棟（ＳＢ201～211・213～218・220・221)、掘立柱塀２条（ＳＡ212・219)、井戸５基（ＳＡ501～505)、溝、土坑がある。掘立柱建物・掘立柱塀、井戸の概要は一覧表にまとめた。

ＳＤ105・106　発掘区中央部で検出した素掘りの溝である。ＳＤ105は幅0.7ｍ、深さ0.1ｍで、隣接調査から復元できる二条条間南側溝の溝心からおおよそ1/4坪の距離にある。ＳＤ106はＬ字形に曲がる溝で、幅1.0～2.0ｍ、深さ0.1～0.2ｍ。南北側の溝心は坪境小路西側溝から1/4坪の距離にあたり、坪内を区画する溝と考えられる。ＳＤ105の残存状況が悪く断定できないが、ＳＤ105とＳＤ106の間は坪内通路である可能性が考えられる。

ＳＸ801　ＳＢ223の東面北よりに隣接してある土器埋納土坑である。直径0.3ｍ、深さ0.16ｍの円形掘形の中に直径18.4㎝、高さ15.2㎝の土師器甕を口縁を上に向けた状態で埋設し、その上に口径23.2㎝の土師器皿が逆さに向けられて蓋のように置かれていた。

平安時代の遺構　掘立柱建物３棟（ＳＢ222～224)、井戸２基（ＳＡ506・507）土坑がある。掘立柱建物と井戸については一覧表にまとめた。

ＳＸ803　一辺4.4ｍ、深さ0.5～0.8ｍの平面方形の土坑である。奈良時代の溝ＳＤ106が埋まった後に掘られている。埋土から平安時代初頭の土器が出土した。　（久保邦江）

遺構番号	掘形			枠			主要出土遺物	備考
	平面形（ｍ）	平面規模（ｍ）	深さ（ｍ）	平面形・構造	内法（ｍ）	水溜・濾過装置等		
ＳＥ501	不整円形	南北2.5 東西2.2	1.9	方形縦板組横桟留	南北0.65 東西0.65			奈良時代の遺物に一部平安のものがまじる
ＳＥ502	円形	南北1.95 東西2.0	2.8	方形縦板組横桟留	南北0.75 東西0.5		太枘	
ＳＥ503	楕円形	南北3.65 東西2.95	1.4	外－方形縦板組隅柱横桟留　内－円形縦板組	外－不明 内－径0.6		太柄	二重構造ではなく造りかえたと考えられる円形縦板組は太枘結合の可能性あり
ＳＥ504	不整円形	南北1.8 東西2.2	1.5	方形縦板組隅柱横桟留	南北0.65 東西0.65	楕円形曲物(直径55㎝・短径30㎝・高さ10㎝)	斎串、網代	
ＳＥ505	隅丸方形	南北2.1 東西2.5	2.1	方形縦板組隅柱横桟留	南北0.9 東西0.9		柄杓	
ＳＥ506	隅丸方形	南北4.1 東西4.1	2.6	方形縦板組隅柱横桟留	南北1.1 東西1.1		曲物・神功開寶 緑釉椀・緑釉単彩	
ＳＥ507	隅丸方形	南北2.1 東西2.0	1.8	方形縦板組隅柱横桟留	南北0.9 東西0.9		「菅原寺」墨書曲物 毬杖の玉・挽物皿	

井戸一覧表

Ⅲ　出土遺物

出土した遺物には、古墳時代の土器、奈良時代の軒瓦・土器・木製品・金属製品・銭貨、平安時代の土器・木製品、中・近世の土器がある。以下主なものについて報告する。

瓦類　大半は丸瓦、平瓦であるが、軒丸瓦６点、軒平瓦９点、塼15点がある。軒丸瓦の内訳は6236Ａ１点、6285Ａ１点、6301種別不明１点、型式不明３点である。軒平瓦の内訳は6663Ｆ１点、6663Ｊ１点、6664Ｄ１点、6691Ａ１点、型式不明５点である。このうち6285ＡがＳＸ803から、6663Ｆ、6664ＤがＳＸ802から出土した。　（原田憲二郎）

土器類　古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器・製塩土器、平安時代の土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器、中世の土師器・瓦器、近世の陶磁器が遺物整理箱で70箱分ある。ここでは、ＳＥ506の枠内出土土器を器種ごとにまとめて報告する。

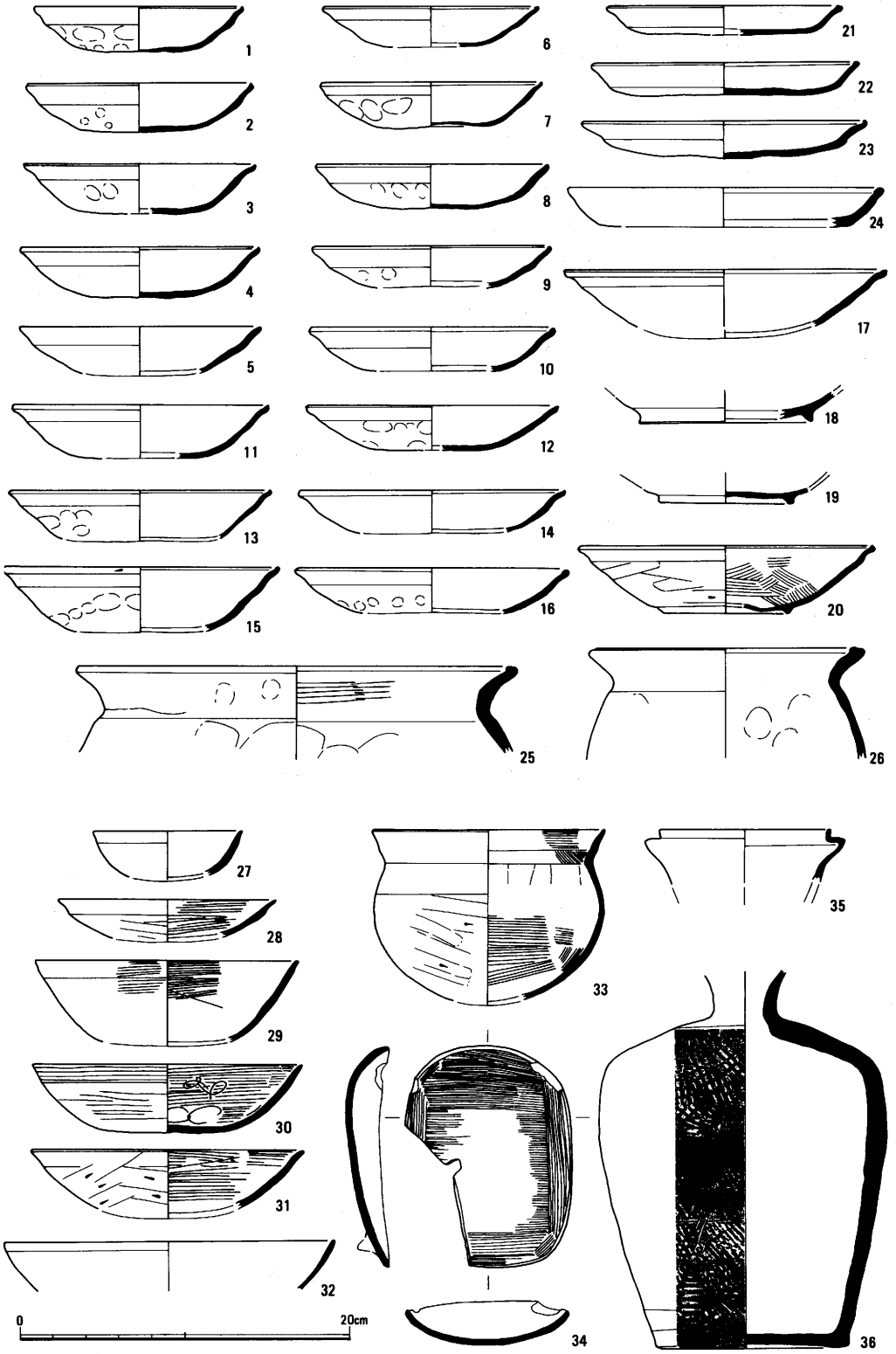
土師器　杯Ａ（４～17)、杯Ｂ（18～20)、椀Ａ（１～３)、皿Ａ（21～24)、皿Ｃ、高杯、甕（25・26)、竈、羽釜、製塩土器がある。杯Ａは、口径13.0～19.8cmまでのものがあるが、14.0～16.5cm大のものが大半である。器高は3.0cm前後のものが多いが、同一口径のものの中に若干の深浅が認められる。杯Ｂは、杯Ａと比べると点数が少なく、わずかに６点あるだけである。20は、外面をｅ－ｃ手法で調整している。口縁部内面から底部内面にかけてハケ目調整が残っている。17は、法量からみると杯Ｂになる可能性もある。皿Ａは、口径14.3～19.6cm、器高1.8～2.4cmのものがある。これらの杯・皿の調整手法は、約85％がｅ手法で、約15％がｃ手法である。椀Ａは、すべてｅ手法で調整されており、削りや磨きを施すものはない。甕は、いずれも「大和・山城」系のものである。調整手法が粗くなり、叩き痕跡が明瞭に残るものが多い。製塩土器は、いずれも細片で全体の形が判るものはない。

黒色土器　杯（27・29～32)、皿（28)、甕（33)、風字硯（34）がある。風字硯のみＢ類で、他はＡ類である。杯・皿は外面をへら削りし、内面を緻密なへら磨きで調整されている。29・30の口縁部外面にはへら磨きが施されている。口縁端部は、いずれも丸くおさめられている。甕は、体部外面下半を斜め方向の削りで、口縁部から肩部にかけては横なでで仕上げられている。内面は、頸部付近を板状工具でなでたのち、緻密なへら磨きを施している。風字硯も内外面とも緻密なへら磨きで調整されている。

須恵器　杯Ａ、杯Ｂ、杯蓋、壷Ｅ（35)、壷（36)、甕がある。壷Ｅは、口縁部から肩部が残るだけで、底部の形は不明である。奈良時代のものと比べると、肩部の張り出しが短い。ロクロナデ調整である。36は、平底で斜め上に立ち上がる体部とやや張りぎみの肩部に外反する口縁部からなる。体部は、格子目状の叩きを施したのち、ロクロナデ調整を加えている。体部下半にはロクロケズリ調整がみられる。

この他に、緑釉陶器が３点あるが、いずれも小破片のため図示し得なかった。

これらの土器群は、法量、器形、調整からみて９世紀後半から10世紀初頭のものと考え

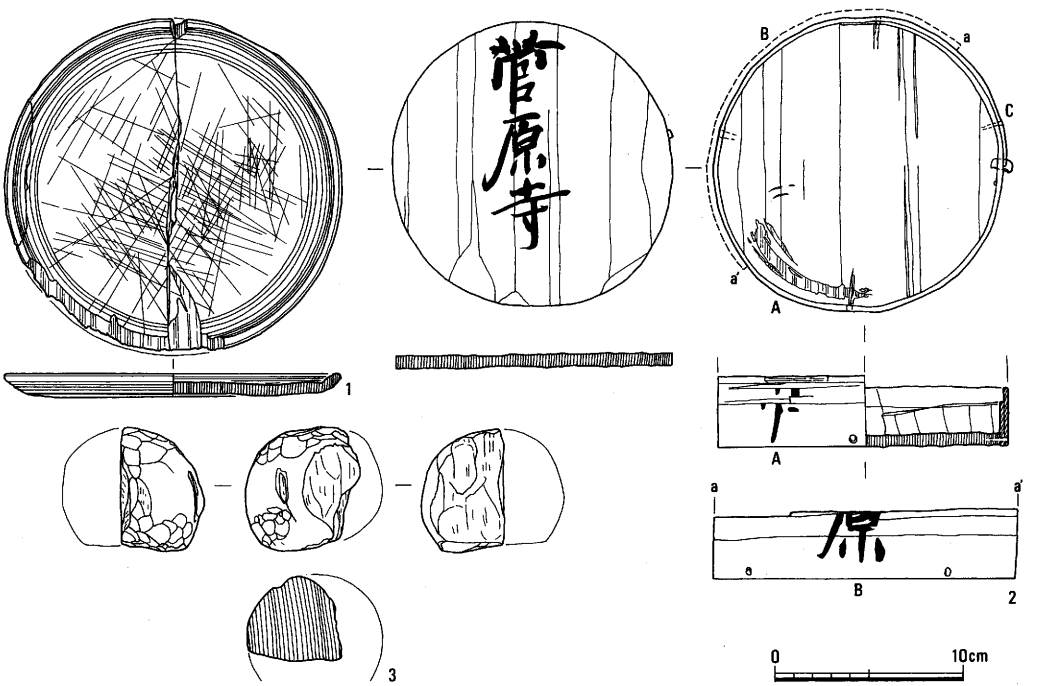


井戸ＳＥ506枠内出土土器（１／４）

られる。この時期のものは寺院跡以外からの出土例は非常に少なく、旧平城京域内ではこれで3例目である。（三好美穂）

木製品　奈良時代の井戸ＳＥ503～505、平安時代の井戸ＳＥ506・507から木製品が出土した。ここでは平安時代の井戸ＳＥ507 の枠内から出土した特に良好な木製品（１～３）について述べる。

１は挽物の皿で形態から皿Ｃ類に分類される。白木作りの縦木取りである。底部の内外面に刃痕跡が残ることから、俎としても使用されている。径17.8cm、高さ1.3cm。２は墨書のある円形曲物で、側板の上半を欠損している。底板は側板と４箇所の木釘で結合される。側板内側には２cm間隔で斜めと、縦方向のケビキがある。側板の綴合わせは１箇所で確認しているが、段数は不明である。墨書は底板の外側１箇所と側板外面３箇所（Ａ～Ｃ）にある。底板の墨書は縦書き「菅原寺」と読める。側板の墨書はＡは「〔寺カ〕□」、Ｂは「原」、Ｃは「□」と読め、各一字ずつ書かれていたとすると、「菅原寺」と横書されていたと考えられる。径15.3cm、残存高3.7cm。３は半分しか残存していないが、おそらく毬杖の玉と考えられる。円柱形に加工された材の両端の縁を粗く面取りしている。残存径5.2cm、高さ6.2cm。（久保邦江）



井戸ＳＥ507出土木製品（１／４）

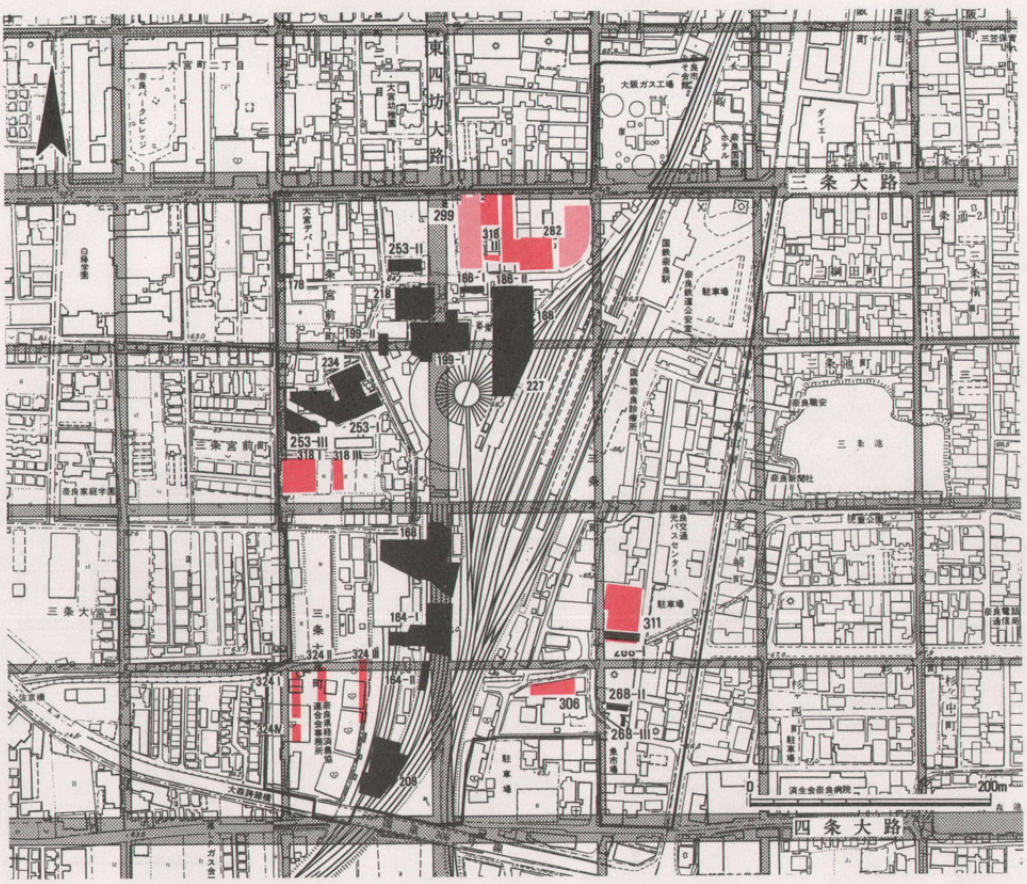
2　ＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業に伴う調査

昭和63年度以来継続しているＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業に伴う発掘調査は平成５年度に１件、６年度に５件の調査を実施し、両年度で計6694㎡の発掘区を設定した。

今回はこのうち平成５年度に実施した第306次、第311次のふたつの調査概要を報告する。両調査ともＪＲ関西本線より東側の地区で実施したものである。なお、残りの282次、299次、318次、324次調査については、隣接地においてさらに調査を進めており、これらの成果をとりまとめた上で次年度以降に報告する予定である。

遺　跡　名	次　数	調　査　地	面　積	調査期間
平城京左京四条五坊一坪	第282次	三条本町24－1他	1700㎡	H5／ 9／ 6～H5／12／21
平城京左京四条五坊一坪	第299次	三条本町28－1・2	1155㎡	H6／ 5／23～H6／ 7／29
平城京左京四条五坊四坪	第306次	三条本町264－1他	315㎡	H6／ 7／26～H6／ 8／15
平城京左京四条五坊六坪	第311次	三条本町333－1他	1050㎡	H6／ 9／12～H6／11／29
平城京左京四条五坊一坪	第318次	三条本町26他	961㎡	H6／12／22～H7／ 3／23
平城京左京四条四坊十四・十五坪	同上	三条宮前町306	969㎡	H6／12／ 5～H7／ 3／ 7
平城京左京四条四坊十三坪	第324次	三条大宮町236－1他	544㎡	H7／ 3／ 6～H7／ 3／27

発掘調査地一覧



発掘区位置図と周辺の条坊（枠内が土地区画整理事業範囲、数字は調査次数　濃赤色は95年度、淡赤色は94年度）

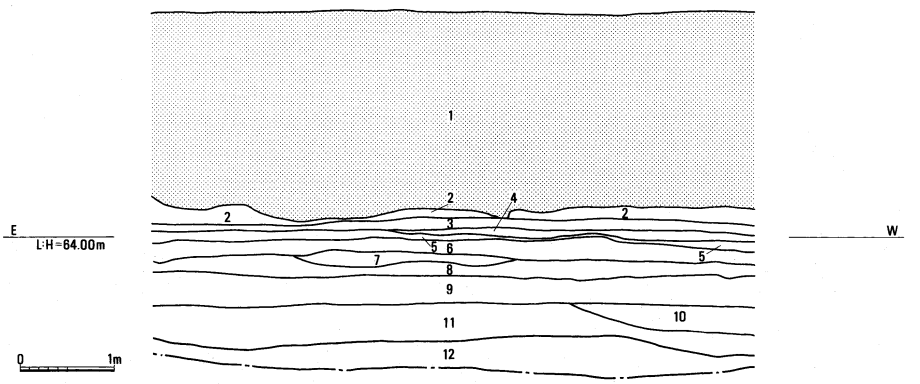
(1)　平城京左京四条五坊四坪の調査　第306次

本調査地は平城京の条坊復元では左京四条五坊四坪の北東部に該当する。調査地のすぐ北側には菩提川が西流しており、また平成３年度に本調査地から南東へ約40ｍの地点で実施した調査(第268次調査)においても、南西から北東方向に流れる流路跡を確認していることから、調査前の段階から流路跡の検出の可能性が予想されていた。調査の結果、発掘区全体が流路跡であることを確認した。

発掘区内の基本層序は、まず盛土の下に黒灰色粘土、暗褐色粘質土の耕作土が堆積している。耕作土の下面までは地表から約1.9ｍあり、標高は約64.5ｍである。この標高は付近の調査で確認した結果とほとんど変わらない。また付近の調査ではこの耕作土の直下が奈良時代などの遺構面であることが多いが、発掘区内ではその下に暗灰色砂礫層があり以下暗灰色粗砂、暗灰色粘土、暗灰色粘砂、黒褐色粘土、黒褐色粘砂、暗灰色砂礫と続いて比較的固く締まった淡黄灰色砂礫に達する。これらは旧菩提川の堆積土と思われる。地表より淡黄灰色砂礫の上面までは約3.5ｍを測り、標高は約62.9ｍであった。

調査は地表下約3.8ｍまで掘削した段階で湧水が激しくなり、土層の状態を観察して終了した。結果として遺構を検出することができなかったが、旧菩提川の堆積土と思われる各土層中からは各時代の遺物が出土した。これらの遺物を調べると、土層によって含まれる遺物の年代がある程度分かれる状態であることが判明した。具体的には暗灰色粗砂層には近世、黒褐色粘土層には8～15世紀頃(特に13～15世紀が多い)、黒褐色粘砂層には14～15世紀の遺物がそれぞれ含まれている。したがって今後の隣接地における調査では、こうした状態に留意しつつ調査を進めれば、各時代における菩提川の河道の変遷などが判明するものと思われる。

(武田和哉・三好美穂)



1　盛土　　4　暗灰色砂礫　7　暗灰色砂礫　10　黒褐色粘砂
2　黒灰色粘土　5　暗灰色粗砂　8　暗灰色粘砂　11　暗灰色砂礫
3　暗褐色粘質土　6　暗灰色粘土　9　黒褐色粘土　12　淡黄灰色砂礫

第306次調査　発掘区南壁土層図（１／80）

1)奈良市教育委員会「平城京左京四条五坊五・六坪の調査 第268次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度』1993。このほかに付近で実施した調査には、同「平城京左京四条五坊四坪の調査 第271次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』1994などがある。

(2) 平城京左京四条五坊六坪の調査　第311次

Ⅰ　はじめに

本調査地は平城京の条坊復元では左京四条五坊六坪の南西隅付近に該当し、敷地の西端付近は坪境小路が想定されている。この地点では平成４年に発掘調査を実施しており（第268次調査北発掘区）、標高64.9ｍで黄灰色粘土の地山を確認し、溝や土坑などの遺構をいくつか検出している。また、発掘区西側では西に向かって落ち込む池状の遺構も検出した。

今回の調査では、この第268次調査で遺構面を確認した結果をふまえ、第268次調査の北発掘区を取り込むようなかたちで南北約40ｍ、東西約30～24ｍ、面積1050㎡の規模の発掘区を設定して、この付近の遺構の様相の把握を第一の目的とした。

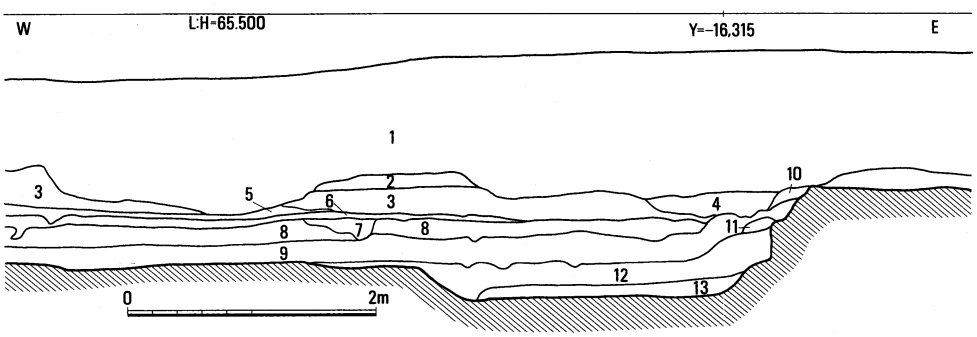
Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本層序は、盛土以下黒灰色粘土、淡灰色粘土と続き地表下約1.2ｍで淡黄緑灰色粘土の地山に達する。地山上面の標高は約64.8～64.9ｍである。

検出した遺構には古墳時代の溝や中世から近世の土坑などのほか、奈良時代から中世の遺物を包含する池状遺構がある。

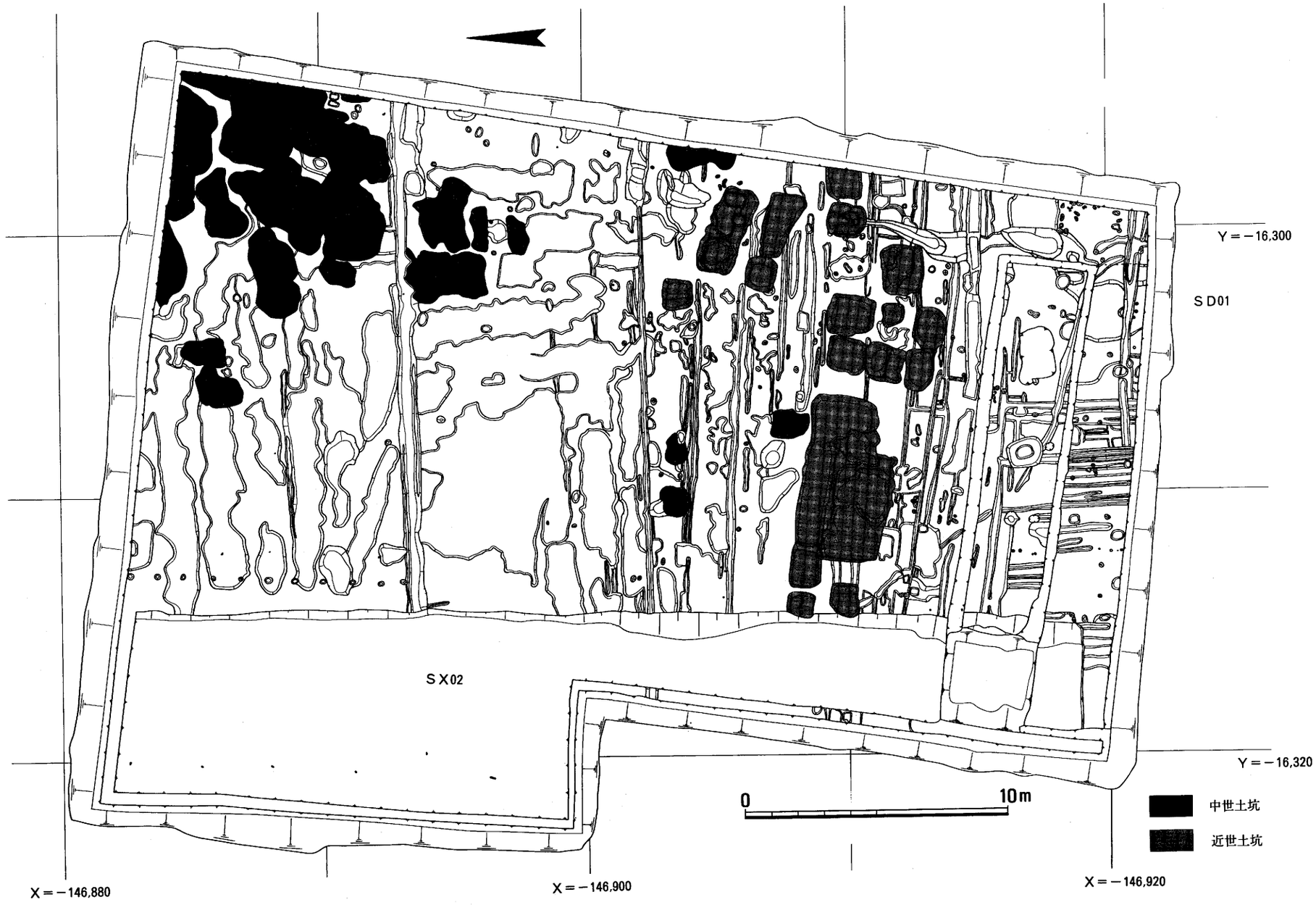
ＳＤ01　発掘区の南東隅付近で検出した溝である。ほぼ北から南に向かって流れており、幅はだいたい1.0ｍ内外であるが、発掘区南端付近では大きく幅が広がっており約3.1ｍにも達している。深さも0.3ｍ程度であるが、所々深くなる箇所があって一定しない。最深部は0.4ｍある。埋土は灰色粘土、暗茶灰色粘土、淡黄灰色粘土、淡黄灰色粘砂の4層に分かれるが、このうち暗茶灰色粘土の埋土からは古墳時代前半の土器が1点出土した。

ＳＸ02　発掘区西側で検出した池状遺構である。発掘区内では東西約８ｍ、南北約38ｍ分を確認した。北、南、西端はそれぞれ発掘区外へと続く。全体の規模は不明である。深さは0.6ｍ程度でほぼ一定している。東岸はほとんど南北方向に直線状を呈し、東肩部分か



1　盛土　　5　灰褐色細砂（Fe含む）　9　淡黒灰色粘土　　13　灰色粘砂
2　黒灰色粘土　6　暗灰色粗砂　10　黄灰色粘砂
3　淡灰色細砂　7　灰白色粘砂　11　暗灰色粘土（Fe含む）
4　灰色粗砂　8　黒灰色粘土　12　灰白色粘砂

第311次調査　発掘区北壁土層図（１／60）

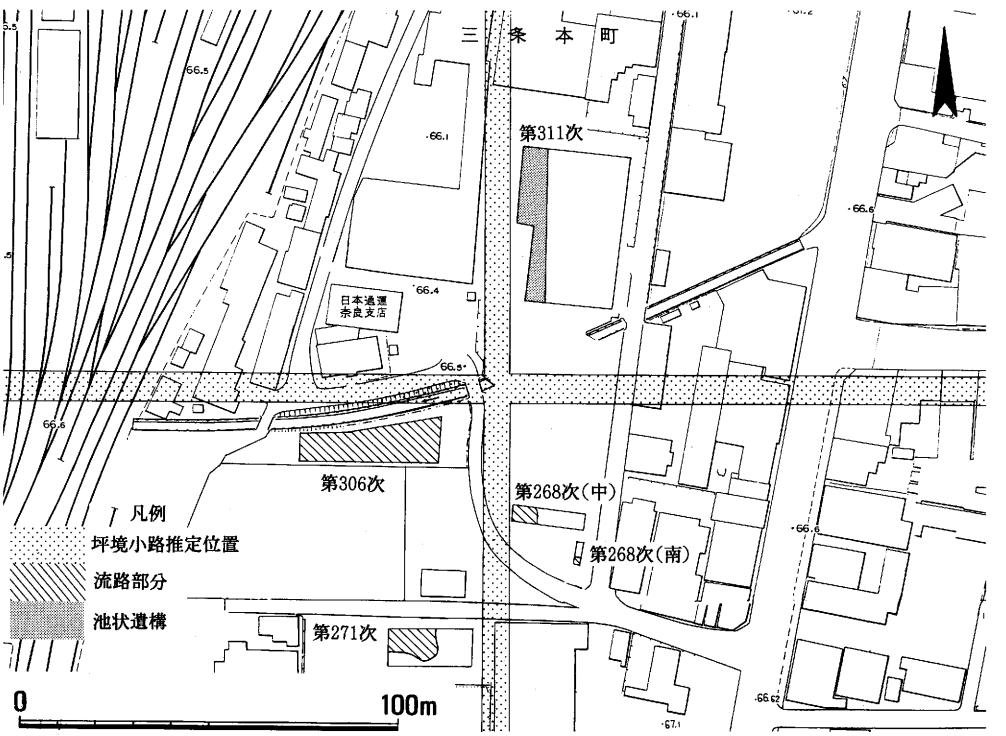


第311次調査　遺構平面図（１／200）

ら底にかけては垂直に近い角度になっている。埋土は3層に大別でき、上から灰色細砂、黒灰色粘土、茶灰色粘砂と続いて暗灰色砂礫の地山に至る。どの層もほぼ均等に堆積している。東岸の状況から考えると、ＳＸ02は人為的に造られた遺構であると考えられる。また埋土の状態から、第268次中・南発掘区や第306次発掘区で確認した流路跡とは異なり、ほとんど水が停滞していた状態であったことが推測される。この他、ＳＸ02の位置が左京四条五坊四坪と六坪間の坪境小路の想定地の西側であることにも留意したい。

出土遺物には、ＳＸ02埋土の各層から出土した奈良時代の土器類、木製品のほか、灰色細砂層から出土した中世の瓦片などがある。奈良時代の土器はいずれもほぼ完形に近い形で出土しており、また表面の摩滅の度合いが非常に少ないのが特徴的である。

中近世土坑群　発掘区北東隅付近を中心に検出した土坑は平面不整形を呈し、径1.5～2.5m、深さ0.5～0.8mの規模で不規則に群集する。灰色粘土の埋土にはごく少量の瓦器片が含まれていた。また発掘区の中央やや南側で多く検出した土坑は平面隅丸方形を呈し、一辺1.0～1.5m、深さ0.4～0.5mの規模の土坑が、いくらか方向性を持って並んでいる。暗褐色土の埋土からは近世の土器片が出土した。これら二種類の土坑群は各土坑の形状や埋土、出土遺物には差異があるものの、各土坑の規模には基本的に大きな差はなく、おそらく掘削時の人間の作業単位を示すものであろうと推測できる。　（武田和哉・三好美穂）



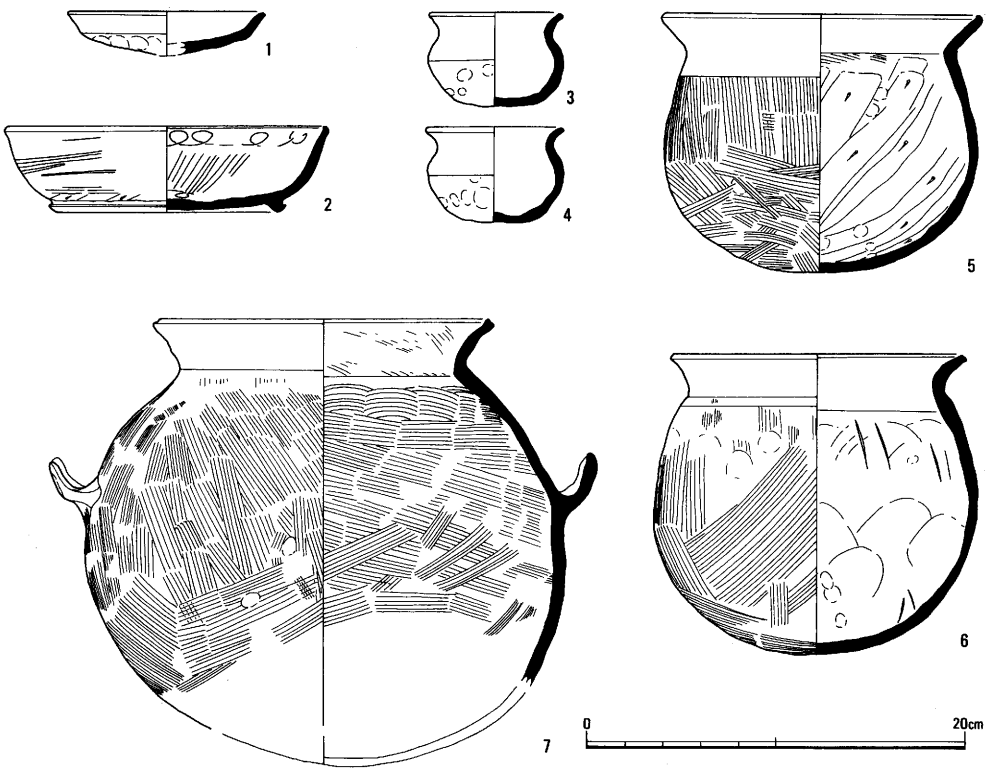
発掘区周辺図（1／2000）

Ⅲ　出土遺物

出土遺物には、古墳時代の土器類、奈良時代の土器類・木製品、中世の瓦類・土器類、近世の瓦類・土器類がある。出土量は、遺物整理箱で5箱分しかなく、発掘面積に比して少量である。主に中・近世の土坑群から出土しているが、ＳＸ02からは奈良時代の土器類や木製品が出土している。ここでは、その概要を記しておく。

土器類　土師器杯Ｂ、皿Ｃ、壷Ｂ、甕Ａ・Ｂ、須恵器がある。

土師器杯Ｂ（2）は、口縁部下半をへら削りしたのちへら磨きで調整している。内面は底部にラセン状暗文、口縁部に一段の斜放射状暗文と連弧状暗文を施している。平城宮土器Ⅱの特徴をもつものである。皿Ｃ（1）は、手づくねで製作されており、口縁部だけを横なでするｅ手法で仕上げている。口縁部上半が外反するタイプである。壷Ｂ（3・4）は体部下半から底部にかけて製作時の凹凸が残る。皿Ｃ同様に、口縁部だけを横なでして仕上げる。祭祀に使われた器であろう。甕Ａには、「河内系」のもの（5）と「大和・山城系」のもの（6）とがある。5は、体部外面をタテ方向のハケ目で調整したのち、体部下半から底部外面にかけて斜め方向のハケ目調整を施す。内面は、口縁部付近を横方向のハケ目で調整したのち、胴部から底部にかけて斜め方向の手持ちへら削りで仕上げている。



ＳＸ02出土土器（1／4）

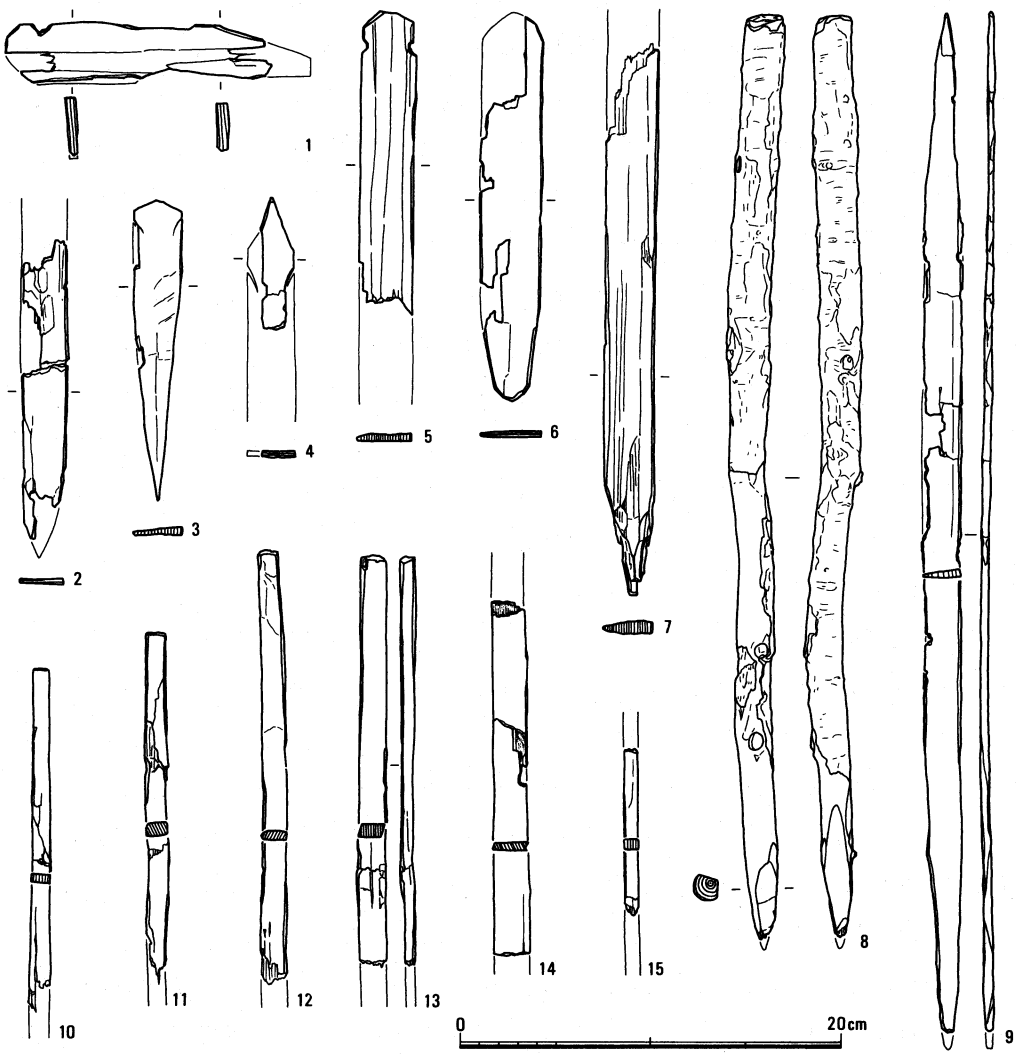
6は、外面の調整手法の順序は5と変わらないが、内面はへら削りせず、軽くなでているだけである。そのために、ところどころに叩きのあて具痕跡が残っている。甕B（7）は二方の肩部に把手をつけたものである。内外面ともにハケ目調整をしている。口縁部だけは、ハケ目調整をしたのちに横なでを施す。

須恵器は、杯または皿になると考えられる口縁部の破片が1点あるだけで、詳細な時期については不明である。

1・2・6・7が灰色細砂、3～5が黒灰色粘土層から出土した。　（三好美穂）

木製品　池状遺構ＳＸ02から奈良時代の祭祀具を中心とする木製品が出土した。

祭祀具には、馬形（1）と斎串（2～6・9）がある。1は小型の馬形で頭部下半と尾



ＳＸ02出土木製品（1／4）

端を欠損する。各部の表現は極端に抽象化されており、四足はなく、鞍の表現があることからかろうじて馬形であることがわかる。頭部と胴部は水平で尾は斜めにさがる。頭部は丸みをおびた圭頭状で、頸部は三角の切り欠きで表し、鞍は胴部上辺中央に扁平な逆台形の切り欠きで表す。腹は胴部下辺に扁平な三角の切り欠きで表す。墨描きはない。板目材である。2は斎串の下半部で下端が欠損する。両側縁は下方にむかって尖らせている。表裏とも丁寧な削りがある。薄い板目材である。3はほぼ完形の斎串である。上端は圭頭状で、上辺両側縁に各1箇所1条の切り込みがある。切り込みより下方を鋭く尖らせる。表裏とも丁寧な削りがある。薄い柾目材である。5は下半を欠損する。上端は圭頭状で、上辺両側縁に各1箇所三角の切り欠きがある。表裏とも粗い割り裂きの痕跡が残る。柾目材である。木簡の付札によく似た形状であるが、墨痕もなく粗く割り裂いているため切り欠きの斎串と考えられよう。6・9は切り欠き、切り込みがない斎串である。6はほぼ完形の斎串である。上端は丸みをおびた圭頭状で、下端は尖らず丸くおさまる。表裏および側縁は丁寧な削りである。薄い柾目材である。9は両端を尖らせた細長い斎串である。表裏は粗い割り裂き痕跡が残る。側縁は丁寧に削り尖らせる。薄い柾目材である。7・8・10～15は棒状木製品である。7は割り裂いた板材の一端を尖らせたもので、他端が欠損する。板目材である。8は表皮の残る丸材の一端を鋭い円錐状に尖らし、他端を直裁し、周縁を丁寧に削り面取りされる。これと同様な破片が他に1点ある。10～15は細長い棒状の木製品である。いずれの断面形も扁平な長方形か菱形である。いずれも柾目材である。

7・8・11が灰色細砂、1・3・5・6・9・10・12～15が黒灰色粘土、2・4が茶灰色粘砂から出土した。（篠原豊一）

瓦類　瓦類は全部で遺物整理箱約1箱分が出土した。すべて丸瓦、平瓦、桟瓦の破片である。ＳＸ02の灰色細砂層の埋土からは平瓦片が1片出土した。小片のために詳細は不明であるが、中世以降のものと考えられる。（宮崎正裕）

Ⅳ　まとめ

旧帝国陸軍参謀本部が明治18年に測量・作成した仮製2万分の1の地図によると、旧国鉄奈良駅(現ＪＲ奈良駅)のすぐ東側に南北160ｍ、東西40ｍ程度の長方形の池が記入されている。周囲の位置関係などからみて、今回検出したＳＸ02がこの池に該当する可能性は十分考えられるが、一方でＳＸ02と坪境小路の想定場所との位置関係や出土した遺物の状況などもあわせて考えると依然として不明な点もある。したがって今回の調査の成果だけでＳＸ02の時期や遺構の性格などについて特定することはできなかった。

このほか、今回の調査では奈良時代の遺構を検出することができなかったが、古墳時代および中近世の遺構が存在していることが明らかとなった。ＳＸ02の問題ともあわせて、今後隣接地での調査が必要であることは言うまでもない。（武田和哉・三好美穂）

3　平城京左京四条四坊二坪の調査　第290次

Ⅰ　はじめに

この調査は奈良市三条添川町215番地の1・2・3で行なった、福村文子氏届出の共同住宅建設に伴う事前発掘調査である。届出地は東西に細長い水田で、平城京の条坊では左京四条四坊二坪の西半に相当し、西辺が東三坊大路にかかる可能性があった。調査は平成６年２月17日に開始し、同年３月19日に埋戻し作業を終えた。発掘区の面積は485㎡である。

Ⅱ　調査の概要

発掘区内の層序は耕作土以下、茶褐色砂質土、黄灰色砂質土、灰色粘質土と続き、発掘区西端では地表面下約0.9m、東端では0.6mで地山である灰色砂礫層に達する。発掘区東半では地山の上に茶褐色砂質土の整地土層がある。遺構は地山面と整地土上面で検出した。遺構面の標高は発掘区西端で61.5m、東端では61.8mである。

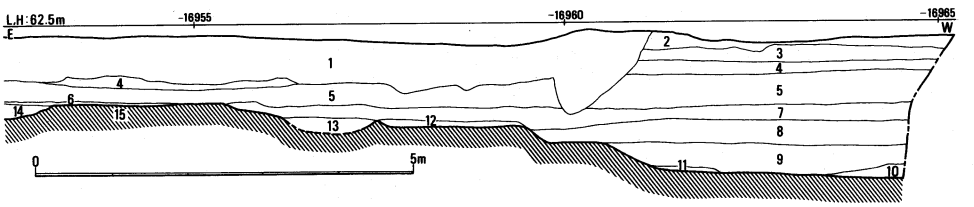
検出した遺構は奈良時代から平安時代のものに掘立柱建物５棟、掘立柱塀１条、井戸１基、土坑２があり、鎌倉時代のものに流路１条、小溝がある。

ＳＢ01　桁行３間以上、梁間２間（3.6m）の南北棟建物。柱間寸法は桁行が2.4m等間、梁間は1.8m等間。

ＳＢ02　桁行３間（6.65m）、梁間１間以上の東西棟建物。柱間寸法は桁行が西から2.35、1.95、2.35mと中央間が狭く、梁間は不明。棟方向が西で南へわずかに振れる。

ＳＢ03　東西２間（5.1m）、南北１間以上の掘立柱建物。柱間寸法は東西が2.25m等間。柱筋が西で南へわずかに振れる。

ＳＢ04　桁行４間以上、梁間２間（4.8m）の南北棟建物。柱間寸法は桁行、梁間ともに2.4m等間 。柱穴の残りは悪いが、なかに礎板や柱根が残るものがある。重複関係からＳ



1　撹乱土
2　黒色粘土(耕作土)
3　茶灰色砂質土
4　黄灰色砂質土
5　灰色粘質土
6　茶褐色粘土（礫混る）
7　暗灰色粘土（SD10埋土）
8　暗灰色粘土（7より暗い、SD10埋土）
9　暗灰色粘土（暗灰色砂混る、SD10埋土）
10　黒色粘土（SD10埋土）
11　淡灰色砂（SD10埋土）
12　暗灰色粘土（SD10埋土）
13　茶褐色粘質土（SK09埋土）
14　灰褐色砂質土
15　灰褐色砂礫

第290次調査　発掘区南壁土層図（1／100）

ＳＢ05　桁行３間（5.85ｍ）、梁間２間（4.8ｍ）の南北棟建物。柱間寸法は桁行が1.95ｍ等間、梁間は2.4ｍ等間。

ＳＡ06　発掘区の西端、ＳＤ10の肩に添う南北塀。３間（6.15ｍ）分を検出し、南北ともに発掘区外へ続く。柱間寸法は2.05ｍ等間。位置から、坪の西辺を画する塀かと思われる。

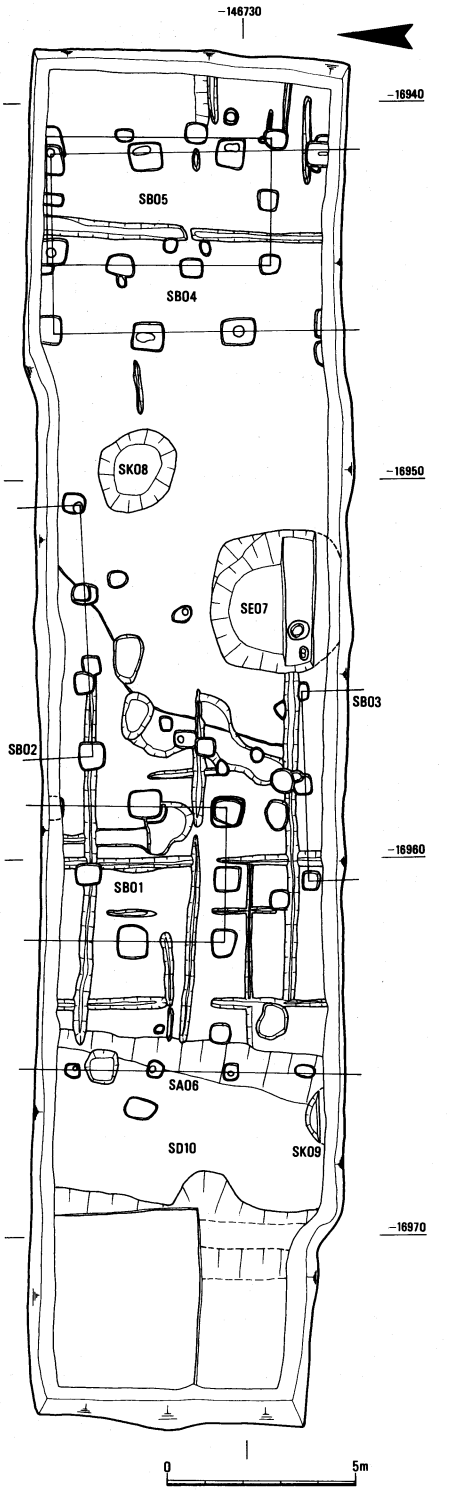
ＳＥ07　東西3.75ｍ、南北3.45ｍ以上の平面隅丸方形掘形の井戸。深さ1.31ｍ。井戸枠は残っていない。掘形から軒平瓦（6646Ａ）１点、塼２点と墨書土器「□」１点が出土したが、黒色土器Ａ類の小片が混ざっており平安時代前期の井戸かと思われる。

ＳＫ08　東西 2.1ｍ、南北2.05ｍの平面楕円形掘形の土坑。断面擂鉢状で、深さ0.7ｍ。平安時代前半の土器が出土した。

ＳＫ09　東西 1.3ｍ、南北0.85ｍ以上の土坑。断面皿状で、深さ0.3ｍ以上。 重複関係からＳＤ10より古い。

ＳＤ10　発掘区西端で検出した南北流路。東半のみを検出し、西半は発掘区外にある。幅18.25ｍ以上、深さ2.08ｍ。あふれのせいか東肩は緩やかに広がっており、本来の幅は検出幅の半分程度であろう。埋土から瓦器の小片が出土し、最上層の埋土が塀ＳＡ06、土坑ＳＫ09を覆っていることから平安時代以降に埋まったと見られる。坪の西辺にあると思われる塀ＳＡ06との位置関係からは、通常の大路側溝に比べ幅広ではあるが、当初東三坊大路の東側溝として掘削された溝であった可能性が考えられる。

小　溝　軒丸瓦（6314Ａ）１点が出土。他に瓦器の小片が出土したものがあり、鎌倉時代の遺構と思われる。　（西崎卓哉）



第290次調査　遺構平面図（1／200）

4　平城京右京三条一坊十四坪の調査　第291次調査

Ⅰ　はじめに

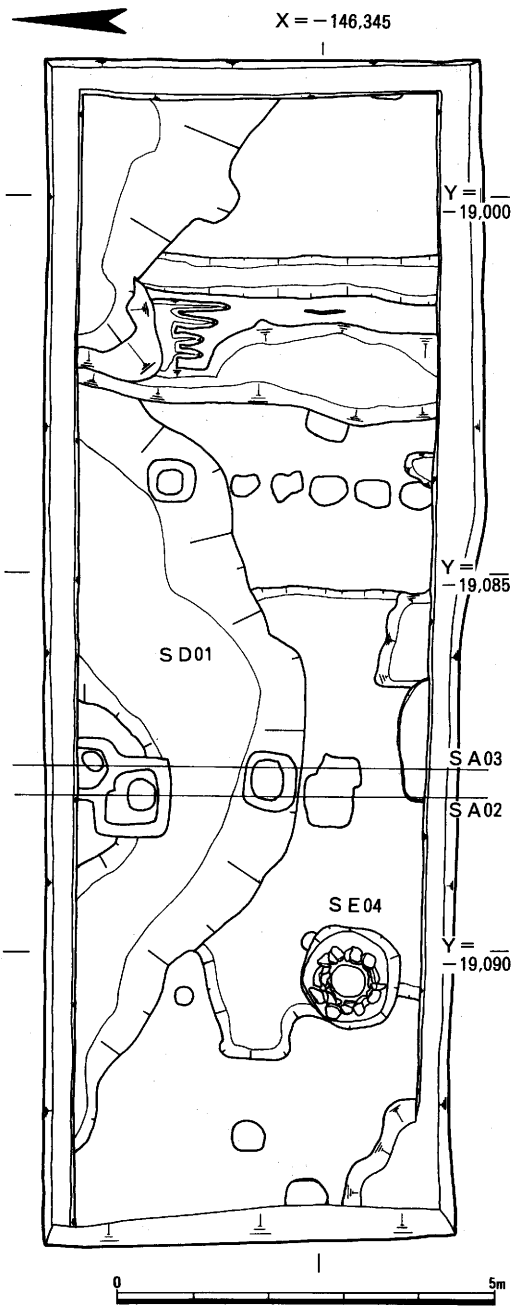
本調査は、奈良市三条大路五丁目１－29番地において実施した杉田昌弘氏届出の個人住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元によると、右京三条一坊十四坪の西辺中央部にあたる。調査は建物建設予定地に東西15.5m、南北5.5mの発掘区を設定して行なった。調査期間は平成６年３月14日から同年３月25日までである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本的な層序は、盛土（約0.3m）以下、耕作土（約0.1m）、黄褐色粘土（約0.1m）と続き、地表下約0.5mで黄灰色砂質土、地点によっては明白色土の地山に達する。地山上面の標高は、概ね65.4mである。検出した遺構には、弥生時代の溝１条、奈良時代の掘立柱塀２条、鎌倉時代の井戸１基、時期不明の土坑がある。主な検出遺構について以下に述べる。

ＳＤ01　発掘区北端で検出した、北東から南西へ向い、北西方向へ曲がる素掘りの溝である。幅２m、検出面からの深さ 0.5mである。埋土は黒灰色土である。遺構の重複関係から、塀ＳＡ02、ＳＡ03より古いことがわかる。溝内から弥生土器が出土した。

ＳＡ02　発掘区中央で検出した南北方向の掘立柱塀。検出したのは１間(2.4m)分で、南北ともに発掘区外に続く。



第291次調査　遺構平面図（１／100）

ＳＡ03　発掘区中央で検出した南北方向の掘立柱塀である。検出したのは２間（4.8ｍ）分で、南北とも発掘区外に続く。柱間寸法は2.4ｍ等間である。

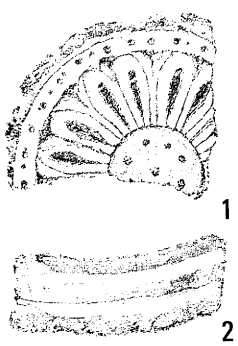
ＳＥ04　発掘区西辺で検出した井戸である。掘形は直径1.3ｍの円形で検出面からの深さは1.5ｍである。井戸側は上部が石組、下部は平面円形の曲物を２段積み上げている。上部の石組は、内法径0.6ｍの平面円形で、６段分が遺存する。下部の曲物は上段のものが内法径0.4ｍ、高さ0.29ｍで、下段のものが内法径0.36ｍ、高さ0.25ｍである。枠内から軒丸瓦、軒平瓦、塼、土師器、須恵器、瓦器、横櫛が出土した。

Ⅲ　出土遺物

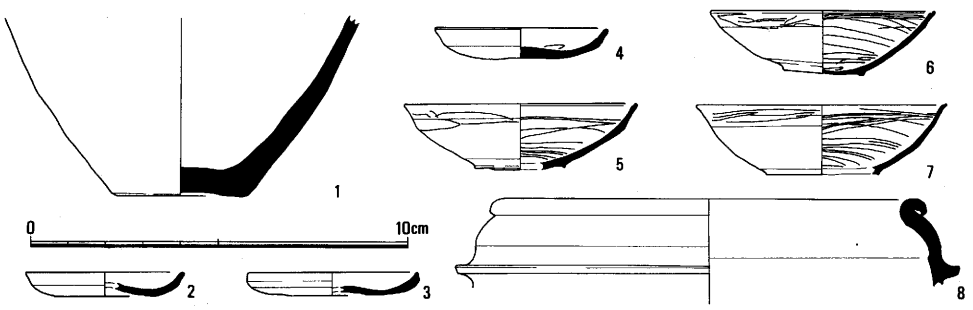
瓦類　出土した瓦類は遺物整理箱で６箱分ある。大半は井戸ＳＥ04から出土した。ほとんど丸瓦、平瓦であるが、軒丸瓦３点、軒平瓦２点、塼３点がある。軒丸瓦の内訳は飛鳥寺ＸⅦ型式[1)]１点、型式不明２点である。飛鳥寺ＸⅦ型式は飛鳥寺、飛鳥池遺跡、奥山廃寺、姫寺廃寺、藤原京横大路に同笵品がある。軒平瓦の内訳は三重弧文軒平瓦１点、型式不明１点である。軒瓦のうち、型式不明の軒平瓦１点が耕作土から、その他は全て井戸ＳＥ04から出土した。丸瓦の中には「竹状模骨痕」を残す行基葺式丸瓦の破片が９点ある。

土器類　出土した土器には弥生・鎌倉・江戸時代のものがある。溝ＳＤ01と井戸ＳＥ04出土土器について記す。溝ＳＤ01からは弥生土器壺の体部から底部にかけての小片３個体分が出土した。これらの内１点は外面がミガキ調整で３条以上のヘラ描直線文が施され、他の１点は体部から底部にかけて境目が不明瞭で比較的縦長の形態をなす。弥生時代前期末から中期初頭にかけてのものである。井戸ＳＥ04からは土師器皿・羽釜、瓦器椀・皿が遺物整理箱１箱分出土した。土師器皿は底部をやや上げ底状にする。瓦器皿は見込み部分に１往復半の平行線状暗文がある。瓦器椀の内面には10～20回転の渦巻状の暗文があり、口縁部外面にも僅かに暗文が残る。13世紀末のものである。

（原田憲二郎・秋山成人・中島和彦）



出土軒瓦（１／４）



溝ＳＤ01（１）、井戸ＳＥ04（２～８）出土土器（１／４）

1）『奈良国立文化財研究所学報第五冊飛鳥寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所　1958

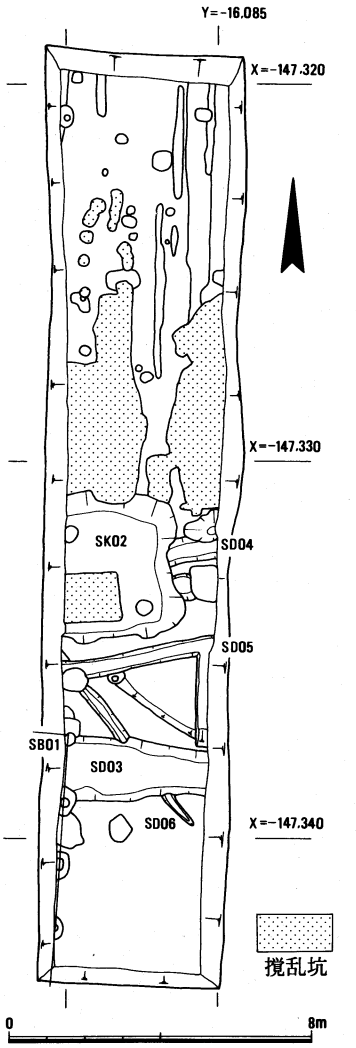
5　平城京左京五条五坊十坪の調査　第294次

本調査は奈良市西木辻町31－7、34－2・6、37－1において実施した、積水ハウス株式会社届出の共同住宅建築に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元によると左京五条五坊十坪の南端で、調査区の南側には条間小路が想定される。また調査地の西約60ｍの地点では昭和63年に平城京第148次調査が行なわれており、奈良時代の掘立柱建物、胞衣壷埋納土坑、溝、古墳時代の溝、遺物等を検出している。調査は、東西５ｍ、南北25ｍ、面積125㎡の発掘区を設定し行なった。調査期間は平成６年４月21日から５月14日までである。

発掘区内の層序は、南辺で、盛土（0.9ｍ）、灰色土（0.1ｍ）、茶褐色粘質土（0.1ｍ）と続き、淡褐色砂礫（地山）となる。地山の標高は約68ｍである。遺構検出は地山上面で行なったが、奈良時代の遺構は茶褐色粘質土上面から掘り込まれている。

検出遺構には掘立柱建物１棟、土坑１、溝４条がある。ＳＢ01は、桁行３間以上の南北棟建物の東側柱と考えられる。建物の大半は発掘区外にあり詳細は不明である。柱間寸法は1.7ｍ等間で、柱筋は北で東偏する。ＳＫ02は南北3.7ｍ、東西3.0ｍ以上、深さ0.4ｍの土坑である。奈良時代の土器、瓦片が少量出土した。ＳＤ03は幅1.7ｍ、深さ0.2ｍの素掘りの東西溝で、重複関係からＳＢ01よりも新しい。条間小路に関する遺構であろうか。溝心の座標値はＸ＝－147,338.160、Ｙ＝－16,088.000である。ＳＢ01、ＳＫ02、ＳＤ03いずれも奈良時代のものと考えられる。ＳＤ04と05は近世または近代の溝で、この溝を境に北側が一段低くなっていることから土地の境界に関するものと考えられる。ＳＤ06は幅0.3ｍ、深さ0.2ｍの溝で、北で西に振れる。重複関係からＳＤ03より古く、奈良時代以前のものと考えられる。

出土遺物には古墳時代後期の土器、奈良時代と近代の土器と瓦があり、遺物整理箱２箱出土した。



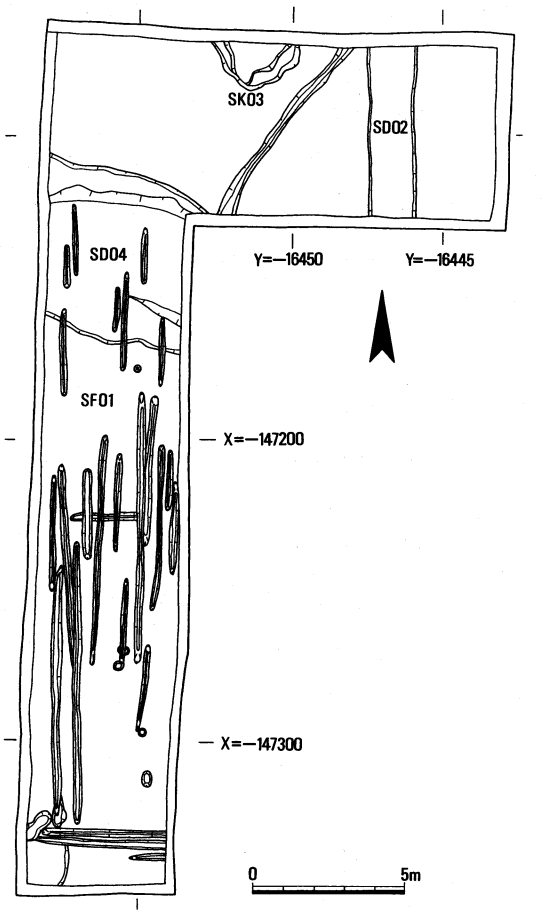
（中島和彦）第294次調査　遺構平面図（１／200）

6　平城京左京五条四坊・東四坊大路の調査　第295次

この調査は、奈良市大森町字売リウ田74－1、75において、岡田キヌエ氏届出の共同住宅建設に伴って実施した事前の発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では左京五条四坊に位置し、調査地内に東四坊大路が想定される。調査面積は180㎡で、調査期間は平成6年4月20日から5月20日までである。

発掘区内の層序は、上から盛土（1.4m）、黒灰色土（0.2m）、灰色土（0.1m）、暗灰茶色土（0.1m）、灰色土（0.2m）と続き、現地表下 2.0mで茶褐色土の地山にいたる。遺構はすべて地山上面で検出した。遺構検出面の標高は概ね64.4mである。

検出した遺構には弥生時代の土坑、弥生時代から古墳時代の流路、奈良時代の道路、溝、時期不明の溝がある。ＳＦ01は東四坊大路と考えられるが、路肩の東から10.5mまでを確認したにとどまった。ＳＤ02は奈良時代の溝である。南北6ｍ分を検出した。幅が1.5mで、深さは0.2mである。埋土から奈良時代の土器が出土した。東四坊大路東側溝と考えられるが、第168次調査で検出した東四坊大路東側溝との振れが0° 32’ 21”と大きい。しかし、このＳＤ01より西で側溝と考えられる溝は検出できなかったため、ＳＤ01を東四坊大路東側溝と考えておきたい。溝心の座標はＸ＝－147,285.000、Ｙ＝－16,446.800である。ＳＫ03は弥生時代の土坑である。東西2.9m、南北1.6m以上ある。深さは0.3mである。出土土器が細片で、詳細な時期は不明である。ＳＤ04は北西から南東方向に流れる流路である。幅約5.2m、深さ0.8mである。埋土は上から茶黄色土、灰色砂質土、灰色砂礫で、いずれの層からも弥生時代の終りから古墳時代初頭の土器が出土した。（池田裕英）



第295次調査　遺構平面図（1／250）

7　平城京外　東堀河の調査　第296次

Ⅰ　はじめに

本調査は奈良市北之庄西町１丁目２番３・７において、柏原洋二氏届出の工場建築に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では左京九条三坊の南約50ｍの平城京外にある。いわゆる「京南辺条条里」の八条三里に該当し、「上ツク田」（小字名）と呼ばれる南北に細長い水田の一角にある。この南北に細長い水田は、北は大安寺付近から南は大和郡山市の地蔵院川付近まで続き、左京三坊を南下する東堀河の遺存地割と考えられている。今回は、平城京外での東堀河の様相の究明を主な目的とし、東堀河が想定される位置に南北６ｍ、東西 27ｍの規模（面積162㎡）で発掘区を設定した。調査期間は平成６年４月21日から４月29日である。

Ⅱ　検出遺構

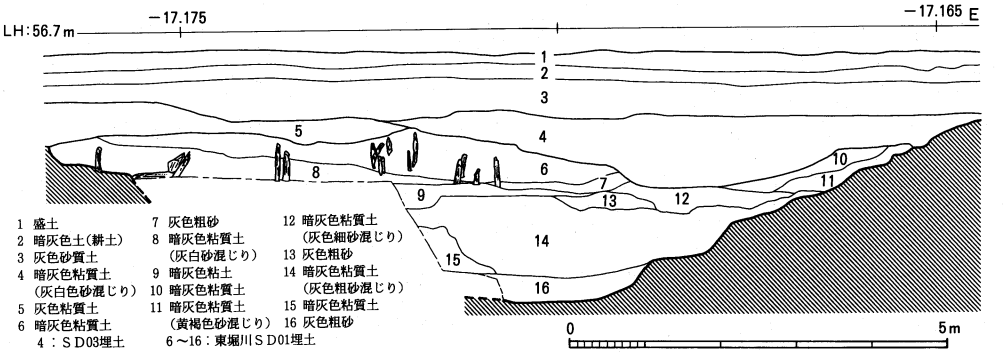
発掘区内の基本層序は、盛土以下、暗灰色土（耕土）、灰色砂質土と続き、地表下約0.8ｍで黄褐色土（粗砂、細礫混じり）の地山にいたる。遺構はすべて地山上面で検出した。地山上面の標高は、概ね55.5ｍである。

主な遺構には、東堀河（ＳＤ01）と流路（ＳＤ03）がある。

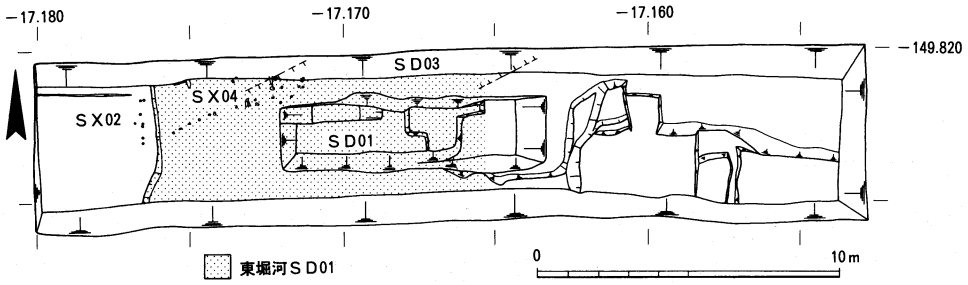
東堀河ＳＤ01　幅11.4ｍ、深さ2.0ｍの南北溝で、約４ｍ分を検出した。埋土は大きく３層に分かれる。上層（0.8ｍ）は暗灰色粘質土と灰色粗砂、中層（1.2ｍ）は主に暗灰色粘質土（灰色粗砂混じり）、下層（0.3ｍ）は灰色粗砂である。いずれの層からも、奈良時代中頃から平安時代前半の遺物が少量出土した。溝心の国土座標はＸ＝－149,822.200、Ｙ＝－17,171.000。溝底面の標高は、概ね53.1ｍである。

護岸施設ＳＸ02　東堀河ＳＤ01の西岸を護岸した南北杭列で、約2.5ｍ分を検出した。

ＳＤ03　東堀河ＳＤ01埋没後、発掘区中央を北東から南西方向に斜行する流路である。遺構検出は、地山上面で行なったため、流路の両岸を削平することになり、平面では検出



第296次調査　東堀河ＳＤ01土層図（１／100）



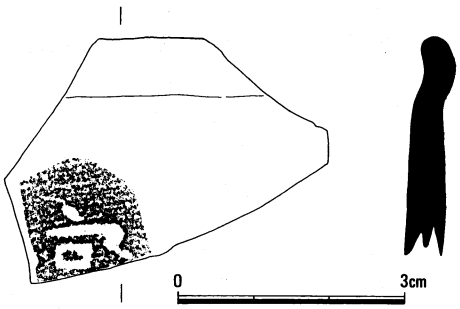
第296次調査　遺構平面図（1／250）

できなかった。北壁の土層堆積状況から、幅3.5m、深さ0.9m程度の規模の流路であることを確認した。埋土は主に暗灰色粘質土（灰白色砂混じり）である。奈良時代中頃から平安時代前半の遺物が少量出土した。流路底面の標高は、概ね54.6mである。

護岸施設ＳＸ04　東堀河ＳＤ01上面で検出した杭列で、北東から南西方向に約５ｍ分を確認した。位置関係と北壁の土層堆積状況から、ＳＤ03の西岸を護岸したものと思われる。

Ⅲ　出土遺物

出土遺物には瓦類と土器類がある。瓦類は東堀河ＳＤ01、ＳＤ03から出土した丸瓦、平瓦が少量と東堀河ＳＤ01から出土した塼が１点あるのみである。土器類は大半が東堀河ＳＤ01とＳＤ03から出土した。東堀河ＳＤ01から出土したものには土師器、須恵器、黒色土器、土馬、製塩土器、人面墨書土器が少量ある。いずれの層からも奈良時代中頃から平安時代前半の土器が出土した。特筆すべきものとしては、下層から出土した「官」の刻印をもつ須恵器がある。一方、ＳＤ03からは土師器、須恵器、黒色土器、土馬がいずれも細片で少量出土した。出土土器は東堀河ＳＤ01同様、奈良時代中頃から平安時代前半のものである。　（宮崎正裕・池田裕英）



東堀河ＳＤ01出土刻印土器（１／１）

Ⅳ　まとめ

東堀河が京外においても京内とほぼ同規模で南下していたことを確認した。これにより、地蔵院川まで続く南北に細長い水田が東堀河の遺存地割である可能性が一層高まった。東堀河は現在までに、六条から九条間の５地点で確認されている[1)]。国土方眼方位に対する堀河の振れは、平均Ｎ０°21′1″Ｗ程度であるが、九条条間路付近と本調査地を比較すると、振れはＮ０°5′56″Ｗ程度であり、京内の平均の振れよりも若干小さい。河底は、北から南へ下り勾配であり、九条条間路付近から本調査地までは1.2‰程度の勾配である。平城京内での平均勾配２‰程度と比較すると若干緩やかである。　（宮崎正裕）

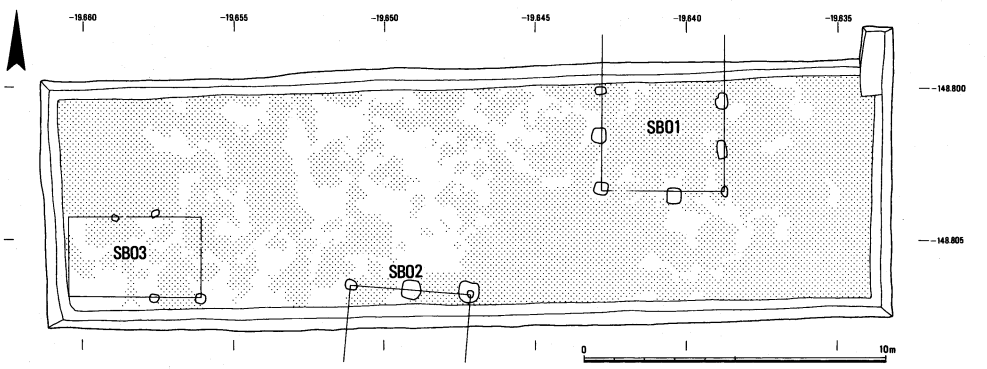
1)「平城京左京六条三坊十坪の調査 第284次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』1994年

8　平城京右京八条・西二坊大路の調査　第297次

本調査は、奈良市七条一丁目508－1、509－1において実施した、吉田弥嗣郎氏届出の共同住宅建築にともなう事前発掘調査である。調査地は、平城京条坊復元では右京八条三坊一坪と、これが面する西二坊大路想定位置にあたる。このため、西二坊大路及び一坪内の様相を明らかにすることを目的に、調査地の南半に東西約27ｍ、南北８ｍ（面積220㎡）の発掘区を設定した。調査期間は、平成６年５月10日から６月１日までである。

発掘区内における堆積土の基本層序は、盛土以下、耕作土、暗灰色粘質土、灰色砂質土、茶灰色砂質土、茶褐色粘質土、中世の土器片を含む茶灰色砂と続き、現地表下約１ｍで黒褐色粘土の地山となる。発掘区の東半では、地山上面に暗茶褐色粘質土による奈良時代の整地層があり、奈良時代の遺構はこの整地土上、もしくは地山上面で検出した。また、発掘区西半では、茶灰色砂の下層に中世の土器片を含む暗灰色粘砂の堆積土が続き、地山の黒褐色粘土となる。

検出した遺構には、奈良時代の掘立柱建物２棟（ＳＢ01・ＳＢ02）、中世の掘立柱建物１棟（ＳＢ03）及び粘土採掘坑がある。ＳＢ01は発掘区東半で検出した梁間２間（4.2m）、桁行2間（3.6m）以上の掘立柱南北棟建物である。発掘区北側へ続く。ＳＢ02は、発掘区中央南側で検出した東西２間（4.2m）で、発掘区外南に続く建物。両建物ともに建物主軸の方向は方眼方位に従う。ＳＢ03は、発掘区西半で検出した桁行２間（３ｍ）、梁間２間（３ｍ）以上の掘立柱東西棟建物である。また、発掘区西半で多数の土坑を検出した。埋土は暗灰色粘砂で、12世紀中ごろの瓦器片が出土した。重複関係を確認できないほど密に掘り込まれていることと、いずれの土坑も黒褐色粘土の地山下層にある灰色砂質土にまでは掘削が及んでいないことから、中世における粘土採掘坑であると思われる。なお、調査当初に想定した西二坊大路はその西側溝についても確認できなかった。　（立石堅志）

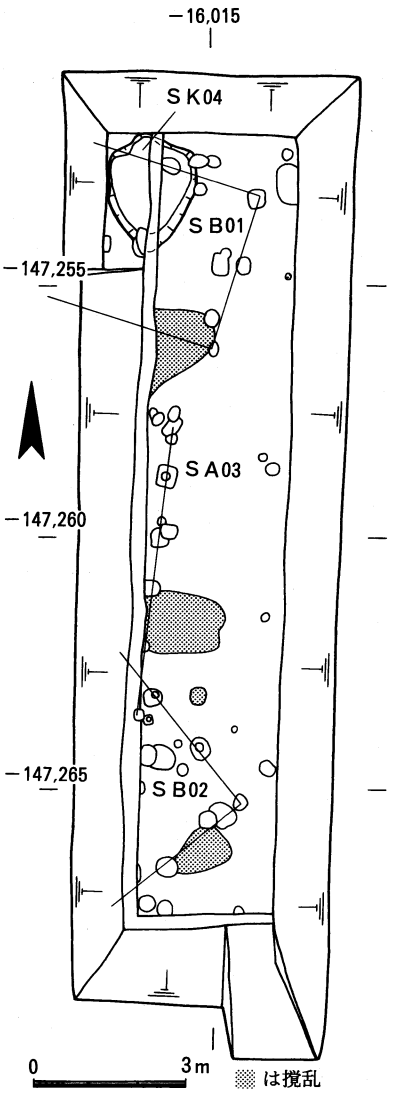


第297次調査　遺構平面図（網目は粘土採掘坑　１／250）

9　平城京左京五条五坊十五坪の調査　第298次

本調査は奈良市西木辻町28番地において、市立済美幼稚園園舎改築に伴って実施した事前の発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では、左京五条五坊十五坪のほぼ中央にあたる。調査面積は100㎡で、調査期間は平成６年５月12日から５月31日である。基本層序は、盛土以下、黒灰色土、暗灰褐色土、灰褐色土、黄灰褐色土と続き、現地表下約1.9ｍで、黄灰色土の地山にいたる。遺構はすべて地山上面(標高約68.5m)で検出した。

検出した遺構には掘立柱建物２棟、掘立柱塀１条、土坑１のほか柱穴がある。ＳＢ01は桁行１間(1.85m)以上、梁間２間(3.1m)の掘立柱建物である。梁間の柱間寸法は北から1.4－1.7ｍで、棟方向は国土方眼方位東で南に振れる。重複関係から、後述する土坑ＳＫ04よりも新しい。ＳＢ02は２間(1.35m等間)以上×１間(1.9m)以上の掘立柱建物である。棟方向は国土方眼方位に対し大きく振れる。ＳＡ03は南北方向の掘立柱塀で５間(5.6m)分を検出した。柱間寸法は北から0.9－1.2－1.0－1.1－1.4ｍである。南北棟建物の東側柱列とも考えられるが、柱間が不揃いであることから、塀の可能性が高い。柱筋は国土方眼北で東に若干振れる。ＳＫ04は南北約2.3ｍ、東西約1.7ｍ、深さ約0.2ｍの土坑である。底は平坦で、埋土は灰褐色土である。そのほか、多数の柱穴を検出したが、残り具合が悪く、建物としてはまとまらなかった。



遺物はすべて土器で、整理箱に２箱分程度出土した。大半が遺物包含層から出土した奈良時代のものである。遺構に関するものとしては、ＳＫ04から出土した古墳時代(５世紀末～６世紀初)の土師器甕・杯、須恵器杯が少量ある。ＳＢ01・02、ＳＡ03については、柱穴から出土した土師器、須恵器が少量あるが、いずれも小片であり、時期は特定できない。しかし、ＳＢ02は棟方向が大きく振れる特徴から、古墳時代に遡る可能性もある。

(宮崎正裕)

10　平城京左京九条四坊・九条大路の調査　第300次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市北之庄町672－1において実施した、株式会社関西電力奈良支店届出の電力供給変電所建設に伴う発掘調査である。調査地は平城京九条大路の南側にあたり、九条大路南側溝、京南辺を西流する流路が想定されている。また平城京以後は京南辺条条里の三里七坪にあたる。九条大路については、調査地の東約16mの地点で奈良国立文化財研究所が調査[1)]を行なっており、九条大路の北または南側溝と築地状遺構、門を検出している。この調査成果により、遺存地割りから推定した九条大路がさらに南へ下がること、九条大路が京南辺条条里により壊されており条里の施工時期が平城京以後であることが判明している。発掘区は東西11m、南北40mで、さらにその北側に東西2m、南北39mの細長い発掘区を設定した。調査面積は518㎡で、調査期間は平成6年6月2日から8月2日までである。

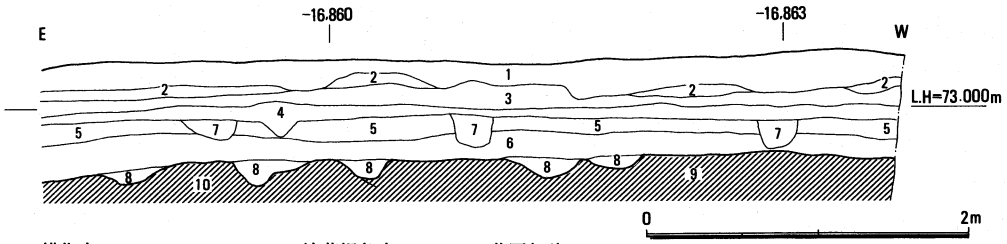
Ⅱ　検出遺構

発掘区内の層序は北辺で耕作土（0.2m）・床土（0.1m）と続き明茶褐色土の地山となる。地山は北から南に向かい緩やかに下降し、発掘区南半では地山の上に古墳時代遺物包含層の淡茶褐色土と暗茶褐色土が堆積している。また調査区は南北2枚の水田にまたがっており、南側の水田では地山が北側に比べ約0.25m下がる。地山の標高は北端で57.2mで、南端で56.6mである。遺構検出は地山上面で行なったが、発掘区南半では淡茶褐色土上面で一度行なった。地山上面では弥生時代後期から古墳時代前期の遺構、淡茶褐色土上面では奈良時代から近世の遺構を検出した。以下主要な遺構について記す。

弥生・古墳時代の遺構　掘立柱建物1棟、土坑9、溝、小柱穴多数を検出した。

ＳＢ01　桁行2間（2.4m）、梁間1間（1.8m）の南北棟建物で、棟方向は北で西偏する。弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられる。

ＳＫ02　直径2.0mの平面円形の土坑で、深さは0.9mである。断面の土層観察による



1　耕作土
2　耕作土（橙色土混じり）
3　橙色土（床土）
4　淡灰褐色土
5　淡茶褐色土
6　暗茶褐色土
7　灰色砂質土
8　暗茶灰色砂質土
9　茶灰色砂
10　明黄褐色粘質土

第300次調査　発掘区南壁土層図（1／50）

と土坑中央に径1.2mの枠の痕跡の土層堆積が見て取れることから、有機質の枠があった可能性がある。出土遺物は弥生時代後期の土器で、この枠の堆積土の中から出土した。

ＳＫ03　長径2.4m、短径2.0mの平面楕円形の土坑で、深さは0.8m以上である。断面は逆台形で底は擂鉢状になっている。砂層を掘り込んでおり湧水が激しい。弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の土器が出土した。

ＳＫ04　長径2.6m、短径1.8mの平面楕円形の土坑である。断面形は擂鉢状で、深さは0.5m以上である。ＳＫ03同様砂層を掘り込んでおり湧水が激しい。ＳＫ03とほぼ同時期の土器が出土した。

ＳＤ11　幅約１m、深さ0.3mの溝で、南北約９mの半円を描き発掘区西側へ続く。断面形は浅いＵ字形で中心が一段深くなっている。ＳＫ03とほぼ同時期の土器が出土した。

ＳＤ12　幅0.3m、深さ0.2mの断面Ｕ字形の溝である。発掘区西壁の土層断面や出土遺物から、ＳＤ11とつながり発掘区内を逆Ｓ字状に流れる溝になると考えられる。

この他に弥生時代後期から末にかけての遺構（ＳＫ05～10、ＳＤ14・15等）があるが、いずれも土器の破片が小量出土するのみで性格等は明らかにしがたい。

奈良・平安時代の遺構　掘立柱建物４棟、土器埋納土坑１、土坑１を検出した。

ＳＢ16　南北３間（6.4m）、東西２間以上の掘立柱建物で、発掘区外西につづく。柱間寸法は南北が北から 2.0－2.3－2.1m、東西が1.8mである。棟方向は北でやや西に振れる。

ＳＢ17　南北３間（6.3m）、東西２間以上の掘立柱建物で、発掘区外東につづく。柱間寸法は南北が北から 2.7－1.9－1.7m、東西が北の柱間で2.1m、南の柱間で1.8mである。棟方向は北でやや西に振れる。ＳＢ16とは南北の柱筋を揃えており、両建物間の距離は９mである。

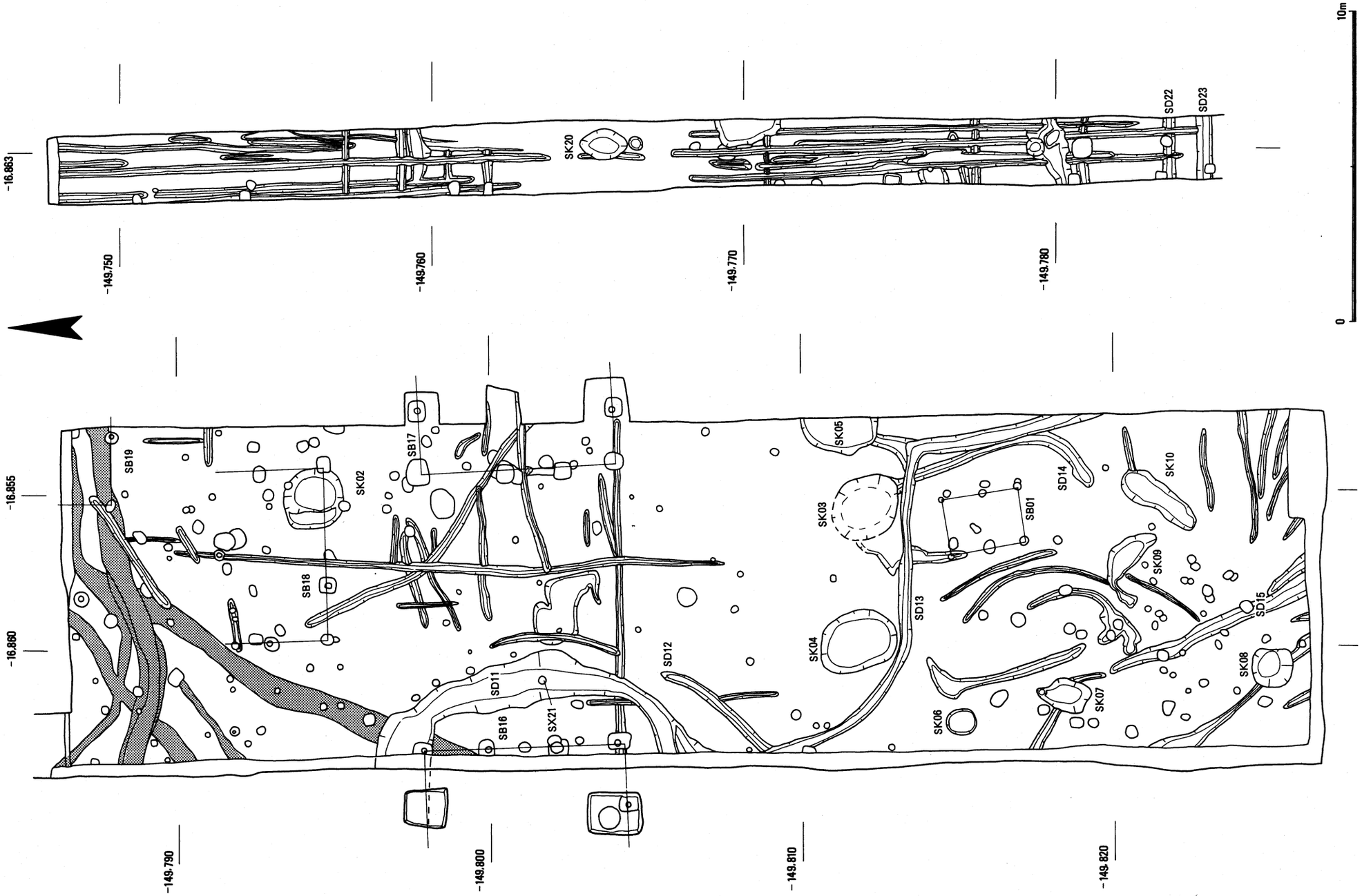
ＳＢ18　東西３間（5.6m）、南北２間以上の掘立柱建物。北側は削平され残存しておらず、全体の規模等は不明である。

ＳＢ19　東西方向の１間分（2.2m）を検出したのみで、大半は発掘区外にあり全体の規模等は不明である。柱掘形から土師器羽釜の破片が３個体分出土した。11世紀頃のものである。

ＳＫ20　東西1.0m、南北1.6mの平面楕円形の土坑で、深さは0.1mである。11世紀頃の黒色土器Ｂ類と土師器が出土した。

ＳＸ21　須恵器の壷Ｋを埋納した土坑である。壷は肩部から上半が割られており、底部は打ち欠かれ孔があけられている。壷の内面には漆が付着している。掘形は径0.25mの平面円形である。奈良時代のものである。

これらの建物の時期はＳＢ18を除き出土遺物がなく知る手がかりはないが、ＳＸ21と同時期のものとし、奈良時代と考えたい。



第300次調査　遺構平面図（1／150　網目部分は自然流路）

中・近世の遺構　素掘溝多数を検出した。素掘溝は幅約0.1～0.4m、深さ約0.1～0.2mで断面浅いU字形である。いずれもほぼ東西、南北方向に向いている。溝間の距離、主軸の傾き等より5群以上に分けられるが、明確に群をとらえられたのは以下のａ～ｅ群の5群だけである。

ａ群は南北方向の溝群で、溝間の距離は3.3～3.7mである。溝方向は北でやや西偏する。重複関係から最も新しいものである。

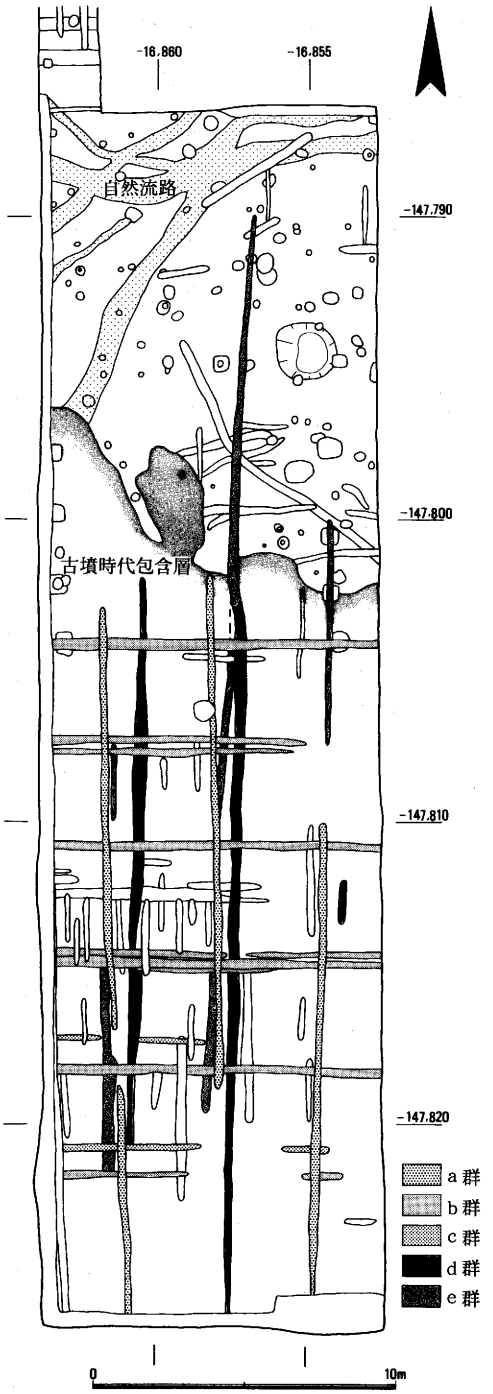
ｂ群は東西方向の溝群で、溝間の距離は3.3～3.8mである。溝方向はほぼ東西を向く。

ｃ群は東西方向の溝群で、溝間の距離は3.8mである。溝方向はほぼ東西を向く。

ｄ群は南北方向の溝群で、溝間の距離は3.3～3.6mである。溝方向は北でやや東偏する。

ｅ群は南北方向の溝群で、溝間の距離は3.3～3.6mである。溝方向は北でやや東偏する。重複関係から最も古いものである。

これらの溝の時期は出土遺物が小片で少ないため特定できないが、ｂ群の溝から瓦器椀の破片が出土しており、少なくとも11世紀の建物等の廃絶後のものと考えられる。

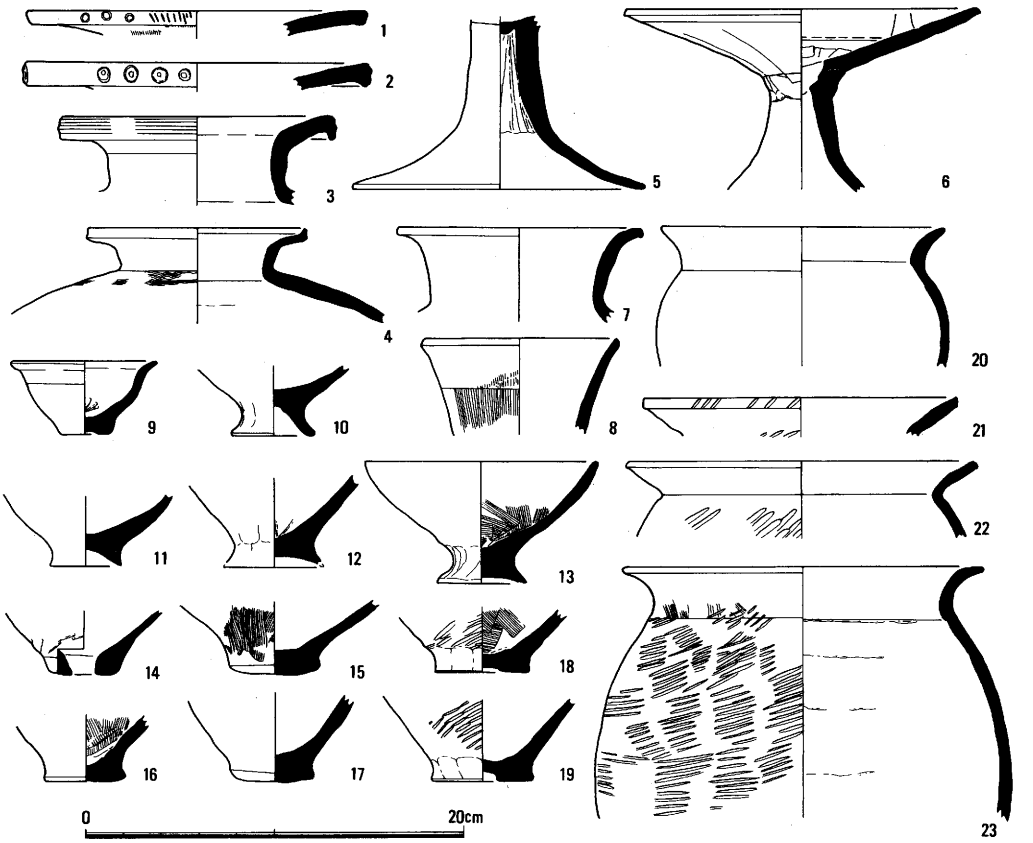


第300次調査　中近世遺構平面図（1／250）

Ⅲ　出土遺物

出土遺物には弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・江戸時代の土器があり、遺物整理箱37箱分出土した。大半は弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。以下ＳＫ02とＳＫ03出土の土器について記す。

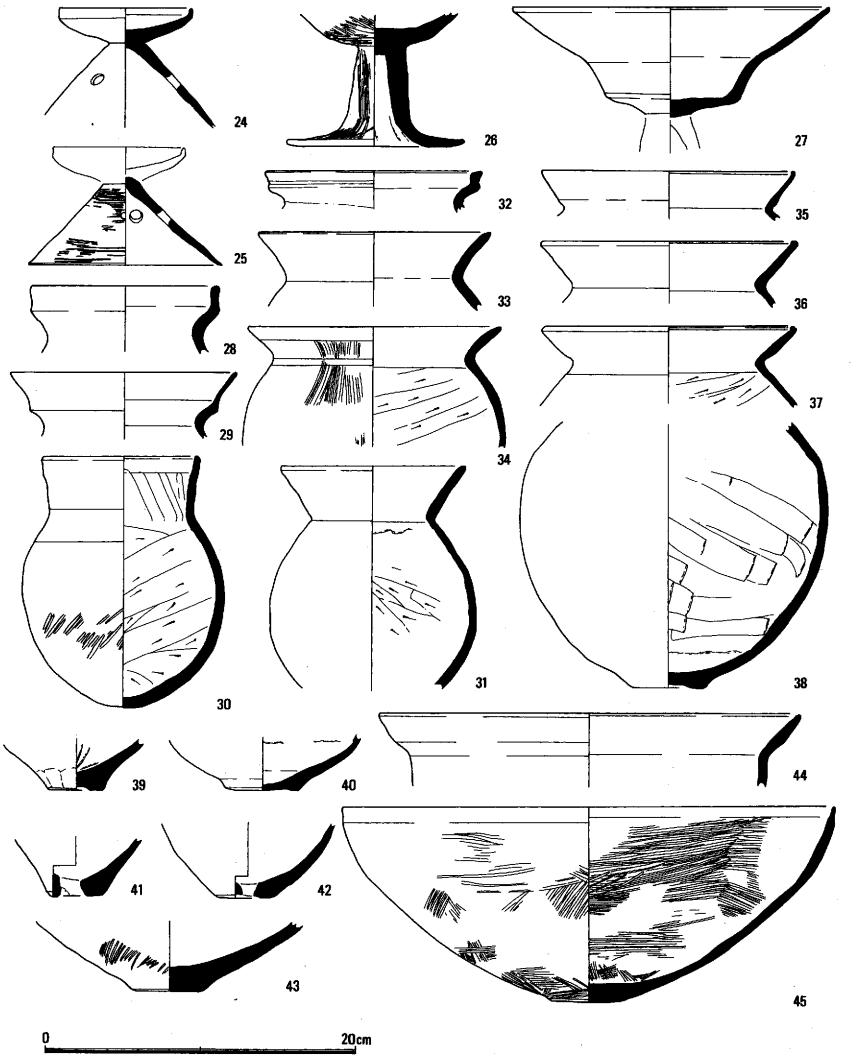
ＳＫ02からは器台（1・2）・高杯（5・6）・鉢（9～14）・壷（3・4・7・8・15～17）・甕（18～23）が出土した。器種別では高杯と鉢の占める割合が高い。1・2は器



土坑ＳＫ02出土土器（１／４）

台の口縁部で、口縁端部は外面に面をなし、１は竹管文と縦の沈線文を、２は円形浮文を施す。高杯６は杯部見込み部の円盤充塡法で詰めた粘土が剥離脱落している。杯部内面には粘土を環状に貼りつけた跡が残る。鉢はいずれも体部外面をナデで調整しタタキは確認できない。内面はハケメまたは板ナデである。壷４は体部をヘラミガキした後、頸部から肩部に波状文と連簾文を施す。甕は右上がりのタタキで外面を調整するものが多い。弥生土器畿内第五様式のものである。

ＳＫ03からは器台（24・25）・高杯（26・27）・鉢（39・41・42・44・45）・壷（28～31）・甕（32～38・40・43）が出土した。器種別では甕・壷類の割合がやや高い。器台はいずれもいわゆる小型器台である。24は非常にきめ細かい明るい橙色の胎土で、高杯27と壷29の胎土も同様の特徴をもつ。鉢はＳＫ02でみられるような小型のものは少なく、大型のものがみられる。45は内外面に密なヘラミガキを行なう。甕はハケメ、タタキで外面を調整しているが、タタキの調整が残るもの（43）は少ない。内面はヘラケズリのもの（34・37）、ケズリ風の板ナデのもの（38）とがある。32は受口状の口縁部で、端部外面に１条のヘラ描沈線がある。35～37は口縁端部を摘み上げ気味に肥厚させる。庄内から布留式にかけて



土坑ＳＫ03出土土器（１／４）

の土器と考えられる。

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、当初想定していた九条大路と京南辺の流路は検出出来なかった。調査地北端の遺構面の標高は、東の奈良国立文化財研究所の調査地の遺構面より約0.5ｍ低いだけで、遺構が大きく削平を受けた可能性は考えられない。したがって現状では京南辺の流路の存在は積極的には肯定できず、九条大路の幅員等についても明確にしがたい。今後の周辺部の調査進展を待ちたい。また弥生時代後期から古墳時代前期の遺構を検出したことにより、範囲等は不明であるがこの時期の遺跡が周辺一帯に存在することを新たに確認した。

（中島和彦）

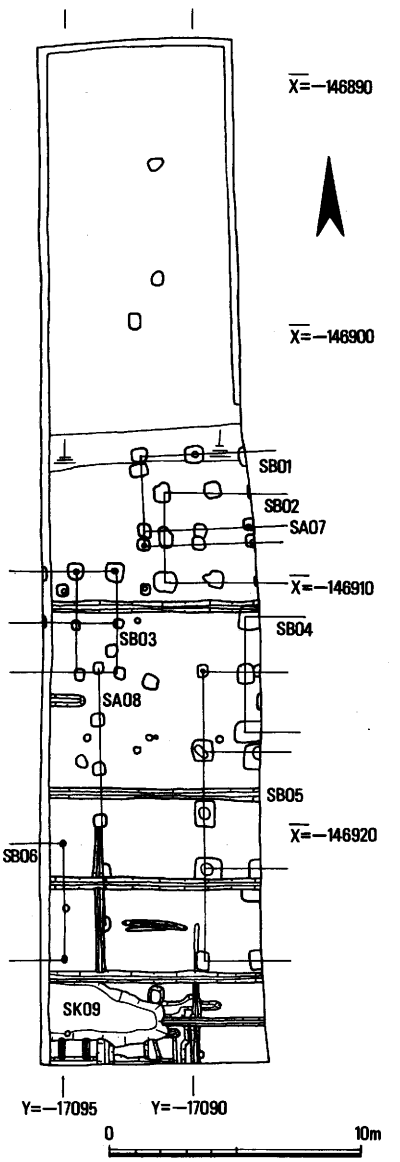
1）奈良国立文化財研究所編「市道九条線関係発掘調査概報（Ⅰ）」1983

11　平城京左京四条三坊十四坪の調査　第301次

この調査は、奈良市三条桧町392-1において実施した、田村義春氏届出の共同住宅建設工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では左京四条三坊十四坪に位置し、調査地の南に十三・十四坪坪境小路が想定されている。調査期間は平成６年６月１日から６月22日までで、調査面積は320㎡である。

発掘区内の層序は、上から黒灰色土、暗灰色土、灰色土と続き、現地表下0.5ｍで、黄茶色粘土の地山にいたる。地山上面の標高は概ね60.4ｍである。

検出遺構には奈良時代の掘立柱建物５棟、時期不明の掘立柱建物１棟、掘立柱塀２条、土坑１がある。ＳＢ01は東西２間（4.2m）、南北２間（3.0ｍ）の建物である。柱間寸法は東西が2.1ｍ等間、南北は1.5ｍ等間である。ＳＢ02は東西２間（4.2m）以上、梁間２間（3.6m）の建物である。柱間寸法は東西が2.1m等間、南北は1.8m等間である。ＳＢ03は東西２間（3.0m）、南北２間（4.2m）の総柱建物である。柱間寸法は東西が1.5m等間、南北は2.1ｍ等間である。ＳＢ04は南北２間（4.8m）のみを検出した。柱間寸法は2.4m等間である。ＳＢ05は東西１間（2.2m）、南北２間（4.8m）を検出した。柱間寸法は東西が2.2m、南北は2.4m等間である。南・北に廂がつき、廂の出は3.2ｍで、東西の柱間寸法は2.2ｍである。ＳＢ06は南北２間（4.7m）のみを検出した。柱間寸法は北から１間目が2.1ｍ、２間目が2.6ｍである。ＳＡ07は東西２間（4.0m）以上の掘立柱塀である。柱間寸法は2.0m等間である。ＳＡ08は南北５間（8.2m）の掘立柱塀である。柱間寸法は2.1m等間である。ＳＫ09は東西4.7ｍ以上、南北2.3ｍの東西方向に細長い土坑である。深さは0.3ｍである。埋土から奈良時代の土器・瓦が出土したが、いずれも小片で、詳細な時期は特定できない。（池田裕英）



第301次調査　遺構平面図（１／300）

12　平城京左京五条五坊九坪の調査　第302次

Ⅰ　はじめに

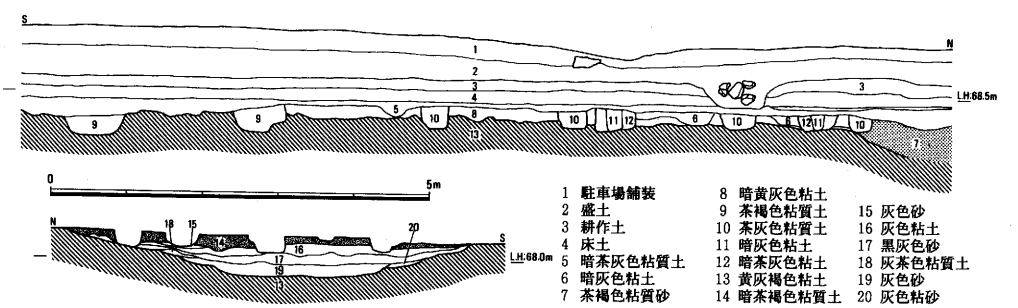
本調査は、奈良市大森町36－1における株式会社レック代表取締役中本敦士氏届出の共同住宅建設に伴う事前発掘調査として実施した。当該地は、平城京条坊復元では、左京五条五坊九坪のほぼ中央に位置しており、敷地の南半部で、坪の東西、南北の計画中軸線が交わることになる。このため、坪の中軸位置を含め、敷地南半部に約900㎡の発掘区を設定した。調査期間は、平成６年６月28日から８月18日までである。なお敷地の南側の進入路部分については、すでに昭和59年度に奈良国立文化財研究所による発掘調査（第156－33次）が行なわれている[1)]。この調査ではほぼ坪の南北中軸線上にある東西方向の溝や、方位の振れる小規模な掘立柱建物、掘立柱塀が検出されている。

Ⅱ　検出遺構

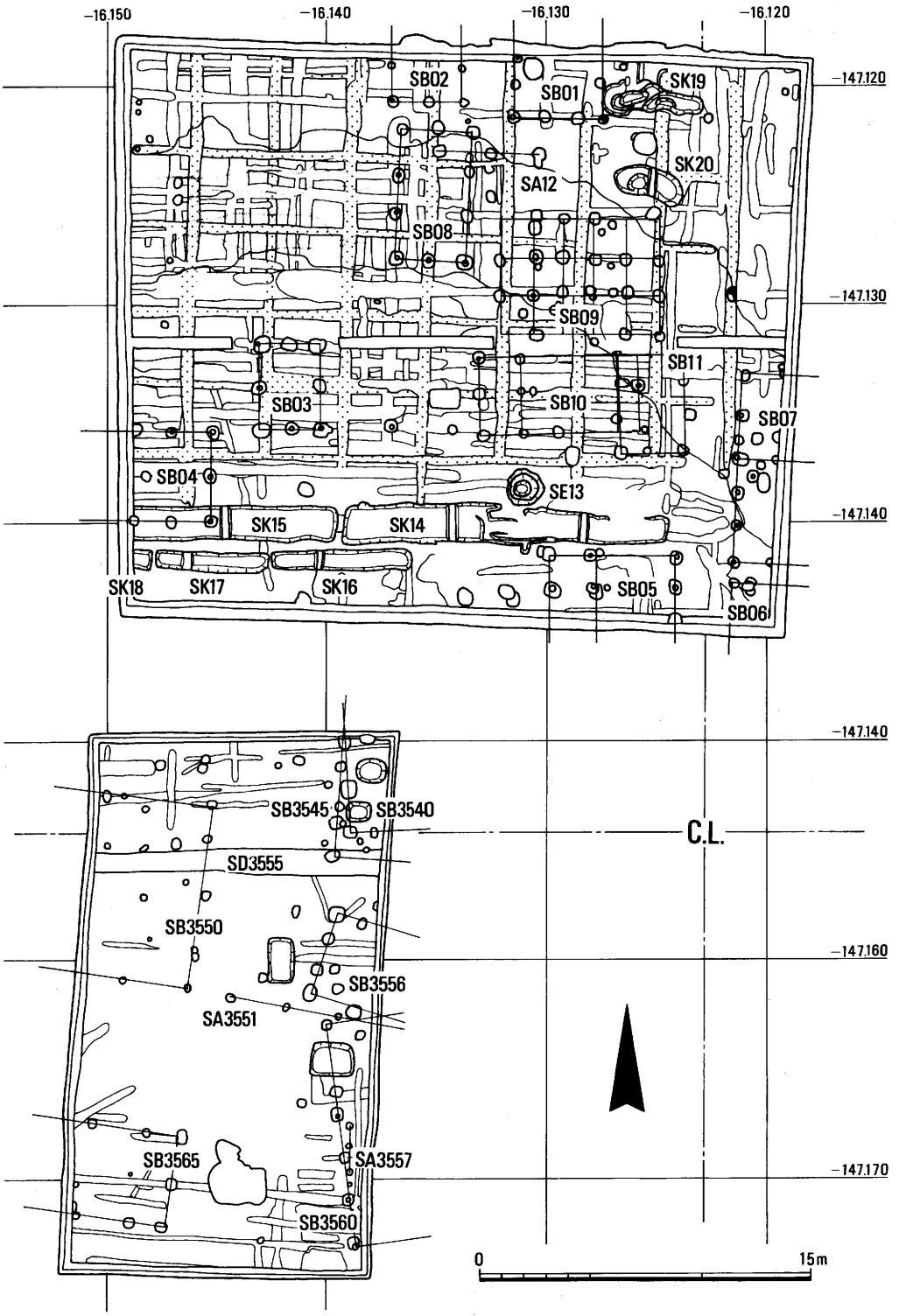
発掘区内での堆積土の層序は次のとおりである。現地表であるアスファルト舗装以下、盛土、耕作土である黒褐色粘質土、床土である灰色粘質土、遺物を包含する暗茶灰色粘質土と続き、地表下約1.1ｍで黄灰褐色粘土の地山となる。また、発掘区中央部で地山が一段窪む箇所があり、この部分に暗黄灰色粘土もしくは、暗茶褐色粘質土による奈良時代の整地層がみられた。遺構は地山上面もしくは、整地土上面で検出した。

検出した遺構には、奈良時代の掘立柱建物11棟、掘立柱塀１条、井戸１基、土坑７、南北溝８条、東西溝６条がある。その他、中世の耕作溝と思われる素掘溝がある。また、奈良時代以前の自然流路を１条検出している。

掘立柱建物には、主軸が方眼方位にたいして振れる建物と、方眼方位に従った建物がある。方眼方位に従ったＳＢ01・ＳＢ02・ＳＢ03・ＳＢ04・ＳＢ05、東へ約３°振れるＳＢ06・ＳＢ07・ＳＢ08・ＳＡ12、西に約３°振れるＳＢ09・ＳＢ10・ＳＢ11の３群に分けられ



第302次調査　発掘区東壁土層図（１／100）



第302次調査　遺構平面図（1／300）

る。いずれの建物も、柱穴埋土から奈良時代の土器小片が出土したが、細片でありそれぞれの建物の時期は不詳。井戸ＳＥ13は、発掘区中央南よりで検出した掘形の平面がやや不整形な、径約1.8m、検出面からの深さ約１ｍの井戸である。井戸枠材はない。埋土から奈良時代の土器片が出土したが、小片であるため時期は不詳。土坑ＳＫ14・ＳＫ15は、発掘区南端で検出した東西方向に一列に続く平面長方形の土坑である。ともに幅約1.7ｍ、深さ約0.3ｍの土坑。ＳＫ14は、東西約15ｍ。ＳＫ15は、東西約10ｍ分を検出したが、発掘区外西に続くためその総長は明らかではない。この両土坑の埋土はともに茶褐色粘質土であり、両土坑間は、幅の狭い溝によってつながっている。このＳＫ14・15の南側で、同じく東西方向に一列に続く長方形の土坑ＳＫ16・ＳＫ17・ＳＫ18 を検出した。ともに幅約0.7ｍ、深さ約0.3ｍ。ＳＫ16・ＳＫ17 は東西長5.5ｍから６ｍ。ＳＫ18は東西約１ｍ分を検出したが、発掘区外に続くため全長は不明。土坑ＳＫ19は、発掘区北東端で検出した東西４ｍ、南北１ｍの平面不整形な土坑である。ＳＫ20 は、このＳＫ19の南側に平行する位置で検出した東西約５ｍ、南北約１ｍの平面隅丸長方形の土坑である。このほか、ＳＫ14・15の北側で幅約0.3ｍ、深さ約0.1ｍから0.4ｍの東西、南北両方向の素掘溝を検出した。これらの溝は、ほぼ12小尺（約3.55ｍ）間隔で平行に掘られており、碁盤目状を呈している。南北溝は、方眼方位に対して北で東に約３°、東西溝は、東で南に約３°振れている。これは、ＳＢ06・ＳＢ07・ＳＢ08・ＳＡ12と同じ振れを示す。南北溝、東西溝ともにＳＫ14・15以南には続かない。これらの溝の埋土からは奈良時代の土器、瓦が出土しているが、いずれも小片で、時期を特定するまでにはいたらない。しかし、検出した掘立柱建物の中に明らかにこの溝埋土を掘り込み作られたものがあること、また、その分布範囲がＳＫ14・15を南限とし、東西溝が、この東西方向の土坑の南肩を基点にほぼ12小尺で配置されていると考えることができること、及び坪の想定南北中軸線上にある東西溝ＳＤ3555からみてもほぼ12小尺を単位として割り付けることができること、以上の点からして本調査でも検出している他の中世以降の農耕による耕作溝とは異なる性格のものであると考えたい。

また、発掘区中央を南東から西方向に流下する自然流路を検出した。幅約5.5ｍ、深さ約0.5ｍ。長さ30ｍ分を確認した。埋土から、縄文時代の石匙などの石器が出土した。

Ⅲ　出土遺物

特記すべきものに、旧石器時代の翼状剥片石核がある。これは、遺物包含層からの出土ではあるが、いままでこの周辺の調査では旧石器時代の遺物は見つかっておらず、今回初めて調査地周辺に旧石器時代の遺跡がある可能性を示した点で重要であろう。また、古墳時代の土器片、埴輪片も少量であるが出土した。　　（立石堅志）

1)「6.左京(外京)五条五坊九坪の調査 第156－33次」「平城宮跡発掘調査部調査概報 昭和59年度」奈良国立文化財研究所1985 なお、今回の調査にあたり調査担当の杉山洋氏から種々ご教示を得た。記して感謝いたします。

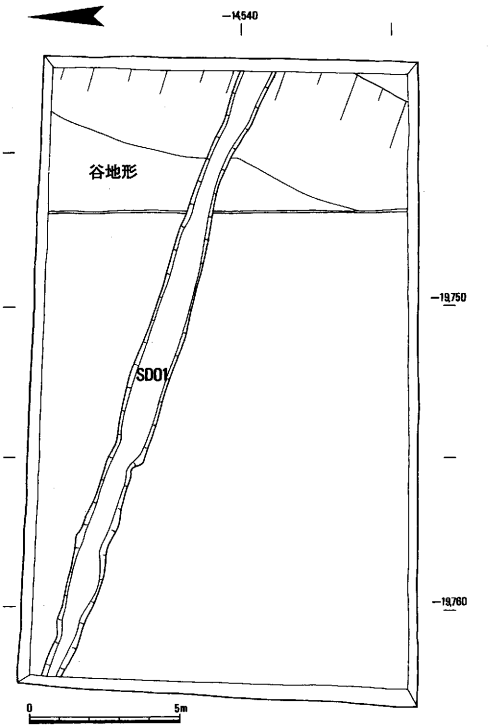
13　平城京右京三条三坊四坪の調査　第303次

本調査は奈良市宝来一丁目66番１、67番１において、東中高太郎氏届出の共同住宅建設に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では右京三条三坊四坪の南西隅にあたる。これまでの四坪内での調査には平成元年に橿原考古学研究所が行なった調査があり、塀と自然河川を検出している。また調査地の南約50ｍには宝来山古墳（垂仁天皇陵古墳）がある。奈良市教育委員会が本年度その西隣接地で行なった小規模調査(94－13）では、墳丘が削平された方墳を検出し、その周濠からは家形埴輪・円筒埴輪が出土した。調査面積は250㎡、調査期間は平成６年６月15日から７月８日までである。

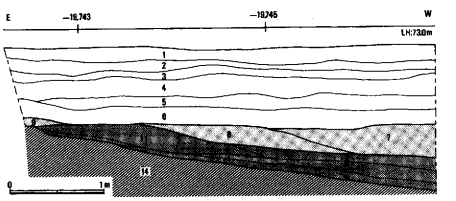
発掘区の層序は、地表面から黒色土、黒灰色土、黄灰色土、淡黄灰色土、淡黄灰色砂質土、灰色砂と続き、以下谷埋土の灰色粘土、黄灰色粘質土、暗灰色粘土、灰色粘砂、黄灰色砂質土、黄灰色粘土、灰色粘砂となり、灰白色砂質土の地山に達する。調査の結果、当初丘陵の東斜面であったものが弥生時代から奈良時代までに徐々に埋まったことがわかった。検出した遺構には淡黄灰色砂質土上面で検出した斜行溝がある。

溝ＳＤ01は北西から南東へ斜行する溝で、幅1.5ｍ、深さ0.7ｍで、長さ21.4ｍ分を検出した。溝は調査地の現在の水田畦畔と平行している。埋土は灰色粘質土で、層位から中世以降に掘削されたものと考えられる。

出土遺物には遺物整理箱５箱分の土器と瓦がある。大半は谷の埋土から出土した。谷埋土上層の灰色粘土からは奈良時代の土師器、須恵器、瓦類が出土した。瓦類には軒丸瓦6282Ｄが１点、塼が２点ある。中層の黄灰色粘土からは少量の古墳時代の土師器が、下層の黄灰色粘土からは弥生土器の小片が出土した。　（秋山成人）



第303次調査　遺構平面図（１／250）



1　黒色土　（耕作土）
2　黒灰色土　（耕作土）
3　黄灰色土（床土）
4　淡黄灰色土
5　淡黄灰色砂質土
6　灰色砂
7　灰色粘土　｝谷埋土
8　黄灰色粘質土　｝古墳～奈良時代
9　暗灰色粘土
10　灰色粘砂
11　黄灰色砂質土　｝谷埋土
12　黄灰色粘土　｝弥生時代
13　灰色粘砂
14　灰白色砂質土（地山）

第303次調査　南壁土層図（１／80）

14　平城京右京四条三坊十四坪・西三坊大路の調査　第304次

本調査は、奈良市平松町一丁目838において実施した、藤沢九五良氏届出の共同住宅新築に伴う事前発掘調査である。調査地は平城京条坊復元では西三坊大路に推定されている地点である。調査期間は平成６年６月20日から同27日まで、調査面積は75㎡である。

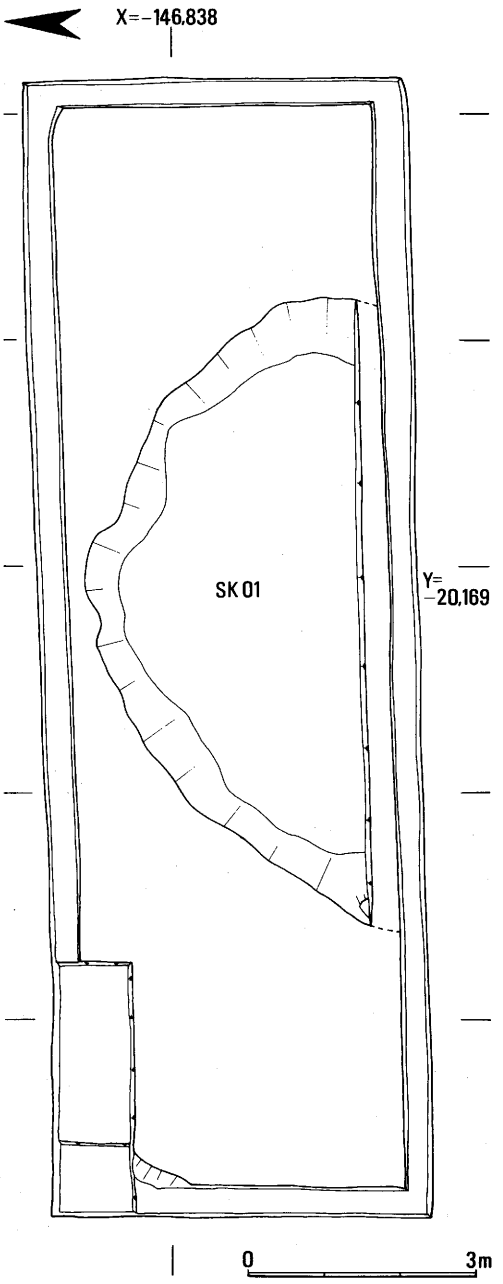
発掘区の基本層序は、0.3ｍ前後の盛土以下、黄白色粘質シルトが0.1ｍ前後堆積し、明黄白色粘土の地山となるが、シルトの堆積は主に発掘区西半に認められる。

検出遺構は土坑ＳＫ01である。北半部を検出したのみであるが、平面形は隅丸方形もしくは円形と思われる。直径は約8.2ｍ、検出面からの深さ約0.6ｍである。埋土から近世の桟瓦が多量に出土した。

調査地の北側にある届出者の藤沢家では昭和初期まで瓦生産を行っていたということであり、ＳＫ01内の瓦はその工場で廃棄されたものと考えられる。またこの付近の粘土は良質で、瓦製作に用いられていたらしく、ＳＫ01も粘土採掘坑が瓦の廃棄に利用されたものと考えられる。

今回の調査地は平城京右京四条三坊十四坪の西端にあたり、西三坊大路の検出が一つの目的であったが、条坊関係の遺構は確認できなかった。調査範囲が狭いため不明な点が多いが、当時の生活面が大規模に削平されたとは考え難く、西三坊大路が推定位置よりずれている可能性が高い。現在の地割りから推測すると、大路は調査地より西側にあるものと思われる。

（松浦五輪美）



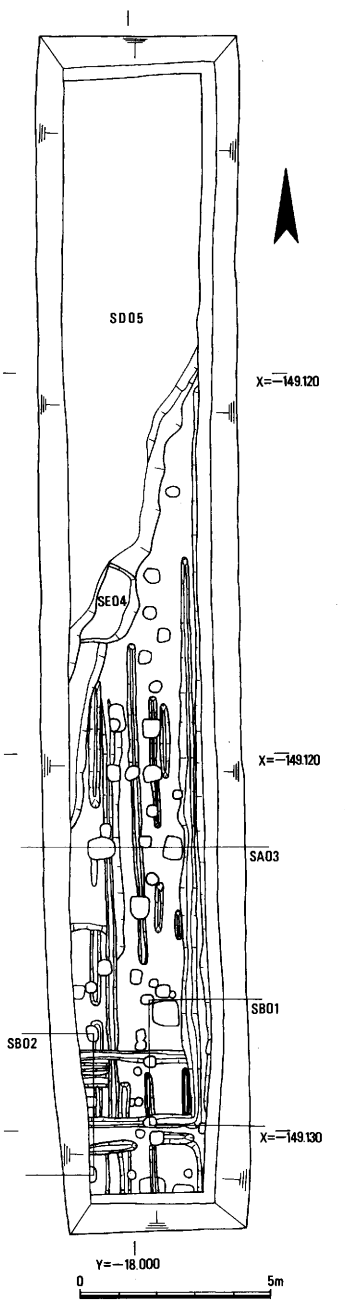
第304次調査　遺構平面図（１／100）

15　平城京左京八条二坊四坪の調査　第305次

本調査は奈良市杏町82で実施した第11号市営住宅改築工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では左京八条二坊四坪に位置する。この四坪では昭和56年度に本調査地の東南約10mの地点で発掘調査を実施しており、奈良時代から平安時代初頭の掘立柱建物や井戸の他、鎌倉時代初頭の井戸や溝を検出したことから[1)]、本調査でも平安時代以降の遺構の存在も予測された。調査面積は125㎡で、調査期間は平成6年7月7日から8月3日までである。

発掘区内の基本的な層序は、上から盛土、黒灰色土、青灰色土、茶灰色土、茶褐色土、褐茶色土と続き、現地表下約1.3mで茶黄色土の地山にいたる。遺構はすべて茶黄色土の上面で検出した。遺構検出面の標高は51.8mである。検出した遺構には掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、河道がある。ＳＢ01は南北2間（3.2m）、東西1間（1.5m）までを検出した。柱間寸法は南北が1.6m等間、東西が1.5mである。ＳＢ02は南北2間（3.6m）のみを検出した。柱間寸法は1.8m等間である。ＳＡ03は東西1間（2.1m）までを検出したのみである。ＳＥ04は平面隅丸方形の井戸であるが、北半をＳＤ05に壊されている。残存部分で東西が1.2～1.5m、南北は1.8mで、深さは1.4mである。井戸枠は残存しなかった。埋土から奈良時代の土器が出土した。ＳＤ05は北東－南西方向の旧河道と考えられる。幅3.5m以上、深さ1.7mである。埋土からは奈良時代から鎌倉時代の土器が出土した。12世紀頃には佐保川がこの辺りを流れていたと考えられている[2)]ことから、その一部であると思われる。

（池田裕英）

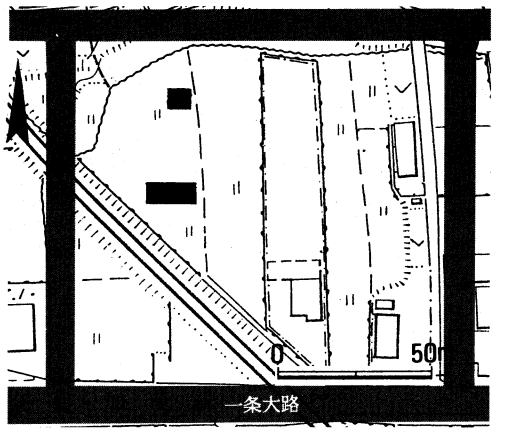


第305次調査　遺構平面図（1／200）

1）奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和56年度』1982
2）奈良市内の河道の考察をされた伊達宗泰、堀井甚一郎氏によれば、佐保川が12世紀には現在の大安寺町西方から八条町、杏町にかけて流れていたことが指摘されている。
奈良市教育委員会『平城京の復原保存計画に関する調査研究』1972

16 平城京左京一条四坊五坪の調査　第307次

Ⅰ　はじめに　本調査は奈良市法蓮町561－3、564－1において、京阪不動産・伝宝商事届出の分譲住宅建設に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では左京一条四坊五坪の中央西よりに位置する。西隣の左京一条四坊四坪の調査で奈良時代の大型南北棟建物、弥生時代と古墳時代の土坑を検出している。今回の調査は遺構の確認を主目的に行なった。調査面積は南発掘区130㎡、北発掘区45㎡、調査期間は平成６年８月４日から８月19日である。



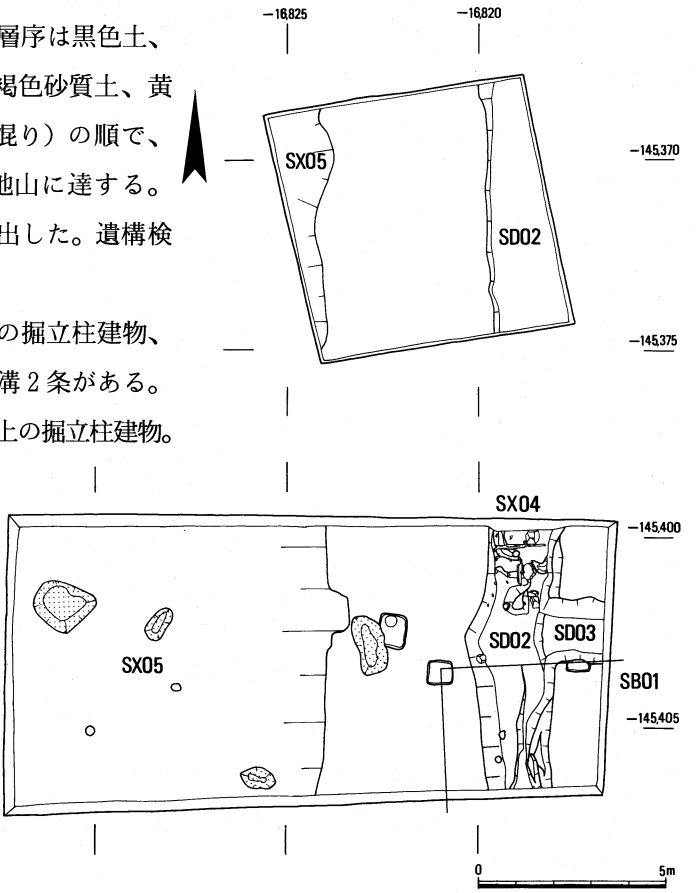
第307次調査　発掘区位置図（１／25,000）

Ⅱ　調査の概要　発掘区の層序は黒色土、淡黄灰色土、黄灰色土、暗黄褐色砂質土、黄褐色粘質土、黄褐色粘土（砂混り）の順で、地表下0.78ｍで黄褐色粘土の地山に達する。遺構は黄褐色粘質土上面で検出した。遺構検出面の標高は66.0ｍである。

検出した遺構には奈良時代の掘立柱建物、奈良から平安時代にかけての溝２条がある。

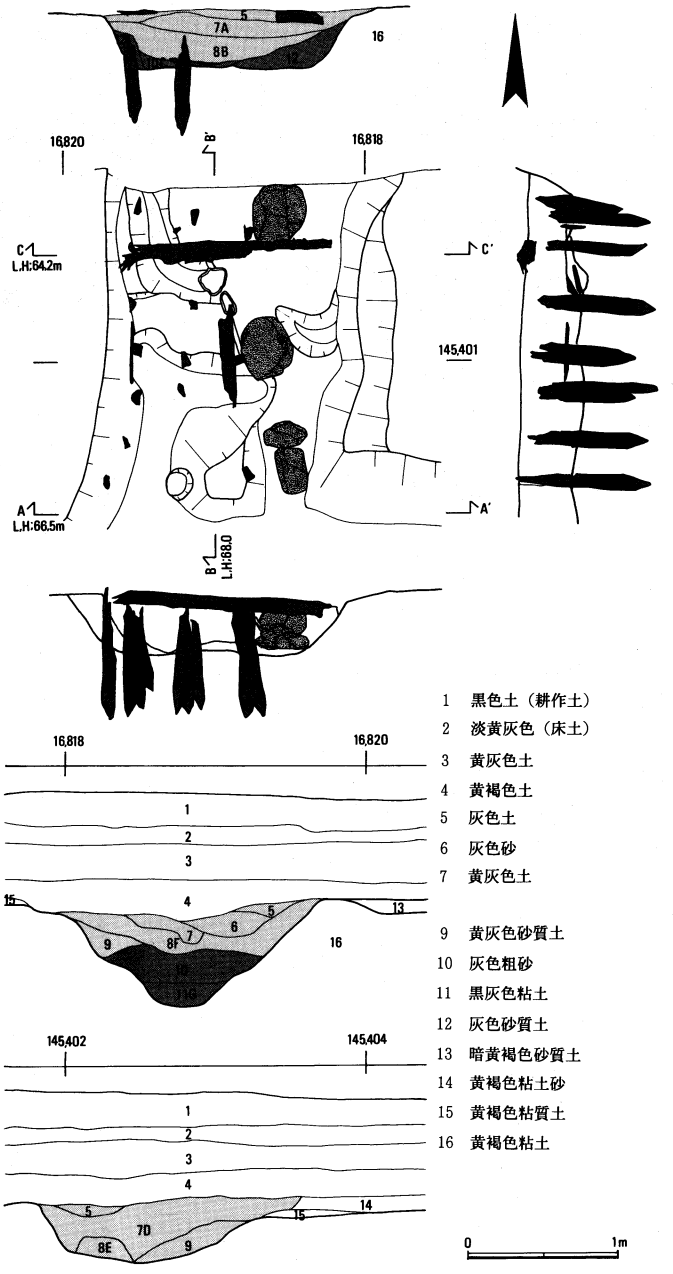
ＳＢ01　東西、南北２間以上の掘立柱建物。棟方向は北で若干西へ振れる。重複関係からＳＤ03より古い。

ＳＤ02付ＳＸ04　南、北両発掘区の東半で検出した南北溝。同位置に新、古２時期の溝が重複している。両溝ともほぼ同規模である。ＳＤ02古は幅1.50ｍ、



第307次調査　遺構平面図（１／200）

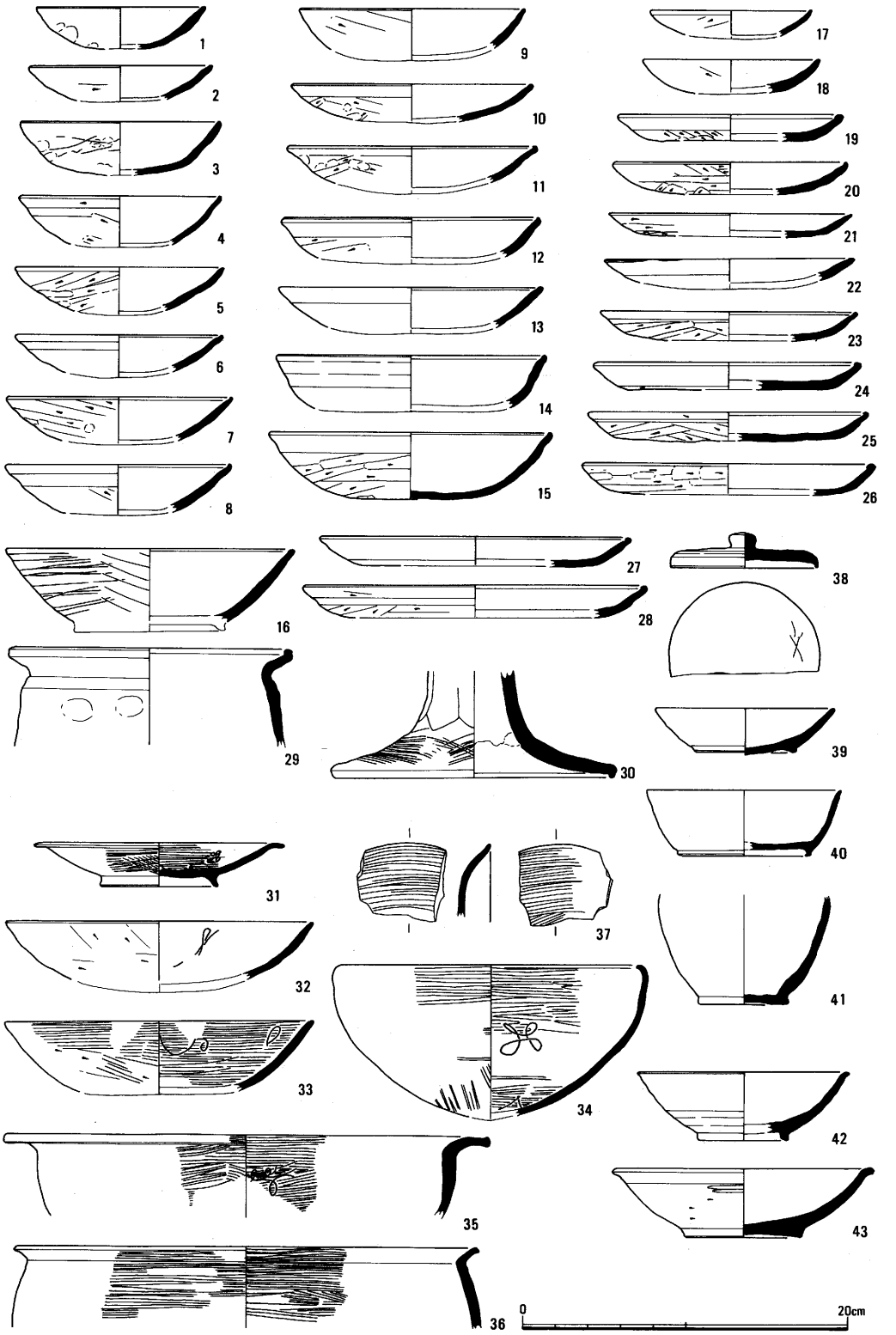
深さ0.71m。埋土は上層から灰色粗砂、黒灰色粘土、灰色砂質土の順である。ＳＤ02新は幅1.75m、深さ0.35m。埋土は上層から灰色土、灰色砂、黄灰色土、黄灰色粘砂、黄灰色砂質土の順である。いずれも奈良時代と平安時代の土器、奈良三彩、軒瓦、漆器が出土した。ＳＤ02新の後述のＳＤ03と合流する部分から北には、溝内に南北に３列の木杭列がある。木杭は10㎝前後の角材で0.3m間隔で15本、1.85m分を検出し、発掘区外北へ続く。木杭列の間隔は0.4ｍである。木杭の西列は溝西肩に沿ってあり、肩との間に当てられた板材の一部が残る。東列は溝東肩に沿い、南端の杭から２本目に板材の一部が残る。北側の木



南発掘区ＳＤ02・03土層図杭列ＳＸ04平面・立面図（１／50）

杭の上には梁状に断面方形の加工木が残る。東杭列の外側には自然石を南北に0.8m間隔で３箇所に据える。杭列はさらに発掘区外へ続き、暗渠又は橋脚の可能性があり、溝の東側と西側の平坦部は通路として利用されていたと考えることもできるが、小規模な発掘区の為、詳細は不明である。

ＳＤ03　南発掘区で検出した東西溝。溝ＳＤ02にＴ字状に取り付く。幅1.75m、深さ0.71m。



溝ＳＤ02出土土器（１／４）

埋土は4層ある。層位から溝ＳＤ02新と併存していたことがわかる。遺物は奈良時代、平安時代の土師器、須恵器がある。

ＳＸ05　南、北両発掘区西半から緩やかに落ちる地形。幅8.8ｍ以上、長さ38.8ｍ以上、深さ0.36ｍまで確認したが、さらに発掘区外へ落込む。埋土は黄灰色土、暗黄褐色粘質土まで確認した。出土遺物はない。なお調査地南西における調査(第140次)で、自然流路を検出しており、今回の落込みは流路東岸部分に当たると考えることもできる。(秋山成人)

出土遺物には遺物整理箱13箱分の瓦類・土器類・木製品がある。大半がＳＤ03からの出土した。以下にその概要を記す。

瓦類　遺物整理箱で6箱分出土した。大半が丸瓦、平瓦で、軒丸瓦（6225Ｅ)、軒平瓦(6663Ｊ・6691Ａ）が各1点ずつある。軒瓦は3点とも灰色粗砂から出土した。

土器類　土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、奈良三彩、円面硯がある。土師器杯Ａ、皿Ａ、椀Ａは法量により以下の群に分けることができる。

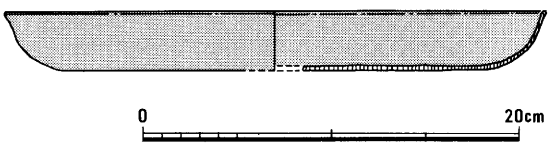
杯ＡⅠ：口径16.8～18.0cm、器高2.8～4.1cm、Ⅱ：口径14.0～16.5cm、器高2.9～3.3cm

皿ＡⅠ：口径19.3～21.3cm、器高1.8～2.1cm、Ⅱ：口径14.0～18.1cm、器高1.5～2.2cm

椀ＡⅠ：口径12.5～14.0cm、器高2.6～3.7cm、Ⅱ：口径10.5～12.0cm、器高2.3～2.8cm

これらのうち約70%がｃ(ｅ－ｃ)手法、約30%がｅ手法で調整されている。このうち、杯の底部破片に「殿」と墨書きされたものが1点ある。須恵器は大半が甕の破片である。杯蓋(38)の内面には記号「×」が箆書きされている。灰釉陶器椀(42)は形態の特徴から黒笹14号窯式併行期のものであろう。緑釉陶器椀(43)は削りだし高台で、軟質の胎土である。京都産のものと考えられる。これらの土器群は、一部に8世紀のものが混じるが、9世紀前半のものと考えられる。平城宮311Ｂに代表される平城宮土器Ⅶの土器群よりやや新しく、平城京東三坊大路東側溝ＳＤ650Ａの土器群とほぼ同時期のものであろう。(三好美穂)

木製品　1は漆器皿Ａで広い底部と短い口縁部からなる。全面に黒漆がかかる。口縁部の木質は腐食が進む。木取りは征目材の横木取りである。　(篠原豊一)



溝ＳＤ02出土漆器（1／4）

Ⅲ　まとめ　今回の調査で溝ＳＤ02及びＳＤ03を検出し、この地域が9世紀に利用されていたことがわかる。これらの溝は敷地内の排水路又は区画溝と考えられるが、調査面積が狭いため判断しがたい。また重複関係から、溝ＳＤ02、溝ＳＤ03より古い建物ＳＢ01を検出し、8世紀に宅地として利用されていたことがわかる。しかし発掘区西半において東から西へ落ち込む地形を検出し、坪の西辺部は宅地として利用されなかった可能性がある。佐保丘陵の自然地形と立地条件が条坊区画に影響したものと考えられる。　(秋山成人)

第307次調査における花粉分析・寄生虫卵分析

天理大学附属天理参考館　金原正明　　古環境研究所　金原正子

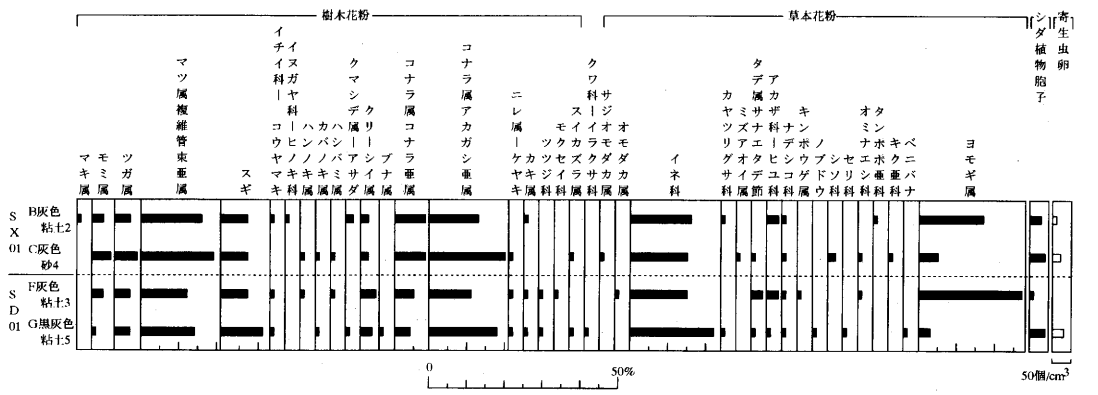
第307次調査のＳＤ02北半の３試料Ａ、Ｂ、Ｃ、ＳＤ02南半の２試料Ｆ、Ｇ、ＳＤ03の２試料Ｄ、Ｅの計７点について、花粉分析・寄生虫卵分析を行い、周囲の植生と環境の復元を試みた。分析の結果、ＳＤ02北半の２試料、ＳＤ02南半の２試料から、花粉・胞子と若干の寄生虫卵が検出された。(図､花粉総数が基数)。

ＳＤ02の分析結果は傾向が同じであるため、以下にまとめて考察する。

花粉分析結果では、樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属とマツ属複維管束亜属（クロマツ･アカマツ）の出現率が高く、コナラ属コナラ亜属･モミ属･ツガ属などが伴われる。この結果からみて、近隣にはマツ属複維管束亜属がかなり多く分布し、人為的な森林破壊が行われ、途中相林の占める割合が高かったと考えられる。コナラ属アカガシ亜属がやや多く他の要素もまじるため、二次遷移における照葉樹林要素をまじえたアカマツ－アラカシ群落（佐々木､1973）であったのではなかろうかと考えられる。

草本花粉ではイネ科とヨモギ属の出現率が高く、周囲は通常の乾燥地の状態で、人里を好むヨモギ属やイネ科が繁茂していたとみなされる。これは周囲が条坊側溝などにより、かなり排水がよかったためではなかろうか。他にカキ属やツツジ科の花粉が出現しており、これらは周囲に植えられていた可能性がある。有用植物としてはベニバナが検出された。

寄生虫卵は出現密度が低く、生活域における汚染の範囲内と考えられる。



第307次調査ＳＤ02における花粉分析・寄生虫卵分析結果
（花粉総数が基数）

17　平城京左京五条六坊三坪の調査　第308次

Ⅰ　はじめに

本調査は奈良市西木辻町109-3において、株式会社朝日住建届出の共同住宅建築に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では左京五条六坊三坪の北東隅にあたる。南側の四坪に葛木寺、東側の五・六、十一から十三坪に佐伯院が推定されている。調査面積は320㎡で、調査期間は平成６年８月８日から９月14日である。

Ⅱ　検出遺構

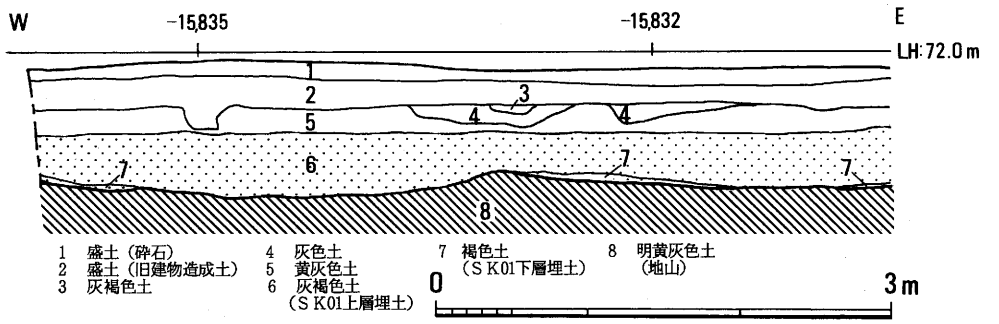
発掘区内の基本層序は、盛土(0.25m)と遺物包含層(0.15m)で、地表下約0.4mで明黄灰色土、あるいは黄色砂礫の地山となる。旧建物造成時の撹乱が広範囲に及び、遺構の残り具合は悪い。遺構はすべて地山上面で検出した。地山上面の標高は、概ね71.6mである。

検出した遺構には、土坑３、掘立柱塀１条、杭列１条がある。

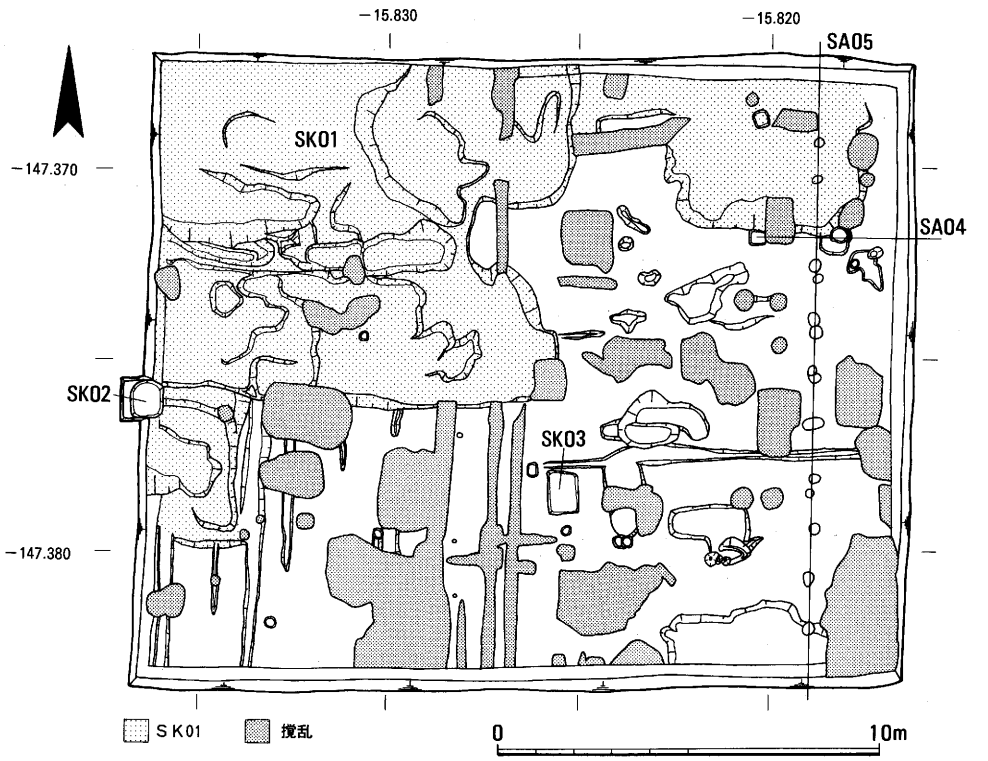
ＳＫ01　中央部から北西隅で検出した南北13m以上、東西18m以上の平面不整形な土坑で、発掘区外へ続く。土坑の底は掘削時の浅深のためか、平坦な部分と舟底状の部分がある。深さは0.1～0.4mで、概ね北西隅ほど深くなる傾向がある。埋土は灰褐色土（上層）と褐色土（下層）の二層である。古墳時代、奈良時代、平安時代の遺物がわずかに出土した。重複関係から、後述のＳＫ02、ＳＡ04よりも新しく、ＳＡ05よりも古い。

ＳＫ02・03　ＳＫ02は西端中央で検出した南北1.0m、東西0.8m、深さ0.25m、ＳＫ03は中央部で検出した南北1.1m、東西0.8m、深さ0.2mの土坑である。いずれの埋土も灰色粘質土の一層である。柱穴の可能性も考えられたが、柱の痕跡などは確認できなかった。遺物もまったく出土せず、遺構の用途、時期ともに不明である。重複関係から、ＳＫ02はＳＫ01よりも古い。

ＳＡ04　東西方向の掘立柱塀である。１間（約2.1m）分を検出したが、発掘区外東へ続く。柱穴から奈良時代の遺物が出土した。重複関係から、ＳＫ01よりも古い。



第308次調査　発掘区北壁土層図（１／50）



第308次調査　遺構平面図（1／200）

ＳＡ05　南北方向の杭列で、約12.8m分を検出した。杭の間隔は不揃いで、発掘区外へ続く。重複関係から、ＳＫ01よりも新しい。　（宮崎正裕）

Ⅲ　出土遺物

瓦類と土器類がある。瓦類は遺物整理箱に2箱分で、大半がＳＫ01出土の丸瓦、平瓦である。軒丸瓦は6318Ab、軒平瓦は法隆寺「216C」[1)]が各1点ずつある。6318AbはＳＡ04の西端の柱穴、「216C」は遺物包含層から出土した。土器類は遺物整理箱にわずか1箱分である。ＳＫ01からは6世紀前半～後半の須恵器と8世紀の土師器・須恵器、10世紀前半の土師器、ＳＡ04の柱掘形からは8世紀の土師器・須恵器が出土した。遺物包含層からは古墳時代、奈良時代のもののほか、近世の磁器が出土した。　（宮崎正裕・三好美穂）

Ⅳ　まとめ

今回、中世の遺物がまったく出土しなかったことから、調査地周辺には平安時代以降近世まで遺構がなかった可能性が高い。平安時代以降に比定できるＳＫ01も、上層埋土に10世紀前半の土器がわずかに1点含まれるだけである。ほかに平安時代の遺構が確認できなかった状況から、ＳＫ01が近世に降る遺構である可能性もある。周辺の調査の増加を待って、ＳＫ01の用途とともに平安時代以降の様相を検討する必要があろう。　（宮崎正裕）

1）法隆寺昭和資財帳編集委員会「法隆寺軒瓦型式一覧」『昭和資財帳15 法隆寺の至寶 瓦』1992

18　平城京左京四条一坊十六坪の調査　第309次

Ⅰ　はじめに

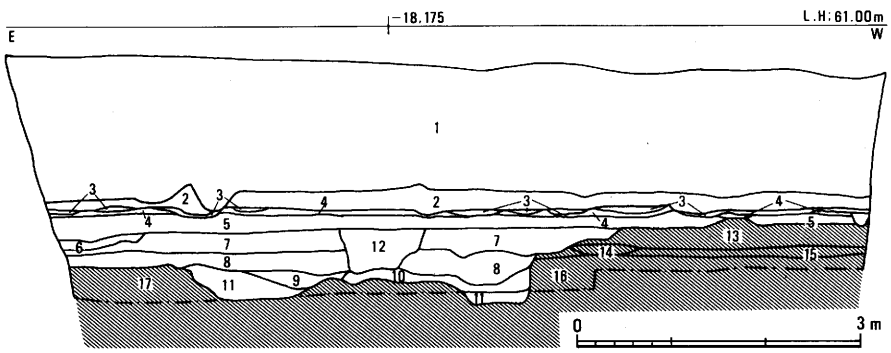
本調査は、奈良市四条大路二丁目827-2において実施した藤原電気工業株式会社届出の事務所ビル建築に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では左京四条一坊十六坪の北西隅にあたり、西の隣接地には坪境小路の痕跡を示す地割りが残っている。調査は、東西７ｍ、南北24ｍの南北に長い発掘区を設定して行なった。調査期間は、平成６年８月17日から９月12日までである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本層序は、地表面から約1.2ｍまで盛土で、その下に耕土、床土、灰色砂質土とつづき、標高59.8ｍ付近で暗黄褐灰色砂質土等の地山となる。

検出した遺構は、奈良時代の溝状遺構１条、掘立柱建物８棟、掘立柱塀１条、方形土坑１、井戸１基である。ほかに、後世の耕作に伴うと思われる素掘溝がある。

ＳＸ01　発掘区のほぼ中央で検出した溝状遺構（網目表示）。幅は１～４ｍ、深さは最も深いところで約0.5ｍ。長さは24ｍ分検出した。南北ともに発掘区外へつづく。検出した位置からみて、西隣接地に南北方向の坪境小路を想定できることから、小路東側溝と溝状遺構との間に築地塀を想定し、築地塀を構築する際の採土坑、および築地塀の雨落溝と考えられる。ただし、南北方向の溝ではあるが、部分的に東西に分岐している。底は、かなりの凹凸があり、平面的にも直線状でないため、自然流路とも考えられる。なお、溝心を国土座標で示すと、Ｘ＝－146,575.920ｍ、Ｙ＝－18,175.160ｍである。奈良時代前半の土器が出土した。



1　盛土及び攪乱土
2　耕作土（黒色土）
3　灰色砂質土
4　床土（黄褐色土）
5　灰色砂質土（遺物包含層）
6　灰色砂
7　茶灰色土（SX01埋土）
8　黒灰色粘土混じりの灰色粘質土（SX01埋土）
9　黄褐色土混じりの暗灰色粘土（SX01埋土）
10　灰色粘土（SX01埋土）
11　暗灰色粘土（SX01埋土）
12　黄褐色土混じりの暗灰色粘土（柱穴埋土）
13　暗黄褐灰色砂質土（地山）
14　淡灰色砂（地山）
15　黄褐色粘土（地山）
16　暗灰色粘土（地山）
17　淡茶灰色砂質土（地山）

第309次調査　発掘区南壁土層図（１／80）

ＳＡ02　発掘区のほぼ中央で検出した南北方向の掘立柱塀。８間分（23.1ｍ）を検出した。南北ともに発掘区外へつづく。柱間寸法は、北から2.7ｍ－3.0ｍ－3.0ｍ－2.7ｍ－3.0ｍ－3.0ｍ－2.7ｍである。重複関係からＳＸ01より新しい。

ＳＢ03　発掘区北西で検出した掘立柱建物。東西 1 間分（3.0ｍ）、南北２間分（6.0ｍ）を検出した。南北棟建物の東面廂の一部にあたると思われる。柱間寸法は桁行3.0ｍ等間。廂の出は3.0ｍ。重複関係からＳＸ01より新しい。

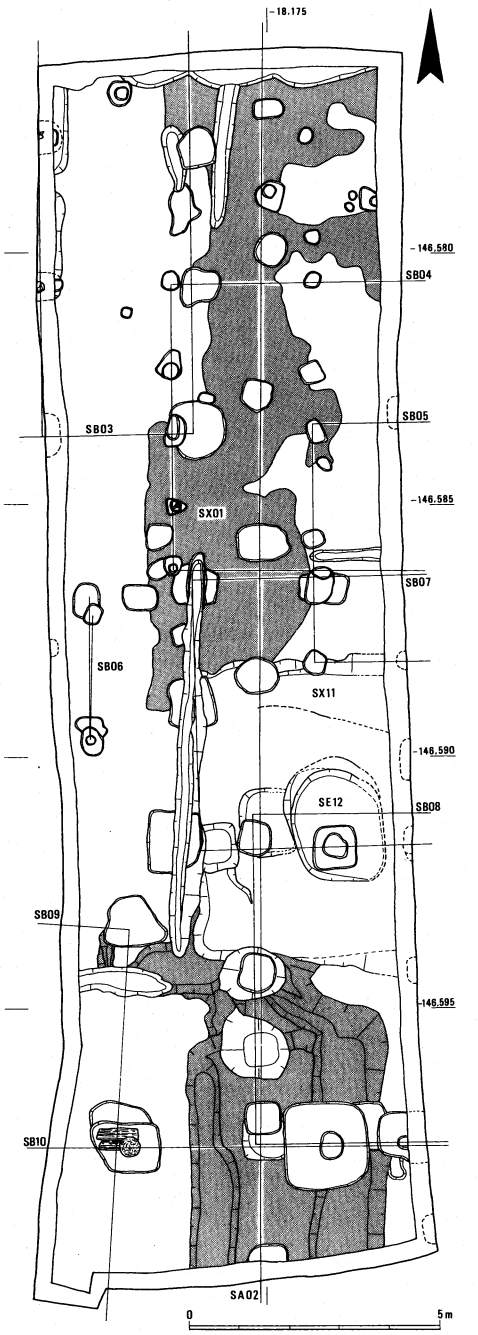
ＳＢ04　発掘区北半で検出した掘立柱建物。東西１間分（3.0ｍ）、南北２間（5.7ｍ）を確認した。発掘区外東へ続く梁間２間の東西棟建物になると思われる。柱間寸法は、梁間が北から3.0ｍ－2.7ｍ。重複関係からＳＸ01、ＳＢ03より新しい。

ＳＢ05　発掘区中央東で検出した掘立柱建物。東西 1 間分（1.8ｍ）、南北２間（4.8ｍ）を検出した。発掘区外東へ続く梁間２間の東西棟建物になると思われる。柱間寸法は、梁間が2.4ｍ等間。重複関係から、ＳＸ01より新しい。

ＳＢ06　発掘区中央西で検出した南北１間の掘立柱列。ＳＸ01に沿って築地塀を想定した場合、それと同時期であるならば、築地に開く門となる。建替られており、柱間も2.4ｍから2.7ｍに広がる。

ＳＢ07　発掘区中央東で検出した掘立柱建物。東西 1 間分（2.7ｍ）、南北２間（5.4ｍ）を検出した。発掘区外東へ続く梁間２間の東西棟建物になると思われる。柱間は、梁間が2.7ｍ等間。重複関係から、ＳＢ04より古く、ＳＸ01より新しい。

ＳＢ08　発掘区南東で検出した掘立柱建



第309次調査　遺構平面図（１／150）

物。東西1間分（3.0m）、南北2間（6.6m）を検出した。発掘区外東へ続く梁間2間の東西棟建物になると思われる。柱間寸法は、梁間が3.3m等間。重複関係から、ＳＡ02より古い。

ＳＢ09　発掘区南西で検出した掘立柱列。南北1間分（3.9m）を検出した。掘立柱建物の北東隅にあたると思われる。柱の掘形は一辺0.4～0.5mである。重複関係から、ＳＸ01より新しい。

ＳＢ10　発掘区南端で検出した掘立柱列。東西1間分（3.9m）を検出した。掘立柱建物の北側柱列にあたると思われる。柱の掘形は一辺0.4～0.7mである。重複関係から、ＳＸ01、ＳＢ09より新しい。

ＳＸ11Ａ・Ｂ　発掘区中央東で検出した平面方形の土坑。埋土の状態から、二回の掘削が考えられる。Ａは南北2.5m、東西は1.7mまでを確認した。発掘区外東へつづく。深さ0.5m。性格は不明であるが、土坑の中央に後述する井戸ＳＥ12が位置することから、それに伴う土坑であると思われる。ＡはＳＥ12の掘削前に埋まったか、あるいは掘削時に埋めたものと思われる。ＢはＳＥ12が埋まった後、あるいは同時に埋まったものと思われ、ＳＥ12の枠の抜き取り坑であろうか。重複関係から、ＳＡ02、ＳＢ05・07・08よりも古く、ＳＸ01よりも新しい。

ＳＥ12　ＳＸ11のほぼ中央で検出した井戸。掘形の平面は楕円形で、東西1.9m、南北2.5m、深さ2.0mである。枠は抜き取られたものと思われる。

Ⅲ　出土遺物

出土遺物はすべて奈良時代のもので、須恵器、土師器、瓦、塼がある。特にＳＸ01からは、奈良時代前半の遺物が出土しており、これが埋まった後、掘立柱建物・塀等が建てられるという遺構の重複関係とも符合する。瓦には、平瓦、丸瓦と軒平瓦2点があり、軒平瓦の型式は6663Ｆと6681Ｃである。そのほか、塼が8点あり、柱穴、遺物包含層から出土している。

Ⅳ　まとめ

今回の調査地は、坪の西端にあたり、西隣接地が坪境小路に相当する。したがって、位置関係からみて、溝状遺構ＳＸ01はおそらく築地塀の雨落溝で、ＳＢ06は築地塀に開く門であると考えられる。ところが、掘立柱建物ＳＢ03・09・10は、検出した位置からみて明らかに坪境小路を横断しているものと思われる。そして、ＳＢ09・10の柱穴は、他の建物と比べてかなり大きなもので、規模の大きな建物を類推することができる。また、遺構の変遷は、重複関係から4時期以上あると考えられる。したがって、当初、築かれた坪境小路と築地塀は、廃されて二坪以上の敷地の宅地とされたと考えられる。その時期は、出土遺物からみて、奈良時代の中頃と思われる。　（森下浩行）

19　平城京朱雀大路・左京三条一坊三坪の調査　第312次

Ⅰ　はじめに

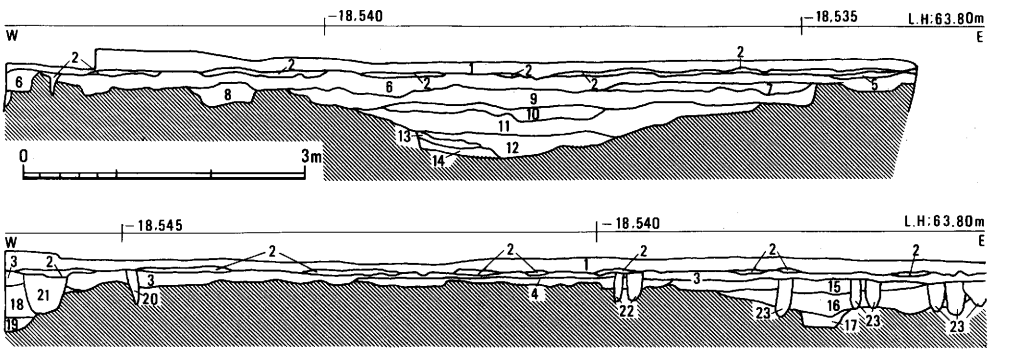
本調査は、奈良市三条大路三丁目450他で実施した、三和住宅株式会社届出の分譲住宅建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では、左京三条一坊三坪の西端に相当し、朱雀大路の東側溝、あるいはそれに関連する遺構が想定された。発掘調査は、北発掘区と南発掘区の二箇所に分けて行なった。北発掘区は東西22m、南北５m（面積110㎡）、南発掘区は東西10m、南北11m（面積110㎡）である。なお、北発掘区では朱雀大路東側溝の確認のため、一部西へ１m拡張した。調査期間は平成６年９月19日から同年10月11日までである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本層序は、北発掘区では、上から耕作土、灰色土、淡黄灰色砂、淡黄灰色土がつづき、標高約63.2mで茶褐色粘土の地山になる。東半部では淡黄灰色土の下に淡茶灰色土があり、茶褐色粘土の地山は0.1～0.2mほど下がる。南発掘区では、耕作土、灰色砂の下に淡黄灰色粗砂がつづき、標高約63.0m付近で黄茶色砂土の地山に至る。遺構はすべて地山上面で検出した。

検出した遺構はすべて奈良時代のもので、朱雀大路東側溝とそれに沿った築地塀、雨落溝がそれぞれ１条、掘立柱建物４棟、掘立柱塀２条である。

ＳＤ01　北発掘区の拡張区で検出した西に降る落ち込み。西岸は検出していないが、位



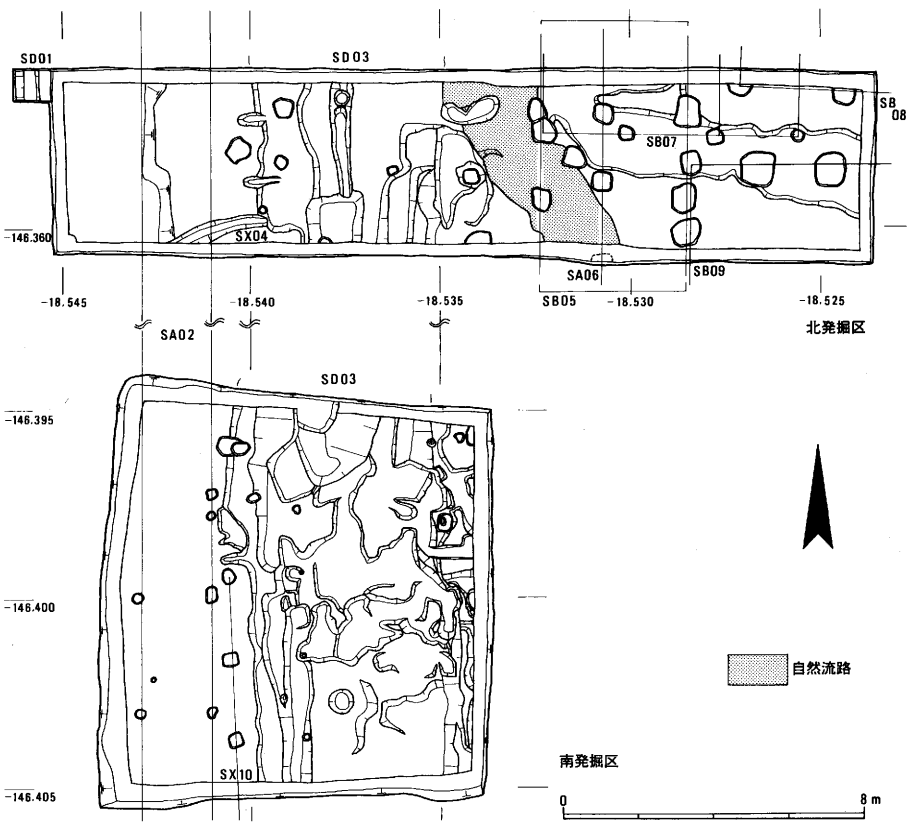
1 耕作土（黒色土）　2 灰色砂あるいは灰色土　3 淡黄灰色砂　4 淡黄灰色土　5 暗黄灰色粗砂　6 淡黄灰色粗砂　7 灰茶褐色土　8 淡茶灰色砂　9 明灰茶褐色土（SD03埋土）　10 暗灰茶褐色土（SD03埋土）　11 茶灰色土（SD03埋土）　12 暗灰色粘土（SD03埋土）　13 淡灰色砂（SD03埋土）　14 灰色粘土（SD03埋土）　15 灰茶褐色土（SD03埋土）　16 暗灰茶褐色土（SD03埋土）　17 茶灰色土（SD03埋土）　18 灰茶褐色土（SD01埋土）　19 灰黄褐色土（SD01埋土）　20 黄灰色土　21 淡茶灰色土　22 淡黄褐灰色土　23 灰褐色土

第312次調査　南発掘区北壁土層図（上）、北発掘区北壁土層図（下）（１／80）

置からみて朱雀大路東側溝の東岸を検出したものと思われる。幅は不明、深さ0.55m。なお、ＳＸ01東岸の国土座標は、Ｘ＝－146,356.334、Ｙ＝－18,545.600である。

ＳＡ02　南発掘区西半で検出した築地塀。築地塀の堰板留の添柱と思われる柱穴を南発掘区で検出した。検出できなかった北発掘区にもおそらく続いており、坪の西辺を区画していたものと思われる。添柱から推定される築地基底幅は1.8m。添柱の柱間寸法は3.0mである。なお、築地塀ＳＡ02心の国土座標は、Ｘ＝－146,403.551、Ｙ＝－18,541.940である。ＳＸ01東岸から築地塀ＳＡ02心までの距離は3.5mである。

ＳＤ03　築地塀の東に沿って検出した雨落溝。幅は北発掘区で4.5m、南発掘区で5.0m、深さは北発掘区で0.5m、南発掘区で0.8mである。北発掘区では、掘形が２段で、溝底中央にはさらに幅0.6mほど掘り込まれている。それが、発掘区の南端ではさらに深く掘り込まれ、幅1.5mとなる。南発掘区では、溝底の凹凸が著しい。築地塀を築造した際の採土坑を雨落溝として利用したためであろう。なお、北発掘区の２段に掘られた溝底の中央をＳＤ03の溝心とすると、その国土座標は、Ｘ＝－146,356.334、Ｙ＝－18,537.520である。ＳＤ01東岸からの距離は8.0mで、想定される築地塀ＳＡ02心からの距離は4.5mである。



第309次調査　遺構平面図（１／200）

したがって、築地塀ＳＡ02は、朱雀大路東側溝ＳＤ01と雨落溝ＳＤ03の中央に位置するのではなく、ややＳＤ03寄りに築かれており、東側溝ＳＤ01と築地塀ＳＡ02との間隔はやや広く、その間を犬走りと考えることができる。

ＳＸ04　北発掘区で検出した築地塀を斜めに横切る溝。長さ2.5ｍ分を確認した。幅0.4～0.6ｍ、深さ0.05～0.25ｍ。位置からみて、暗渠と考えられる。西端はＳＤ03と、東端はＳＸ01とつながっていたものと思われる。

ＳＢ05　北発掘区西半で検出した掘立柱建物。西、東側柱列のそれぞれ１間分（2.4ｍ）を確認した。桁行３間、梁間２間の南北棟建物になると思われる。

ＳＡ06　北発掘区西半で検出した南北方向の掘立柱塀。２間（3.9ｍ）分を確認した。柱間寸法は北から、1.8ｍ、2.1ｍである。

ＳＢ07　北発掘区西半で検出した掘立柱建物。南側柱列３間（6.9ｍ）を確認した。柱間寸法は西２間が2.4ｍ、東１間が2.1ｍであり、東廂付きの南北棟建物であろうか。

ＳＢ08　北発掘区北東隅で検出した掘立柱建物。南側柱列１間（2.7ｍ）分を確認した。

ＳＢ09　北発掘区南東で検出した掘立柱建物。東西２間（3.6ｍ）分、南北１間（1.8ｍ）分を確認した。柱間寸法は東西1.8ｍ等間。

ＳＸ10　南発掘区で検出した南北方向の掘立柱列。２間（4.2ｍ）分を確認した。柱間寸法は2.1ｍ等間。築地塀ＳＡ02に沿った位置にあるので、ＳＡ02廃絶後に坪の西辺を区画した掘立柱塀とも考えられるが、溝ＳＤ03の底で柱穴から1.8ｍ離れて杭列を検出したことから、溝ＳＤ03に関連する構築物が存在した可能性も考慮する必要があろう。

なお、北発掘区で北で西に斜行する自然流路１条を検出した。幅は約２ｍ。埋土は灰色砂である。重複関係からみて奈良時代以前のものと思われるが、遺物は出土しなかった。

Ⅲ　出土遺物

出土遺物には、弥生時代のものと思われるサヌカイト剝片、古墳時代・飛鳥時代の須恵器、奈良時代・平安時代の土師器、須恵器、陶硯、土馬、瓦、塼、鉄滓がある。遺物の大半はＳＤ03から出土した。墨書土器が１点あり、須恵器杯Ａの底部外面に「大」と書かれてある。また、軒丸瓦が１点ある。型式は6316Ｋである。平瓦、丸瓦には、やや小型のものが多く見られる。築地塀ＳＡ02に使用されていたものであろう。

Ⅳ　まとめ

今回の調査の成果は、朱雀大路の東側溝とそれに面する築地塀、雨落溝を検出できたことである。今回検出した朱雀大路の築地幅は、1.8ｍで、これは『延喜式』記載の築地幅と一致する。また、側溝と築地塀との位置関係も明らかとなり、平城京の朱雀大路を考える資料を付け加えた。

（森下浩行）

20　平城京左京五条五坊六坪・東五坊坊間路の調査　第313次

Ⅰ　**はじめに**　本調査は奈良市西木辻町67において実施した、奈良市立春日中学校図書室改築に伴う事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では左京五条五坊六坪の東辺中央から東五坊坊間路に相当する。調査地周辺で奈良市教育委員会が行った平城京第９次調査では七・十坪間で、第17次調査では六・十一坪間でそれぞれ東五坊坊間路を検出している。調査面積は260㎡で、調査期間は平成６年10月11日から11月７日までである。

Ⅱ　**調査の概要**　発掘区の層序は盛土（0.1m）、黒色土（0.1m）、茶褐色土（0.1m）、茶灰色土（0.12m）、黄褐色土（0.08m）の順で、地表下0.5mで黄灰色粘土あるいは灰色砂礫の地山に達する。茶褐色土上面が近世、黄褐色土上面が中世、黄灰色粘土上面が奈良時代の遺構面である。奈良時代の遺構面の標高は67.84mである。検出した遺構には奈良時代の東五坊坊間路と東西の側溝、掘立柱建物、土坑、時期不明の自然流路がある。

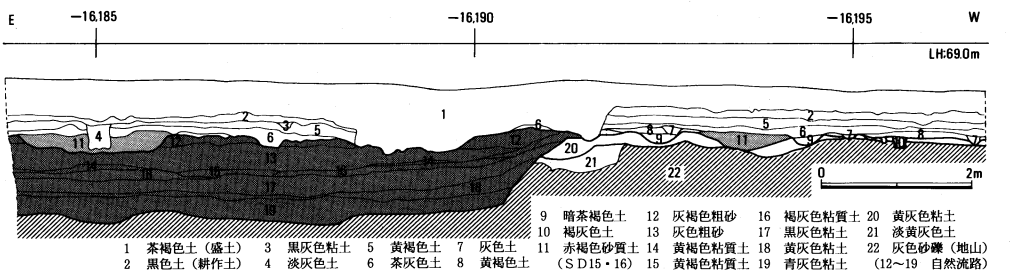
ＳＦ01・ＳＤ02・03　ＳＦ01は発掘区の東端で検出した南北道路である。位置からみて東五坊坊間路であると考えられる。東西には側溝が掘られ、溝心々の幅員は8.4mである。側溝心々の道路心の座標値はＸ＝－147,423.0、Ｙ＝－16,189.8である。東側溝ＳＤ02は幅1.65m、深さ0.25m、西側溝ＳＤ03は幅1.42m、深さ0.22mである。両側溝とも埋土は赤褐色土で、８世紀の土器が出土した。

ＳＢ04　桁行４間（7.4m）、梁間２間（3.7m）の南北棟建物。柱間寸法は桁行梁間とも1.85m等間で、桁行の南から１間目に間仕切りがある。棟方向は北で若干東へ振れる。

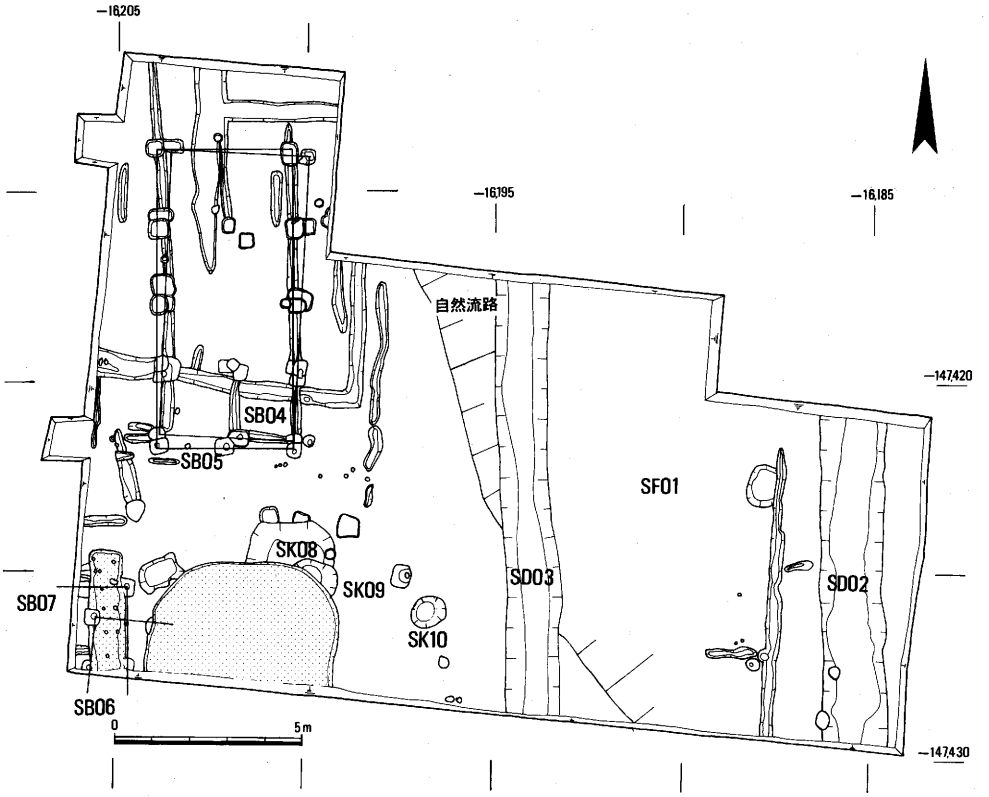
ＳＢ05　桁行４間（7.8m）、梁間２間（3.9m）の南北棟建物。柱間寸法は桁行梁間とも1.95m等間で、桁行の南からと北からの１間目に間仕切りがある。棟方向は北で若干西へ振れる。この建物はＳＢ04とほぼ同位置、同規模であり、ＳＢ04の建替えであろう。

ＳＢ06・07　いずれも東西２間以上、南北２間以上の掘立柱建物である。

ＳＫ08・09　いずれも平面隅丸方形掘形の土坑。土坑南半が撹乱により破壊されている



第313次調査　発掘区南壁土層図（１／100）



第313次調査　遺構平面図（1／200）

ため南北長は不明である。ＳＫ08は東西2.35m、深さ0.56mで、埋土は褐色土である。ＳＫ09は東西1.83m、深さ0.43m。埋土は暗褐色土で８世紀の土器が出土した。

ＳＫ10　平面不整円形掘形の土坑。径0.9m、深さ0.56m。埋土は暗褐色粘質土である。

自然流路　南東から北西に流れる流路。東肩が発掘区外にあり幅員は不明。幅10.9m以上で、深さ1.0mまで確認した。層位から奈良時代以前であることがわかる。

出土遺物には遺物整理箱に２箱分の土器と瓦がある。土器は奈良時代の土師器、須恵器で、瓦は奈良時代の丸瓦、平瓦である。

Ⅲ　まとめ　道路ＳＦ01について検討する。今回の調査で検出した道路ＳＦ01心と朱雀門心との距離は、朱雀大路の振れを考慮して 2,396.385mである。これを朱雀門心から東五坊坊間路心までの造営計画寸法6,000大尺（４坊幅）＋750大尺＝6,750大尺で除すと、１大尺あたり0.3550mとなる。この値は単位尺として妥当なものであることから、検出した道路ＳＦ01を東五坊坊間路と考えることができ、少なくとも東五坊坊間路までは外京の造営計画寸法が短縮されていないことがわかる。また検出した４棟の掘立柱建物には重複関係から、ＳＢ04・06からＳＢ05・07への２時期の変遷があることがわかる。（秋山成人）

21　平城京左京四条三坊十坪の調査　第314次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市三条栄町185－4において実施した、（株）近鉄不動産届出の共同住宅新築に伴う事前発掘調査である。調査地は平城京条坊復元では左京四条三坊十坪の南半中央にあたる。調査期間は平成６年10月25日から同12月22日まで、調査面積は1178㎡である

Ⅱ　基本層序

調査地の基本層序は、約1.5ｍの盛土以下、黒色土が約0.2ｍ、暗灰色土が0.1～0.2ｍ堆積し、黄色粘土となる。奈良時代の遺構面はこの黄色粘土の上面で、標高は60.1～60.2ｍであり、北が若干高い。さらに、約0.2ｍ堆積する黄色粘土以下は、橙褐色もしくは暗褐色のマンガンを含む土が0.3ｍ前後堆積している。この下層は暗紫色のしまりの強い土となっているが、断面観察によってこの上面から掘り込まれている土坑が認められ、奈良時代以前の遺構面が下層にあることを確認した。この上面の標高は約59.6ｍである。各遺構の断面観察等で窺える状況から、黄色粘土以下の地層はかなり複雑であると思われ、発掘区内の各地点で土質、色調の異なる土が堆積している。確認した最深部は黒色粘土で、この層は全体に広がっており、上面の標高は約59.1ｍである。

Ⅲ　検出遺構

検出遺構は、奈良時代の掘立柱建物４棟、塀２条、井戸３基、土坑７、溝９条、東堀河及びこれに架かる橋脚、護岸杭列、そして性格不明遺構１である。遺構の検出は黄色粘土上面で行なったが、発掘区南西隅では東西約10ｍ、南北約６ｍにわたって厚さ約0.15ｍの灰褐色土が堆積しており、この部分では灰褐色上面及び直下で遺構検出を行なった。

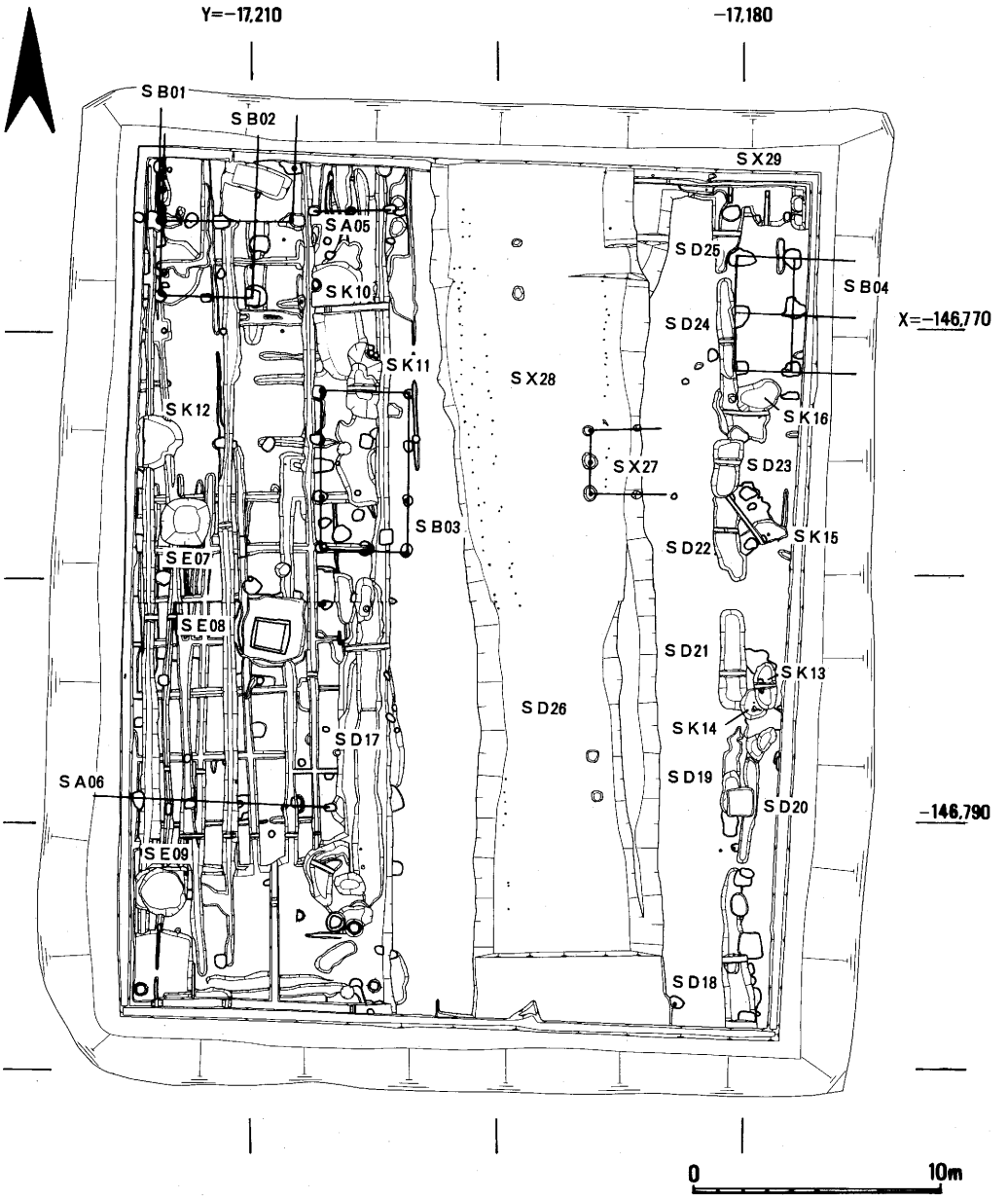
ＳＢ01　梁間２間（5.4ｍ）で、発掘区外北に続く南北棟掘立柱建物。桁行は南１間分（2.1ｍ）のみ確認した。梁間は2.7ｍ（９尺）等間である。

ＳＢ02　桁行２間（4.2ｍ）以上、梁間２間（3.6ｍ）で発掘区外北に続く南北棟掘立柱建物。柱間は桁行2.1ｍ（７尺）等間、梁間1.8ｍ（６尺）等間である。重複関係からＳＢ01より古い建物であることがわかる。

ＳＢ03　桁行３間（6.3ｍ）、梁間２間（3.6ｍ）の南北棟掘立柱建物。柱間は桁行2.1ｍ（７尺）等間、梁間1.8ｍ（６尺）等間である。

ＳＢ04　南北２間（4.2ｍ）で発掘区外東に続く掘立柱総柱建物と思われるが、東西は１間分（2.1ｍ）のみ確認した。柱間は東西南北とも2.1ｍ（７尺）等間であるが、東側中央の柱が若干北に寄っており、東の南北柱列は、北から1.8－2.4ｍとなっている。

ＳＡ05　東西２間（3.0ｍ）の掘立柱塀。柱間は1.5ｍ（５尺）等間。



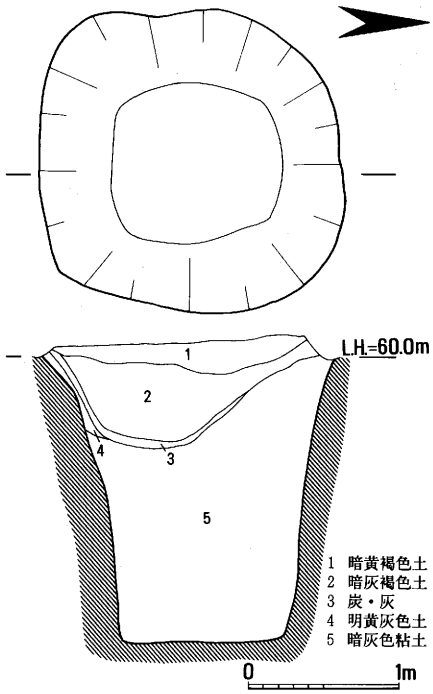
第314次調査　遺構平面図（1／300）

ＳＡ06　東西３間以上（6.3m）の掘立柱塀。柱間は2.1m（７尺）等間。

ＳＥ07　直径約2.0mの平面円形掘形の井戸である。検出面からの深さは約2.0mで、井戸枠は残存していなかった。埋土の大半を占める暗灰色の粘土は、比較的長期間にわたって徐々に堆積したものと思われ、木葉が溜まる面も認められる。この粘土の上面付近で奈良時代前半の土器がいくつか完形に近い状態で出土したことから、一括投棄されたものと思われる。また粘土の上面には炭が薄く堆積しており、井戸が最終的に廃絶する際に祭祀

的な行為があった可能性がある。

ＳＥ08　一辺約2.5ｍの平面方形の掘形に井籠組の井戸枠を据えた井戸である。検出面からの深さは約2.5ｍ。井戸枠は一辺約1.0ｍで、底から６段分が残る。各枠板の結合部は相欠き枘によって組まれており、頑丈な作りとなっているが、部材はすべて転用材である。最下部には面取りされた角材が、一辺約1.0ｍの井桁状に組んで敷かれており、井戸枠は沈下防止のためこの台枠上に組み上げられている。さらに、台枠は組み方が浅く、四周が同一面となっていないため、井戸枠や地面と接していない部分には別の薄い板が差し込まれている。掘形の埋土はすべて地山の粘土ブロックで、井戸枠を組み上げた後に、掘り上げた土で一度に埋められたものであろう。井戸枠内から奈良時代中頃の土器が出土したが、掘形埋土からの出土遺物はない。



井戸SE07平面・断面図　（１／50）

ＳＥ09　直径約2.0ｍの平面円形の掘形を呈する井戸である。発掘区南西隅の灰褐色土下で検出した。検出面からの深さ約1.7ｍ。井戸枠は残存していないが、掘形の西側上端が崩れていることから井戸枠を抜き取ったものと考えられる。埋土から奈良時代中頃の土器が出土た。

ＳＫ10　長径約4.3ｍ、短径約2.0ｍ、深さ約0.2ｍの平面楕円形の土坑。

ＳＫ11　長さ約3.1ｍ、幅約1.3ｍ、深さ約0.5ｍの平面形がほぼ長方形の土坑。埋土から奈良時代後半の土器が出土した。重複関係からＳＢ03より新しく、ＳＫ10より古いことがわかる。

ＳＫ12　直径2.1ｍ以上、深さ0.5ｍ以上の平面円形の土坑と考えられるが、西半が発掘区外へ広がっているため未確認である。

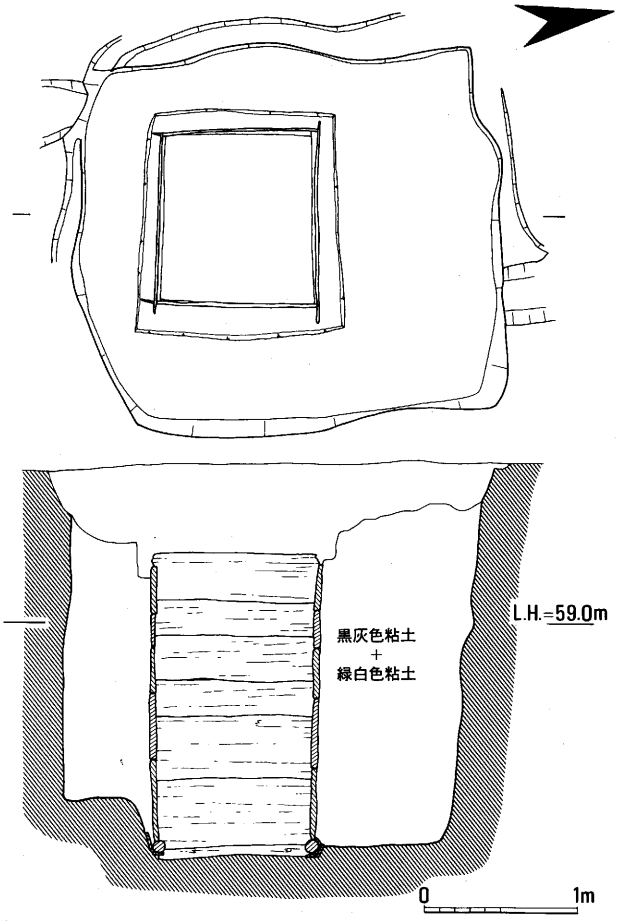
ＳＫ13　長径約1.9ｍ、短径約0.9ｍ、深さ約0.25ｍの平面円形の土坑。埋土は炭と灰が混じる土で、底面及び側壁に熱を受けた痕跡が認められる。埋土から奈良時代中頃の土器が出土した。

ＳＫ14　直径約1.9ｍ，深さ約0.9ｍの平面円形の土坑。埋土から奈良時代後半の土器が出土した。重複関係からＳＫ13より新しいことがわかる。

ＳＫ15　長径約2.0ｍ、短径約1.0ｍ、深さ約0.1ｍの平面楕円形の土坑。埋土は炭混じり

の土で、底面に熱を受けた痕が認められる。埋土からは奈良時代末の土器が出土した。

この土坑の周辺には炭と土器が拡がっていたが、これらはこの土坑の上半部が破壊された際に散乱したものと思われる。この付近の遺構は炭混じり土の下で検出していることから、ＳＫ15はＳＤ22・23より新しいものと考えられる。



井戸ＳＥ08平面・断面図（１／50）

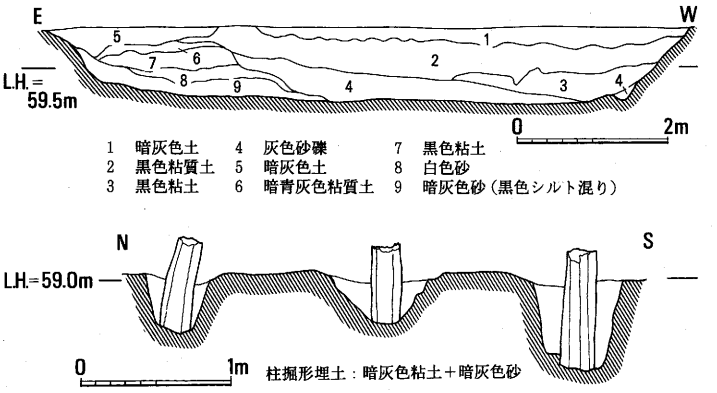
ＳＫ16　東西約2.0ｍ、南北約2.0ｍ、深さ0.3ｍ～0.5ｍの平面不定形土坑。底部は凹凸が著しく、北東部は一段深くなっている。埋土から奈良時代中頃の土器が出土した。

ＳＤ17　長さ約13.5ｍ、幅約1.5ｍ、深さ約0.3ｍで南北に長い溝である。南西隅の灰褐色土上面から掘り込んでいることから、灰褐色土下で検出した井戸ＳＥ09より新しいことがわかる。

ＳＤ18～25　長さ2.4ｍ～7.0ｍ以上、幅0.5ｍ～1.3ｍ、深さ0.05ｍ～0.5ｍの南北溝が断続的に、南北ほぼ一直線上に連なっている。埋土は基本的に灰色砂質土であるが、褐色土のブロックを含んでいる。ＳＤ21、23の底面は東西両隅が溝状に掘り込まれている。浅いもの（ＳＤ19、20、22、25）と深いもの（ＳＤ18、21、23、24）があり、ほぼ交互に並んでいる。ＳＤ22と23のみ重複しており、浅いＳＤ22が古いことがわかる。

ＳＤ26　東堀河である。幅はおよそ7.5ｍ～8.5ｍで北が広い。深さは北で約1.0ｍ、南で約1.1ｍ、河床の標高はそれぞれ59.05ｍ前後、58.90ｍ前後で、北から南へ流れていたようである。 基本的な堆積層は、下から順に砂礫、灰色シルト、黒色粘土、酸化した暗灰色土となっており、暗灰色土以外は流水堆積と考えられる。堆積状況から、当初の河幅が１ｍ前後狭まり、河筋も北に行くに従って西に動いていった状況が認められる。堆積土中からは多量の遺物が出土したが、それらは主に最下層の砂礫からである。出土遺物の大半は

奈良時代の土師器、須恵器であり、その他古墳時代、弥生時代の遺物も含まれているが、遺物の状態から、ほとんどが流されてきたものと判断できる。最上層の暗灰色土には9世紀前半の遺物が含まれており、この頃から次第に堀河の機能を失っていったものと思われる。



東堀河SD26断面（1／100）　桟橋SX27掘立柱断面（1／50）

これまで東堀河は、左京五条三坊十坪付近で京内を東西に流れる菩提川から引き込まれたものとして推定復元されてきた。しかしＳＤ26は東堀河の推定位置を北に延長した位置に相当し、また奈良時代の人工河川と考えられることから、東堀河の一部であることは間違いないと思われる。したがって東堀河は従来の推定よりも北へ続いていると判断できる。堀河心の座標は北端で（Ｘ：Ｙ）＝（－146,764.0：－17,188.5)、南端で（Ｘ：Ｙ）＝（－146,794.0：－17,186.6）である。またこのＳＤ26には以下の二つの遺構が伴う。

ＳＸ27　梁間2間（2.7m)、桁行1間（1.8m）以上でＳＤ26の東岸に取付けられた、掘立柱の橋脚をもつ桟橋である。梁間は4.5尺等間で、すべて柱が残る。柱はいずれも面取りされた多角柱である。対岸に同様な柱穴が認められないため桟橋と判断した。堀河の斜面部に残る穴は一回り小さく、補助橋脚のものと考えられる。この他、二つずつ並ぶ柱穴を2箇所、河床面で検出したが、橋脚掘形とは判断できなかった。

ＳＸ28　ＳＤ26の護岸杭列である。直径5㎝前後の丸杭が河底の両側に打ち込まれている。西側北半のみ2列平行しており、東側南半には杭列が認められなかった。

ＳＸ29　長さ0.8m以上、幅約1.25m、深さ約0.35mの掘形内に四本の柱が正方形を描くように据えられた性格不明の遺構。柱間は0.55m。この発掘区北東端付近には橙褐色土が不定形に拡がっており、一部溝状になるところもある。またＳＤ26の東岸もこの付近では東へ拡がるように崩れていることから、あるいはこのあたりから以北は堀河に注ぐ東西方向の溝となっている可能性もあり、ＳＸ29はそれに関係するものとも考えられるが、発掘区外へ続き、出土遺物もなく性格は不明である。

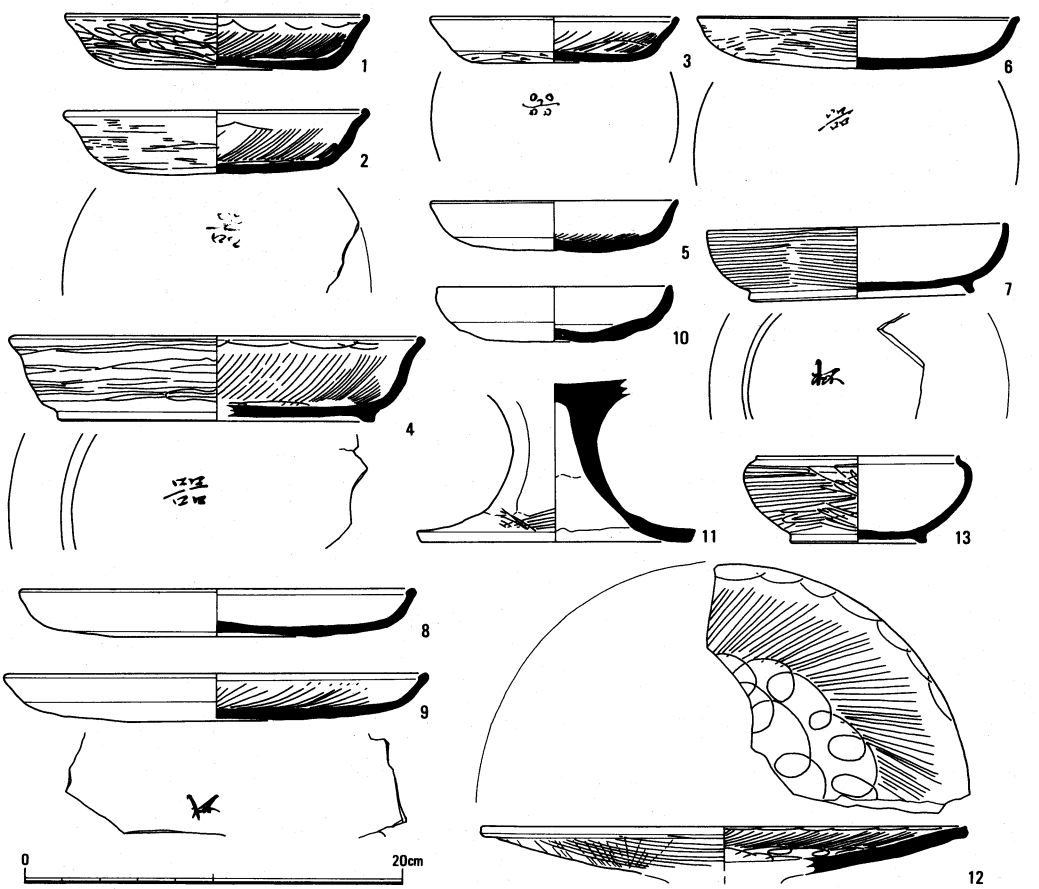
この他発掘区南東隅で下層に別の遺構面を確認したため、約12㎡にわたって下層遺構の確認を行なった。しかし断面で確認した土坑以外に遺構は確認できなかった。土坑は直径約0.8m、深さ約0.4mで、平面円形を呈するものと思われるが、確認したのは北半部のみである。埋土は明灰色シルト質土で、出土遺物はなく、時期不明である。

Ⅳ　出土遺物

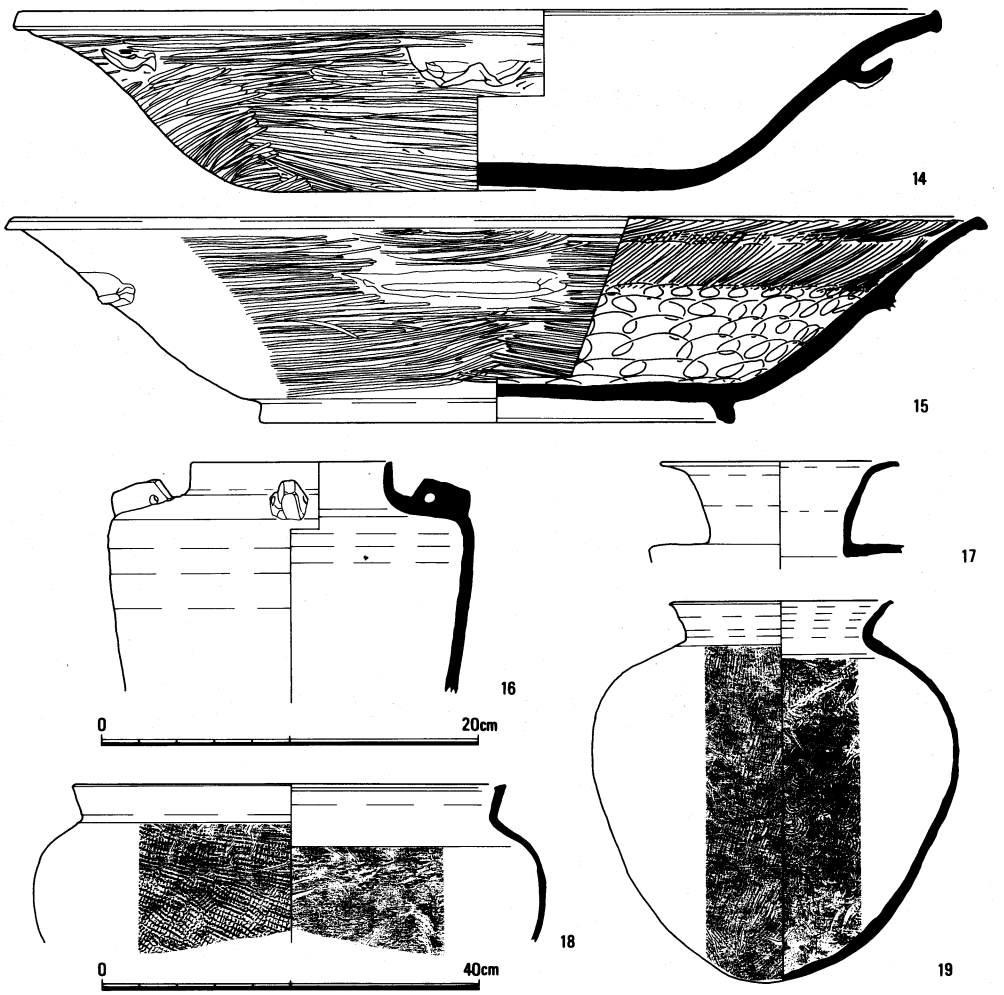
今回の調査では整理箱110箱分の遺物が出土したが、その大半は東堀河ＳＤ26から出土したものであり、その他良好な資料が井戸ＳＥ07・08から出土している。

土器　土器は井戸、土坑、柱掘形、素掘溝、東堀河等から出土しているが、そのうち半分は東堀河ＳＤ26から出土している。また、井戸ＳＥ07およびＳＥ08からは奈良時代前半～中頃の遺物がまとまって出土しており、以下、整理が終了しているＳＥ07出土の土師器・須恵器について述べる。

土師器には、杯Ａ（１～３）、杯Ｂ（４）、杯Ｃ（５・６）、杯Ｅ（７）、椀Ｃ（10）、皿Ａ（８・９）、高杯（11・12）、壷Ｂ（13）、盤Ａ（14）、盤Ｂ（15）、鍋Ｂ（26）、甕Ａ（22・23・25）、甕Ｂ（24・27）、甕Ｃ（21）、甕Ｘ（20）がある。杯Ａ・Ｃ・Ｅは口径の大きさによりそれぞれ二つに分けることができる。皿は口径が21.0㎝以上の大きいものばかりである。底部内面には螺旋状暗文、口縁部内面には斜放射状暗文と連弧状暗文が施されているものが多い。高杯は、２点しか図示し得なかったが、大半のものは脚部が

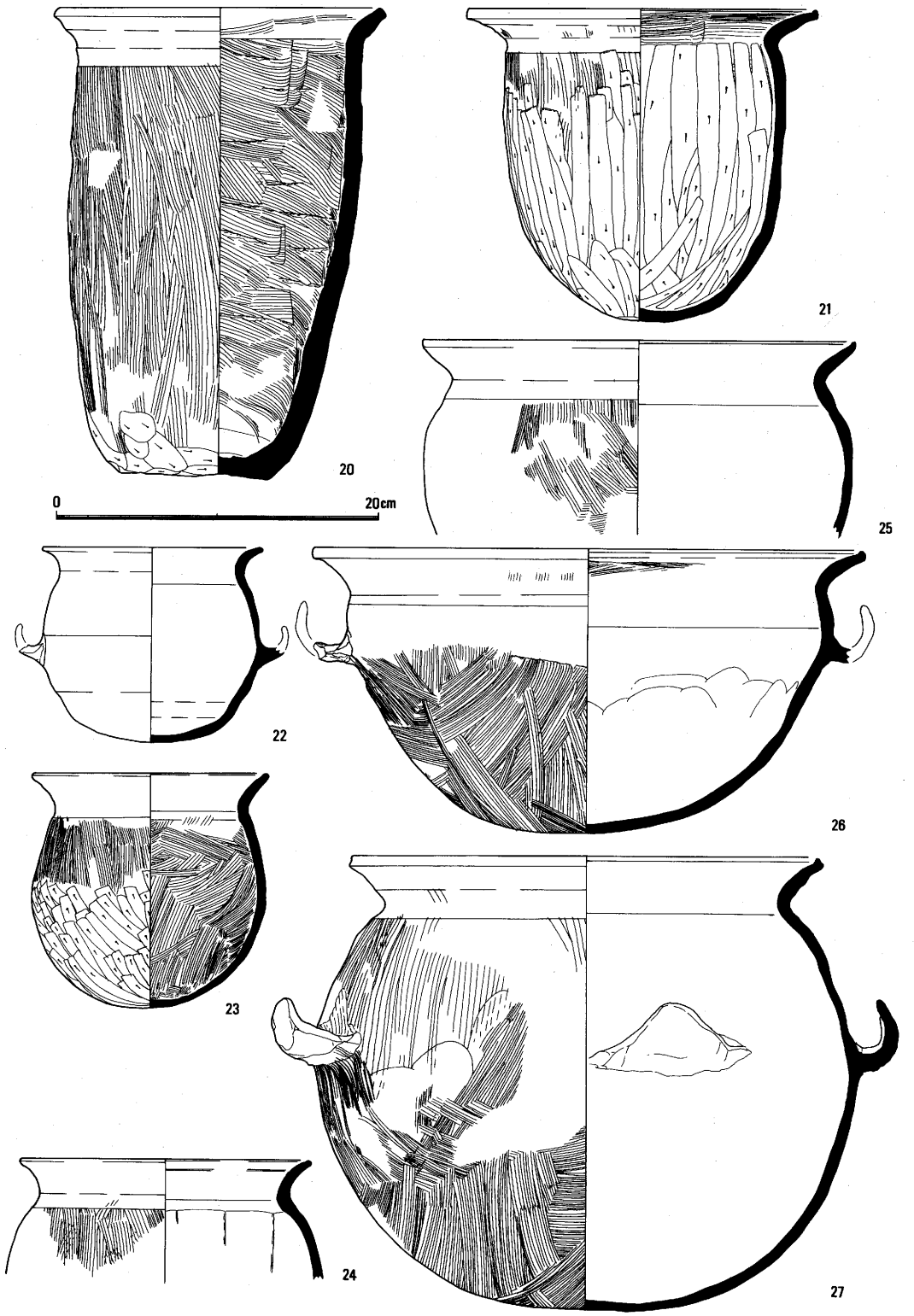


井戸ＳＥ07出土土器（１／４）



井戸ＳＥ07出土土器（14～17　1／4、18､19　1／8）

短い。杯Ｅ・壷Ｂは、外面を丁寧にへら磨きで調整している。２・３・４・６の底部外面には「器」、７・９の底部外面には「杯」と読める文字が墨書されている。土師器甕は形態、製作技法から見て五つに分けることができる。20は平底の甕で、内外面をはけ目で調整する。底部は未調整で、底部と体部の境はへら削りする。内面には粘土紐を螺旋状に巻き上げた痕跡が顕著に残る。21は、丸底の長胴甕で、内外面ともはけ目調整後へら削りする。22～25・27は、丸底で球形の体部の甕である。25・27は、いわゆる「大和・山城系」の甕である。23は外面をタテ方向のはけ目調整をした後下半部をへら削りする。内面は丁寧なはけ目調整が施されている。24は体部下半に、杯を外型にして整形したような痕跡が残る。内外面とも指押さえとなでだけの調整である。鍋は底部を叩いて丸く成形したのち外面を不定方向のはけ目で調整する。盤Ｂの内面には２段の斜放射状暗文と９条の螺旋状暗文がある。盤Ａの内面には暗文がない。須恵器には、杯Ａ、皿、平瓶（17)、壷Ｂ（16)、



井戸ＳＥ07出土土器（１／４）

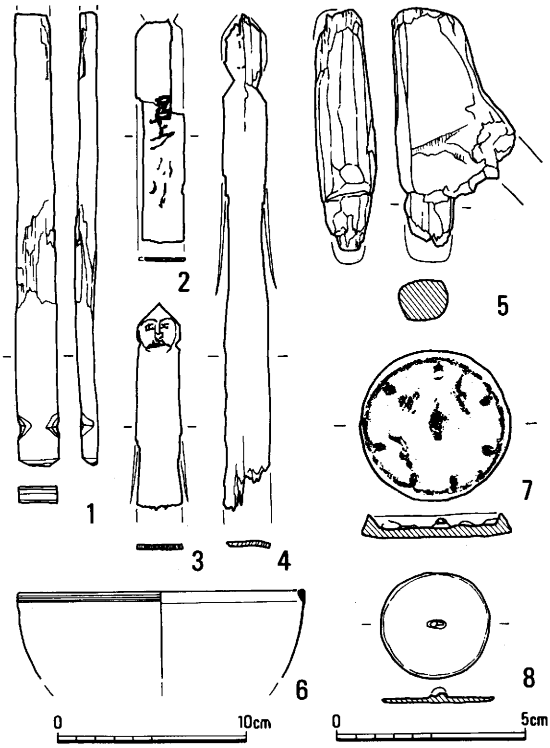
甕A（18)、甕B（19）がある。須恵器は、土師器と比べるとその量は少なく、全体の15％程度しかない。これらの土器群は、調整手法、暗文構成、法量、器種構成からみて平城宮土器Ⅱに位置付けられるものである。　　　　　　　　（三好美穂・中島和彦）

瓦類　出土した瓦類には、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、塼がある。このうち軒瓦はすべて奈良時代のものである。軒丸瓦は4型式4種があり、6284E 2点、6301B 1点がSD26から、6308D、6313C、型式不明各1点が素掘溝等から出土している。軒平瓦は4型式8種があり、6664D、6664G、6664L各1点がSE08から、6664C、6668A、6732C各1点がSD26から、6663F、6664K各1点がSD26上部で出土した。このうちSE08から出土した軒平瓦の平瓦部凸面に朱線が付いている。これは瓦が葺かれている状態で、茅負に朱が塗られたために付いたものと思われる。またSE08出土の瓦はいずれも焼けた痕跡が認められる。塼は4点あり、すべてSD26から出土した。　　　　　　　　（宮﨑正裕）

木簡　1は付札である。上端部は欠損し、表面の一部が破損している。2は薄い板に人名と思われる墨書がある。共に東堀河SD26から出土した。釈文は以下のとおり。

1	・背国□〔相カ〕□〔楽カ〕□〔郡カ〕水［　］　□□∨□∧請□〔請カ〕	(239)×20×8	*032*
2	［　］君万呂［	(112)×25×2	*039*

木製品　木製品の大半は東堀河SD26から出土したものであり、そのほとんどが欠損して用途不明のものである。3・4は人形である。3は長さ10.8cm以上、幅2.4cm、厚さ0.2cmで、下半部と両腕を欠損している。顔は墨書で表現されている。4は長さ26.5cm以上、幅2.4cm、厚さ0.3cmで、脚部と両腕を欠損している。東部には顔の表現と思われる墨痕が残る。この他頭部および上半部と思われる破片が若干出土している。5は斧の柄である。握りは欠損している。斧台は長さ12.7cm、厚さ3.1cm、装着部は幅2.6cm、厚さ2.0cmで先端部がやや欠けている。装着部の形状から縦斧であったものと思われる。以上の遺物はすべて東堀河SD26から出



出土木製品・金属製品（鏡1／2　他1／4）

土したものである。

金属製品　6はＳＥ07から出土した佐波理椀である。口縁部から体部にかけて残存している。口径は15.2cmに復元できる。口縁端部は内側に巻き込むように作られている。体部外面には、わずかながらロクロで挽いた痕跡が残る。内外面とも丁寧に研磨されており、光沢を放っている。奈良時代前半の土器を伴っている。7は海獣葡萄鏡。本来の鏡の内区だけを踏返した仿製鏡であり、文様は著しく崩れている。直径3.9～4.0cm、鏡面の厚さ0.3cm、縁の厚さ0.5cm。海獣は1体（右下）欠失し3体、葡萄は7箇所に痕跡がある。8は素文鏡。直径2.9cm、厚さ0.1cm。鈕の上部を欠損している。鏡は両者とも東堀河ＳＤ26から出土した。この他、和同開珎と萬年通寶各1枚が東堀河ＳＤ26から出土した。

Ⅴ　まとめ

今回の調査成果として、まず東堀河の検出があげられる。当坪内で東堀河を検出したことから、東堀河の北限が従来の推定復元よりも北に続くことが明らかとなった。そこで改めて東堀河の北端を推定するなら、平城京二条を西流している佐保川が考えられる。ただし現在の流路と異なり、奈良時代には佐保川が左京三坊で二条大路の南側溝として利用されていた可能性があり、これに従えば東堀河は二条大路南側溝から引き込まれていたと考えられる。このことによって、佐保川を介して京内に運ばれた物資は無理なく東堀河を下ることができることになる。二条大路以北についても二条条間路付近までは遺存地割りと思われる地形が認められ、あるいは東堀河が京内を南北に貫流していた可能性もある。

また今回検出した東堀河には東岸に桟橋と考えられる構造物が取付けられている。検出位置に道路は交差しておらず、渡河するための橋を想定するよりも桟橋と考えるのが妥当と思われる。ここに桟橋があるということは、一つには堀河の東に接した宅地の居住者が、水運による物資の供給を受けていたことが考えられる。しかし、堀河に面した宅地を持つものだけがその利を得ていたとは考え難い。そこで堀河の岸に沿った幅約3ｍの空間地が注目される。ここには遺構がほとんど認められず、特に東側の溝ＳＤ18～25が区画施設だとすると、少なくとも東岸沿いの部分は宅地から除外されていたと考えられる。すなわち東堀河の岸沿いは一種の道路として使われていたと考えられるのである。平城京左京六条三坊十坪の2度の調査においても東堀河東岸沿いに最大幅6ｍの空間地があることが認められている[1)]。おそらくこの道を利用して荷揚げした物資を搬送したものと思われる。

この他今回の調査では、佐波理椀や朱塗りの建物に葺かれていた瓦が出土しており、この付近が比較的位の高い人物の宅地であったことを推測させる。堀河に面するという特殊な宅地のあり方については今後十分な検討を重ねる必要がある。　（松浦五輪美）

1）奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』1984
奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』1994

22　平城京左京三条四坊六坪の調査　第315次

Ⅰ　**はじめに**　本調査は奈良市大宮町三丁目155－1、155－7において中井一男氏届出の医院事務所ビル建設に伴って実施した事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では左京三条四坊六坪の北東隅に位置する。調査面積は150㎡、調査期間は平成６年11月14日から11月30日までである。

Ⅱ　**調査の概要**　発掘区の層序は盛土、黒色土（耕作土）、灰色土、黄灰色粘質土、黄灰色砂質土、黒灰色砂質土と続き、黄褐色粘土の地山に至る。遺構面の標高は64.30ｍである。検出した遺構には奈良時代と江戸時代のものがある。

奈良時代の遺構　奈良時代のものには掘立柱塀、掘立柱建物、土坑、井戸がある。

ＳＢ01　桁行梁間とも２間（3.6ｍ）以上の東西棟建物である。

ＳＢ02　桁行２間（4.4ｍ）以上、梁間１間（3.6ｍ）以上の東西棟建物である。

ＳＢ03　東西１間（0.7ｍ）以上、南北２間（4.4ｍ）以上の掘立柱建物である。

ＳＢ04　東西１間（1.3ｍ）以上、南北２間（2.9ｍ）以上の掘立柱建物である。

ＳＢ05　桁行２間（2.1ｍ）以上、梁間１間（3.6ｍ）以上の南北棟建物。重複関係から土坑ＳＫ05より新しいことがわかる。

ＳＢ06　東西１間（1.0ｍ）以上、南北１間（3.6ｍ）以上の掘立柱建物。南東隅の柱掘形は径0.87ｍ、深さ0.23ｍ。他の建物と較べて大型である。

ＳＡ07　南北３間（6.9ｍ）以上、柱間寸法は北から2.4ｍ－2.1ｍ－2.4ｍである。

ＳＤ08　幅0.3ｍ、深さ0.23ｍで塀ＳＡ08の東側で長さ10.6ｍ分を検出。埋土は灰色土で奈良時代の土師器、須恵器が出土重複関係から土坑ＳＫ05、建物ＳＢ06より新しい。

ＳＫ09　平面円形掘形の土坑。径0.86ｍ、深さ0.40ｍ。埋土は茶褐色土で平城宮土器Ⅴに属する土師器、須恵器が出土した。

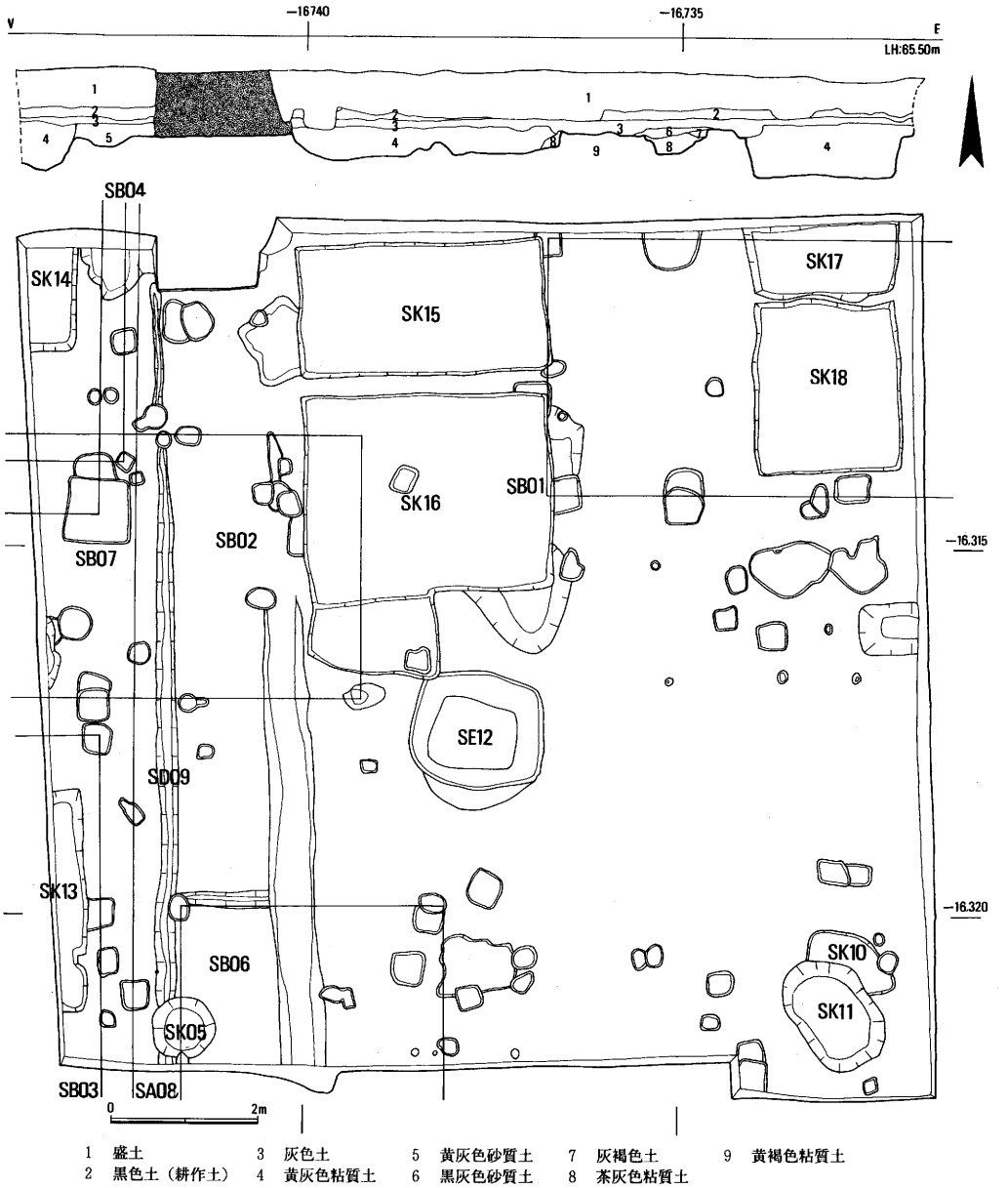
ＳＫ10　平面不整形掘形の土坑。東西1.1ｍ、南北0.47ｍ以上、深さ0.04ｍ。埋土は茶褐色土で奈良時代の土師器、須恵器が出土。

ＳＫ11　平面不整形掘形の土坑。東西1.43ｍ、南北1.28ｍ、深さ0.08ｍ。埋土は茶灰色土で炭が含まれている。奈良時代の土師器、須恵器、土馬、丸瓦、平瓦、塼が出土。

ＳＥ12　平面隅丸方形掘形の井戸。東西1.79ｍ、南北1.82ｍ、深さ1.86ｍ。方形縦板組横桟留の枠で、枠内から平城宮土器Ⅳに属する土師器、須恵器、緑釉平瓦、塼が出土。

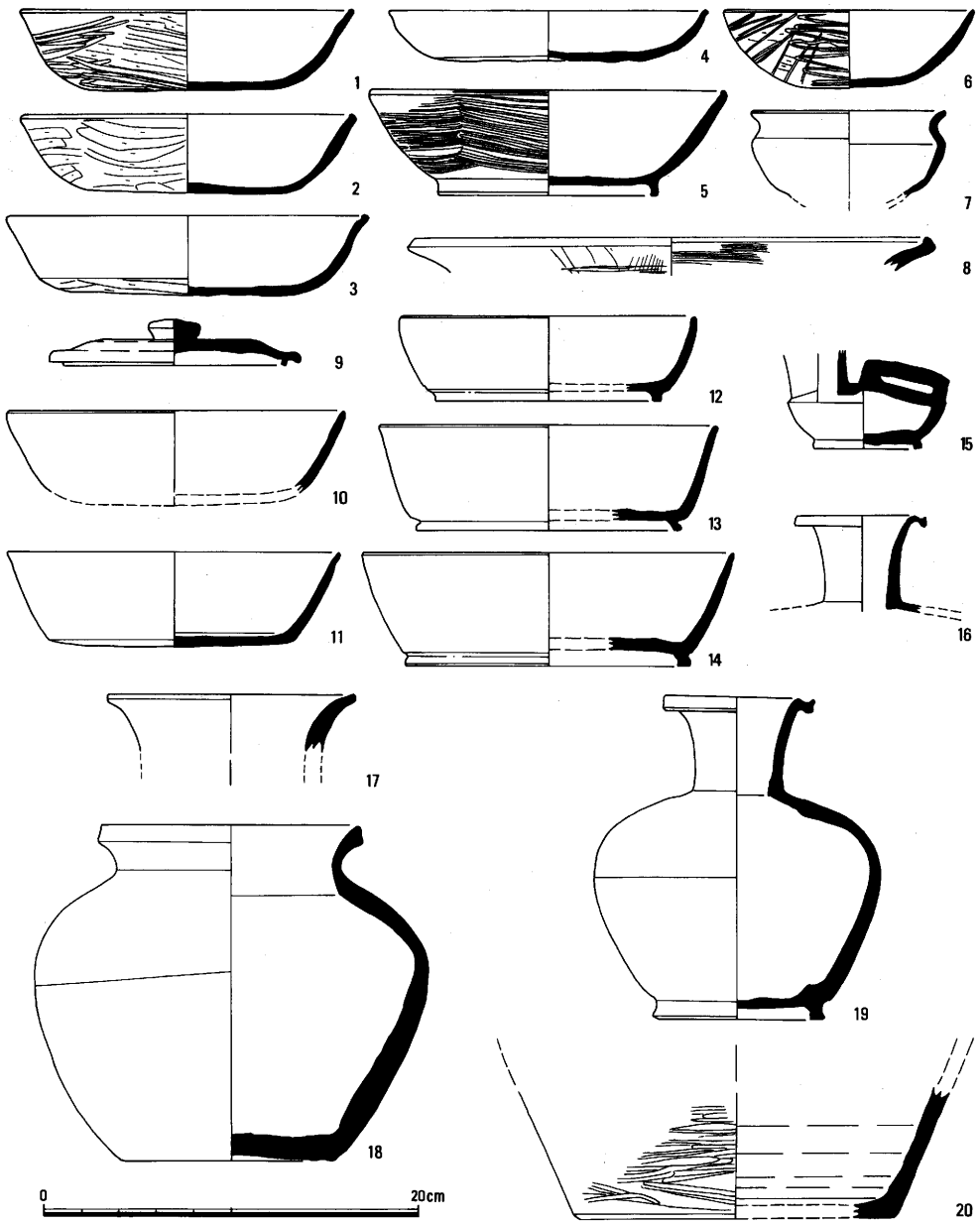
江戸時代の遺構ＳＫ13～18　平面方形掘形の土坑。東西1.9～3.4ｍ、南北2.28～2.65ｍ、深さ0.75～0.8ｍ。底部は平坦である。埋土は茶灰色土で18世紀の伊万里焼 染付椀が出土。

他に発掘区南東で径0、3ｍの柱穴を検出。埋土は茶褐色土で弥生土器が出土。（秋山成人）



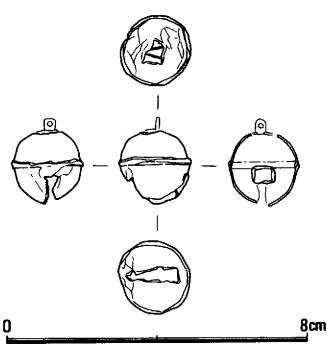
第315次調査　遺構平面・北壁土層図（1／100）

出土遺物には遺物整理箱に4箱分の土器類と1箱分の瓦類、金属類がある。土器類のうち井戸ＳＥ12から出土したものを図示した。器種構成や調整手法などから奈良時代後半のものである。他に遺物包含層及び小柱穴より出土した弥生中期前葉の壺の底部と頸部がある。瓦類は土坑ＳＫ11出土の丸瓦、平瓦、塼、井戸ＳＥ12枠内下層出土の緑釉平瓦（凹面に施釉）1点がある。金属類は井戸ＳＥ12出土の銅鈴があり、鈕を欠損するが球形部は完存している。下面に一文字の切口をもうけ、下半部を重ね接合する。中に角のある小石を入れ音を発する。径1.9cm、重さ2.388gである。　（篠原豊一・秋山成人・池田裕英）



井戸ＳＥ12出土土器（１／４）

Ⅲ　まとめ　今回の調査で奈良時代後半の建物、井戸、土坑を検出した。また江戸時代の平面隅丸方形の土坑ＳＫ13～18は幅0.3m前後の畦を境に同時期に掘削され、層位から一度に埋まったことがわかる。付近の地山が良質の粘土であり、粘土採取土坑の可能性がある。今回弥生土器が出土し、大宮町周辺で弥生時代中期の遺構遺物が見つかっており、集落が存在すると考えられる。　（秋山成人）



井戸ＳＥ12出土銅鈴（１／２）

23　平城京左京五条一坊十五坪・東一坊大路の調査　第316次

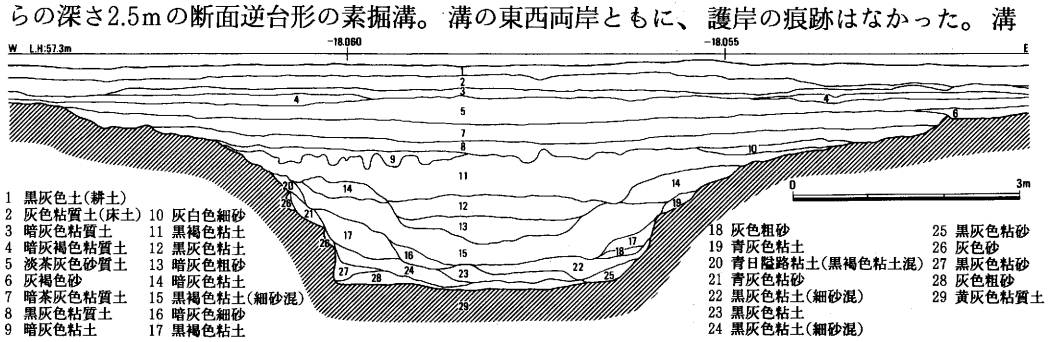
Ⅰ　**はじめに**　本調査は、奈良市柏木町555－1番地他において実施した、株式会社ライダースパブリシティー大阪支社支社長橋本恒政氏届出の住宅展示場造成工事に伴う事前発掘調査である。当該地は、平城京条坊復元では、左京五条一坊十五坪のほぼ南半分を占め、調査地の東辺には東一坊大路が想定され、南は十四坪との坪境小路、西は十坪との坪境小路に面している。ところで、当該敷地の面積は7,302㎡にも及ぶが、期間の限られた仮設工事であること、工事による地下遺構への影響が小さいと考えられることから、奈良県教育委員会との協議の結果、今回は条坊遺構に関わる遺構を確認するに留めることとなった。このため、東一坊大路の想定位置と、西、南それぞれの坪境小路に面する位置に発掘区を設定した。このうち東一坊大路に関しては水田畦畔に遺存する地割からほぼその路面全幅を検出出来うるものと考えられた。発掘区は、東一坊大路想定位置に240㎡（東発掘区）、十坪との坪境小路に面した位置に75㎡（西発掘区）、十四坪との坪境小路に面した位置に28㎡の発掘区（南発掘区）をそれぞれ設定した。調査期間は、平成６年11月14日から同年12月13日までである。

Ⅱ　**検出遺構**　発掘区ごとに検出した遺構の概略を記す。

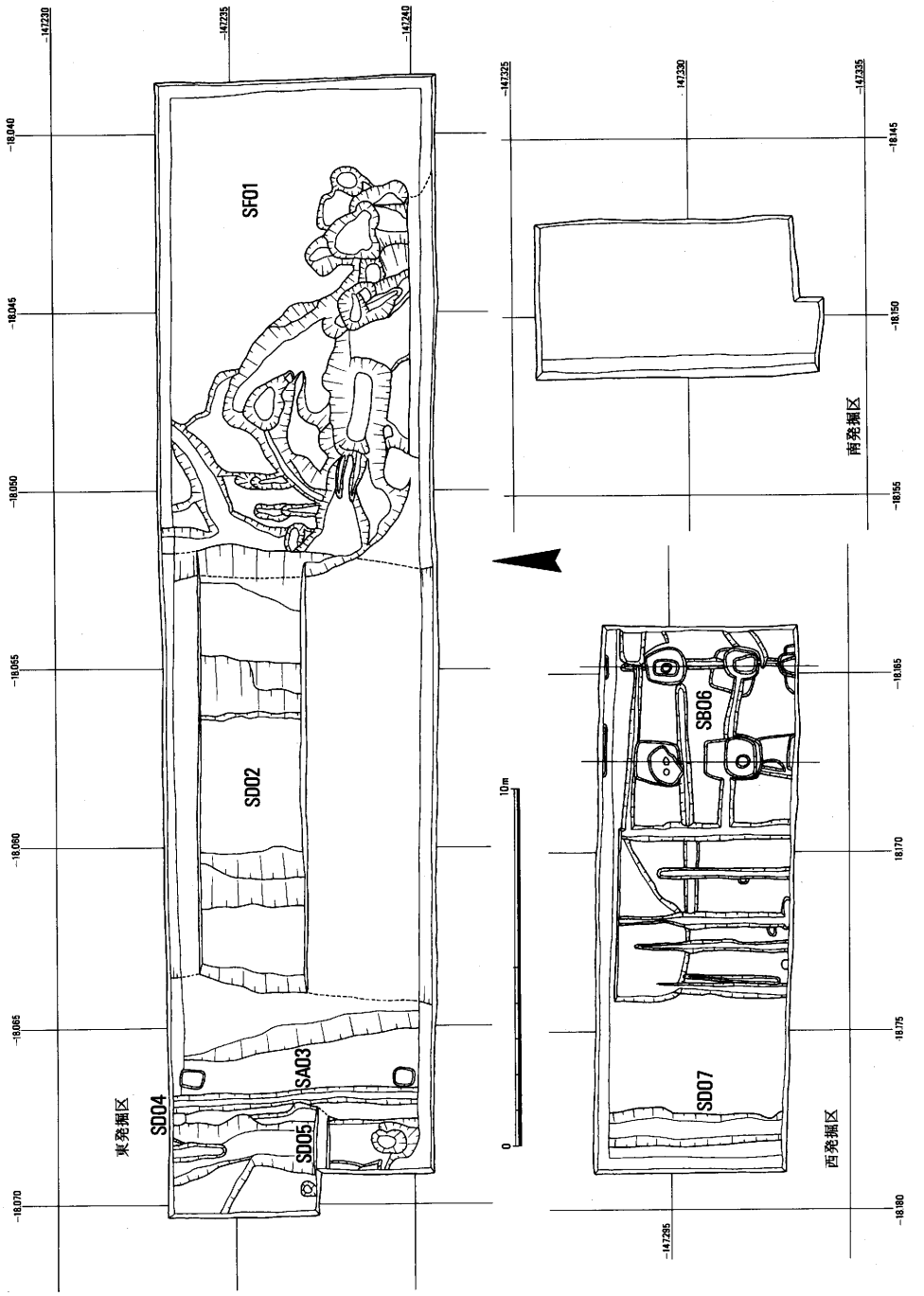
東発掘区　発掘区内での堆積土層の層序は基本的に、黒灰色土の耕作土以下、灰色粘質土の床土、明灰色粘質土、灰褐色粘質土と続き、12世紀後半の瓦器椀片を含む淡茶灰色砂質土の遺物包含層の下、表土下約0.5ｍで黄灰色粘質土の地山に至る。遺構は、この地山上面で検出した。検出した遺構には、東一坊大路及び同西側溝、十五坪の東を限る築地及びその雨落溝がある。

ＳＦ01　東一坊大路である。幅約14ｍ分を確認した。路面は地山が露呈しており、砂敷舗装などの路面保護については不明である。西側溝に向かってなだらかに傾斜する。

ＳＤ02　東一坊大路西側溝である。検出面での幅12.5ｍ、溝底での幅約４ｍ、検出面からの深さ2.5ｍの断面逆台形の素掘溝。溝の東西両岸ともに、護岸の痕跡はなかった。溝



第316次調査　東一坊大路西側溝ＳＤ02土層図（１／100）



第316次調査　遺構平面図（1／200）

埋土は大きく3層に分けられ、最上層の暗茶灰色砂質土以下、黒灰色粘質土、暗灰色粘土、灰白色細砂（以上上層）、黒褐色粘土、黒灰色粘土、暗灰色粗砂（以上中層）、暗灰色粘土、黒褐色粘土、暗灰色砂、黒褐色粘土、黒灰色粘土、黒灰色粘砂と続き、最下層に奈良時代

後半の遺物を含む灰色粗砂が堆積する（以上下層）。黒灰色粘砂からは木簡１点及び多くの削りくずが出土した。また、中層の黒褐色粘土からは、10世紀末頃の黒色土器Ｂ類の椀が出土した。最下層の灰色粗砂と黒灰色粘砂を除くと埋土中から出土した遺物の量は極めて少ない。埋土の堆積状態と各層の出土遺物からみると、この東一坊大路西側溝は、中層の堆積時期である10世紀末頃まではまだ溝としての機能を保っていたが、上層の時期に至っては、幅が大きく広がった非常に浅い流れに変わり、溝としての機能をほぼ失っていたと考えることができる。この上層埋土も、その上面を覆う遺物包含層に含まれる遺物の時期からみて、12世紀までには堆積したと考えられる。

ＳＡ03　東一坊大路西側溝の西で検出した、西側溝とＳＤ05に挟まれる幅約６ｍの空閑地であり、十五坪の東を限る築地塀が想定される。築地版築は既にない。後に掘立柱南北塀に作り替えられる。掘立柱塀は、柱間１間（６ｍ）分を検出した。

ＳＤ05　ＳＡ03の西側で検出した幅1.6m、検出面からの深さ0.4ｍの南北方向の素掘溝である。約８ｍ分を検出。十五坪の東を限る築地塀の雨落溝の可能性がある。

ＳＤ04　ＳＡ03の西側で検出した幅0.5m、検出面からの深さ0.1ｍの南北方向の素掘溝である。約８ｍ分を検出。十五坪の東を限る掘立柱塀の雨落溝である可能性がある。

西発掘区　発掘区内の基本的な堆積土層の層序は、東発掘区と同様であり、遺構は地山の黄灰色粘質土上で検出した。検出した遺構には、掘立柱建物１棟、素掘溝、土坑がある。

ＳＢ06　発掘区の東端で検出した、東西１間（2.7m）以上、南北３間（6.3m）以上の掘立柱建物である。発掘区外に続くため建物規模については明らかでない。

ＳＤ07　発掘区西端で検出した幅１ｍ、検出面からの深さ0.2ｍの南北方向の素掘溝である。約５ｍ分を検出。十五坪の西を限る築地の雨落溝である可能性がある。

他にＳＢ06の柱穴に重複する位置で、２基の土坑を検出した。重複関係からみて、ＳＢ06よりも古いことがわかるが、埋土中から全く遺物が出土しなかったため、時期は不明。

南発掘区　発掘区内の基本的な堆積土層序は東発掘区と同様である。遺構面は同じく黄灰色粘質土の地山であると考えられるが、発掘区内には、全く遺構はなかった。目的とした十五坪と十四坪の坪境小路は、調査地の南に面する市道の下にあるものと考えられる。

Ⅲ　まとめ　今回の調査では、東一坊大路の全幅を検出することは出来なかったが、大路西側溝及び宅地の東を限るであろう閉塞施設について明らかにし得た。今回検出した条坊関連遺構についてその国土座標値を記して今後の調査の資料とする。　（立石堅志）

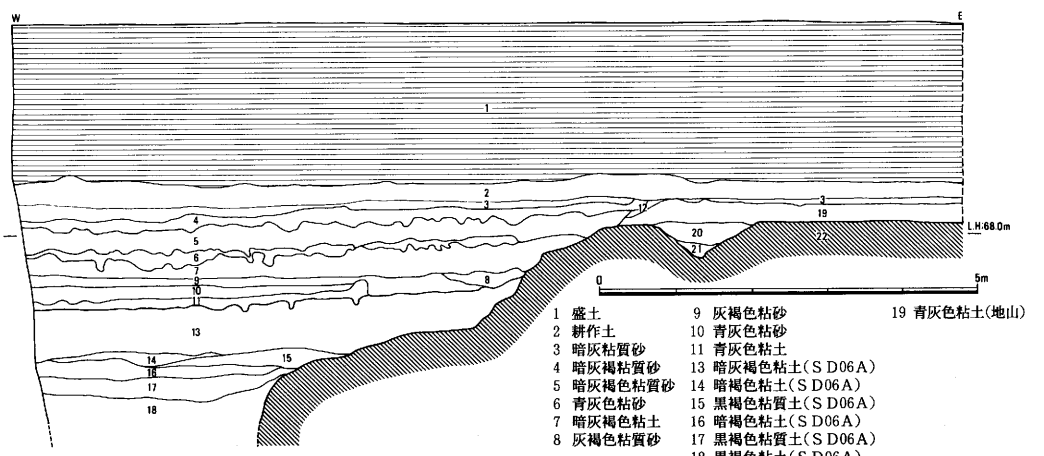
検出遺構	X	Y	底面の標高	備考
ＳＤ02	－147,235.000	－18,058.230	54.175	東一坊大路西側溝
ＳＤ05	－147,237.20	－18,068.400	56.373	
ＳＤ07	－147,297.000	－18,177.650	57.206	

24　平城京右京二条二坊七坪の調査　第319次

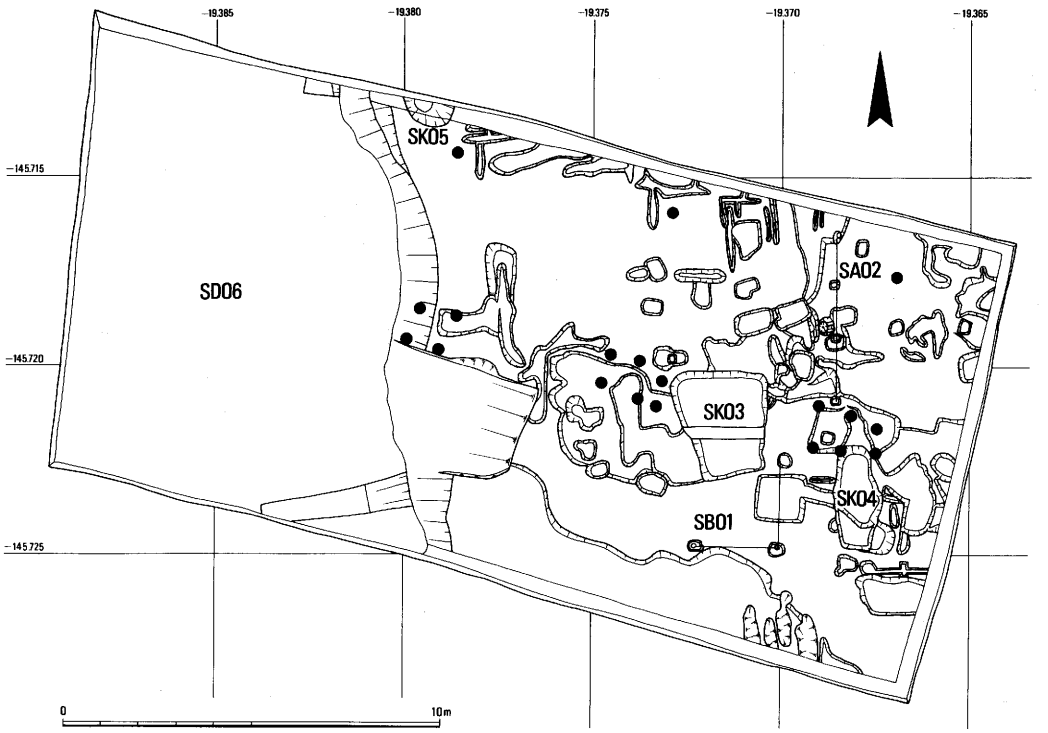
Ⅰ　はじめに　本調査は、奈良市西大寺国見町一丁目2137－60・63における近鉄不動産株式会社取締役社長小林雅夫氏届出の共同住宅建設に伴う事前発掘調査である。当該地は平城京の条坊復元では、右京二条二坊七坪の西南部にあたり、調査地の西辺に西二坊坊間路が、調査地外の南側には二条条間路が想定される。このため、七坪の宅地内様相と西二坊坊間路の条坊計画を明らかにすることを目的として調査地南部に東西25m、南北12m（面積300㎡）の発掘区を設定した。調査は平成6年12月22日に開始し、平成7年1月25日に終了した。調査地の北側では、平成4年度に奈良県教育委員会によって七・八・九・十坪と西二坊坊間路の調査が行われ、西二坊坊間路の両側溝が検出されている。[1)]

Ⅱ　検出遺構　発掘区内の基本的な層序は、2mにも及ぶ盛土下、耕作土、床土、暗灰色粘質砂の中世遺物包含層、地山の青灰色粘土となる。遺構は、この地山上面で検出した。検出した遺構には、奈良時代の掘立柱建物、塀、土坑、溝、時期不明の土坑がある。奈良時代の柱穴が深さ0.1m程度しか残っておらず、地山面にかなりの凹凸がみられることから、後世に奈良時代の遺構面が相当削平されたであろうことが窺える。

ＳＢ01は、発掘区東南で検出した掘立柱建物。東西1間分（2.1m）、南北1間分（2.1m）を検出した。東西、南北方向ともに続くべき柱穴は削平されたものと考える。ＳＡ02は、南北方向の掘立柱塀である。3間分を検出した。柱間は北から1.2m－1.5m－1.6mと不揃いである。ＳＫ03は、ＳＢ01の北側で検出した平面台形の土坑。北辺2.6m、南辺1.6m、南北幅約3mある。検出面からの深さは約0.3m。埋土から奈良時代の土器片が出土したが、細片であるため時期は不詳。ＳＫ04は、ＳＫ03の東側で検出した平面長方形の土坑。南北2.8m、東西1m、検出面からの深さは、約0.3mである。埋土から奈良時代の土器片、



第319次調査　北壁土層図（1／100）



第319次調査　遺構平面図（1／200）

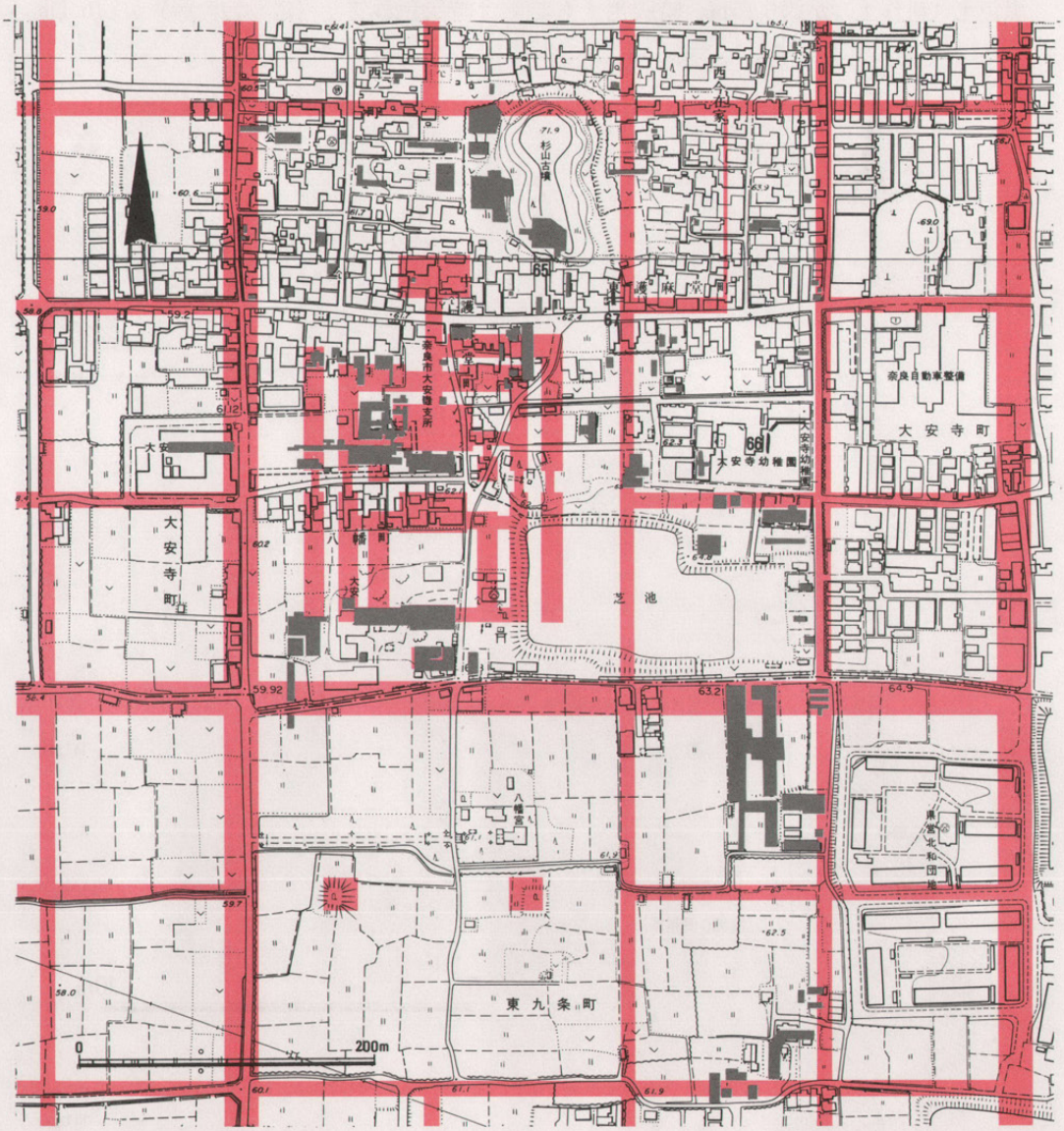
瓦片が出土したがいずれも小片で、時期は不詳。ＳＫ05は、発掘区北壁にかけて検出した径1.4ｍの土坑。断面擂鉢状を呈する。遺物が出土しなかったため時期は不明。また、発掘区西端の西二坊坊間路想定位置において、南北に流れる河川状の遺構ＳＤ06を検出した。東岸からの幅10ｍ分を確認。検出面から約３ｍの深さまでを確認したが、それ以下は、危険なために掘り下げを断念した。東岸は、なだらかに西に向かって下がり、検出面から約1.8ｍでいったん平坦面をなし、さらに西に向かって急な傾斜をもって下がる。埋土は、大きく上下２層に分けることができるが、堆積の状態に差がみられ、異なる遺構が同じ位置に重複していることが考えられることから、下層の堆積をＳＤ06Ａ、上層の堆積をＳＤ06Ｂとする。ＳＤ06Ａは、粘土もしくは粘質土で、埋土中からは奈良時代後半の土器片、瓦片が出土した。いっぽうＳＤ06Ｂは中世遺物包含層を掘り込む砂を主体とする堆積土からなる層であり、湧水が激しく、また遺物はまったく出土しなかった。これについては、おそらく奈良時代において、西二坊坊間路の位置に大きな南北方向の切通状の遺構としてＳＤ06Ａがあり、この埋没後の中世以降に新たな自然河川の氾濫ＳＤ06Ｂの堆積があったものと考えておきたい。しかし、周辺の状況が未だ明らかでない現状であり、今後の調査に期待したい。　（立石堅志）

1）佐々木好直「平城京内の調査　2.平城京右京二条二坊七・八・九・十坪」『奈良県遺跡調査概報平成4年度』奈良県教育委員会 1994

Ⅱ　寺院跡の調査

1　史跡大安寺旧境内の調査

史跡大安寺旧境内では、今年度第65～67次の３件の調査を実施した。うち第66・67次の調査は現状変更許可申請に伴うものである。両調査とも伽藍に関する遺構は確認出来なかったが、第67次調査では杉山古墳の前方部南側裾を確認し、杉山古墳復元の貴重な成果が得られた。第65次調査は、杉山古墳保存整備事業に伴う調査で、昨年度に引き続き前方部の瓦窯の調査を行なった。なお第65次調査の成果は整備事業完了時に報告の予定である。

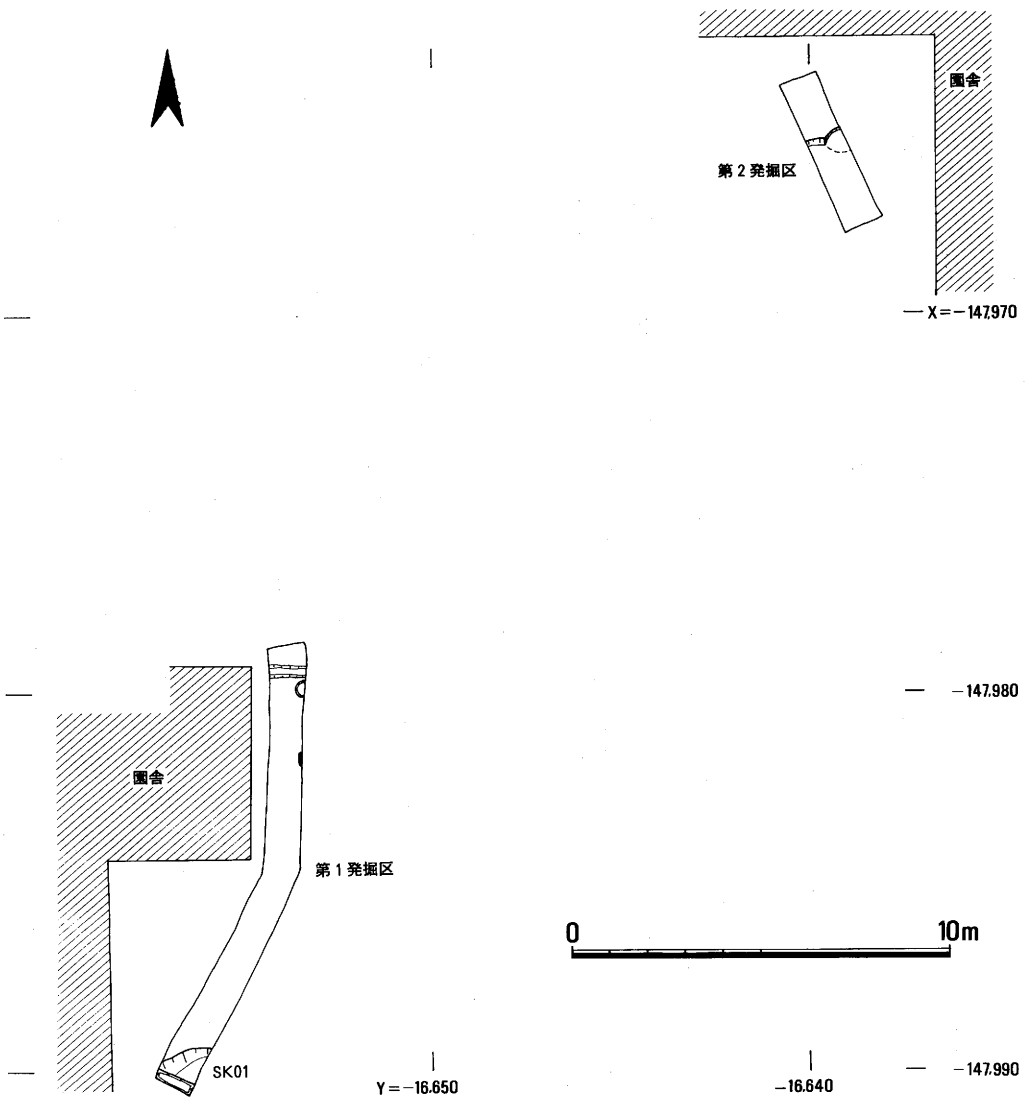


史跡大安寺旧境内発掘調査位置図（１／5000）

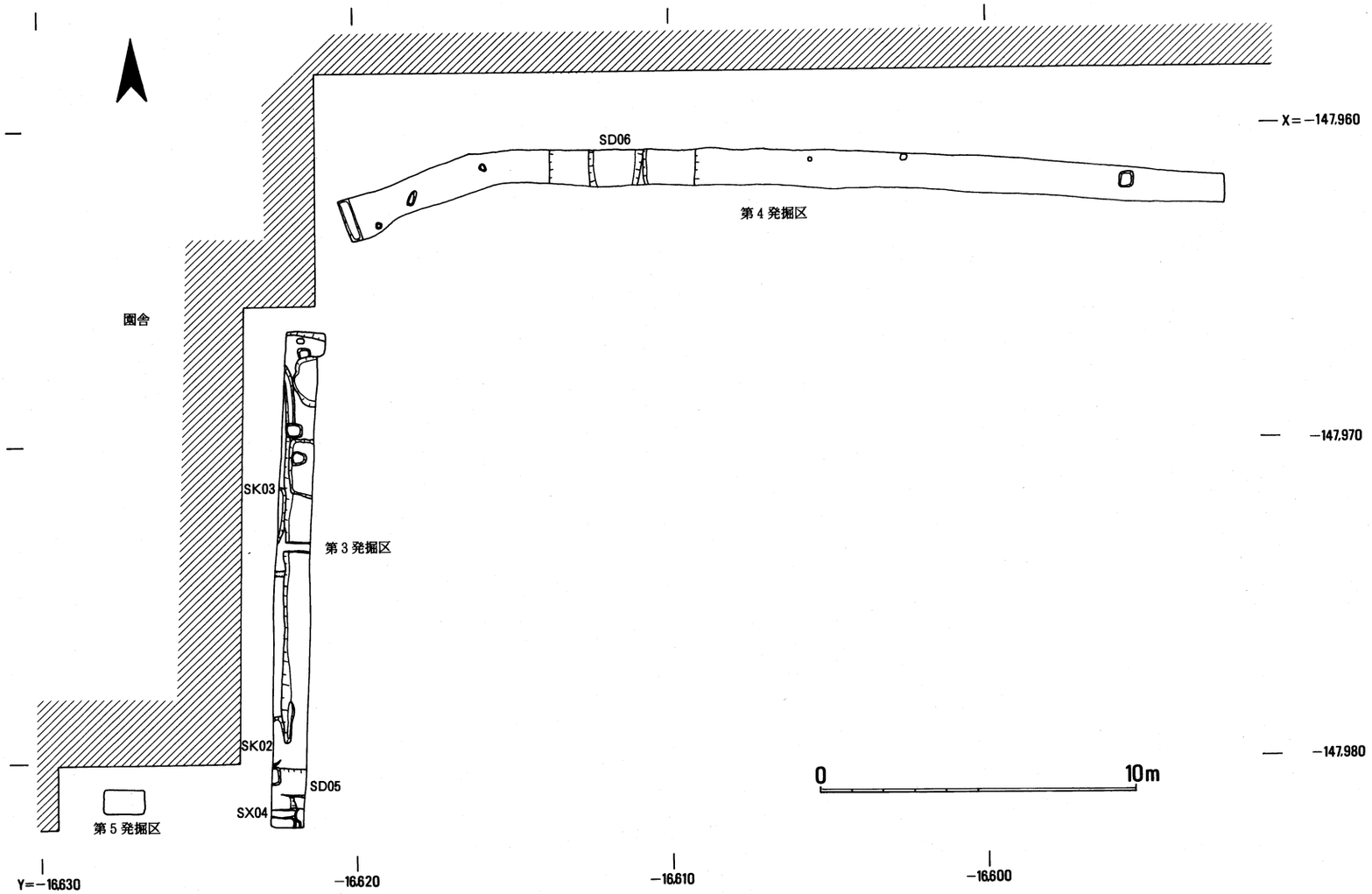
(1)　第66次調査

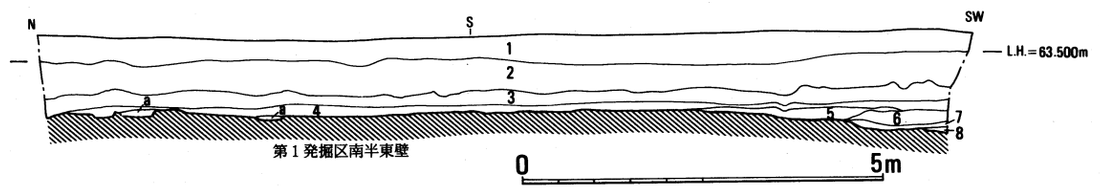
本調査は、奈良市大安寺町一丁目７番１号において実施した、大安寺幼稚園の下水道建設に伴う現状変更許可申請に関わる調査である。調査地は大安寺旧境内の北東部を占める賤院に推定されている場所である。調査は下水道配管予定位置に５箇所の発掘区を設定して行なった。調査期間は平成６年10月５日から同20日まで、発掘総面積は92㎡である。

調査地の基本層序は、第１・２・４・５発掘区は同じで、0.6m～0.8mの盛土以下、黒色土（耕作土）が約0.15m、暗灰色土もしくは暗灰色砂質土（遺物包含層）が約0.1m

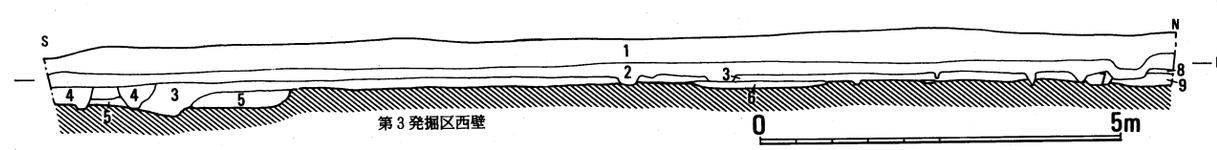


第66次調査　第１・２発掘区遺構図（１／200）





1 盛土（真砂土）
2 〃（改良剤）
3 黒色土（耕土）
4 暗灰色土（遺物包含層）
5 灰色粘質砂
6 土器層（土器片が詰まる）
7 暗灰色砂質土
8 茶灰色砂
a 柱穴埋土
（6～8層はSK01埋土）



1 盛土
2 黒灰色土
3 茶褐色土
4 暗灰色土
5 濁黄色シルト質土（SK02 SX04埋土）
6 濁黄灰色土（SK03埋土）
7 暗灰色土
8 褐色砂質土
9 暗褐色砂質土

第66次調査　第3・4・5発掘区遺構図（1／200）・第1発掘区南半東壁及び第3発掘区西壁土層図（1／100）

堆積し、砂礫の地山に達する。第3発掘区のみ、砂礫と暗灰色土の間に黄色シルト質土が堆積しており、遺構はすべてこの上面で検出した。周辺の調査結果から考えて、本来の奈良時代の遺構面は黄色シルト質土の上面であり、他の発掘区は耕作等によりこの土が削られているものと考えられる。遺構検出面の標高は西の第1・2発掘区で62.5m前後、東の第3～5発掘区で63.2m前後で東が高くなっている。

第1発掘区

検出遺構は土坑1、溝1条。この他柱穴と思われる遺構を3箇所検出した。土坑SK01は、南北1.4m以上、東西1.0m以上、深さ0.24m、平面円形の土坑と思われ、発掘区南端でその一部を確認したのみである。土坑内からは9世紀後半の製塩土器が多量に出土したが、それらは埋められた当初から破片の状態であったことが認められる。おそらく破損した土器を一括廃棄するために掘られた土坑であろう。溝は後世の耕作に関連するものと思われる。

第2発掘区

検出遺構は柱穴と思われる遺構1箇所のみである。

第3発掘区

検出遺構は土坑2、形状不明の遺構1、溝4条である。この他柱穴と思われる遺構5、粘土採掘坑と考えられる掘込みが2ある。土坑SK02は南北1.5m以上、東西0.4m以上、深さ0.3m、土坑SK03は南北1.4m以上、東西0.2m以上、深さ0.1m以上で、両者とも平面楕円形を呈するものと思われる。出土遺物はなく、性格は不明である。形状不明の遺構SX04は土坑もしくは溝になる可能性が強いが、検出部分はその一部と思われ、また他の遺構と重複しているため判断できない。溝SD05は土管を埋設した中世の溝であり、排水施設と考えられる。他の溝はすべて耕作に伴うものと考えられ、埋土に近世の遺物を含むものもある。

第4発掘区

検出遺構は溝1条、柱穴と思われる遺構1箇所である。溝SD06は幅1.6m、深さ0.2mの南北溝である。長さ1.2m分を検出したのみであり、時期および性格は不明であるが、幅からみて他の耕作関係の溝とは性格が異なるものと思われる。

第5発掘区

検出遺構なし。

今回の調査地は、大安寺旧境内の賤院に推定されている場所にあたる。しかし明確な建物または寺域を区画する施設など、寺地推定の手掛りとなる遺構は検出できなかった。また検出した遺構についても、ほとんどはその全体像を知ることができず、性格を明らかにするには至らなかった。（松浦五輪美）

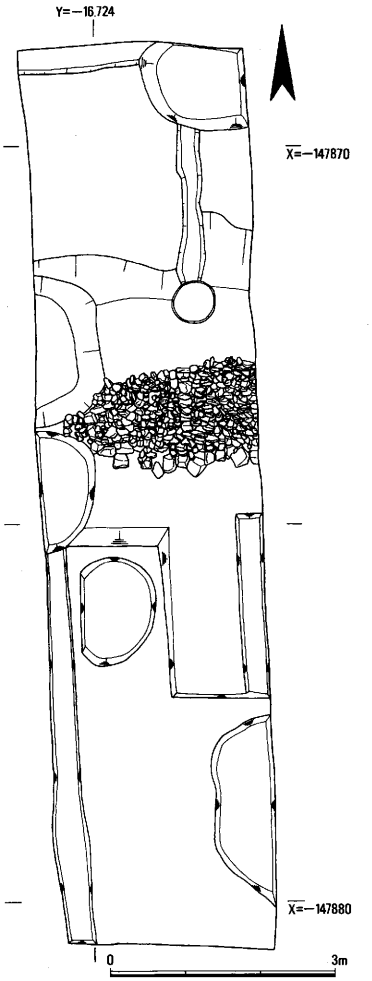
(2)　第67次調査

本調査は奈良市大安寺四丁目1115で実施した、永保則和氏提出の個人住宅改築のための現状変更に関わる事前の発掘調査である。調査地は中心伽藍地区の東辺に位置し、杉山古墳の前方部端にあたると推定される位置にある。

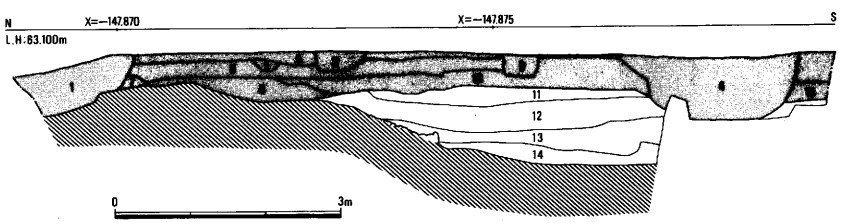
杉山古墳に関しては、これまでの数次の調査で規模の復元に関する資料を得ている。第44～47次調査で西の外堤や後円部の一部を、第54・55次調査では東の外堤を確認しており、後円部径は82mであることなどがわかった（『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成4年度』）。しかし、前方部端や周濠の南端が未検出であったため全長については不明であった。このため今回の調査では前方部端の確認を主たる目的として調査を行なった。また、『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』によれば杉山古墳は大安寺の寺域に取り込まれていることから、大安寺造営以後の利用のされ方についても留意した。

調査は建物予定地に東西3m、南北12m（面積36㎡）の発掘区を設定して行った。調査期間は平成7年2月10日から2月23日までである。

調査の結果、杉山古墳前方部墳端および周濠を確認することができた。前方部の墳丘盛土はすべて削平されており、茶黄色礫土の地山を削り出した墳丘基底部のみを検出した。葺石は濠底から高さ約0.5mまでが遺存していた。基底石はかなり崩れていたが、他の葺石に比べて大きめの石を用いている。基底石下端の標

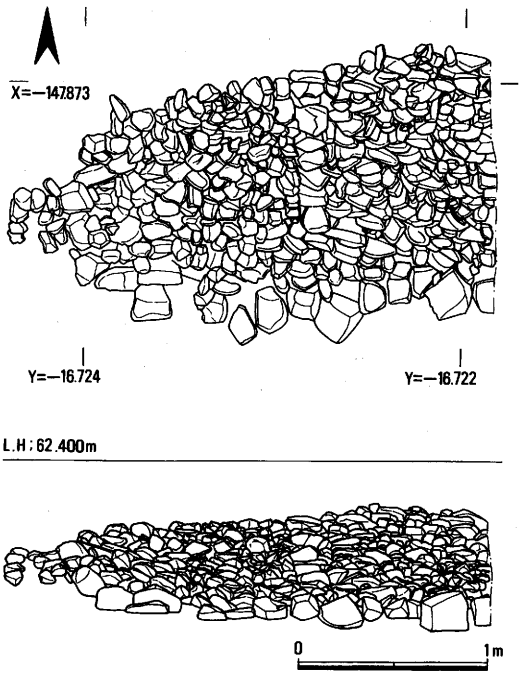


第67次調査　遺構平面図（1／100）



第67次調査　東壁土層図（1／100）

高は概ね61.5mである。葺石は石列で区画され、2条の縦方向の区画石列を確認した。区画石列には20cm大の石が用いられ、2条の石列の間隔は1.3mで、この間に10cm大の石を葺いている。遺存していた葺石面の角度から、前方部南斜面の傾斜角は概ね23°である。使用された石材の種類は花崗岩、チャート、片麻岩、安山岩などである。



第67次調査　前方部葺石平面図・立面図（1／40）

周濠は墳丘端から幅7mまでを確認した。周濠内の層序は上層から灰茶色土、茶褐色土、青灰色粘土、褐色植物腐植土の順で、青灰色土の地山にいたる。周濠底の標高は概ね61.2mである。本調査区の北東で実施した第54・55次調査でも埴輪のほかに植物遺体を含む褐色腐植土層を検出しており、杉山古墳西側の調査では、大安寺の造営にともなって壊された外堤の排土で周濠の一部が埋め立てられていたことが判明し、大安寺の造営以前には周辺の自然環境は維持されていたと考えてきた。今回の調査でも範囲が狭いという制約はあるものの、褐色腐植土層から自然遺物の他は埴輪しか出土せず、上述の成果を確認した。

上層の青灰色粘土層からは埴輪片、奈良時代の土器、瓦などとともに瓦窯の分焔牀の一部と考えられる窯体の破片が出土した。杉山古墳の前方部には瓦窯が築かれており、墳丘が削平された際に破壊されたものであろう。この青灰色粘土層は土質から滞水時に堆積したものと考えられ、窯体片が出土したことから、前方部のこの部分は大安寺造営時には埋め立てられていなかったと考えられる。後円部東北側の周濠で実施した第35次調査や先述の第54・55次調査では、後円部周辺は近世以降に埋め立てられたことが知られている。この青灰色粘土層の上に堆積する、周濠を埋め立てた土と考えられる茶褐色土には近世の遺物が含まれ、今回の所見もそれと矛盾しないものである。一方、これまでの調査では、前方部の周濠は埋め立てられ僧坊が建てられていたことが判明しており、前方部の周濠の大部分は埋め立てられていたと考えられる。ところが、上記の成果から前方部の周濠には埋め立てられていなかった部分があり、これが『資材帳』にみえる「一坊池并丘」の記述と関連することも考えられる。

出土遺物には埴輪、土器類（土師器、須恵器、陶磁器）、瓦（軒平瓦、丸瓦、平瓦）がある。埴輪には円筒埴輪と形象埴輪があるが、形象埴輪は小片であるため種類は不明である。軒平瓦は6712Bで、茶褐色土から出土した。

今回の調査は、杉山古墳の前方部端を確認したことで、杉山古墳の規模を復元する上での重要な成果を得ることができた。これまでの調査成果をあわせ、杉山古墳の規模を復元すると図4のようになる。（池田裕英）

杉山古墳発掘調査位置図（1／1500）

2　新薬師寺旧境内の調査

新薬師寺旧境内では、今年度は6～8次の3件の調査を行なった。いずれも個人住宅建設に伴う事前調査である。新薬師寺については伽藍配置など不明な点が多く、過去5件行なった調査でも伽藍配置、寺域については明らかになっていない。また旧境内の北端には江戸時代の柳生街道が東西にはしり、周辺は奈良町として発展してきた。

第6・7次調査は旧境内の東辺、第8次調査は北辺にあたる。いずれも境内の区画施設が想定されたが、それに関する遺構は確認出来なかった。しかし中近世の遺構は各調査区で検出しており、この地域の町並みの変遷を知る資料が得られている。

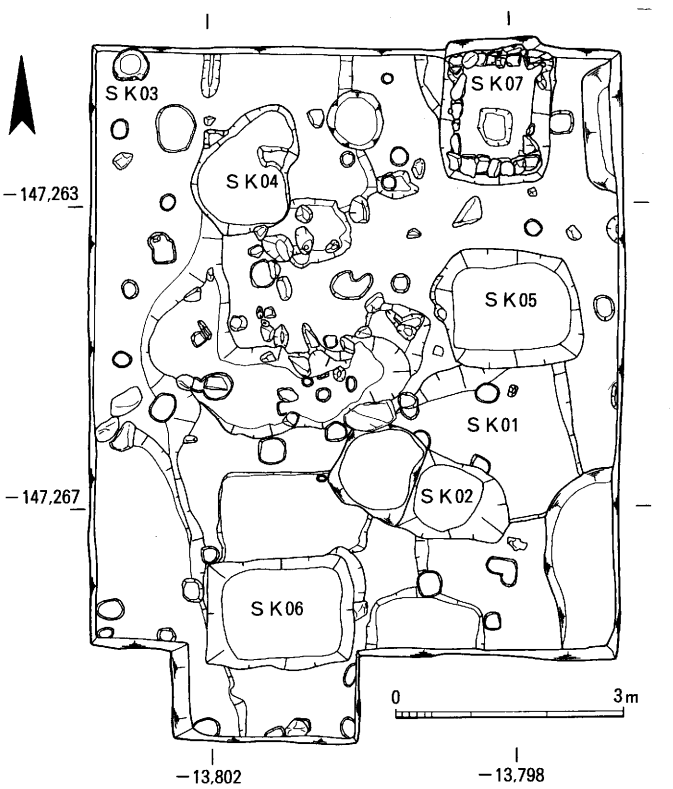
新薬師寺旧境内推定地発掘調査位置図（1／5000）

(1) 第6次調査

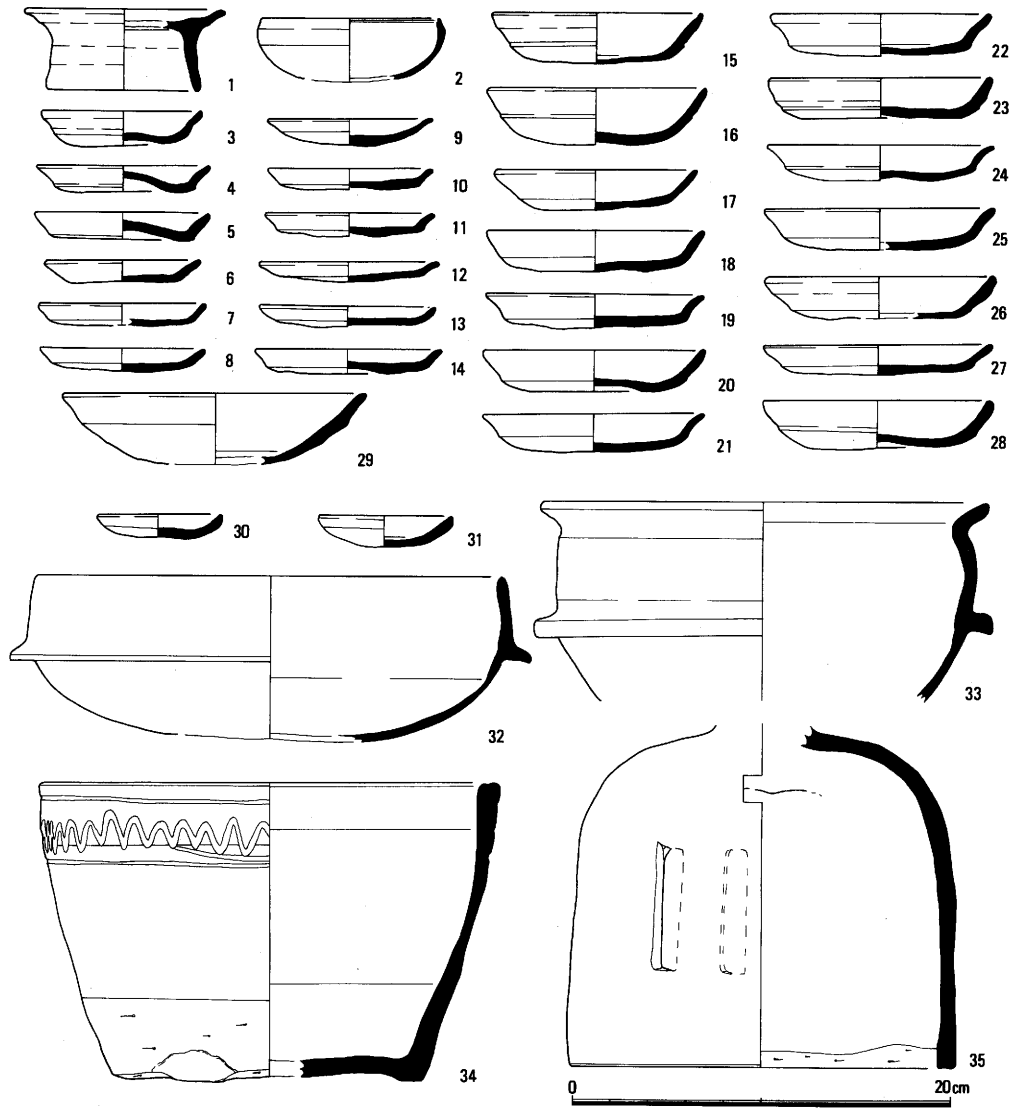
本調査は奈良市高畑町1378番地において、奥景由氏届出の個人住宅建設に伴って実施した事前発掘調査である。当該地は現在の新薬師寺の伽藍に極めて近接し、新薬師寺旧境内推定復元では境内地の東端に位置する。調査は寺域の東を限る築地などの確認を主な目的とした。発掘区は面積58㎡で、調査期間は平成6年4月6日から4月19日である。

発掘区内の基本層序は、表土以下、暗灰褐色土、黄茶褐色土と続き、現地表下0.3m前後で、明黄色土の地山となる。地山面は東から西に緩やかに傾斜する。遺構はすべて地山上面(標高130.1m前後)で検出した。検出遺構には、土坑7と柱穴があるが、奈良時代のものは確認できなかった。土坑には鎌倉時代と江戸時代のものがある。鎌倉時代のものはSK01・02である。SK01は南北2.2m、東西2.5m、深さ0.15m、SK02は南北1.1m、東西1.1m以上、深さ0.7mの土坑である。いずれからも14世紀初頭の土器が出土した。重複関係から、SK01よりもSK02が新しい。江戸時代のものにはSK03～SK06がある。SK03は埋甕土坑で、瓦質土器甕が残存する。SK04は南北1.7m、東西1.4m、深さ 0.3m、SK05は南北1.5m、東西1.9m、深さ0.5m、SK06は南北1.5m、東西2.0m、深さ0.6mの土坑である。いずれも17世紀後半～18世紀前半のものである。SK07は石組土坑で、南北2.0m、東西1.5mの方形掘形に、拳大から人頭大程度の自然石を方形に組む。石組の内法は南北1.2m、東西0.8m、深さ0.4mである。遺物は全く出土せず、時期は不明である。その他、小柱穴を多数検出したが、建物としてはまとまらなかった。

遺物は瓦と土器がある。瓦は丸瓦、平瓦が大半で遺物整理箱4箱分出土した。軒瓦はすべて巴文軒丸瓦(7点)で、SK02・05・06から出土した。奈良時代のものはない。土器



第6次調査　遺構平面図（1／100）



土坑ＳＫ01・06出土土器（１／４）

には鎌倉時代と江戸時代のものがある。以下、ＳＫ01とＳＫ06出土のものについて記す。ＳＫ01からは、土師器皿（３～29）・高台付皿（１）・羽釜、瓦器椀（２）、瓦質土器浅鉢、須恵器鉢が遺物整理箱１箱分出土した。その大半は土師器皿である。瓦器椀は白桃色の色調で炭素の吸着は見られず、また内面のヘラミガキは全くない。土師器皿は口径で大、小に分けられる。小皿にはヘソ皿がある。14世紀初頭のものと考えられる。ＳＫ06からは土師器皿（30・31）・焙烙（32・33）、瓦質土器深鉢（34）・浅鉢・行灯（35）、国産陶磁器が遺物整理箱１箱分出土した。焙烙はいずれも底部を外型作りする。瓦質土器行灯は正面に連子状の明かり窓があり、その反対側にも孔があるが、形状は不明である。17世紀後半～18世紀前半頃のものと考えられる。（宮崎正裕　中島和彦）

(2)　第７次調査

本調査は、奈良市高畑町字新薬師寺町1357番地において実施した柴岡與志夫氏届出の個人住宅増築に伴う事前の発掘調査である。当該地は、新薬師寺旧境内の推定復元によれば境内地の東辺にあたると考えられ、寺域の東を限る築地等の存在が想定された。

これまでに奈良市教育委員会では寺域推定地内で６次にわたる調査を行なっているが、奈良時代の堂塔に関係すると考えられる遺構は確認されていない。

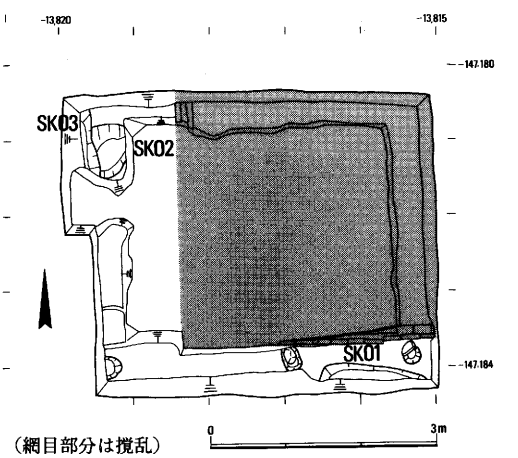
調査は、建物予定地に東西５ｍ、南北４ｍ（面積20㎡）の発掘区を設定して実施した。調査期間は、平成６年８月22日から８月26日である。

発掘区内の基本層序は、約0.1ｍの表土、その下に約0.4ｍの暗褐色土、約0.4ｍの土師器片を多く含んだ褐色土と続き、地表下約0.9ｍで人頭大の礫を包含する橙褐色粘土の地山にいたる。発掘区南東隅および北西隅では、土坑ＳＫ01・ＳＫ02・ＳＫ03が掘り込まれているため層序が異なり、複雑な様相を呈している。発掘区の北東部分（約11.6㎡）については、以前築かれた車庫のコンクリートの床面がそのまま埋められていたため、掘り下げを断念せざるを得なかった。遺構は、すべて地山上面で検出した。地山の標高は、概ね131.9ｍである。

調査の結果、土坑３、小柱穴３を確認したが、新薬師寺に直接関わる遺構は検出することができなかった。

土坑ＳＫ01・02・03は、発掘区外へ続くため規模は不明。深さは、検出面から0.2～0.3ｍである。ＳＫ01からは中世の巴文軒丸瓦２点および唐草文軒平瓦１点と13世紀中頃の土師器・瓦器が、ＳＫ02からは18世紀の土師器・陶磁器が少量出土した。小柱穴は、出土遺物がないため時期は不明である。

遺物には、土坑から出土した瓦類、土器類の他に、遺物包含層（暗褐色土）から出土した奈良三彩、土管、巴文軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。奈良三彩は、小片のため詳細は不明だが、杯または皿になると考えられる。　（三好美穂）



第７次調査　遺構平面・土層図（１／100）

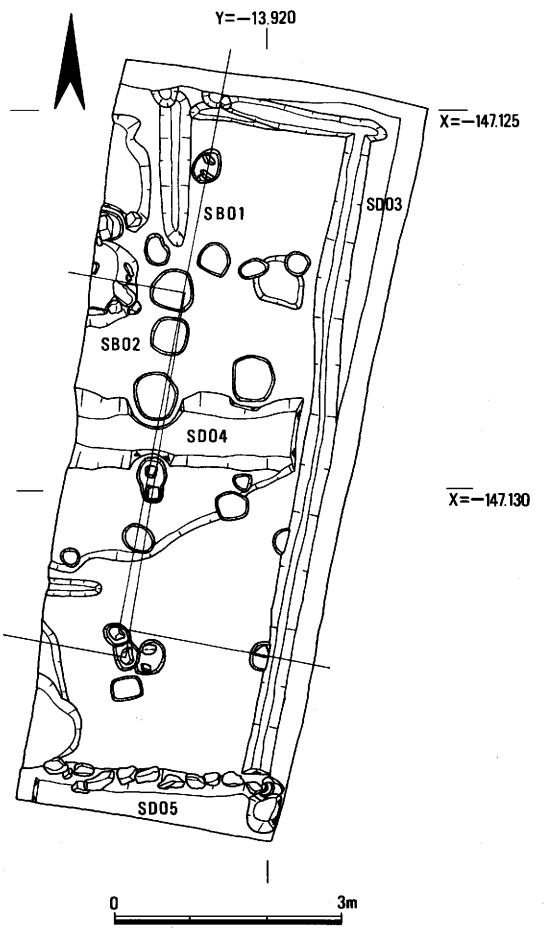
(3)　第８次調査

本調査は奈良市高畑町1340－1において実施した牧野興司氏届出の店舗付住宅建設に伴う事前の発掘調査である。当地は新薬師寺旧境内の推定復元によれば境内地北端にあたり、寺域の北を限る築地等の施設の存在が予測される場所であるが、平成４年度に本調査地の東約50ｍのところで実施した第４次調査では北限の築地等は検出することができなかった。今回の発掘区は東西3.5ｍ、南北10ｍ（35㎡）で、調査期間は平成７年１月９日から１月19日までである。発掘区内の基本的な層序は、上層から暗茶褐色土、褐茶色土、茶灰色土と続き、現地表下約0.9ｍで黄橙色土の地山にいたる。遺構はすべて地山の上面で検出した。遺構検出面の標高は概ね122.3ｍである。検出した遺構には礎石建物、溝、土坑がある。

ＳＢ01は東西３間（6.2ｍ）、東西１間（2.0ｍ）までを検出した礎石建物である。北、東ともに調査区外へ続く。柱間寸法は南北が北から2.1ｍ－2.0ｍ－2.1ｍである。ＳＢ02は南北３間（4.8ｍ）を検出したが、調査区外西へ続く。柱間寸法は1.6ｍ等間である。ＳＤ03は幅0.4ｍ、深さ0.1ｍの素掘溝である。ＳＤ04は南北1.0ｍ、深さ0.3ｍの素掘溝である。ＳＤ05は東西溝で、北肩には人頭大の石が並べられる。南肩は調査区外である。幅0.8ｍまでを検出した。深さは0.3ｍである。

出土遺物には土器類（土師器・須恵器・奈良三彩・黒色土器・瓦器・陶器・磁器）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦）があり、それらの年代からＳＢ01、ＳＢ02、ＳＤ03は12世紀中頃、ＳＤ05は15世紀初頭を前後する時期、ＳＤ04は９世紀前半に位置づけられる。

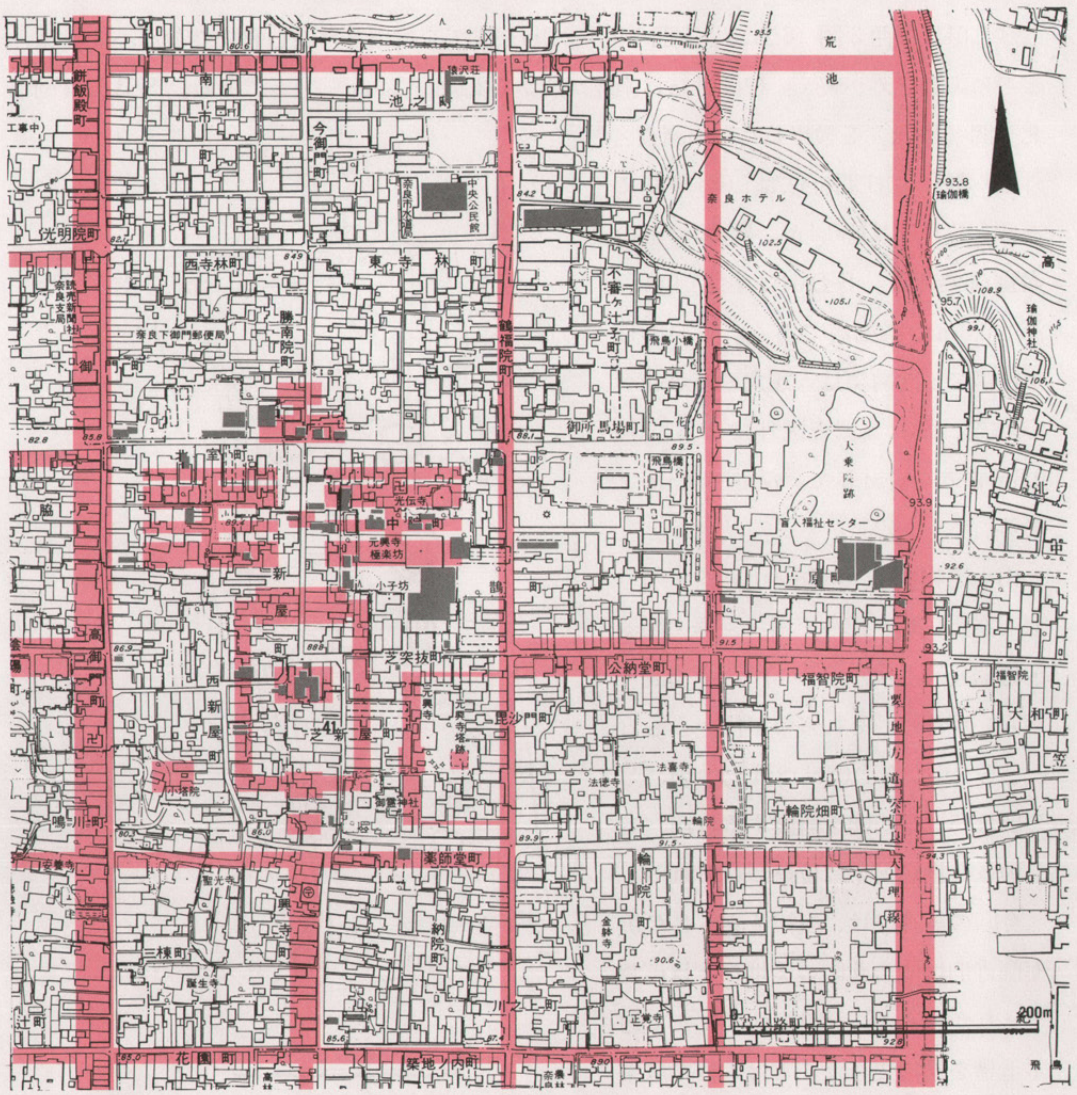
今回の調査では、当初予測された新薬師寺旧境内の北限の築地などは確認できなかったが、９世紀前半にまで遡る遺構を検出できたことは大きな成果であったといえよう。　（池田裕英）



第８次調査　遺構平面図（１／100）

3　元興寺旧境内の調査

元興寺旧境内では、今年度第41次の１件の調査を行なったのみである。個人住宅建設に伴う調査で、元興寺金堂の南東に隣接する所である。金堂は昭和49年に奈良県教育委員会が、平成元年には奈良市教育委員会が調査を行なっており、基壇や礎石が確認されている。また今年度の小規模調査でも、原位置を止めていなかったが、金堂の礎石を確認している。第41次調査では奈良時代の遺構を確認出来なかったが、16世紀の整地土を確認し、町並の変化を知る資料が得られている。

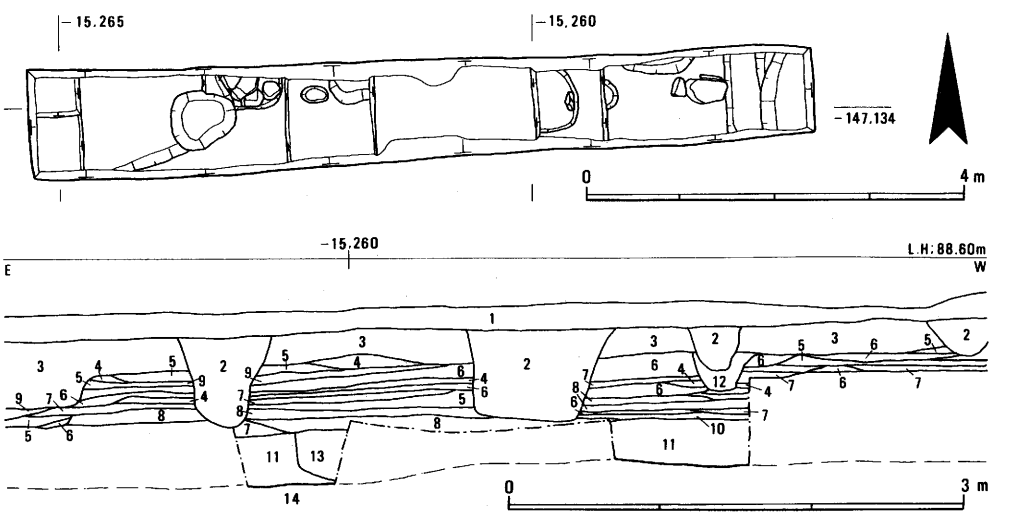


元興寺旧境内　発掘調査位置図（１／5000）

第41次調査

本調査は、奈良市芝新屋町21－5において実施した、吉川恵次郎氏届出の個人住宅建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、金堂の南東隣接地にあたり、金堂に関連した遺構の検出を目的として実施した。調査は、東西7.5m、南北１ｍの東西に細長い発掘区を設定して行なった。調査期間は、平成６年４月15日から同月20日までである。なお、調査地が狭く、十分な排土置場が確保できなかったため、地山まで掘削できたのは一部にとどまる。

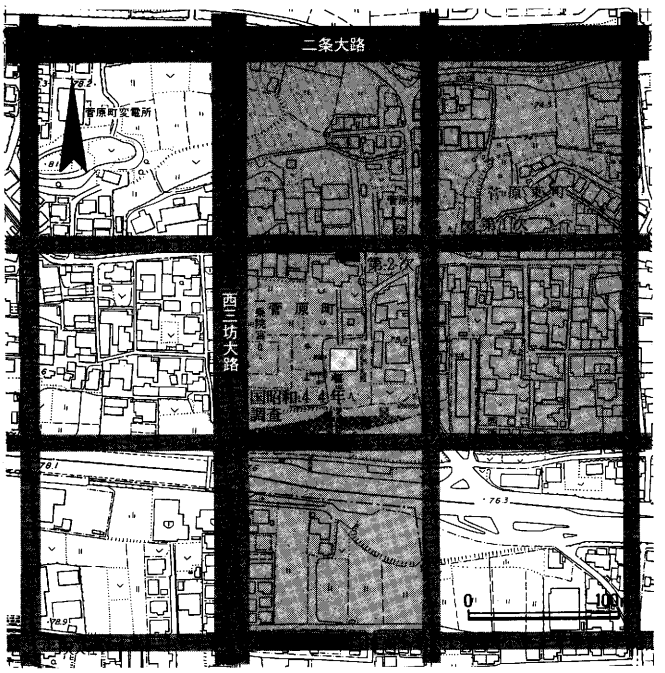
発掘区内の基本層序は、表土の下に暗褐色土（0.2m）、数cmごとにつきかためた整地土層（0.5m）、灰褐色土（0.3m）と続き、標高87.2m付近で黄褐色土の地山となる。整地土層は、北西に降る斜面の上に堆積している。遺構は、整地土層上面と灰褐色土上面から掘り込まれている。地山面では遺構が検出できなかった。整地土層上面では小穴３個と土坑１、灰褐色土上面では小穴３個を検出した。発掘区西端で検出した土坑は、全体は明らかでないが、東西1.2m以上、南北１ｍ以上である。整地土層上面で検出した小穴のなかには、３個の石が置かれており、柱の礎板として使われた可能性がある。出土遺物には、土師器、陶磁器、瓦質土器、瓦、砥石があり、整地土層から16世紀後半の唐津焼が、灰褐色土層から16世紀中頃の土師器皿・羽釜、瓦質土器・擂鉢が出土した。また、軒瓦の点数は軒丸瓦２点、軒平瓦１点で、軒丸瓦はともに巴文、軒平瓦は江戸時代以降のものである。遺構、遺物ともに奈良時代のものは検出できなかった。（森下浩行）



1　表土（茶褐色土・黒褐色土）　4　淡茶色土　8　黄茶褐色土　12　茶褐色土
2　撹乱土　5　茶褐色土　9　暗茶色土　13　黄茶褐色土
3　暗褐色土　6　黒色土　10　赤褐色焼土　14　黄褐色土
7　茶褐色土　11　灰褐色土

第41次調査　発掘区平面図（上　1／80）、発掘区南壁土層図（下　1／50）

4　菅原寺旧境内の調査　第２次



菅原寺旧境内発掘調査位置図（１／5000）

Ⅰ　はじめに　本調査は奈良市菅原町516-１・２・３において実施した喜光寺庫裏建築に伴う事前発掘調査である。菅原寺は養老五年（721年）に寺史乙丸が居宅を行基に施し精舎としたことから創まると伝えられている。昭和44年には、重要文化財に指定されている現在の本堂の修理に関わって周辺の調査が行われている。その成果から今回の発掘区は伽藍中軸線上、かっての金堂の北65ｍの位置にあることがわかる。調査面積は100㎡、調査期間は平成６年９月５日から10月１日までである。

Ⅱ　検出遺構　発掘区内の層序は、発掘区東半で暗褐色土、黄白色土、黄灰褐色土、白色土、淡灰色土、淡黄褐色土と続き黄灰色土の地山となる。地山上面の標高は75.45ｍである。遺構は奈良時代から江戸時代までの各時期のものがある。

奈良時代の遺構　**ＳＢ01**　東西２間以上、南北２間以上の掘立柱建物で、柱間寸法は東西1.8ｍ、南北2.1ｍである。柱穴から８世紀の土器が出土した。

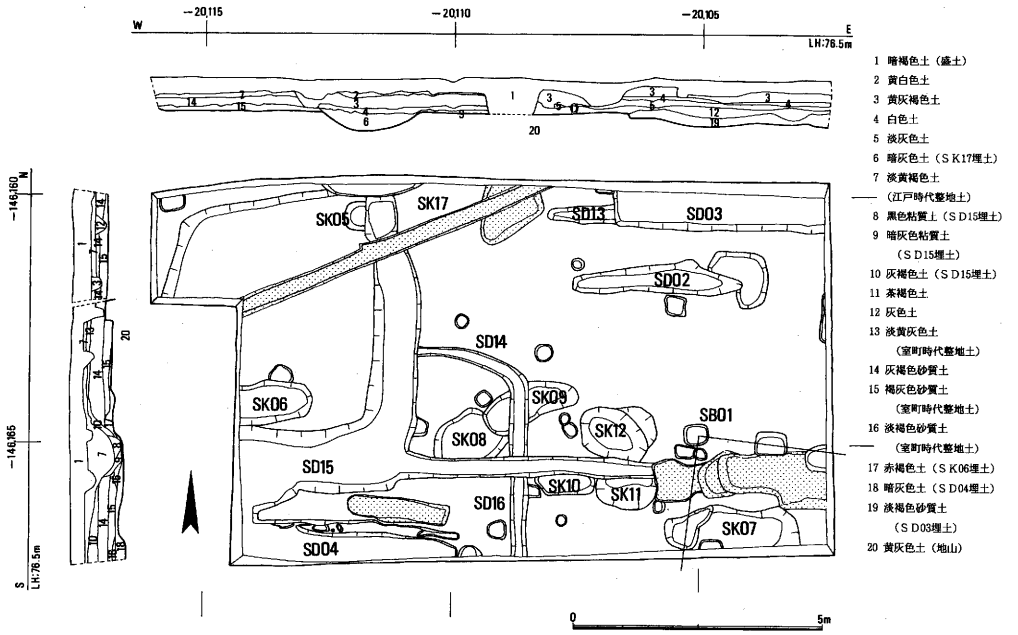
ＳＤ02　発掘区北辺に沿って検出した東西方向の素掘溝。幅0.58ｍ、深さ0.21ｍ、長さ3.35ｍ以上である。埋土は茶灰色土で８世紀の土師器、須恵器が出土した。

平安時代の遺構　**ＳＤ03**　発掘区北東で検出した東西方向の素掘溝。幅0.7ｍ以上、深さ0.25ｍ、長さ4.15ｍである。埋土は淡褐色砂質土で９世紀の黒色土器Ａ類が出土した。

鎌倉時代の遺構　**ＳＤ04**　発掘区南西で検出した東西方向の素掘溝。幅0.78ｍ以上、深さ0.21ｍ、長さ4.27ｍ以上である。埋土は淡灰色土で13世紀の瓦器、巴文軒丸瓦が出土。

ＳＫ05　発掘区北辺西寄りで検出した平面不整形掘形の浅い土坑。南北0.6ｍ、深さ0.1ｍである。埋土は灰色土で13世紀前半の瓦器椀が出土した。

室町時代の遺構　**ＳＫ06**　発掘区西辺で検出した平面不整形掘形の土坑。南北0.88ｍ、東西1.44ｍ以上、深さ0.17ｍである。埋土は淡黄灰色土で14世紀の瓦質土器鉢が出土した。



第２次調査　遺構平面図、西壁・北壁土層図（１／150）

ＳＫ07　発掘区南辺東で検出した平面不整形掘形の土坑。東西2.2ｍ、南北0.87ｍ以上、深さ0.3ｍである。埋土は淡褐色砂質土で層位から室町時代の遺構であることがわかる。

ＳＤ13　発掘区北辺で検出した東西方向の素掘溝。幅0.38ｍ、深さ0.06ｍ、長さ1.33ｍ以上である。埋土は暗灰色土で15世紀の瓦質土器擂鉢が出土した。

ＳＤ14　発掘区南辺から中央にかけて南から西へ鉤の手に曲る素掘溝。幅0.85ｍ、深さ0.77ｍである。埋土は淡黄灰色土で16世紀の瓦質土器擂鉢が出土した。重複関係から溝ＳＤ15・16より古いことがわかる。

江戸時代の遺構　**ＳＤ15**　発掘区西半で検出した西から北へ鉤の手に曲る素掘溝。幅1.35ｍ、深さ0.5ｍである。埋土は赤褐色土で、瓦質土器、陶磁器が出土した。

ＳＤ16　発掘区南半で検出した東西方向の素掘溝。幅0.4ｍ、深さ0.35ｍである。埋土は茶灰色土で、層位から江戸時代の遺構であることがわかる。

ＳＫ17　発掘区北辺で検出した平面不整形掘形の土坑。南北0.3ｍ以上で、深さ0.35ｍである。埋土は茶灰色土で、層位から江戸時代の遺構であることがわかる。

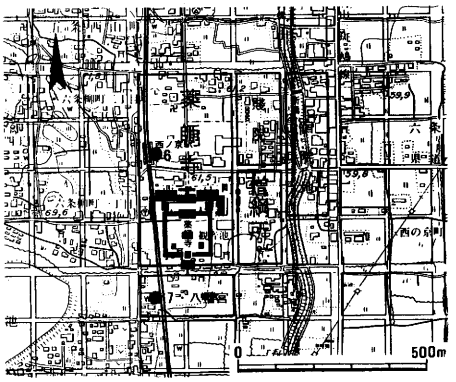
時期不明の遺構　発掘区南半中央で検出した土坑ＳＫ07～11がある。いずれも南北0.8～1.0ｍ、東西1.2～1.9ｍの平面不整形掘形で重複関係からＳＤ14・16より古い。

出土遺物には遺物整理箱７箱分の奈良時代から江戸時代までの土器と瓦がある。瓦には鎌倉時代の「菅原寺」銘軒平瓦、巴文軒丸瓦がある。

今回の調査では直接伽藍に関わる遺構を検出できなかった。しかし検出した建物ＳＢ01は菅原寺境内の変遷を考える上で数少ない資料になるものと言えよう。　（秋山成人）

5　薬師寺旧境内の調査　第７次

平成７年度、薬師寺旧境内においては２箇所の発掘調査を実施した。第６次調査は西ノ京町字金岡408番地において実施した、近鉄西の京駅駅舎地下化に伴う事前の発掘調査である。調査期間は平成７年２月27日から３月９日まで、調査面積は60㎡である。第７次調査は西ノ京町417－３番地において実施した、市道西の京六条線改良工事に伴う事前の発掘調査である。調査期間は平成７年３月15日から３月22日まで、調査面積は22㎡である。今回は第７次調査のみ概要を報告する。

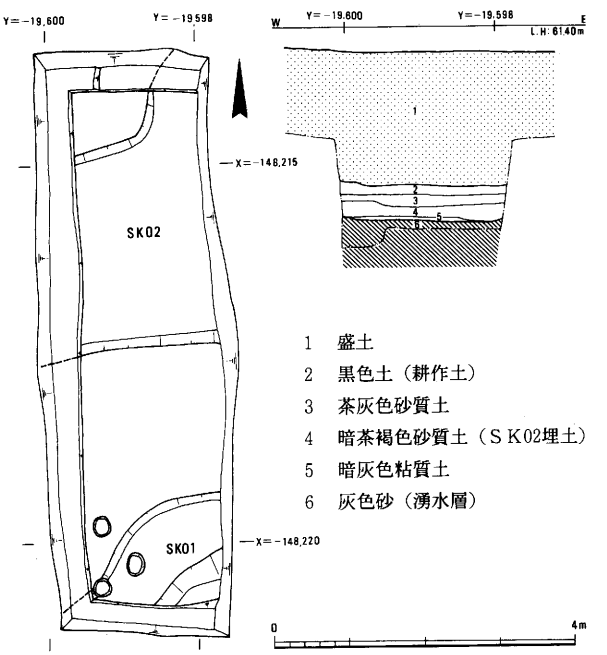


薬師寺旧境内発掘調査位置図（Ｓ＝１／20000）

第７次調査　薬師寺の伽藍復元では「花苑、八幡院」に推定される地点である。周辺の地形は西の京丘陵から東へ延びる谷筋で、西200ｍにこの谷を塞ぎ止めてつくられた大池がある。調査地は養魚池であったものが資材置場として造成されており、造成の際には試掘調査（市91－19 次）を実施している。この調査では時期不明の浅い溝、土坑を検出した。層序は地表から1.8ｍは盛土、その下は黒色土、暗灰褐色土、茶灰色砂質土、明黄褐色粘土の順である。遺構面は明黄褐色粘土上面（標高60.1ｍ）である。これより下層は遺物を含まない灰色砂の湧水層である。検出した遺構には土坑２と小柱穴がある。

ＳＫ01・02 は平面が不整形な浅い平底の土坑である。埋土からは、奈良時代から平安時代末の瓦片と土師器、須恵器片、瓦器椀片が少量出土した。小柱穴は重複関係から土坑より古い。出土遺物がなく、時期不明である。

（篠原豊一）



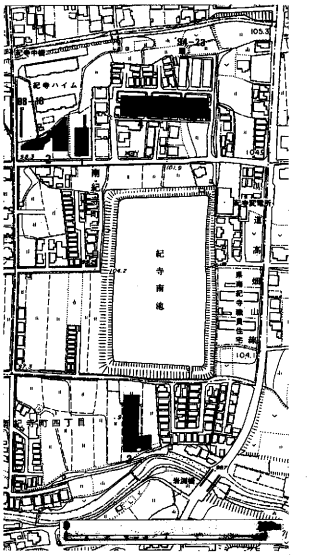
第７次調査　遺構平面図・北壁堆積土層図（Ｓ＝１／100）

Ⅲ　その他の調査

1　南紀寺遺跡の調査　第４次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市南紀寺町三丁目293において、第14号市営住宅の建替に伴って実施した事前発掘調査である。遺跡は、能登川と岩井川とにはさまれた扇状地にあり、東から西へ緩やかに下降する斜面に位置している。これまでに能登川南岸で第１次・第２次調査を、岩井川の北岸で第３次調査を実施している。第１次・第２次調査では、石積によって護岸された古墳時代の濠と島状の方形区画を、第３次調査では同時代の集落を検出している。今回の調査地は、第１次・第２次調査地の北東にあり、第１次・第２次調査で検出した石積で護岸された濠の範囲が確認できるものと予測された。調査期間は平成５年11月９日から平成６年３月16日である。調査面積は、1700㎡（東西85ｍ、南北20ｍ）である。



南紀寺遺跡調査地位置図（1／7500）
（数字は調査次数）

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本層序は、東部では、上から盛土、耕作土、床土、灰色土、暗灰色土とつづき、標高約101.5ｍ付近で灰色砂、あるいは灰色砂礫となる。この上面が遺構面である。ただし、発掘区北東部には谷状の窪地がある。茶褐色砂質土、淡茶灰色砂質土などで埋まっており、整地、あるいは自然に埋まったと考えられ、この層の上面で遺構を検出した。この層は土師器を含むが、ごく細片のため、その時期は不明である。また、西部では、盛土、撹乱土の下に、灰色粘土層が４～５層つづき、標高98.5ｍ付近で灰色粘土、あるいは灰色砂礫となる。この上面が遺構面であるが、中世頃の水田のためか、やや削平されており、上面から中世の土器が出土した。なお、遺構面下の灰色砂から弥生時代前期の土器が出土している。

検出した遺構には、古墳時代から飛鳥・奈良時代のものがあるが、遺構面上で中世の遺物が出土したことから、時期不明の小穴などは中世の遺構の可能性もある。以下、古墳時代～飛鳥時代の遺構について、５世紀代と６世紀以降とに分けて説明する。

５世紀代の遺構　井泉、溝、濠がある。

ＳＸ01　発掘区北東部で検出した一辺4.5ｍ、深さ0.7ｍの平面方形の井泉である。主軸は磁北で41°西に振れている。掘形の断面は逆台形で、底は平坦である。底面の中央やや南東寄りに直径1.8ｍ、深さ0.25ｍの円形水溜を設けている。掘形の斜面には直接礫を用い

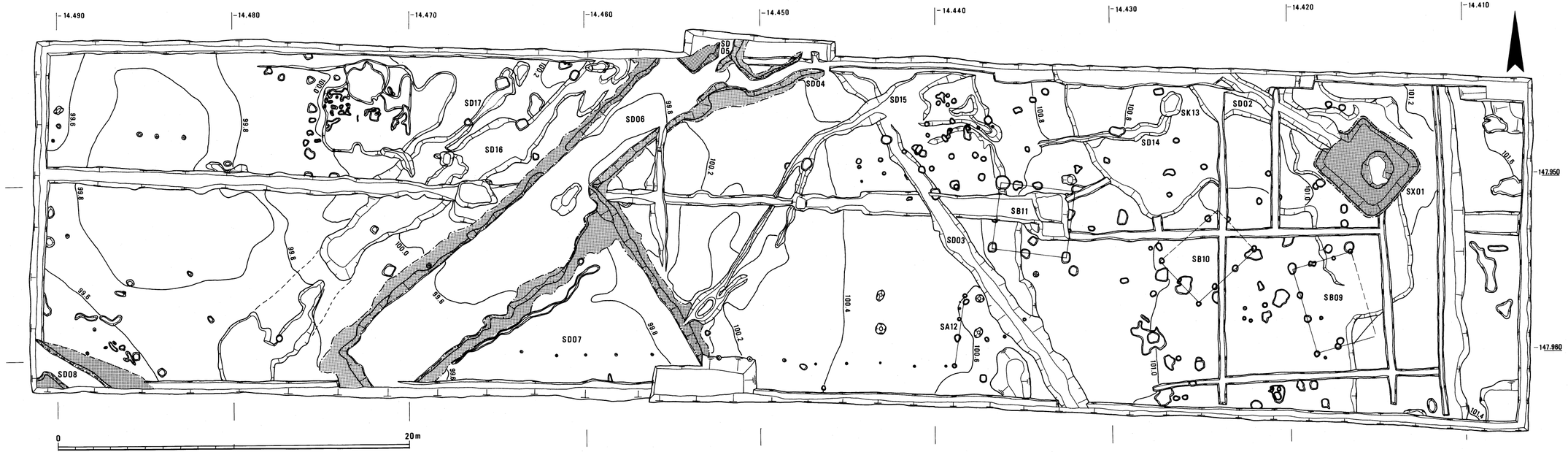
て擁壁を施している。基底部にはやや大きめの礫を置き、その上には拳大の礫を小口積みしている。北西壁の中央には後述する溝ＳＤ02が取りついており、水溜に溜まった湧水はこの溝ＳＤ02に流れていく仕組みになっている。なお、四周のうち、北西壁の北東側のみ掘形と石積の間に礫を裏込めしている。溝ＳＤ02をはさんで、北西壁の南西側と北東側とが一直線をなさずにずれているのは、このためである。また、底面には主に平たい礫を敷きつめているが、水溜部では、地山の細かな砂礫が露出した状態になっている。湧水は北東壁の南寄り底面にみられ、調査当時もこんこんと水が湧き出る状況であった。そのため、北東壁の南半は当初の壁が崩れており、また、水溜部も中央よりやや東側が侵蝕されていた。埋土は上から灰色砂、明灰色砂、灰色砂、暗灰色粘土であり、暗灰色粘土が水溜部の埋土である。暗灰色粘土には種子が大量に含まれていた。また、その上の砂層や積石の間隙から土師器、須恵器が出土した。最下層の暗灰色粘土から土器が出土していないため、明確にはしがたいが、上層の出土土器からみて、遅くとも５世紀中頃をややさかのぼる頃に造られ、５世紀の終わり頃には埋まったものと思われる。

ＳＤ02　井泉ＳＸ01の北西壁中央に取りつく北西－南東方向の素掘溝である。長さ7.5ｍ分を検出した。幅は1.7～2.0ｍ、深さは約0.5ｍである。方向は磁北から約52°西に振れており、ＳＸ01の方向とややずれがある。底面は南東から北西に降る。発掘区外北につづくが、屈曲して後述するＳＤ05につながるものと思われる。

ＳＤ03　発掘区のほぼ中央で検出した北西－南東方向の素掘溝である。長さ24.5ｍ分を検出した。幅は1.0～1.6ｍ、深さは0.1～0.4ｍである。溝底には凹凸があり、深い部分と浅い部分とでは約0.3ｍの差がある。埋土は、浅い部分は暗灰色砂質土のみであるが、深い部分にはその下に礫層があり、敷かれていた可能性がある。したがって、本来の溝底には凹凸がなかったものと思われる。なお、本来、礫が敷かれていたと思われる部分は溝底に砂質土が露呈し、それ以外の溝底は礫が露呈していた。砂質土の部分に礫を敷き、溝底全体が礫敷であるかのようにみせかけたのかもしれない。方向は磁北から西に27°振れている。底面は南東から北西に降る。溝の北端は後述するＳＤ04の東端に接続する。

ＳＤ04　発掘区中央北端で検出した石積で護岸した北東－南西方向の溝である。長さ4.5ｍ、幅約1.0ｍで、深さはもっとも深い西端で0.3ｍ、浅い東端で0.1ｍである。方向は磁北から東に約75°振れている。底面は北東から南西に降る。断面は逆台形を呈し、石積は、両岸ともに基底部に0.2～0.3ｍ大の大きな石材を横に並べ、その上にそれよりもやや小さい石材を小口積している。東端で素掘溝ＳＤ03と接続し、西端は後述するＳＤ05と合流してＳＤ06につながる。ＳＤ03に流れ出た水は、ＳＤ04を経てＳＤ06に流れ出る仕組みである。

ＳＤ05　発掘区中央北端で検出した石積で護岸した北東－南西方向の溝である。長さ3.0



第４次調査発掘区　平面図（１／200　網目は石積・石敷）

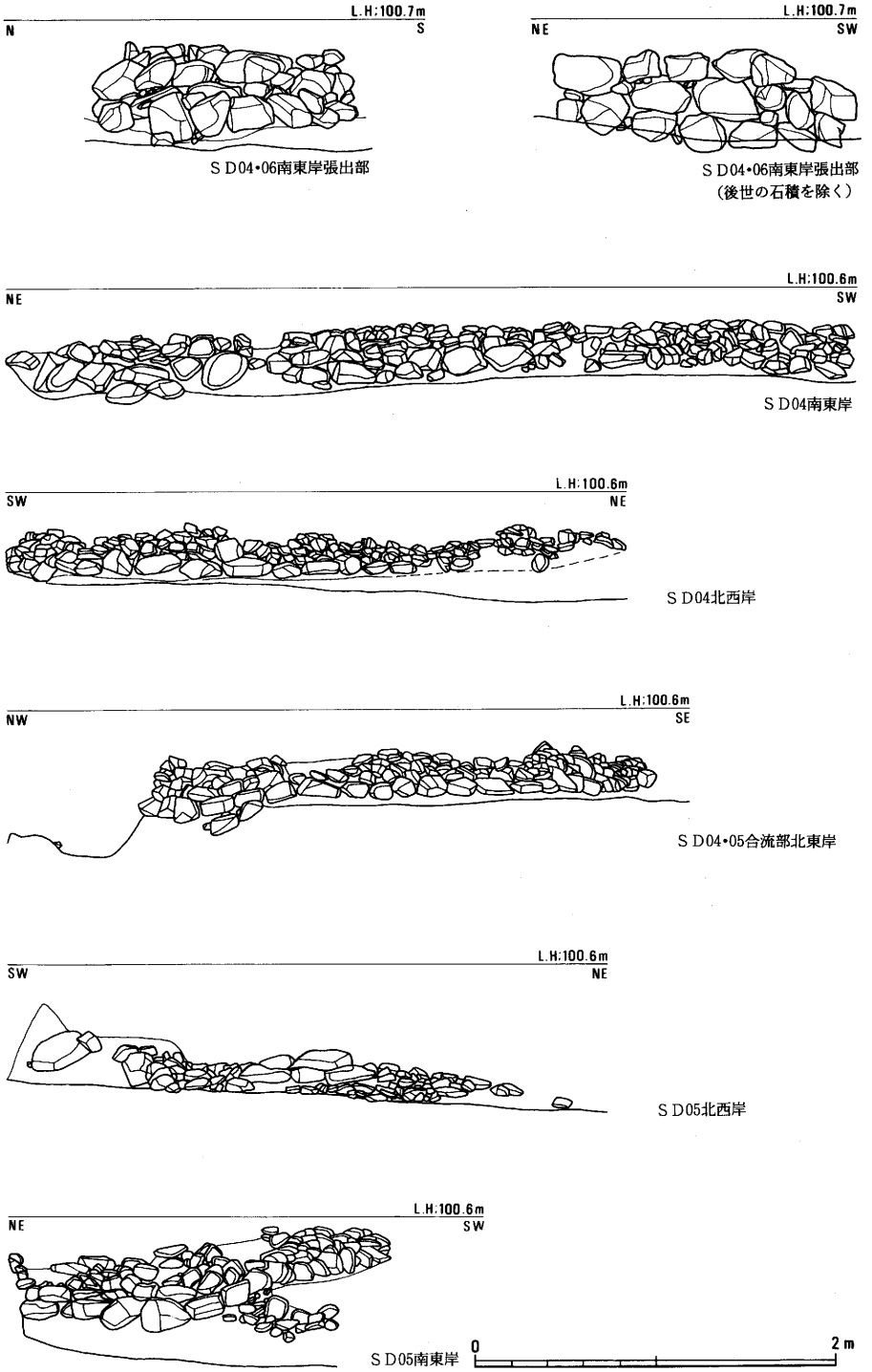
m分を検出した。幅1.0m、深さ0.45mである。磁北から東に44°振れている。底面は北東から南西に降る。南東岸の石積はよく残存しており、基底から4～5段（高さ0.4m）が残っている。石積の手法はSD04と同様である。しかし、北西岸の石積は、流水で侵蝕されて崩れており、残っているのは基底部の1段ほどである。おそらくSD02が発掘区外で屈曲してこの溝につながるものと思われる。

SD06　発掘区中央で検出した石積で護岸した北東－南西方向の溝である。北東、北西、南東の三辺の岸を検出した。長さ8.5mである。北西、南東の両岸は平行せず、南西に広がる。幅は北東端が狭く3.0m、南西端が広く4.2mである。断面はやや底の丸い逆台形で、深さ0.5mである。溝の主軸は磁北から東に57°振れている。底面は北東から南西に降る。北東岸と南東岸が接する隅部にSD04・SD05がつながり、南西端は後述する濠SD07の北東岸と北西岸が接する隅部につながる。石積は、北東岸の残存状態は悪いが、北西岸と南東岸ではよく残っている。石積の手法は部分によって異なる。SD04・05と同様に基底部にやや大型の石材を置き、その上をやや小さい石で小口積する部分が多いが、基底部からやや小さい石を積み重ねる部分、基底部の石材を縦位に用いてある部分、溝の内側にさらに川原石を並べてある部分がある。数mごとに異なっていることから、作業の単位があるものと思われる。

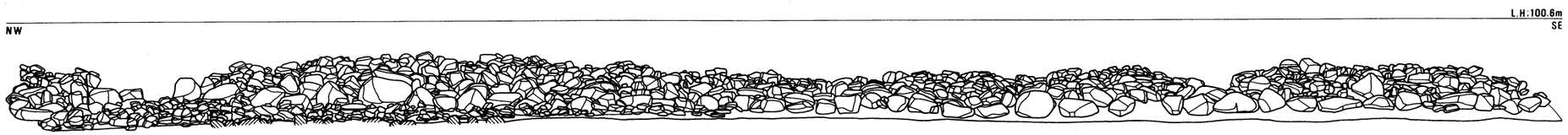
なお、SD06とSD04との接続部には、長さ2.2mにわたって南東岸から0.8m張り出している。この張出部には他の石積よりもやや大型の石材が使われ、溝内からみると高さ0.5mの壁を構築しているように見える。張出部の作り方をみると、まず、SD04南岸とSD06南東岸を一連のものとしてやや弧を描くように掘削したのち護岸の石積を施し、その後、張出部の基底部に人頭大の石を円弧状に据える。そして、基底石と護岸の石積との間に裏込めの石材を入れながらやや大型の石材を2～3段積み上げて壁を構築している。なお、張出部の基底石の外側には、さらに大型の石材を円弧状に一段分ならべている。これらは築造時のものでなく、後に付け加えられたもので、後述する閉塞時のものであるかもしれない。

また、SD07との接続部では、SD06を埋めるかのように大量の礫が投棄されていた。おそらく意図的に閉塞しようとしたものと思われる。SD06の埋土は、上層（青灰色細砂）と下層（淡灰色粗砂）とに分かれており、その間に薄い灰色粘土層がある。上層は閉塞後に埋まったものである。上層からは7世紀の土器、瓦が出土しており、7世紀までには閉塞され、その後、埋まったものと思われる。

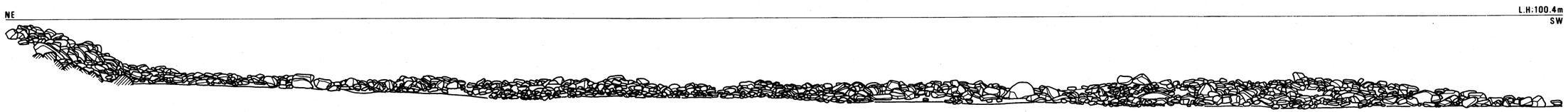
SD07　発掘区中央南半で検出した石積で護岸した濠である。北西岸18.0mと北東岸14.0m分、南西岸3.5m分を検出した。北西岸と北東岸とが接する隅部でSD06と接続する。北西岸はSD06北西岸と一連に造られており、長さは合わせて26.5mである。北東岸と南



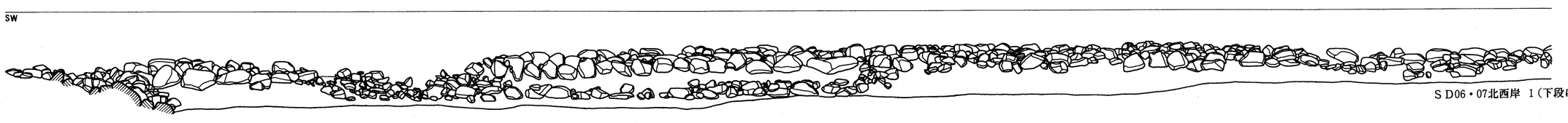
溝SD04・SD05岸石積立面図（1／40）



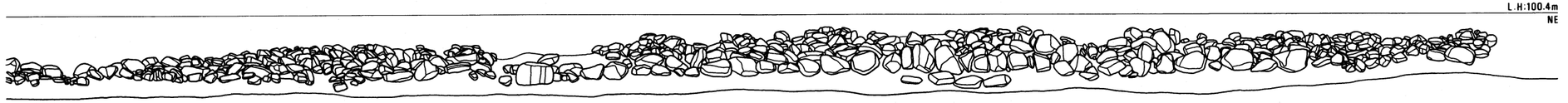
SD07北東岸



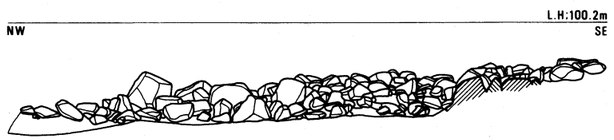
SD07洲浜状石積



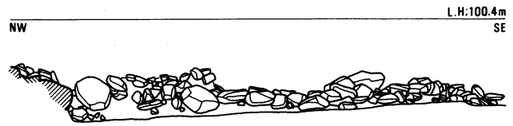
SD06・07北西岸 1（下段に続く）



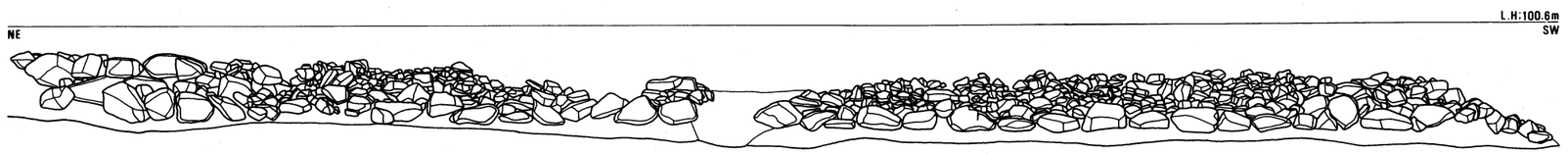
SD06・07北西岸 2



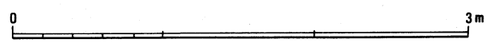
SD07南西岸



SD06北東岸



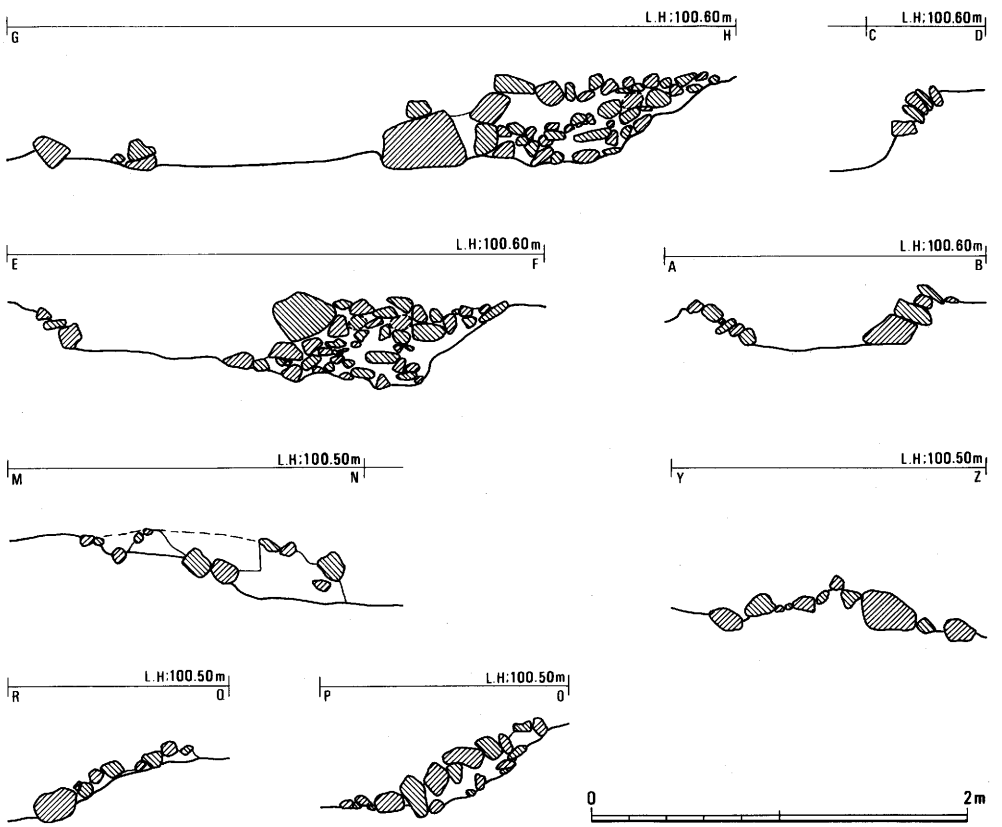
SD06南東岸



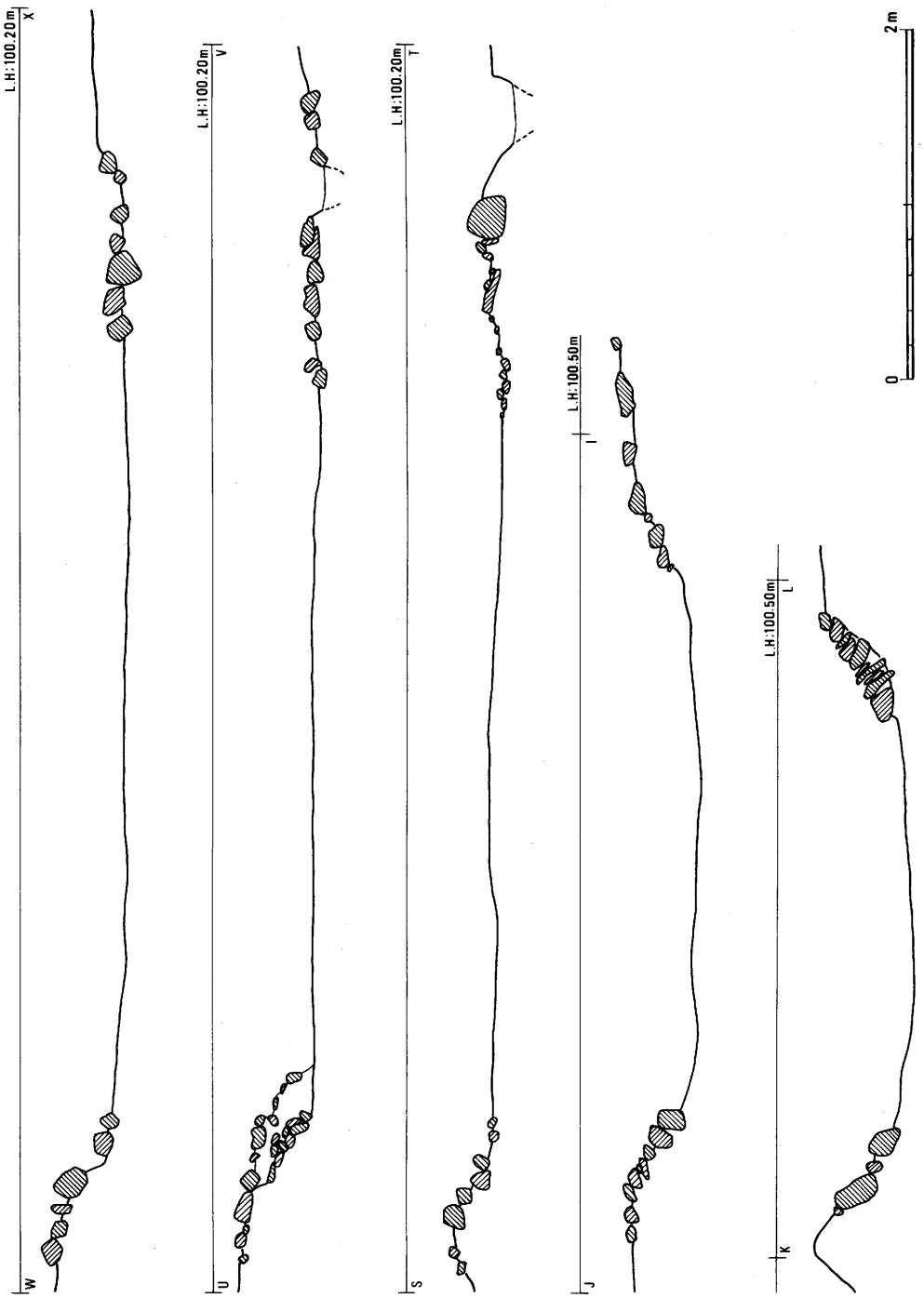
溝SD06・濠SD07岸石積　立面図（1／40）

西岸はほぼ平行しているが、北西岸と北東岸・南西岸は直交せず、北西岸と北東岸との交点が成す角度は80°である。北西岸がＳＤ06北西岸と一連に造られているためであろうか。北西岸の磁北に対する振れは、ＳＤ06北西岸と同様に東へ55°で、北東岸・南西岸の振れは西へ26°である。岸は斜面を成し、底は平らである。深さは約0.5ｍであるが、ＳＤ06からつづく北西岸寄りの幅約4.5ｍのみが溝状に深くなっており、さらに約0.1ｍ深くなる。

石積は、南西岸と北西岸の一部を除いて比較的残存状態が良い。北東岸の石積は、基底部にやや大型の石材を並べ、その上に小さい石材を小口積する。基底石は、ＳＤ06と接続する北寄りで大きくなる傾向があるが、ＳＤ06南東岸の基底石とはつながらない。ＳＤ06南東岸との接続部から南へ2.8ｍまでは、表面に見えている基底石の裏側にさらに一列、やや大型の石材を並べており、この石列とＳＤ06南東岸の基底石がつながっている。北西岸の石積は、ＳＤ06北西岸から続く約７ｍまでは同様に基底部にやや大型の石材が並べられ、その上にやや小さい石材を小口積している。それ以西は石積手法が異なる。地山に含まれる石との区別が困難になるため、不明確な部分はあるが、地山に含まれる石を利用しており、基底部に石材を並べ、それより上を小口積にしている部分もある。さらにそれを



溝ＳＤ04、05、濠ＳＤ07断面図（アルファベットは付図表示に対応　1／40）



溝ＳＤ06・濠ＳＤ07断面図（アルファベットは付図表示に対応　1／40）

覆うようにやや大型の平たい石材を横方向に二列並べている部分もある。なお、北西岸寄りの溝状に深くなっている部分の南東岸には、バラス状の細かい礫を洲浜状に敷き、濠の浅い部分と区画している。また、この洲浜状の石敷に沿って、濠の浅い部分に長さ10m、幅0.05～0.15m、深さ0.15mの素掘溝がある。性格は不明である。

濠内から土師器、須恵器、砥石が出土した。出土土器からみて、SX01と同様に5世紀中頃をややさかのぼる頃までに造られ、また、濠の浅い部分からは、飛鳥時代の土器が出土していることから、SD06と同様にその頃まで存続していたものと思われる。

SD08　発掘区南西隅で検出した石積で護岸した北西－南東方向の溝である。検出した部分は溝の屈曲部にあたり、北西端で南西に屈曲する。長さ3.2m分を検出した。幅は1.3m、深さ0.15mである。南西岸の石積は基底石のみ残存している。ほぼ人頭大の石が小口を内に向けて置かれ、屈曲部ではやや大きい石が用いられている。北東岸の石積は、残存している部分から判断すると、南西岸と同様に、基底石は人頭大の石を小口を内に向けて置かれていたものと思われる。その上にさらに1～2段分積まれていた可能性があるが、高さが低平なものであっただろう。断面は箱形を呈していたと推測される。石積と岸掘形との間は、拳大から人頭大の石で裏込めされている。溝の磁北からの振れは西へ47°であるが、北東岸の石積掘形の方向はそれとずれており、西へ62°振れている。

6世紀以降の遺構　掘立柱建物・塀、土坑、溝がある。

SB09　発掘区東で検出した掘立柱建物である。桁行は3間（5.0m）で、梁間は3間（3.5m）分検出した。柱穴が比較的小さいことから、大型の建物にはならず、梁間は検出した3間までであったとみられる。柱間は桁行が1.4～2.1m、梁間が1.1～1.3mである。棟方向は磁北から西へ9°振れている。

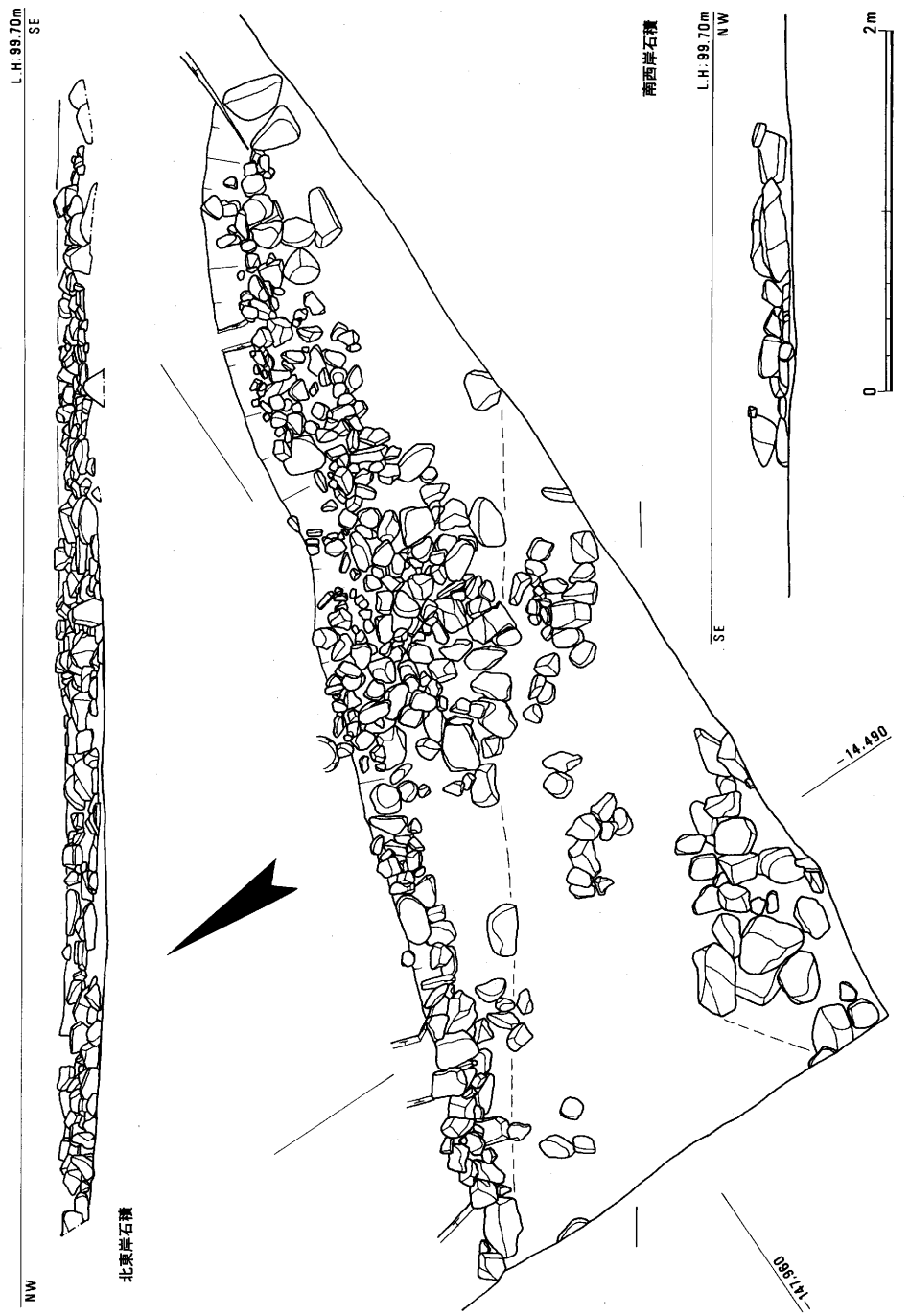
SB10　SB09の西で検出した掘立柱建物である。桁行3間（4.4m）分、梁間2間（3.2m）分の、南東側柱列と南西妻柱列を検出した。柱穴が比較的小さいことから、大型の建物にならず、桁行3間、梁間2間の建物であったとみられる。柱間は桁行1.1～1.5m、梁間1.5～1.7mである。棟方向は磁北から東に54°振れている。

SB11　発掘区中央やや東で検出した掘立柱建物である。東西2間（4.2m）、南北2間（3.8m）である。柱間は東西が西から1.9m、2.3m、南北が北から2.2m、1.6mである。建物の棟方向は磁北から東へ15°振れている。

SA12　SB12の南で検出した掘立柱塀である。南北3間（4.0m）。柱間は北から1.4－1.1－1.5mである。方向はSB11と同じで、磁北から東へ15°振れている。

なお、上記の掘立柱建物・塀以外に、建物としてまとまらない柱穴が数多くあり、これ以外にも建物・塀が存在したものと思われる。

SK13　発掘区東で検出した平面楕円形の土坑である。長径1.5m、短径1.2m、深さ0.16



溝ＳＤ08平面図・立面図（１／40）

mである。

ＳＤ14　ＳＫ13の南で検出した東北東－西南西方向の素掘溝である。検出したのは8.2m分であるが、さらに緩やかに曲ってのび、後述するＳＤ15に合流していたかもしれない。幅0.1～0.3m、深さ0.05～0.1mであり、西へいくほど狭く、深くなる。底面は東北東から西南西へ降る。東端で北に屈曲してすぐにＳＫ13に接続する。ＳＫ13との重複関係がみとめられなかったため、ＳＫ13とＳＤ14は同時期の一連の遺構と考えられる。

ＳＤ15　発掘区中央で検出した北東－南西方向の素掘溝である。長さ23.5m分を検出した。幅0.3～1.2m、深さ0.1～1.15mである。南西にいくほど狭く、深くなる。途中でやや屈曲し、2条に分かれ、さらに合流する部分があることから、時期の異なる溝が重複している可能性がある。底面は北東から南西に降る。北端は発掘区外にあり、南端は濠ＳＤ07南東岸の石積上部を壊して接続し、流れた水はＳＤ07に注ぐ仕組みである。重複関係から、ＳＤ03より新しい。飛鳥時代の須恵器、土師器が出土した。

ＳＤ16　ＳＤ06・07の北で、それに平行する北東－南東方向の素掘溝である。一部途切れる部分があるが、一連のものと考えられる。長さ30m分を検出した。幅は0.6～2.7mであるが、部分的に削平されていると考えれば、もとは2.5m前後であったと思われる。深さ0.1m前後である。南端ではＳＤ07を囲むように屈曲する可能性がある。

ＳＤ17　ＳＤ16の北で検出した北東－南西方向の素掘溝である。長さ6.5m分検出した。幅0.4～0.8m、深さ0.05mである。底面は北東から南西に降る。南端でＳＤ16とつながるが、重複関係はみとめられなかった。

Ⅲ　出土遺物

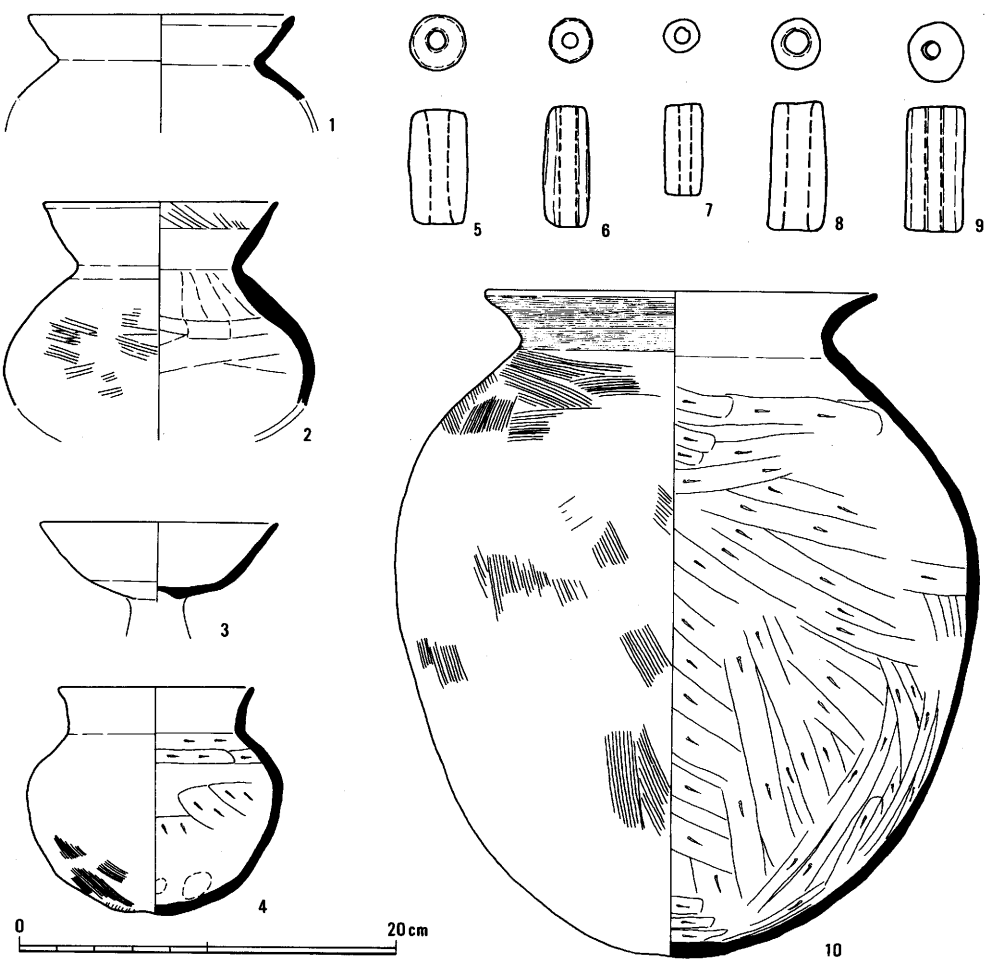
出土遺物には、縄文時代の石器（有茎尖頭器）・剥片、弥生時代前期の土器、古墳時代の土師器・須恵器・石製品（砥石）・土製品、飛鳥時代の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器、鎌倉時代の土師器・瓦器、時期不明の鉄釘がある。これらのうち、古墳時代・飛鳥時代の土師器、須恵器、土製品の一部について、以下に記す。

1・2・5～7はＳＤ07から、3はＳＸ01から、4・10はＳＸ01最上層（灰色砂層）から、8はＳＤ06から、9はＳＤ08から、11～23はＳＤ15から出土した。

1～4・10は土師器、5～9は土製品である。1は甕の口縁部である。口径は、小破片であるため判然としないが、14cm前後と思われる。口縁部と体部との境は、くの字に屈曲し、口縁部はわずかに内彎気味に外方へ広がる。端部は内側に肥厚する。調整は、体部外面にわずかにハケメがみられる。2は壷である。底部を欠失している。口径12.4cm。体部はやや下ぶくれの球形で、口縁部は屈曲してまっすぐに外方へ広がる。調整は、口縁部内面がハケののちヨコナデ、外面がヨコナデである。体部は、内面がヨコナデ、外面がハケである。3は高杯の杯部である。口径12.5cm。口縁は外方にまっすぐに広がる。調整は不

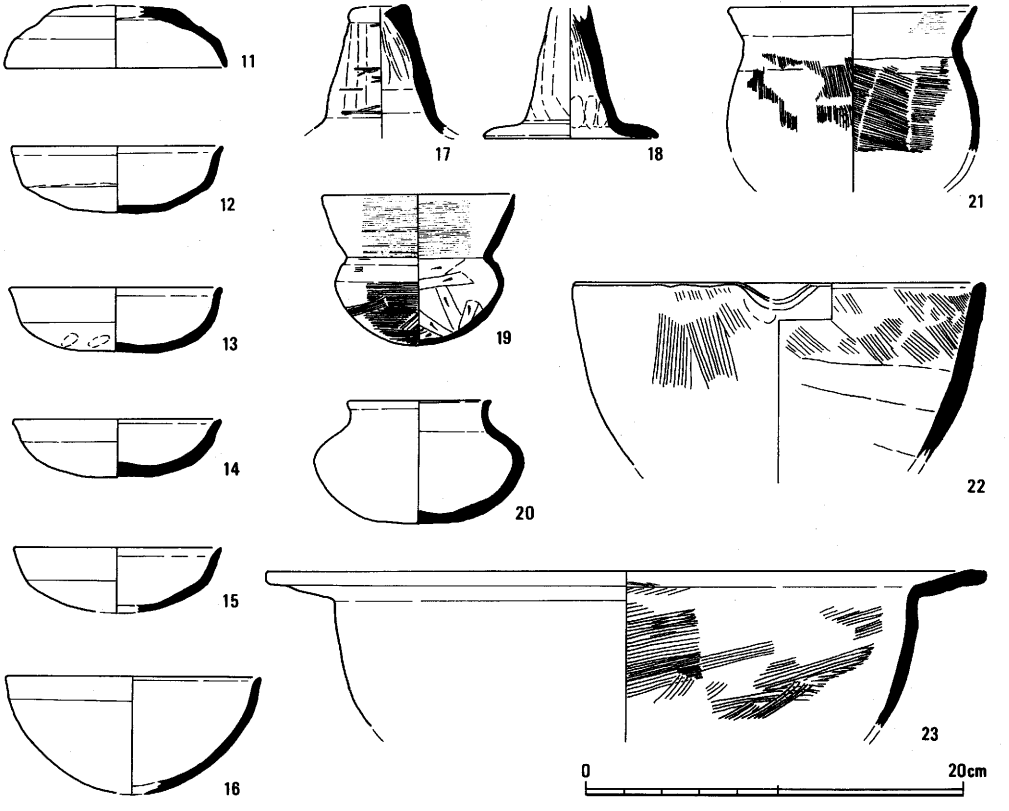
明である。4は甕である。口径10.4cm、器高12.0cm。ほぼ球形の体部にやや外反して広がる口縁がつく。端部は丸い。調整は、口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部は外面がハケ、内面がケズリで、底部に指頭圧痕が残る。10は甕である。口径20.0cm、器高35.3cm。やや胴長の体部に外反して広がる口縁がつく。底部は丸い。口縁端部はわずかに上方に丸く肥厚する。調整は、口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部は外面がハケ、内面がケズリである。5～9は筒形の土製品である。大小2種類に分かれ、大型品（5・6・8・9）は、長さ6.0～6.7cm、直径2.0～3.1cm、孔径0.8～1.2cm、重さ40.7～83.1gである。小型品（7）は、長さ4.9cm、直径1.9cm、孔径0.6cm、重さ19.5gである。いずれも外面は縦方向のナデでていねいに仕上げられている。

11・20は須恵器、12～19・21～23は土師器である。17・19は古墳時代の布留式土器であり、それ以外は古墳時代末～飛鳥時代初頭頃の土器と思われる。11は杯蓋である。口径



出土土器、土製品（1／4）

11.7cm、器高3.31cm。口縁端部は丸い。頂部はヘラキリ後、無調整である。20は短頸壷である。口径7.3cm、器高6.5cm。体部は偏平な球形で、口縁部は直立する。端部は外反する。調整は、口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部は不明である。色調は灰白色を呈し、須恵器の生焼けとみられる。12～15は杯である。口径10.8～11.2cm、器高3.1～3.6cmで、法量はほぼ同じである。口縁部が緩く外方へ広がるもの（13・14）とわずかに屈曲して広がるもの（12・15）とがある。口縁端部はいずれもわずかに外傾する。調整はいずれもヨコナデである。16は鉢である。口径13.4cm、器高6.2cm。底部は丸い。口縁部はやや直立し、端部はわずかに外傾する。調整は内外面ともにナデである。17・18は高杯の脚部である。17は端部を欠失する。やや内彎気味に外方へ広がる。調整は、外面が縦方向のナデののち、横方向のミガキ、内面下半がヨコナデである。18はほぼまっすぐに外方へ広がり、さらに屈曲して水平に広がる。調整は、外面上半が縦方向のナデ、下半が横方向のナデで、内面は下半がヨコナデで、指頭圧痕が残る。19は小形丸底壷である。口径10.0cm、器高8.0cm。体部はやや肩が張り、口縁部は長い。調整は、口縁部が内外面ともにスリナデ、体部は外面がハケ、内面がケズリである。21は甕である。底部を欠失する。口径13.0cm。体部は肩の張らない球形で、口縁部はわずかに屈曲して外方に広がる。調整は、口縁部が内外面とも



溝ＳＤ15出土土器（１／４）

にヨコナデ、体部が内外面ともにハケである。22は片口鉢である。底部を欠失する。口径21.4cm。やや内彎気味に上外方へ広がる。調整は、外面と内面上半がハケ、内面下半がナデである。23は鍋である。底部を欠失。口径27.8cm。口縁部は屈曲してほぼ水平に広がる。調整は、口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部内面がハケ、外面は不明である。

Ⅳ　まとめ

以上のうち、一連の遺構であると思われる井泉、溝、濠は、出土遺物からみて5世紀中葉をややさかのぼる頃に造られ、後葉まで機能していたとみられる。そこで、他の地域の類例などからこれらの遺構の性格などについて考えてみたい。まず、素掘溝ＳＤ03が屈曲して、石積によって護岸された溝ＳＤ04につながることから、同様に井泉ＳＸ01からのびる素掘溝ＳＤ02が途中で屈曲し、石積によって護岸された溝ＳＤ05に接続すると推測することができる。また、素掘溝ＳＤ02が井泉ＳＸ01につながることから、同様に素掘溝ＳＤ03の南端にも井泉を想定することができよう。このような復元が可能であるなら、時期は少し遡るが三重県上野市城之越遺跡の祭祀遺構と類似していることがわかる。城之越遺跡の遺構は、三箇所の井泉から湧き出す水がそれぞれ石積みで護岸された溝に流れ出るしくみであり、これらの溝は合流し、素掘の大溝となる。今回検出した南紀寺遺跡の遺構も上記の推定が可能であるならば、二箇所の井泉から湧き出す水が素掘溝を通り、石積で護岸した溝に合流し、最終的には濠に流れ出すしくみとなる。したがって、石積で護岸した部位は異なるものの、機能的には城之越遺跡の祭祀遺構と同じであり、同様の水に関わる祭祀の場と考えられる。

また、今回検出した井泉ＳＸ01は、城之越遺跡の井泉とは異なり、かなり精緻なつくりである。上述のように平面方形に掘削された掘形の一辺のほぼ中央に溝を設け、涌き出した水が流れる仕組みになっている。これより時代は降るが、石敷きの井戸施設のほぼ中央に水路を設けた例には、伝承飛鳥板蓋宮の井戸や平城宮の東院や造酒司などの井戸がある。また斜面に石積を施す例は、全貌は明らかでないが、法華寺の造営前の遺構として検出されたものがある。いずれにしても石敷で、中央に水路を設ける例は数少なく、今回検出した井泉は、系統的にこれらの諸宮の井戸につながる可能性がある。

以上のことから、今回検出した遺構は、有力豪族等の祭祀施設、あるいは公的な施設である可能性が考えられる。第1次・第2次調査の成果を含めると、石積で護岸した溝・濠などの範囲は、少なくとも東西180 m、南北60mである。これらの遺構はさらに広がっており、遺跡の全貌を解明するにはまだほど遠い状況であるが、かなり大きな施設になるものと思われる。

（森下浩行）

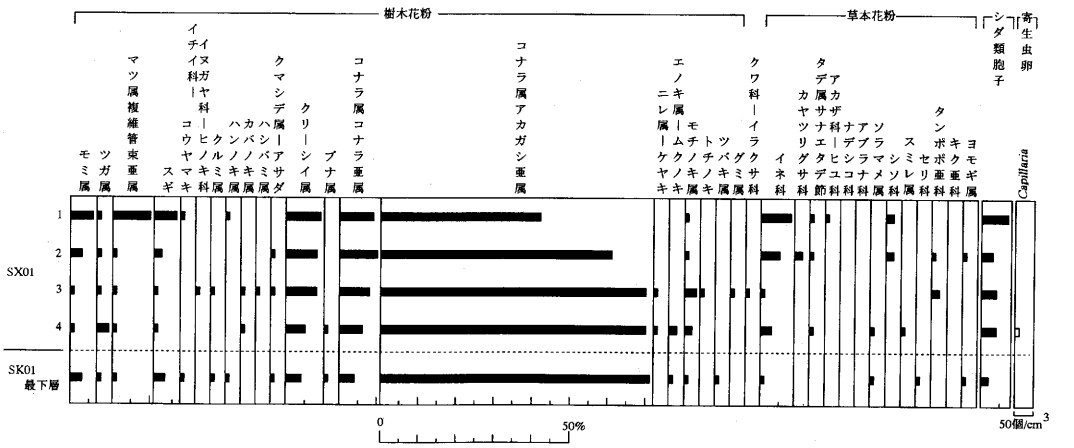
南紀寺遺跡　第4次調査における花粉分析・寄生虫卵分析

天理大学附属天理参考館　金原正明　　古環境研究所　金原正子　中村亮仁

南紀寺遺跡のSD07内堆積物の4層準・SX01の最下層の計5点の花粉分析・寄生虫卵分析、SX01の最下層の4試料の種実同定を行った。時期はいずれも古墳時代中期であった。分析の結果は図ないし表に示した。種実同定は試料100ccを0.25㎜篩で水洗選別によって行った。

SD07の花粉分析結果では、下位からコナラ属アカガシ亜属が最優占し約70％にも達する。樹木花粉では他にクリ－シイ属やコナラ属コナラ亜属なども伴われるがいずれも低率である。草本花粉はイネ科などがわずかに出現するのみで極めて低率である。上位ではコナラ属アカガシ亜属がやや減少し、モミ属・マツ属複維管束亜属・スギの針葉樹と草本のイネ科が少し増加する。この結果からみて、SD07の周囲はコナラ属アカガシ亜属の樹木が多く分布し、日当たりのよい開地を好む草本がほとんどなく、森林の状態であったとみなされる。ヨモギ属などの改変地を好む草本もないため、SD07の周囲は大きく改変されていなかったと推定される。上位ではコナラ属アカガシ亜属の森林が減少しはじめ、イネ科や針葉樹がやや多くなり、大きな森林への人為干渉が開始されたと考えられる。

SX01の最下層の花粉分析結果は、SD07の下層と同じくコナラ属アカガシ亜属が極めて優占する。種実同定結果では、樹木より草本が多く、ザクロソウ・ナデシコ科・アブラナ科・カタバミ属・セリ科（チドメグサ型）などが多い。これらは道ばたや畑などの人里を好む植物ばかりである。樹木ではアラカシ・ヒサカキなどの照葉樹林の主要な構成要素が多く、自然度が高くなければ分布しないウドカズラもある。花粉と種実は各植物における生産性や散布性そして残存性が異なり、これらを考慮するならば、SX01の周辺はアラカシを高木とする照葉樹林が分布し、SX01の周囲にはザクロソウ・ナデシコ科・アブラナ



南紀寺遺跡における花粉分析結果・寄生虫卵分析
（花粉総数が基数）

分類群 学名	和名	部位	1	2	3	4	計
arbor	樹木						
Quercus glauca Thunb.ex Murray	アラカシ	堅果	11	44	8	14	77
		堅果片	7	33	4	12	56
		幼果	6	5	47	27	85
		殻斗		5	7	8	20
Morus	クワ属	種子	1		2		3
Rubus	キイチゴ属	核	3	2	1	1	7
Ruubus buergeri Miquel type	フユイチゴ型	核			3	2	5
Prunus persica L.	モモ	核				1	1
Zanthoxylum ailanthoides Side.et Zucc.	カラスザンショウ	種子	1	1		1	3
Ilex latifolia Thunb.	タラヨウ	種子			1		1
Ampelopsis leeoides Planch.	ウドカズラ	種子	1		1	1	3
Cleyera japonica Thunb.	サカキ	種子				1	1
Eurya japonica Thunb.	ヒサカキ	種子	11	3	5	5	24
Araliaceae	ウコギ科	核		1			1
Styrax japonica Sieb. et Zucc.	エゴノキ	種子			1		1
herb	草本						
Gramineae	イネ科	穎	3		1	2	6
Monochoria	ミズアオイ属	種子	5	4	6	5	20
Aneilema keisaku Hassk.	イボグサ	種子			1		1
Cyperus	カヤツリグサ属	果実				3	3
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実			1		1
Polygonum thunbergii Sieb. et Zucc.	ミゾソバ	果実				1	1
Polygonum	タデ科	果実		2	4		6
Polygonaceae	タデ科	果実			1	4	5
Mollugo pentaphylla L.	ザクロソウ	種子	62	36	175	79	352
Caryophyllaceae A	ナデシコ科A	種子	18	14	71	67	170
Caryophyllaceae B	ナデシコ科B	種子	82	119	566	149	916
Amaranthus	ヒユ科	種子			3		3
Duchesnea-Fragaria-Potentilla	ヘビイチゴ属−オランダイチゴ属−キジムシロ属	種子		1	3	6	10
Cruciferae	アブラナ科	種子	8	4	10	13	35
Oxalis	カタバミ属	種子	49	31	132	68	280
Umbelliferae(Hydrocotyle type)	セリ科(チドメグサツ属型)	果実	13	6	67	57	143
Perilla frutescens Britton var japonica Hara	エゴマ	種子	1				1
Mosla	イヌコウジュ属	種子	1	1	4		6
Solanaceae	ナス科	種子			1		1
Tubocapsium anomalum Makino?	ハダカホオズキ？	種子		1	1		2
arbor	樹木		41	94	80	73	288
herb	草本		242	219	1047	454	1962
Total	計		283	313	1127	527	2250

表　南紀寺遺跡ＳＸ01最下層における種実同定結果（試料100cc0.25㎜）

科・カタバミ属・セリ科（チドメグサ型）などの道ばたなどに多い草本が繁茂していたと考えられる。自然度の高い照葉樹林としても、コナラ属アカガシ亜属の堅果がアラカシであることから、長年の人為干渉によって偏向遷移された森林であったと推定される。なお、SX01自体にはミズアオイ属（ミズアオイ・コナギ）などの水湿地植物が繁茂していた。古墳時代中期の南紀寺遺跡は森林の中に営まれた遺跡とみなされるが、同様の状況は三重県上野市の城之越遺跡に類似性がもとめられる。

寄生虫卵は鳥類に寄生する*Capillaria*がわずかに含まれるのみであった。人体寄生虫卵が含まれておらず、周囲は人口密度が低かった可能性が高い。

井泉SX01および濠SD07の珪藻遺骸

奈良女子大学　　清水　晃

南紀寺遺跡の井泉ＳＸ01（４層＝最下層の２試料）および濠ＳＤ07（64層，65層それぞれから３試料）の珪藻遺骸を調べた（図１，２参照)。まず、井泉および濠からの試料である堆積土（計８試料）をそれぞれ約５gr浅い器にとって水に溶き、しばらく静置してから浮いているシルトを捨てるという方法を繰り返して、試料の粘土質をなるべく少なくする。この後、塩酸および硫酸で処理してから水洗を繰り返して水を中和し、さらに、生じたシルトを洗浄しやすくするためアルカリ洗剤を加えてしばらく置く。浮いているシルトを水洗を繰り返すことによってできるだけ除去した後、砂粒と珪藻遺骸を分離することを試み、プレパラートを製作した（珪藻遺骸の方が浮きやすいことを利用する)。

珪藻種の同定は Hustedt,F.(1930)，Patrick,R.& C.W.Reimer(1966,1975)，水野（1964)，小出と大西（1986）などに従った。試料全てについて珪藻遺骸の数量が極めて少ないので、各試料の出現頻度を地層ごとに合計して表１にまとめた（ＳＸ01－最下層，ＳＤ07－64層および同65層それぞれをまとめた)。64層および65層に産出した珪藻は、ほとんどの種について全体の形態をとどめているものがなく、数量が極めて少ないので定性的な表示をした。なお、表には前例（清水 1992,1993など）にならって、生態特性を加えた。出現種の主なものの写真を図版にかかげた（図版の写真番号は表内の番号に一致)。

出現珪藻の種数も個体数も少ないので断定はできないが、井泉ＳＸ01(最下層)は清冽な水をたたえていたと考えられる。すなわち、出現18種(184個体)の内訳をみると、嫌塩性種(Ｈ)が８種(出現頻度は全体で54%)、非耐汚濁性種(Ｌ)が４種(同37%)含まれている(Ｈで且つＬでもある種は４種しかいないが約37%含まれ、耐塩性種Ｇで且つ耐汚濁種Ｋであるもの６種の計16%をうわまわる)。この水は冷水で、流れていたことが考えられる。

他方、濠ＳＤ07(64層及び65層)については、井泉の場合よりも更に出現種が少ない上に、表の番号５，７，14，18，24以外の種は破損が激しく、種同定と存在確認がやっとできるにすぎなかった。出現10種の内、Ｈで且つＬでもあるものは３種含まれるが、Ｇであるものが３種、Ｋであるものが４種含まれること、ほとんどが止水性種であることが特徴的である。

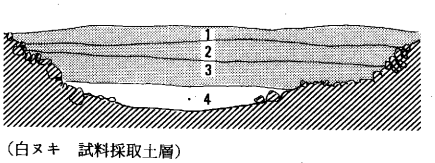


図１．ＳＸ01の試料採取点（東西断割断面）

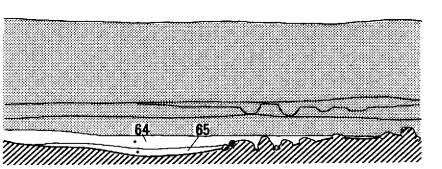


図２．ＳＤ07の試料採取点（南壁土層）

出現珪藻種	生態	相対出現頻度(%)		
		井泉(SK01) 最下層	濠SD07 64層	濠SD07 65層
1). Achnanthes brevipes v.parvula	a, d, , G, ,	−	−	++
2). Achnanthes inflata	A, D, , H, J, K	−	−	+
3). Amphora veneta	b, D, , G, ,	101	−	−
4). Csloneis schumanniana	B, D, , g, J, K	0.5	−	−
5). Cocconeis placentula v.klinoraphis	, D, , H, J, K	−	+	+
6). Cymbella aspera	B, d, , H, J, K	11.4	−	+
7). Eunotia maior	a, D, , H, I, L	−	+	−
8). Eunptia parallela (E.angusta)	a, D, E, H, I, L	0.5	−	−
9). Gomphonema accuminatum	A, D, , H, J, L	16.8	−	−
10). Gomphonema affine	a, D, , G, J, K	4.3	−	−
11). Hantzschia amphioxys	b, D, , g, J, K	1.6	−	−
12). Navicula cuspidata	, , , G, , K	7.1	−	−
13). Navicula gregaria	B, D, , G, J, K	1.1	−	−
14). Navicula mutica	, D, , G, J, K	0.5	+	+
15). Nidium iridis	A, D, , H, , L	3.3	−	−
16). Nitzschia ignorata	B, D, , G, J, K	3.3	−	−
17). Nitzschia linearis v.tennis	B, d, , H, J, K	0.5	−	−
18). Nitzschia palea	b, D, , g, i, K	−	+	+
19). Pinnularia abaujensis (P.gibba)	B, D, , , ,	18.5	−	−
20). Pinnularia cardinalis	B, , E, , ,	8.2	−	−
21). Pinnularia maior	A, D, , H, I, L	16.3	−	+
22). Pinnlaria microstauron	B, D, , H, I, K	2.7	−	−
23). Stauroneis acuta	, D, , H, J,	2.2	−	−
24). Stauroneis amphioxys	, D, , G, ,	+	+	++
25). Synedra ulna	a, D, , g, J, K	−	+	+
26). Tabellaria fenestrata	A, C, , H, I, L	−	+	+

表1．井泉ＳＸ01および濠ＳＤ07に出現した珪藻遺骸

1）出現頻度 0.5% 以上のものを記録した。＋：存在する（＋＋＞＋）、－：存在しない。

2）生態：A（a）好止水性，B（b）好流水性，C（c）浮遊性，D（d）底生性または付着性，E（e）好冷種，F（f）好温種，G（g）耐塩性，H（h）嫌塩性，I（i）好酸性，J（j）好アルカリ性，K耐汚濁性，L嫌汚濁性。大文字ならば、一般にそういう性質が認められること、小文字ならば、一般にそういう性質をもつが不定の場合があることを意味する。無記号は不明を意味する。ある種がA，c，F，G，Kであれば、この種は温かい止水に生息し、浮遊性（プランクトン性）で、少々の有機汚濁に耐えることを意味する（生息水環境はやや汚れていることが考えられるが、それが酸性かアルカリ性かは推論できない）。

2　奈良柳生カントリークラブの造成工事に伴う調査

この調査は、箕面観光開発㈱が奈良市下狭川町字藤尾2587番地、同字城山2589番地、同字薬師堂2712番地、同字タゲ2714番地他および大柳生町字ヲシヨジ4807番地他において実施した、奈良柳生カントリークラブの造成工事に伴う調査である。開発面積は、総計で約116.57haあり、その範囲内に含まれる遺跡には、藤尾城跡やヲシヨジ古墳群のほか、室町から安土桃山時代にかけての作品と推定される磨崖仏２体や六地蔵菩薩像などがある。

奈良市教育委員会では、平成５年度に開発予定地域内において踏査を行い、各遺跡の範囲、規模等の確認を行うとともに、その成果をもとに各遺跡の保存問題について事業者側と協議を重ねたところ、ゴルフコースの一部設計変更等の協力が得られることになった。

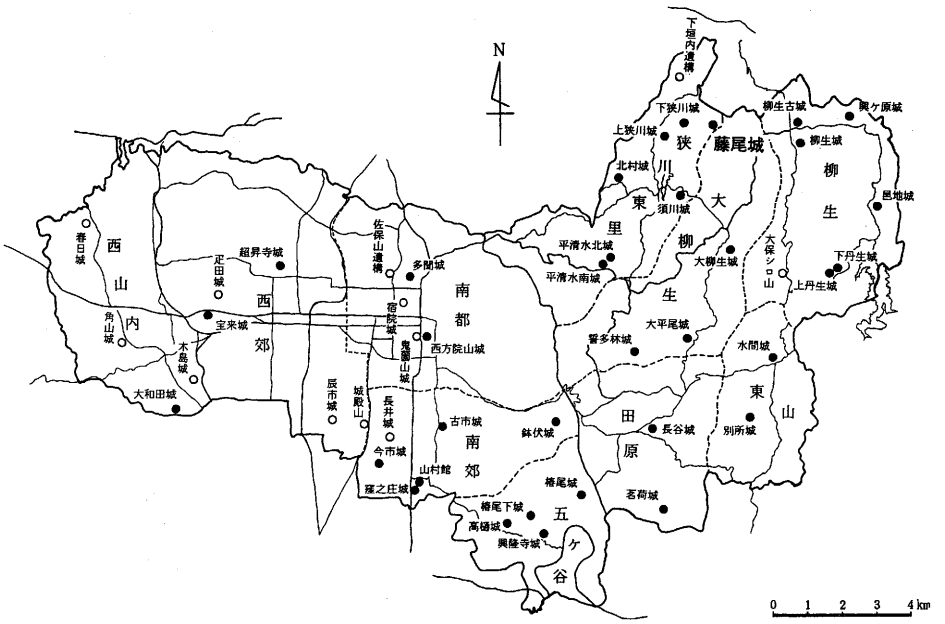
その結果、藤尾城の中で比較的原型を良く残している第Ⅰ～Ⅲ曲輪部分についてはそのまま保存することになり、ゴルフコースがかかる部分については、発掘調査を実施して遺構の様相を把握した後に、盛土で覆って遺構面を保護することになった。また、造成に伴い埋没の恐れが生じた磨崖仏２体や六地蔵菩薩像、さらに付近に散在する石仏群については、然るべき場所に移設することにした。一方ヲシヨジ古墳群については、当初ゴルフコース内に入っていた１号墳は、発掘調査を実施した上で遺構が保存されることになり、下部へ崩落した石材を積みなおす復元整備工事も実施することが決まった。以上の合意のもと、発掘調査を平成５年度から６年度にかけて実施した。総発掘区面積は計1275㎡である。

また以上のほかには、発掘調査およびゴルフ場造成工事が終了した後に、遺跡に通じる歩道や遺跡案内板の設置などの整備を実施して、見学の便を図ることも予定している。

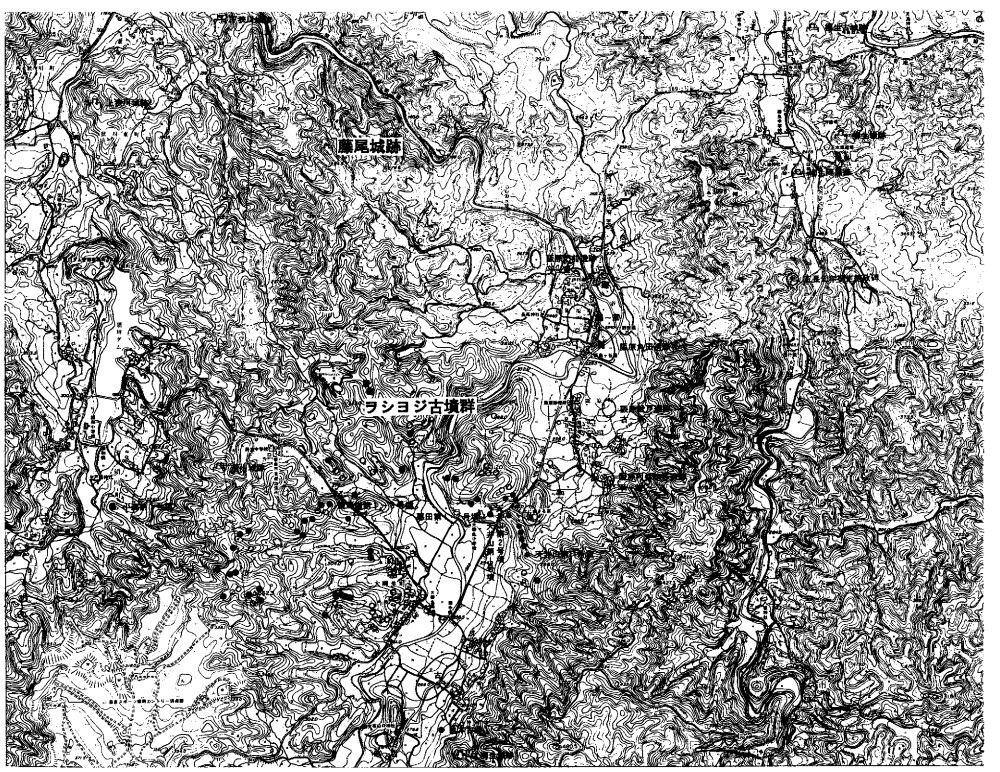
ここでは、奈良柳生カントリークラブ造成工事に関わる各遺跡の発掘調査の概要について報告する。なお藤尾城に関しては、第Ⅲ曲輪の南東側に広がる平坦部と磨崖仏周辺などの部分の他に、藤尾城の南東側に隣接する尾根の一部においても発掘調査を実施したところ、いくつかの遺構を確認したのでここにあわせて報告することにする。

今回の各発掘調査地の地番、調査面積等は下表のとおりである。　　（武田和哉）

遺跡名	発掘調査実施部分	調査次数	調査地番等	調査面積
藤尾城跡	第Ⅲ・Ⅳ曲輪、磨崖仏ほか	9CFO-1	下狭川町字藤尾2587、字城山2589ほか	937 ㎡
藤尾城跡	隣接地	9CFO-2	下狭川字タゲ2714ほか	198 ㎡
藤尾城跡	隣接地	9CFO-3	下狭川町字薬師堂2712ほか	100 ㎡
ヲシヨジ古墳群	１号墳	4PWS-1	大柳生町字ヲシヨジ4807ほか	40 ㎡



奈良市内の城館位構分布図（『奈良市史』通史２より）



藤尾城・ヲシヨジ古墳群周辺遺跡分布図（１／40,000）

(1) 藤尾城跡・磨崖仏の調査　第1次

Ⅰ　はじめに

藤尾城は下狭川町字藤尾に所在する、戦国時代に築かれたと考えられている城である。平成3年7月に当時奈良大学学生の永井隆之氏が、当地に残っている城郭に関係のある地名を手掛かりに踏査を行ったところ、城が実在していることを確認し、これが以前より伝承で伝えられていたものの所在地が不明であった藤尾城として同定したものである。

また中世の磨崖仏は、藤尾城の南側を通る狭川と阪原を結ぶ古道沿いに2体が並んでいる。東側の磨崖仏は阿弥陀如来像、西側の磨崖仏は不動明王である。このほか、周辺には多くの石仏や五輪塔が散在しており、「薬師堂」という字名も残っている。

今回の発掘調査では、ゴルフコース造成のため盛土で覆って保護する城の第Ⅲ曲輪南東平坦地の部分において、14ヵ所の発掘区(計814㎡)を設定し、この部分の遺構の様相を探ることを第一の目的とした。また、移設予定の磨崖仏2体の周辺部についても、遺構の有無を確認するべく2ヵ所の発掘区(計88㎡)を設けた。さらに城の第Ⅲ曲輪南西側において、コース造成と遺構面保護のため実施する盛土の擁壁工事によって削平される部分についても、35㎡の発掘区を設けて調査を行った。本調査における発掘区の総面積は937㎡で、調査期間は平成6年1月10日から同年3月31日までである。

Ⅱ　遺跡周辺の環境

歴史的環境　奈良市の東部山間地域は古来より「東山内(ひがしさんない)」と呼ばれ、これに対し「国中(くんなか)」といわれる大和盆地とは歴史的、地理的には区別されてきた。また、この地は古来より伊賀方面の地域ともつながりが深く、文化的な面で共通する部分も少なくない。

今回調査を行った藤尾城が所在する狭川の名は、既に平安時代のいくつかの記録に見ることができる。これらによると当初は大和国国衙領であったが、大和高原に勢力をもっていた山村氏によって平安中期ごろから開発がすすめられて、村として独立したものと考えられている。11世紀には隣の簀川村(現須川町)とともに山村氏の私領であった(『平安遺文補遺20』)。なお、狭川村は「柳生郷狭川里」とも記されることがあり、治安元年(1021)には春日神郷となった柳生郷のなかに包摂されていたものと推定される。ちなみに大柳生、(小)柳生、阪原、邑地の四郷を総称して「神戸四箇郷(かんべしかごう)」とも称する[1]。

その後春日大社が興福寺の支配下に入ったことに伴い、狭川村(里)は一乗院方の荘園として記録に現われるようになる(『簡要類聚鈔』巻一)。当地の地侍は狭川(佐川氏)で、庶流に福岡氏がいる。彼らは一乗院の坊人として興福寺に出仕し、室町時代にはしばしば春日若宮御祭の願主人をつとめた(『長川流鏑馬日記』、『多聞院日記』など)。やがて15世紀に入って応仁の乱が発生し、大和国中が筒井方と越智方にわかれて抗争する事態になると、

狭川氏は両者の陣営間で帰属・離反を繰り返しながらも在地の土豪としての勢力を保持し、戦国時代末期に至って松永久秀の配下となり南都にも頻繁に出没した。

ところで、この時代には狭川地区ではいくつかの城郭が築かれており、現在下狭川町内に残存する下狭川城は狭川氏の居城、狭川西町に残る上狭川城は福岡氏の居城に比定されている。これらの城は「方形単郭式山城」と呼ばれるもので、この地域に多くみられる。基本的には集落付近の高地を選んで築かれており、平時には土豪・地侍層の居所として、戦役時には軍事的拠点としての役割を果たしたものと考えられる。[2)]

藤尾城の立地と現況　狭川地区における前記のような各城郭の様相の中にあって、藤尾城の立地は他の城郭とは大きく異なるものである。通常では中世の城郭はいかなる構造の城であっても、他の城や集落などへの眺望や防御上の利点などを重視する立場から、標高が高くて眺望の開けた場所を選び占地している例がほとんどである。しかしながら、藤尾城の場合は狭川地区の南方に広がる山地のなかでも、周囲を高い尾根に囲まれた低い尾根の上に位置しており、あたかも城の存在を隠すようなかたちで築城している。下狭川城からは南東へ約0.9km、上狭川城からは東南東へ約1.2kmの地点にあたるが、城から狭川地区の集落および下狭川、上狭川両城への眺望はほとんど利かない。

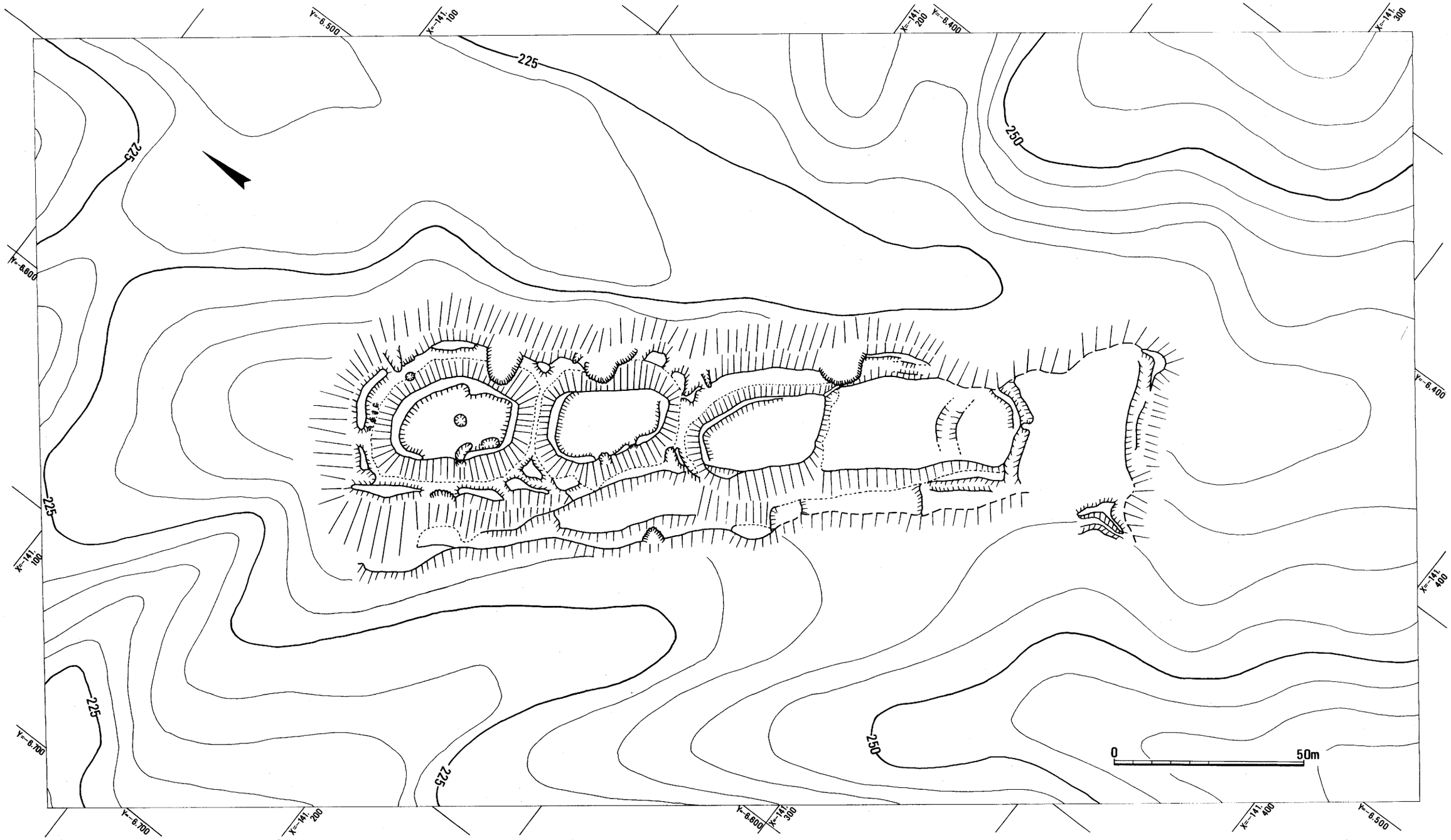
藤尾城の現況をみると、三つの曲輪が連なる形で残っていることから、城の構造は曲輪が一列に連なる連郭式山城であったと考えられる。これは大和東山内地区内で数多くみられる方形単郭式山城とは全く異なった構造である。曲輪を巡る土塁や堀などの残存状態も比較的良く、当時の様子を今によく伝えている。各曲輪とも形状は隅丸方形を呈し、長辺35～40m、短辺25～30m程度の規模である。また曲輪の周囲には堀底仕切や竪堀など防御施設の跡らしきものも見受けられることから、この城が軍事的性格の強い城であったことがうかがわれる。さらには三つの曲輪の南東側には平坦地が広がっているが、その中央付近にも土塁状の高まりが現存しており、何らかの施設の存在が予想された。

このほか、城のある尾根の山腹を縫うようにして狭川地区と阪原地区を結ぶ古道が通っている。この道は両地区を結ぶ最短のコースであり、かつては主要な道として利用されていた。藤尾城が当時の城郭の常識とは異なった占地をした背景には、この道の存在が大きく関係しているとみることもできる。

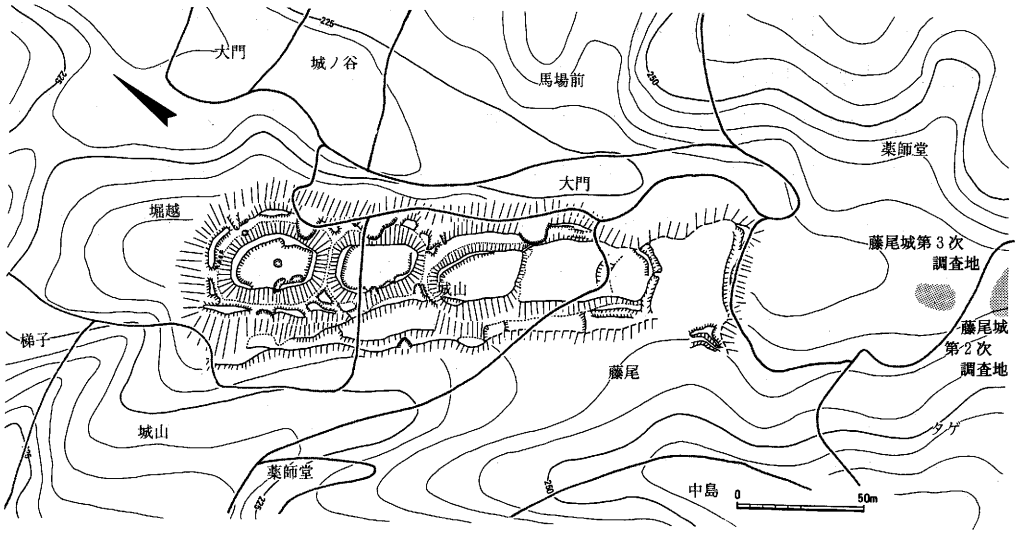
藤尾城周辺の地名と伝承　藤尾城の周辺には「城山」、「城ノ谷」、「大門」、「馬場前」、「梯子」といった城郭と関係の深い字名が残っている。また以前からこの付近には城跡があったことが知られていたらしく、大正5年編纂の『狭川村是』第6項「歴史、舊蹟」には、

吉村家城址　下狭川字藤尾ニアリ、城山、馬場前、大門、等ノ地名存セリ

と記されている。この「吉村家城址」が今回調査の対象となった藤尾城であることは、周囲の地名に関する記述から明白である。ただ「吉村家」の実態については、狭川家に伝来する



藤尾城縄張図（１／1200）



藤尾城周辺の字名の分布（１／3000）

『狭川之系図』に戦国時代末に狭川家と縁戚関係にあった家と伝えるだけで、他の史料等には全く記述がなく詳細はわからない。またこの吉村氏が藤尾城の築城者もしくは城主であったかという点についても真偽の程は確認できない[3)]。

このほか、城の南側には「薬師堂」の小字名も残っている。付近には磨崖仏や多くの石仏や五輪塔が散在し、また隣接する尾根の一部には人工的に削平したと思われる平坦地が存在している。前記の『狭川村是』第６項「歴史、舊蹟」はこれについても言及している。

薬師堂　大字下狭川中墓寺境内ニ在リ、間口四間半奥行四間アリテ薬師如来ヲ安置ス、村内現在建物中最古ノモノナリト、此ノ堂古ヘハ下狭川字藤尾ニアリシヲ、後、今ノ地ニ移セシモノナリト、別項藤尾城址ト関係アルモノヽ如シ（字藤尾ノ近傍ニ薬師堂ト云フ處アリ）

これによると、藤尾城の北西約1.2㎞にある中墓寺(奈良市下狭川町所在)内にある薬師堂が以前は藤尾城付近にあったものであるという。またこの中墓寺には平安中期から後期の薬師如来像が３体現存しており、これらはかつて山中の諸堂にあったものと伝えられている[4)]。こうしたことから、藤尾城付近にはかつて寺院が存在していた可能性が高いと考えられている。しかし藤尾城と寺院がいかなる関係であったかについては判らない。

Ⅲ　第Ⅳ・Ⅴ曲輪の調査概要

(1)　基本層序　第Ⅲ曲輪南東平坦部の中央付近には土塁状の高まりが残っていた。これより北側部分の基本層序は、表土(腐葉土)以下淡褐色土、暗褐色土、明茶褐色土と続き、地表面下0.7～1.1ｍで濁橙褐色の花崗岩風化土もしくは橙褐色土の地山となる。山の尾根上にも拘らず相当の土が堆積しており、調査直前には一部がスギ林であったことを考えると、城の廃絶後に何らかの開墾が行われていたことは明らかである。また前記のように寺院の存在も推定されており、これに関係した開削や整地が行われていた可能性もある。

一方土塁状の高まりの南側部分における堆積状況は表土(腐葉土)以下褐色土、暗褐色土、淡褐色土と続き、地表面下0.5～0.7ｍで橙褐色土の地山に至る。

なお、発掘区内で確認した地山の標高は北側部分では237.6～238.6ｍ前後、南側部分では236.8～237.0ｍ前後であった。藤尾城の最高点は第Ⅰ曲輪内にあり標高248.9ｍである。

(2) **検出遺構**　第Ⅲ曲輪南東平坦部では計14ヵ所の発掘区を設定した。その結果、第Ⅲ曲輪南東平坦部の中央付近にあった土塁状の高まりは、当初の予想どおり城郭の土塁であることが判り、その南東から南西側にかけて堀が巡っていることを確認した。また、その土塁と第Ⅲ曲輪との間で堀を検出した。この結果藤尾城の第Ⅲ曲輪の南東部分にはさらにふたつの曲輪が存在していたことが明らかとなった。ゆえに、以下第Ⅲ曲輪側のものからそれぞれ第Ⅳ曲輪、第Ⅴ曲輪と呼称することにする。

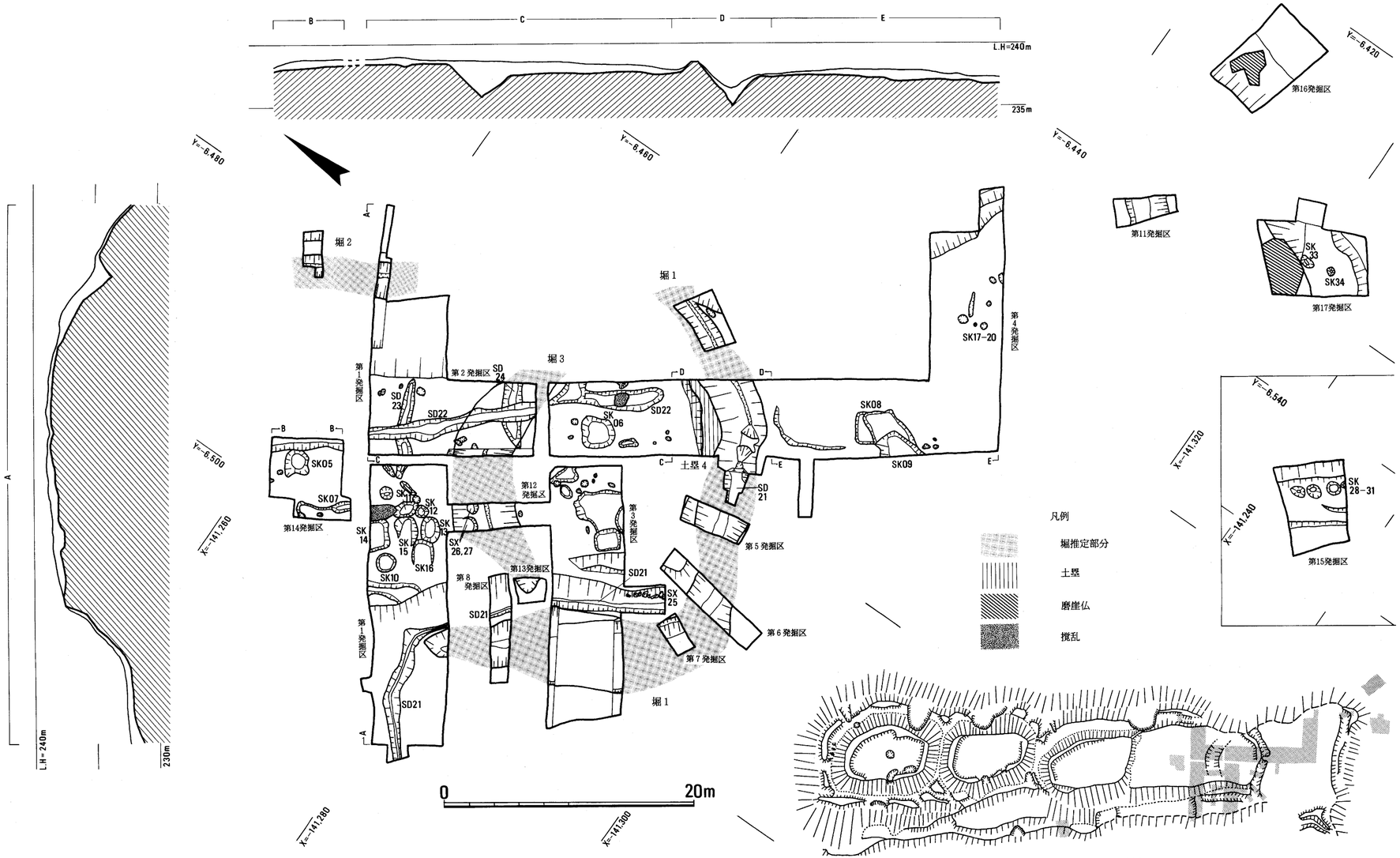
第Ⅳ曲輪　隅丸方形を呈し、長辺約30ｍ、短辺約25ｍの規模と推測される。曲輪の周囲にはかつて土塁があったと考えられるが、後世に削平されたらしく現状では全く残存していない。曲輪の北西、南東、南西には堀がめぐっていることが確認されたが、第Ⅲ曲輪と接する北東側では調査を実施していないので堀が存在しているかどうかは不明である。現況で観る限りでは、第Ⅲ曲輪と接する部分は切岸状になっていて堀らしき跡は確認できない。なお、曲輪中央付近の地山の標高は約238.5ｍである。

第Ⅴ曲輪　直径約20ｍのほぼ円形に近い曲輪と思われる。他の曲輪と同様に周囲には土塁が周回していたと思われるが、現在は南東辺の部分に土塁４が残っているのみである。調査の結果、北西、南東、南西側には堀が存在していたことが明らかである。なお曲輪中央部の地山の標高は約237.0ｍである。

堀１　第Ⅴ曲輪の南東辺から南西辺にかけて確認した。南東辺では比較的硬質の花崗岩盤を開削して掘っている。北東辺については土砂崩れの跡があって急な斜面地になっているので、発掘区を設けることができず、この部分にまでに堀１が及んでいたかは不明である。堀の幅は概ね3.5ｍ内外であるが、第６発掘区付近では約4.9ｍを測る。また第Ⅴ曲輪上面からの深さは3.0ｍ前後で、第Ⅴ曲輪土塁上面からの深さでは最大約3.4ｍに達している。堀底の標高は南東辺で234.5～235.0ｍ、南西辺では233.5～234.2ｍであった。

南東辺の中央には地山を掘残す形で土橋状の仕切りがある。幅は上面で約0.8ｍ、堀底からの高さは約1.4ｍあり、第Ⅴ曲輪側の土塁の中腹部に取り付く様な形状になっている。人間が第Ⅴ曲輪内に到達するには、この土橋状遺構を渡ったあとさらに土塁の急斜面を登行しなれけばならないが、これが連絡用の土橋である可能性が高い。しかし一方では堀内を区切ることにより、敵の攻撃を防御するための施設であったとも考えられる。

堀の断面は南東辺中央の仕切りから東側はＶ字状の薬研堀になっていて、最底部は幅0.3ｍ程度の溝状を呈している。また、西側および南西辺はＵ字状の堀となっている。断



藤尾城第１次調査　遺構平面図（１／300）

面の観察から、南東辺部分は0.6m程度の自然堆積の後に第Ⅴ曲輪方向から土を入れて人為的に埋めた痕跡が認められる。また南西辺部分も0.2～0.3m程度の自然堆積の後に第Ⅴ曲輪方向から土や礫を入れて埋められていることが判った。

なお、堀の埋土からは12～13世紀頃の土師器や瓦器、15～16世紀中頃にかけての土師器、瓦質土器、国産陶器、輸入陶磁器が出土しているが、出土量は少ない。

堀2　第Ⅳ曲輪北東辺の斜面に沿って掘られている。前記の堀1とつながる可能性があるが、第Ⅴ曲輪の北東斜面南半部分は土砂崩れによって発掘区を設定できず、堀1との関係は確認できなかった。幅は約2.8m、第Ⅳ曲輪上面からの深さは約2.2mを測る。堀底の標高は233.7～233.9mで、堀1南西辺の底の標高と比較するとほぼ同じである。堀の断面形はⅤ字形で、最底部は堀1と同様に幅0.3m程度の溝状を呈している。土層観察の結果数回の浚渫の痕跡が確認でき、城が機能していた期間中に堀の補修をしていた可能性がある。最終的には第Ⅳ曲輪方向からほとんど地山と同じ土塊がブロック状に堆積して埋まっている。これが人為的に埋めたものか、第Ⅳ曲輪上の土塁の崩落の結果であるかは不明。

堀3　藤尾城が占地している尾根を横切るように掘られており、第Ⅲ曲輪方向に突出した円弧状を呈するものと推定される。幅は約2.0m、最大深は約2.6mを測る。第13発掘区では北西側の終端部を検出した。最底部の標高は約235.2mで、隣接する堀1の南西辺や堀2に比べ1.4～1.6m程度高くなっており、堀1・2とは直接つながらない構造となっている。断面形はⅤ字形を呈し、断面観察から第Ⅴ曲輪側から土や礫を入れて人為的に埋めていることが判明した。埋土からは15世紀初頭頃の土器のほか、石臼が出土している。

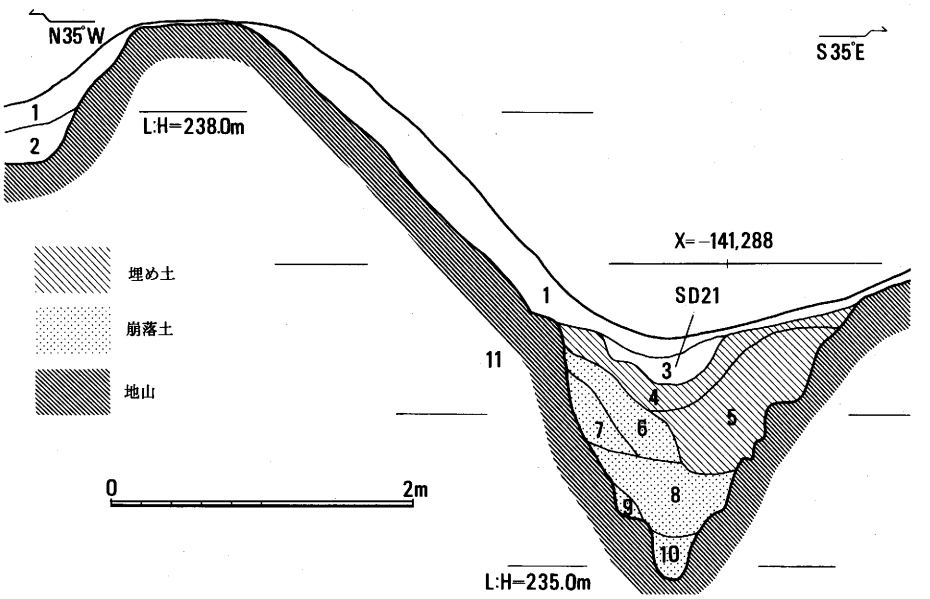
土塁4　第Ⅴ曲輪南東辺で長さ約6m分を確認した。幅は2.2～2.6m、残存部分で最も高い部分は第Ⅴ曲輪内部の地山面より約0.6mを測る。発掘区内で確認した限りでは、土塁の残っている部分は地山の風化した花崗岩盤を削り出す方法で造られている。第Ⅰ、Ⅱ曲輪に残る土塁の状況や、堀1～3を埋めるのに曲輪側から大量の土を入れている点などから考えると、当初はこの上に盛り土をしてさらに高く土塁を築いていた可能性が高い。

ＳＫ05　第14発掘区中央付近で検出した土坑。平面隅丸方形を呈する。長径約2.2m、深さは約0.6mである。0.2m程度の石などを用いて人為的に埋めている。埋土からは遺物はほとんど出土せず、城に伴う施設であるどうかは不明である。

ＳＫ06　第2発掘区の北東部分で検出した土坑。平面楕円形を呈する。長径約2.5m、深さは約0.6mである。埋土からは砥石が出土した。拳大程度の石を用いて人為的に埋めている。ＳＫ05と同じく城に伴う施設であるかは不明である。

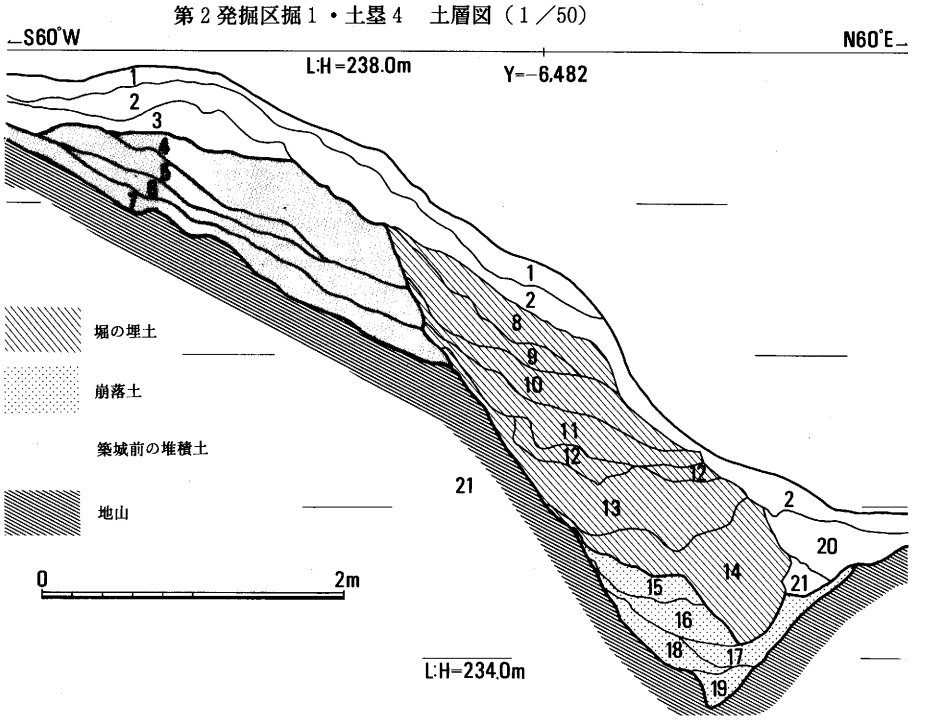
ＳＫ07　第14発掘区の南側で検出した土坑。平面長円形を呈し、発掘区外へ延びる。長さ約1.6m、幅約0.8m、深さ約0.4m。埋土から15世紀初頭の土器が十数点出土した。

ＳＫ08　第2発掘区南側で検出した。平面不整形を呈する。長径約4.5m、深さ約0.15m



1 表土（腐葉土）　4 淡褐色土　7 暗褐色土（礫含む）　10 茶褐色土
2 暗褐色土　5 明褐色土　8 黄褐色土　11 淡灰色花崗岩盤
3 褐色土（SD21埋土）　6 明褐色土　9 暗褐色土　（地山　一部風化している）

第2発掘区掘1・土塁4　土層図（1／50）



1 表土（腐葉土）　6 暗黄褐色粘質土　9 暗濁黄褐色土　13 暗緑灰色砂質土　18 灰色粘質土
2 暗褐色土　7 暗橙褐色粘質土　（地山ブロック含む）　14 淡赤色粘質土　19 暗灰赤色粘質土
3 淡黄褐色粘質土　8 暗濁赤褐色土　10 暗緑灰色砂質土　15 濁黄色粘質土　20 黄灰色土
4 淡赤褐色粘質土　（地山ブロック含む）　11 淡赤色粘質土　16 淡灰赤色粘質土　21 暗灰色砂質土
5 暗褐色土　12 暗紫色土　17 淡灰色粘質土　22 赤色粘質土（地山）

第1発掘区　堀2土層図（1／50）

で、遺物は出土しなかった。重複関係からＳＫ09よりも古いことが判る。

ＳＫ09　第２発掘区南側で検出した。規模は長径約3.2ｍ、深さ約0.15ｍで遺物はない。

ＳＫ10　第１発掘区上部西側で検出した。径約1.4ｍの平面円形で、深さは約0.15ｍ。埋土には拳大の石が数個入れられていた。遺物はなく、遺構の性格は不明である。

ＳＫ11～16　第１発掘区上部西側で検出した土坑群。各々径2.0～2.5ｍ、深さ0.1～0.7ｍ前後の規模で、15世紀初頭の土器の小片がごく少量出土した。

ＳＫ17～20　第４発掘区中央付近で検出した。径約0.5～0.7ｍ前後でほぼ2.0ｍの間隔で一列に並ぶことから、何らかの構築物の柱穴であった可能性がある。

ＳＤ21　第Ⅳ曲輪南東辺から南西辺の際の部分を巡り、途中から北西に屈曲して堀１を横切り、藤尾城西側の谷に向かって延びている溝である。曲輪南東辺では堀１のほぼ真上に位置し、南西辺では堀１と曲輪との間を通過している。曲輪南西辺の部分と北西に屈曲して谷に向かう部分では石組みが施されている。規模は幅が概ね0.8ｍ、深さは0.3ｍで発掘区内では約50ｍ分を確認した。堀１が埋まった後に造られている。

ＳＤ22　第１発掘区中央から第２発掘区北側にかけて検出した。ほぼ北西から南東方向に伸びている。断面形はＶ字形で、規模は幅約1.0～1.9ｍ、深さ約0.2～0.4ｍで、出土遺物はなかった。表土直下から掘りこまれている。発掘調査前に周囲がスギ林であったことから、近年の開墾作業に伴い掘られたものである可能性が高い。

ＳＤ23　第１発掘区中央で検出した。北東から南西方向に延びている。断面形はＶ字形を呈し、長さ約8.1ｍ、幅は約1.0ｍ、深さは約0.5ｍで、出土遺物はないが、遺構の重複関係からＳＤ22より古いことが判る。

ＳＤ24　第２発掘区北側で検出した。ＳＤ23とほぼ平行に、北東から南西方向に延びている。断面形はＶ字形を呈し、幅は約1.5ｍ、深さは約0.5ｍで発掘区内では約5.6ｍ確認した。出土遺物はないが、重複関係からＳＤ22より古いことが判る。

ＳＸ25　第３発掘区南東拡張部で検出した石組み遺構。調査前より一部の石は露出していた。遺物は出土せず時期は不明であるが、付近には同様な遺構が残っており、その状況から城廃絶後の開墾による水田などの護岸であると思われる。

ＳＸ26・27　第13発掘区で検出した。堀３の北側斜面にあり径１ｍ程度、深さ0.5ｍ前後の規模と思われる。遺構の性格は不明。第15発掘区のＳＫ28～31と状況が類似する。

主要な遺構については以上の通りである。第Ⅳ・Ⅴ曲輪内部では性格不明の土坑を多く検出したが、土塁以外には建物跡やその他の耐久的な構築物の遺構らしきものは確認できなかった。出土遺物を概観すると12～13世紀の瓦器と15世紀初頭の土器類が大半を占めるが、その量は全般に少なく、各遺構について詳細な時期を決定するには到らなかった。

このほか堀３を検出したことで、藤尾城の構造が５つの曲輪が一列に連なる特異なもの

であった可能性が高い。ただし第Ⅴ曲輪については他の第Ⅰ～Ⅲ曲輪とは形状が異なりほぼ円形を呈しており規模も小さい。また堀１と堀３では１ｍを越える高低差があって連続する構造ではない点など不自然な点もいくつかある。従って、城が機能していた期間中にあらたに第Ⅴ曲輪を築造したかあるいは第Ⅴ曲輪と第Ⅳ曲輪をあわせてひとつの曲輪として造り変えるなどの、曲輪構成を大きく変えるような規模の改修をした可能性もある。

Ⅳ　第Ⅲ曲輪中腹部の調査概要

(1)　基本層序　この部分では第Ⅲ曲輪の基部の斜面に第15発掘区を設定した。

第Ⅲ曲輪中腹部の層序は表土(腐葉土)以下黄茶灰色土、暗茶褐色土等数層があり、概ね地表下1.0ｍ程で濁黄褐色土の地山に至る。調査部分は第Ⅲ曲輪の斜面で表土下の各層は崩落等による堆積であろう。発掘区内の地山の標高は225.3～230.0ｍである。

(2)　検出遺構　第15発掘区では土坑４を検出した。

ＳＫ28～31　発掘区中央で検出した土坑群。径0.5～1.0ｍ、深さ0.5～0.9ｍ前後の土坑が斜面に対して平行に一列に並んでいる。遺物は土器の小片がごくわずか出土した。

Ⅴ　磨崖仏周辺部の調査概要

(1)　基本層序　磨崖仏周辺部については、東側の第16発掘区では厚さ約0.1ｍの表土(腐葉土）の下には黄褐色土が0.4～0.6ｍがあり、その下は花崗岩盤である。西側に設けた第17発掘区では表土(腐葉土)の下に暗灰色土が約0.5ｍ堆積しており、この土層の上面でＳＤ32を検出した。それを除去すると花崗岩盤の地山が現れる。地山上面ではＳＫ33、34を検出した。発掘区内で確認した地山の標高は東側の第16発掘区では227.6～230.8ｍ、西側の第17発掘区では228.8～230.9ｍである。

(2)　検出遺構　ここでは２体の磨崖仏それぞれの周囲を取り囲むように発掘区を設定して調査を実施したが、東側の第16発掘区では遺構はなかった。

ＳＤ32　第17発掘区の磨崖仏の直下で検出した溝。北西側に石列を伴っている。幅約0.4ｍ、深さ約0.05ｍで発掘区内で検出できた長さは約6.5ｍである。付近にある段々畑(田)の畦の護岸と酷似しており、同様なものの残りであると考えられる。

ＳＫ33・34　第17発掘区のほぼ中央で検出した。径0.7～1.0ｍ、深さ約0.1～0.2ｍ。底部には拳大の石が数個入れられていたが遺物はなかった。

このほか、第17発掘区の磨崖仏の後方部の表土や第４発掘区の包含層より遺物整理箱約４箱分の土器が出土した。時期は12世紀から13世紀初頭にかけてのものである。

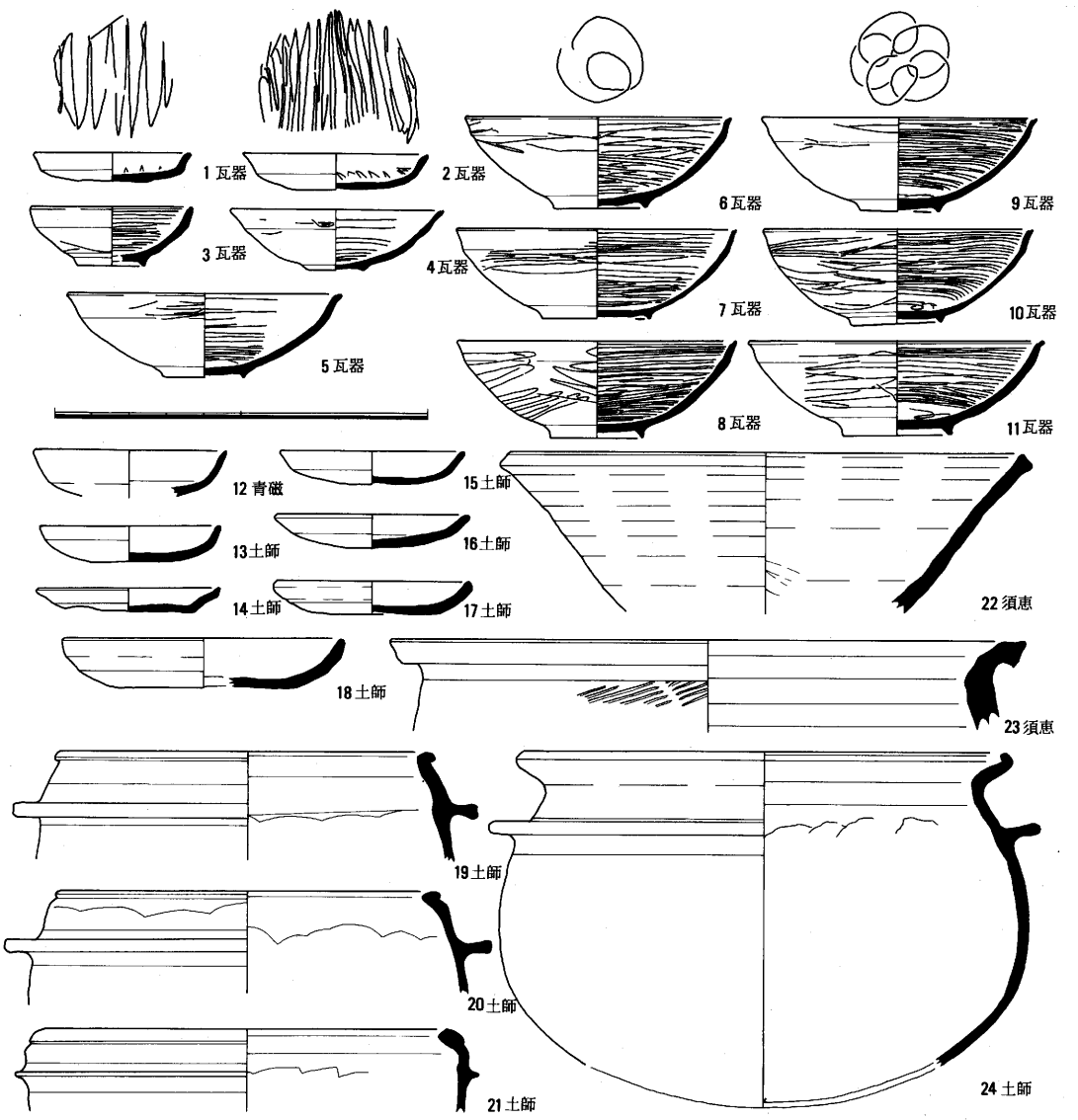
Ⅵ　磨崖仏

磨崖仏は２体あり、藤尾城が築かれている尾根の南東側斜面の岩肌に彫られていた。東側の仏は浮き彫りの阿弥陀如来像で、左に「阿弥陀三尊」を示すと思われる梵字「[illegible]」(ア・サ・サク)と「義阿弥」の銘がある。また西側は線刻仏で、「不動明王」を示す梵字「[illegible]」

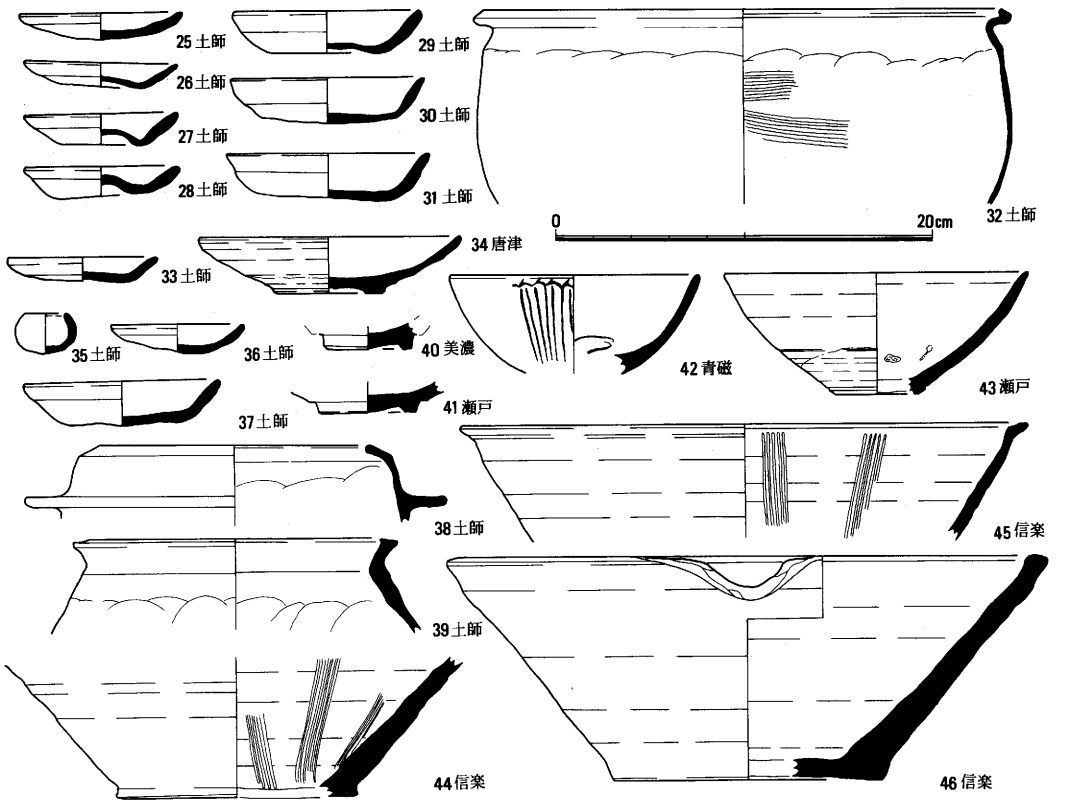
(カーンマーン)をモチーフにして不動明王の姿を表現した作品であり、こうした表現技法は他にあまり類例を見ないものである。ともに室町時代から安土桃山時代にかけての作品と考えられている。また明応年間(1492～1501)の銘がある六地蔵菩薩像が1体あり、藤尾城および磨崖仏付近を通る、狭川と阪原を結ぶ古道沿いに置かれていた[5]。このほか付近には石仏や五輪塔が多く散在している。　(武田和哉・松浦五輪美)

Ⅶ　出土遺物

土器類　発掘区内からは、鎌倉、室町、江戸時代の土器が出土した。25～46は第Ⅳ・Ⅴ



磨崖仏周辺　出土土器（1／4）



出土土器（1／4）

曲輪から出土したもので、15～16世紀にかけてのものである。量的には15世紀前半のものが多い。25～32は土坑ＳＫ07、33・34はＳＫ05、35・36・38～41は堀１、その他は表土・包含層出土のものである。１～24は磨崖仏周辺の包含層・表土出土のものである。12世紀末頃のものが主であり13世紀に下るものもある。出土土器は遺構に伴って出土したものが少なく、藤尾城との関係は不明な点が多い。しかし各遺構、包含層出土のものを見ると、12世紀末と15世紀代のものが多いことがわかる。（中島和彦）

その他の遺物　出土遺物は鉄製品15点、石製品16点である。このうち鎌(鉈鎌)、板状鉄斧、釘および石鍋片が堀１の埋土から、刀子がＳＫ07から、砥石がＳＫ06から出土しているが、各遺物の明確な時期は不明である。（松浦五輪美）

Ⅷ　藤尾城をめぐる諸問題

発掘調査の成果　今回の発掘調査によって得られた所見は以下のとおりである。

①第Ⅲ曲輪南東平坦部にも遺構が良好な状態で遺存していることが確認できた。当初藤尾城の存在が確認された段階では、南東平坦部に残る「薬師堂」という字名などから、第Ⅲ曲輪南東平坦部は寺坊跡地の可能性もあり、現存する土塁状の高まりは寺の築地等とも考えられた。しかしながら調査の結果、これは城郭の土塁でありその外周には堀１が

巡っていることが判明した。なお、寺坊関係のものと思われる遺構は確認できなかった。

②第Ⅲ曲輪と土塁４との間で堀３の存在を確認した。従って藤尾城は現存する３個の曲輪とも合わせると５つの曲輪が連なるきわめて特殊な構造であったことが判った。しかし構造上不自然な点も多く、曲輪構成を大きく変えるような改修をしていた可能性もある。

③発掘区を設定した部分に限って言えば、曲輪内部には建物跡としてまとまる柱穴群やその他の恒常的耐久的な建築物の跡と考えられる遺構は検出できなかった。

④第Ⅳ曲輪北東辺で確認した堀２の土層には、何度か浚渫を行った痕跡が認められることから補修をしていた可能性がある。また最終的にはどの堀も人為的に埋められている。なお、堀１から出土した土器は15世紀から16世紀中頃のものであるが、量的にはすくない。また発掘区内の堀の埋土から鉄砲の弾丸や人骨等は出土しなかった。

⑤第Ⅳ曲輪で検出したＳＫ07からは15世紀初頭の土器が出土したが、その状況からみて何らかの祭祀活動を行っていたものと思われる。しかし城に関係する遺構であるかは不明である。また藤尾城南側の磨崖仏の周辺では12～13世紀初頭頃の土器が多く出土した。磨崖仏自体が彫られた時期はさらに後の室町時代から安土桃山時代にかけてと考えられるが、この付近でも同様にかつて何らかの祭祀活動が行われていた可能性がある。

以上であるが、調査の結果出土遺物が全般的に少量であったこと、また発掘調査を実施した部分は藤尾城の遺構のみならず寺院跡や祭祀跡の存在が想定されていることもあって、発掘調査の成果から藤尾城の存廃の詳細な時期を明確に特定することはできなかった。

縄張からみた藤尾城　次に発掘調査を実施しなかった第Ⅰ～第Ⅲ曲輪なども含め、城全体の構造や施設の特徴などから分析することにする。

狭川地区は方形単郭式山城と呼ばれる城郭が多く存在している地域である。このほか同様の城郭が多くみられる地域には、奈良市の東部山間地域では水間・別所地区と東里地区が挙げられるが、一方では大柳生地区や田原地区などのようにまったく存在しない地区もある。これらの地区について戦国期の情勢を調べてみると、方形単郭式山城が多い地域は地侍層を中心とした地域的な一揆連合が盛んな地域であったのに対し、方形単郭式山城が存在しない地域は、戦国期に北和地域に強大な勢力を保持していた古市氏の影響力が大きく及んでいた地域であったことがわかる。こうした点からみて、方形単郭式山城は大和国中の大きな政治勢力に必ずしも同調しない自立的な在地の地侍層が築城したものであったと理解できる。またこれら方形単郭式山城には、各地域を支配する地侍層の居館としての機能と、戦時の防御の拠点としての機能があったと考えられる。

これに対して、藤尾城の基本構造は連郭式で、狭川地区に多くみられる方形単郭式山城とは大きく性格を異にするものである。発掘調査の結果では５つの曲輪の存在が確認されているが、数個の曲輪が一列に並ぶ例は他にほとんど類を見ない。このうち現存する３曲

輪は、外周空堀、内周土塁の厳重な構造となっており、各曲輪をよく観察すると現況では虎口(出入り口)の跡らしきものが認められない。ちょうど各曲輪が独立した形になっているのが大きな特徴である。従って城内より外に出撃することよりも、むしろ兵員が籠城して主として守備や防御にあたることを想定して築かれた可能性が高いものと思われる。また、各曲輪の防御施設の位置やその方向などから考えると藤尾城は北西方向(つまり狭川地区方面)に対しての防御を想定して築かれた城であることが判る。

このほか城の周辺には人為的な削平地もいくつか残り、5つの曲輪の存在とも考えあわせると、多数の兵員が駐屯することも可能であったことが推測できる。さらに、各曲輪の周辺に残る竪堀や堀底仕切、武者隠し等の防御施設の存在は高度な築城技術を示している。かかる築城技術の水準等から考えると、築城された時期は16世紀頃と推定される。

しかし一方では、周囲に標高の高い尾根や眺望の効く高地が存在しながら、わざわざ一段低い尾根に占地している点など、当時の築城の常識とは一致しない点も見逃せない。

このように、藤尾城は軍事的性格の強い城郭であることは明らかであるが、さらにその特殊な構造や種々の防御施設の存在、特異な占地等も考慮すると、比較的多数の兵員の収容を想定しつつも、特定方向からの攻撃に対する防御や城の脇を通る狭川と阪原を結ぶ古道の確保・哨戒など限定された使用目的のために築かれた城であったと思われる。

室町・戦国時代の大和国の情勢　室町幕府は地方には守護を置いてこれを治めさせたが、大和国の場合は守護の職責は興福寺にあった。興福寺には一乗院と大乗院という二つの門跡が存在し、事実上この両門跡によって大和守護職は分掌されていた。また、鎌倉時代中期より興福寺には衆徒、国民と呼ばれる被官の武士団が組織されていた。一般的に衆徒とは興福寺僧徒のことで、国民は興福寺と一体化した春日社の神人を指す。後に一乗院、大乗院両門跡はこれら衆徒、国民の被官化を競うようになったが、南北朝の動乱に乗じて衆徒・国民は実力を増進し、室町時代に入ると彼らは自立性を強めていく傾向にあった。

応仁元年(1467)に室町幕府の内紛により応仁の乱が発生した後、興福寺衆徒・国民は筒井方と越智方に分かれて抗争を始めた。筒井氏は一乗院方坊人筆頭で衆徒であり、一方の越智氏は一乗院方国民でこれに大乗院方坊人筆頭で衆徒の古市氏が味方した。双方とも東軍・西軍各方とつながりを持っていて抗争は長期に及ぶが、明応8年(1499)、永正4年(1507)の赤沢朝経・長経父子の大和侵入時や、天文6年(1537)の木沢長政の侵入時には一揆が結ばれ、大和国衆徒・国民のほとんどが一致結束して外部からの侵入に対応している。

こうした時期を経て16世紀中葉にさしかかると、筒井氏は順昭の代になり大和国の多くの衆徒・国民を傘下に収めて優勢となりつつあった。しかし天文19年(1550)に彼は急死し、幼少の藤勝丸(後の順慶)が跡を継いで、叔父の順政らが後見することになった。

そして藤勝丸が未だ元服に至らぬ永禄2年(1559)に松永久秀が大和に侵入する。彼はも

とは三好長慶の部将であり長慶に命じられて大和に侵入したものであったが、のちに三好家とは袂を分かち織田信長方についた。久秀の侵入を契機に大和国内の衆徒・国民は筒井氏を中心に抵抗するものと、松永久秀方に味方するものとに分かれて抗争した。その結果、松永方は信長の援軍を得たこともあって、一時は大和の大半を制圧するに至る。しかしその後信長に背いた頃から衰退しはじめ、代わって信長の信任を得た筒井順慶が優勢になった。天正5年(1577)に至って久秀は信貴山城で自害し、筒井順慶の大和統一はここに完成した。順慶は大和守護に任じられるが、この順慶に対して信長は天正8年(1580)に大和の諸城の破却、差出を命じている(『多聞院日記』天正8年8月条ほか[6])。

これによって実際に大和国内のすべての城が完全に破却されたかどうかは疑わしい。事実藤尾城のように今日まで一部の曲輪が現存している例もある。しかしながら少なくともこの時点において新規に築城を行ったり、あるいは現存する城を以前どおりに確保して使用するなどの行為については事実上不可能な情勢になったものとみてよい。

史料からみた戦国期の東山内　戦国期の東山内の情勢を伝える史料は乏しくまた制約も多い。加えて藤尾城もしくはそれらしき城についての記事は見えず、直接史料から藤尾城の築城年代や築城者を知ることはできない。しかし藤尾城が狭川地区内に築かれている事実からすれば、誰が何時この城を築いたにせよ、地元の狭川氏らの動向が大きく関係していた筈である。ここでは史料から16世紀頃の狭川・福岡両氏の動向をさぐることにする。

応仁の乱後の奈良市域の東山内においては、狭川地区には狭川氏やその親戚の福岡氏、須川地区には簀川氏、柳生地区には小楊生(柳生)氏がそれぞれ居り、「神戸四箇郷衆」と呼ばれていた。彼らは各々の地域を拠点とする地元の土豪であると同時に興福寺の国民でもあったが、この頃に大和国で比較的有力であった筒井、越智、古市氏らのもとに帰属、離反を繰り返しつつ、勢力の確保に努めていた模様である。

以下、時代を逐って狭川氏の動向をみてゆくと、応仁の乱以後は筒井氏の配下であったが、15世紀末頃に古市氏の誘いで一時越智方についたことがあり、しばらくしてまた筒井方に復した模様である。この後狭川氏は近隣の簀川氏や柳生氏と争うことがあった[7]。天文12年(1543)には狭川地区西隣の簀川(須川)地区で大規模な合戦があったと伝えられているが、この合戦の原因も当時筒井氏配下にいた狭川氏と簀川氏とが大楊生(大柳生)庄の支配をめぐり争ったことに端を発したものであった。そしてこの事件に筒井順昭が介入し、簀川方を攻撃するに至ったものである。『多聞院日記』天文12年4月条にはその状況を伝えて、

> 十六日　(中略)　今暁従筒井簀川被取懸了、近般世上口遊ニハ万歳・片岡なとへかとのミ沙汰ニて、簀川へノ事一向無沙汰之處ニ、順昭自身被出張、彼在所三ツ城アリ、今日二ノ城落居了、簀川方究竟之衆廿余人打死云々、簀川藤八親子四人・ワツカ北五郎ヲ始トノ、究竟之衆打死云々、本城ハ未無退城、今暁ニテハ彼方ニハ一向無覺悟云
>
> (子一人死ス、余ハシナス)

ヾ、筒井衆手負數限なし、中坊ホリモ打死了、今朝ヨリハ引モチキラス手負ヲ離ケ了、寄手ハ六千余騎、城中ニハ僅五・六十騎也云ヾ　（以下略）

とあり、筒井方は順昭自ら出陣して六千の兵で攻撃したのに対し、簀川方は僅か「五、六十騎」のみで応戦し簀川藤八以下多くが戦死したほか、簀川地区にあった三ヶ所の城は最終的に全て落城したとも伝えている。この後順昭は小楊生(柳生)も攻めて柳生家厳・宗厳(のちの石舟斎)父子を降し(『多聞院日記』天文13年7月条)、奈良市域の東山内はほぼ彼の支配下に入った。結果的には、これらの一連の合戦を足掛かりにして、筒井氏は以後大和国内において着実に勢力を伸ばしてゆくことになったと言える。

さてこの合戦以降もしばらく筒井氏の配下にいた狭川氏であるが、永禄2年(1559)に松永久秀が大和に侵入すると、近隣の柳生氏などと共に松永氏の傘下に移っている。ところが松永方は元亀2年(1571)の辰市合戦で筒井順慶に敗れたのを契機に、北和地域での勢力を徐々に失い、その後織田信長に背いたことによって敗色は決定的となった[8]。しかし狭川氏は、松永方配下の多くが離反してゆく中、久秀自刃直前の天正3年(1575)頃においても依然松永方として南都にも出没して抵抗をしている。(『多聞院日記』天正3年2月条)。

こうした情勢から察すると、筒井順慶としては今だに根強く抵抗を続ける狭川氏を牽制する必要があり、この時期に何らかの対策を講じていた可能性が高いものと考えられる。

やがて天正5年(1577)に至り松永氏は滅亡して、筒井順慶が大和守護に任じられた。これ以後狭川氏の動向を伝える史料はほとんどなく、周囲の情勢等から推し量ることしかできない。天正8年(1580)には、松永久秀侵入の手引きをしたり最後まで筒井順慶に抵抗した者らが信長の命により処刑されており、同時に彼らの所領は没収され家系は断絶したという。しかしこの中に狭川・福岡両氏の名は見られない(『多聞院日記』天正8年11月条)。

一方で江戸時代には彼らの子孫と称する者が各藩に武術指南役等で仕官している事実が見受けられる。狭川氏の場合では在地に残った者もいたが、一部は仙台藩や紀州藩等に仕官しており、福岡氏についても後に土佐藩に出仕していることが知られる[9]。これらの事実から考察する限り、筒井順慶の大和統一の際に、狭川・福岡両氏が以前松永方に与した経緯を問われて家系が断絶するといった事態から免れていたのは確かであろう。ただ、こうして狭川・福岡両氏が家の存続を果せた背景には、最終的に筒井方に帰順したか、でなければ他に何らかの事由があった筈であるが、目下その詳細について知ることは出来ない。

以上のような狭川氏の動向から考えると、16世紀の東山内において藤尾城のような多数の兵員収容能力を持つ軍事的性格の強い城郭を築く必要性が生じたものと推測できる時期がいくつか見出せる。ひとつは筒井順昭が多数の兵を率いて簀川、柳生を攻撃した天文12～13年(1543～44)頃が挙げられる。また元亀2年(1571)頃より天正5年(1577)迄の間も東山内が比較的緊張した時期であったことが指摘できる。　（武田和哉）

Ⅸ　まとめ

前節では発掘調査の成果、藤尾城の縄張、当時の史料などの視点から問題点を整理してみたが、これらをもとに藤尾城の沿革について総合的に考察すると以下の通りである。

①藤尾城はその特殊な構造から多数の兵員の収容を想定し造られたものとみられるが、当時の築城の常識に合わない立地からみて限られた目的のために築いたものとみられる。

②縄張などから推定する限りでは藤尾城が築かれた時期は16世紀とみられるが、発掘調査で曲輪内の各遺構や堀から出土した土器は15世紀初頭のものが多くを占める。ただし出土した遺物の絶対量は少ない上に、ＳＫ07のような15世紀の遺構の存在も判明しており、残念ながら城の時期を知る手掛かりとはならない。なお城が機能していた下限については織田信長が筒井順慶に対して大和諸城の破却を命じた1580年と考えられる。

③史料からみた限りにおいて、藤尾城のような特殊な城を築く契機としては、1543～44年の筒井順昭の東山内進出時や1571～77年頃の筒井順慶の北和地域進出時が挙げられる。

④藤尾城を築城した人物については記録がないので不明であるが、有力な候補としては筒井氏か、在地の土豪で一時松永方として活動した狭川氏や福岡氏がいる。

なお今回の調査地は城の一部分で、保存状態の良い第Ⅰ～Ⅲ曲輪部分については、そのまま保存することになったため調査を実施していない。従って藤尾城全体では、まだ解明されていない点も多くある。また付近には寺院の存在が推定されているなど今後に残された課題は多く、城郭主要部や周辺地での調査が期待される。　　（武田和哉・松浦五輪美）

1）竹内理三編『角川日本地名大辞典 29 奈良県』　角川書店　1990　495頁。田村憲美「郡支配体制と開発」『中世村落形成史の研究』校倉書房　1994　第一部　第四章　所収。

2）村田修三「東山内の城」『日本城郭大系』10　新人物往来社　1980　所収。同「中世の城館」『奈良市史 通史編2』奈良市史編纂室　1994　所収。多田暢久「城郭分布と在地構造」『中世城郭研究論集』　新人物往来社　1990　所収他。

3）奈良狭川家所伝の「狭川之系図」によれば、狭川家第４代甲斐守助康の息女と吉村米之助が婚姻し子息助友が生まれたが、狭川本家に嗣子がなかったため助友が狭川家に入り第５代を継いだと伝える。

4）奈良市教育委員会『奈良市の佛像　奈良市彫刻調査報告書』　1987。

5）奈良市教育委員会『奈良市石造遺物調査報告書』　1989。

6）奈良県史編集委員会『奈良県史11　大和武士』　名著出版　1993。奈良市史編纂室『奈良市史 通史編2』第6章　1994。

7）『大乗院寺社雑事記』文明9年12月条、文明13年9月条、文明16年4月条、同8月条、文明17年9月条、同10月条、延徳元年11月条、『続南行雑録』所収「祐維記」大永4年9月条　など。

8）『和州諸将軍傳』巻3～5、『大和記』「大和国侍之事」条。

9）仙台藩に仕えた狭川氏に関しては『伊達世臣家譜』巻13に所伝があり、その冒頭には狭川氏の祖先に関して、

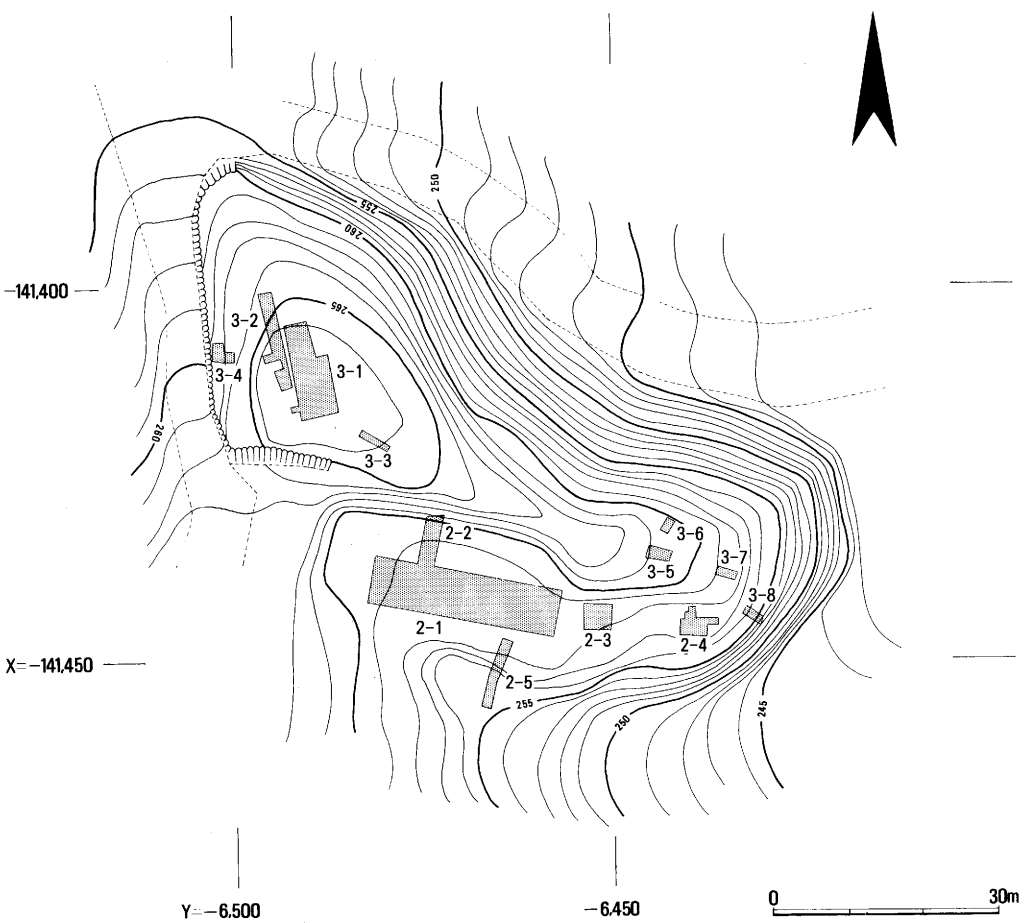
狭川姓藤原、出自狭川甲斐守助貞、不知其先、以狭川上野亮助正爲祖、助正受一萬石於大和国居狭川城、因氏焉、助正子筑前守助重、初名助信、助重子甲斐守助貞、仕織田家、會天正十年信長亡、狭川城陥、助貞學愛洲陰流刀術於上泉武蔵守秀綱、克極奥義、……（以下略）

などとある。また紀州藩に仕官した狭川氏の動向には『南紀徳川史』巻60「小夫(狭川)淺右衛門」条を参照。上掲史料のうち「狭川之系図」にもみえる助貞以降の代についてみると、助貞は上泉秀綱（のち信綱）に師事して新陰流剣術を会得したと伝える。以後狭川家は剣術者を多く輩出し助貞孫の助信とその子助直は柳生宗規に師事して後に狭川新陰流を興した。江戸期の狭川家が剣術を業とした背景には、かつては狭川氏同様東山内の地侍であり後に徳川幕府の兵法指南役を勤めた柳生氏の影響が大きいと思われる。また福岡氏については、奈良市狭川東町所在の吉水寺址に歴代墓地があり、ここが明治政府の文部卿福岡孝悌の祖先の墓地と伝える（『狭川村是』）。なお福岡孝悌は元土佐藩士である。

(2) 藤尾城跡の調査　第２・３次

はじめに

本調査は奈良市下狭川町字タゲ2714番地、字薬師堂2712番地他において実施した、藤尾城跡の第２次・第３次調査である。調査地は藤尾城の曲輪がある尾根の南西に位置する尾根である。尾根頂部から北と南東へ細い支尾根が下っており、南東に延びる尾根の南西斜面は人為的に削平されたものと思われ、幅約10ｍ、長さ約30ｍの平坦部が作り出されていた。また、尾根頂部は試掘によって石列を検出しており、中世の墓域とも考えられることから、この２箇所を中心に調査を行なった。第２次調査として南西平坦部及び周辺に５ヵ所、第３次調査として尾根頂部及び尾根筋に８ヵ所、計13ヵ所、総面積298㎡の発掘区を設定した。調査期間は平成６年４月１日から同４月27日までである。 以下、検出遺構について第２次と第３次調査に分けて述べる。



藤尾城跡第２次、第３次調査発掘区位置図（１／1,000）

第2次調査

第2次調査では、尾根南西平坦部に第1発掘区、尾根筋から平坦部に下る斜面に第2発掘区、南西平坦部の東に位置する2箇所の狭い平坦部に、西から第3、第4発掘区、平坦部から谷へ下る斜面に第5発掘区を設定した。このうち遺構を検出したのは第1、第3、第4発掘区である。

Ⅰ　基本層序

平坦部の中央は、約0.05mの腐葉土の下に約0.1mの淡灰褐色の花崗岩風化土が堆積し、以下は花崗岩岩盤である。しかし平坦部の端では岩盤が粉状に混じる土が幾層も重なっており、削平と同時に盛り土によって平坦部を谷側へ拡張していることがわかる。岩盤及び盛土の上面の標高は259.60m前後である。

Ⅱ　検出遺構

検出した遺構は、土坑15、溝2条、石列1である。

ＳＫ01　直径約0.8m、深さ約0.2mの平面円形の焼成土坑。内面は熱を受けて赤化しており、埋土に炭が混じる。

ＳＫ02　長径約1.0m、短径0.7m以上、深さ約0.15mの平面楕円形の土坑。内面はタールの付着によって黒く硬化しており、埋土に炉壁と思われる破片が混じっている。内部はかなりの高温を受けたことがわかり、炉跡の可能性が強い。

ＳＫ03　長径約1.0m、短径約0.6m、深さ約0.05mの平面楕円形の焼成土坑。

ＳＫ04　長径約1.4m、短径約0.6m、深さ約0.15mの平面楕円形の焼成土坑。

ＳＫ05　長径約0.8m、短径約0.5m、深さ約0.1mの平面楕円形の土坑で、北半部は東へ約0.2m張り出す。

ＳＫ06　長径約0.8m、短径約0.5m、深さ約0.1mの歪んだ楕円形を呈する土坑。

ＳＫ07　長さ約1.0m、幅約0.4m、深さ約0.1mの平面隅丸長方形の土坑。

ＳＫ08　一辺1.0m前後、深さ約0.2mの平面隅丸方形の大型土坑。

ＳＫ09　長さ約1.0m、幅約0.5m、深さ約0.2mの平面隅丸長方形の土坑。

ＳＫ10　長さ約1.35m、幅約0.5m、深さ約0.3mの平面隅丸長方形の土坑。

ＳＫ11　長さ約1.4m、幅約0.7m、深さ約0.25mの平面隅丸長方形の土坑。

ＳＫ12　一辺1.5m前後、深さ約0.2mの平面隅丸方形の大型土坑。重複関係からＳＫ10よりも新しいことがわかる。以上ＳＫ01～12は第1発掘区で検出した。

ＳＫ13　第3発掘区で検出した、長さ約2.5m、幅約1.5m、深さ約0.15mの平面隅丸長方形の土坑。岩盤を掘り込んでおり、内面はタールが付着し硬化している。埋土には炭が混じり、炭窯の可能性が考えられる。

ＳＫ14　第4発掘区で検出した、長さ約0.8m、幅約0.5m、深さ約0.15mの平面隅丸方

形の土坑。

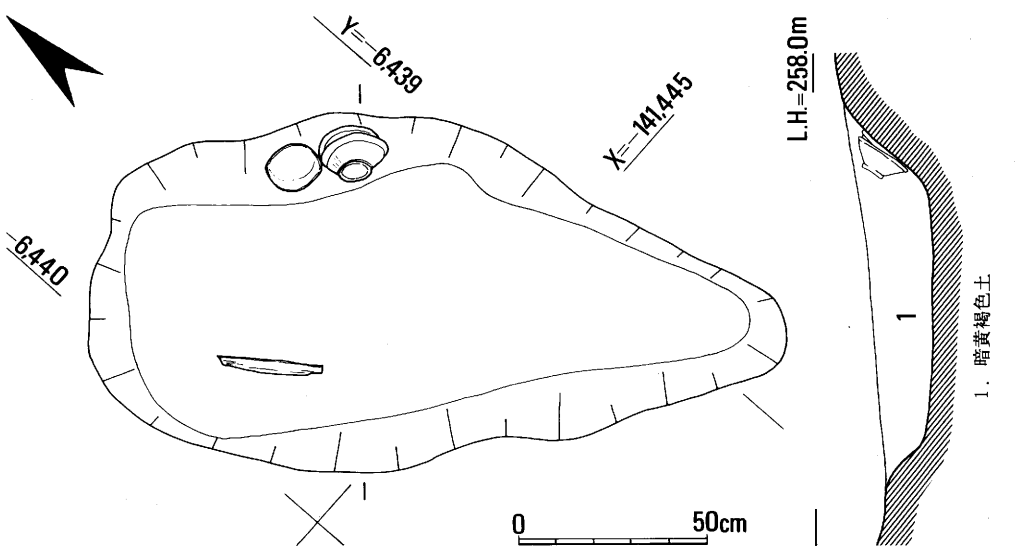
ＳＫ15　第４発掘区で検出した、長さ約1.8m、最大幅約1.0m、深さ約0.2mの平面楕円形の土坑。底面の西よりに鉄刀が置かれ、東よりに二つ重ねで伏せられた白磁碗と瓦器椀一つが並べられていた。棺や遺骸の痕跡はなかったが、遺物の埋納状態からみて土壙墓と考えられる。形状からみて頭部を北に向けて葬られたものと推測できる。土器は12世紀中頃のものである。

ＳＤ16　第１発掘区で検出した、幅約7.5m、深さ約0.1mの南北溝で、北は発掘区外へ続き、南は発掘区中央付近で途切れる。

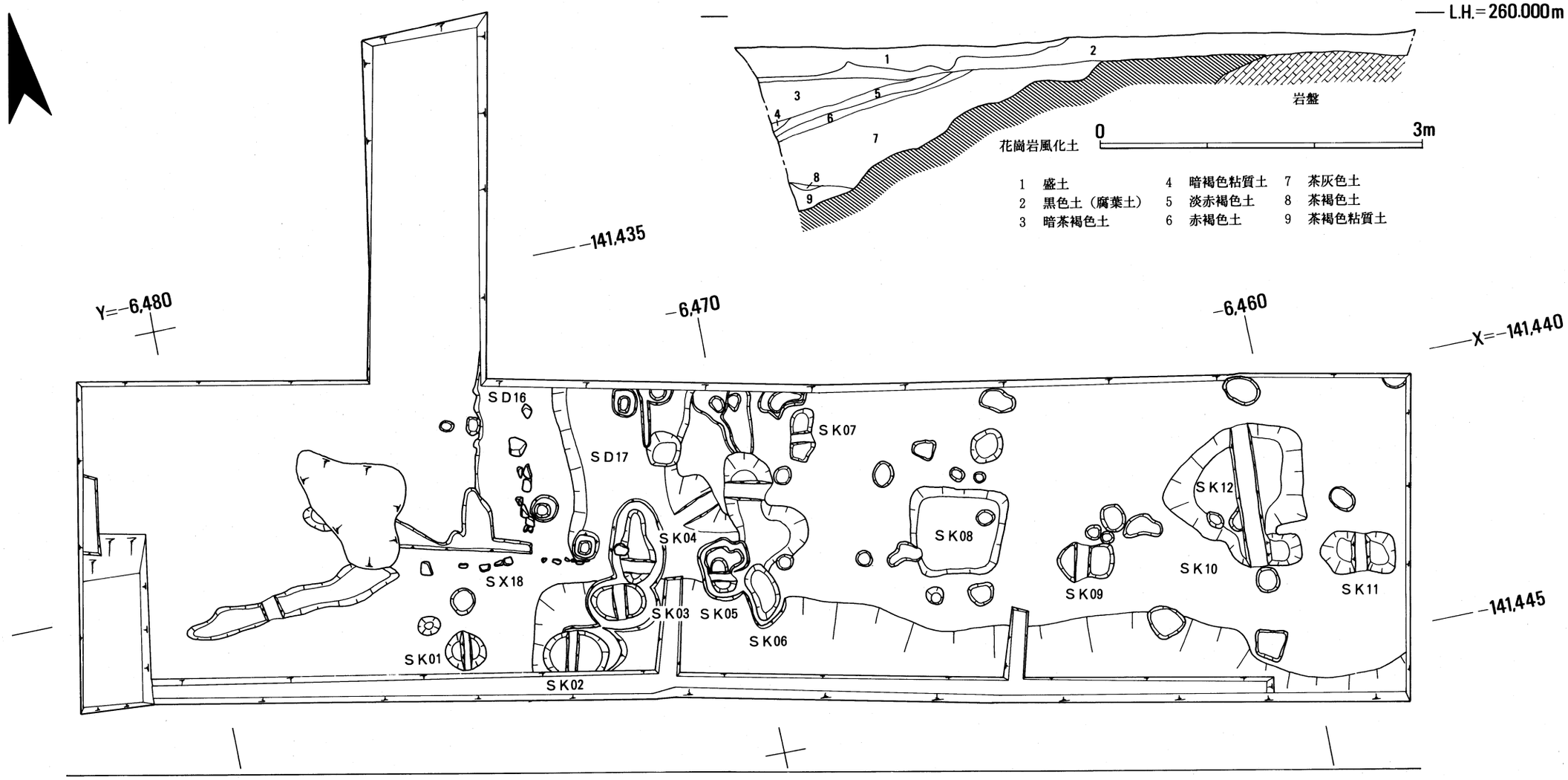
ＳＤ17　幅約1.5m、深さ約0.1mの南北溝で、発掘区外へ続き。ＳＤ16の中央に位置しており、同一の溝内の段差とも考えられるが、南部で東へ広がるため別の溝と判断した。

ＳＸ18　第１発掘区で検出した、縦横それぞれ約5.0mのＴ字状に並ぶ石列である。拳大の角礫を用いている。礫の間隔が一定でなく、列としては不明瞭であるが、周囲に同様の礫が散在していないことから、人為的なものと考えられる。

以上の遺構のうち、その性格を知ることができるものは、土坑ＳＫ01～04、13、15のみである。しかも土壙墓と考えられるＳＫ15以外は、内部で焼成が行なわれたことが確認できるだけで本来の用途は不明である。土坑ＳＫ09～11は、尾根斜面に平行して掘られたほぼ同規模の土坑であり、一連の遺構もしくは同じ用途の遺構とも考えられる。この他柱穴と思われる遺構をいくつか確認したが、発掘区内で建物としてはまとまらない。これらの遺構からは遺物がほとんど出土していないため、遺構の構築時期については知り得なかった。



土坑ＳＫ15平面・断面図（１／20）



右上：第１発掘区西壁土層図
中央：第１・２発掘区遺構図
左下：第３発掘区遺構図
右下：第４発掘区遺構図

藤尾城跡第２次調査遺構平面図（１／100）・土層図（(１／50）

第3次調査

第3次調査では、尾根頂部に第1・第2発掘区、頂部から南東尾根筋に第3発掘区、尾根西斜面に第4発掘区、南東尾根端部に第5発掘区、その北斜面、東斜面、東斜面のさらに低部にそれぞれ第6・第7・第8発掘区を設定した。このうち遺構を検出したのは第1・第2・第4・第5発掘区である。

Ⅰ　基本層序

3㎝前後の腐葉土の下に約10㎝の暗褐色土が堆積し、花崗岩風化土の地山となる。遺構面は暗褐色土の上面で、標高は最高部で約266.50mである。

Ⅱ　検出遺構

検出した遺構は土坑2基、石列2、炭窯1基である。

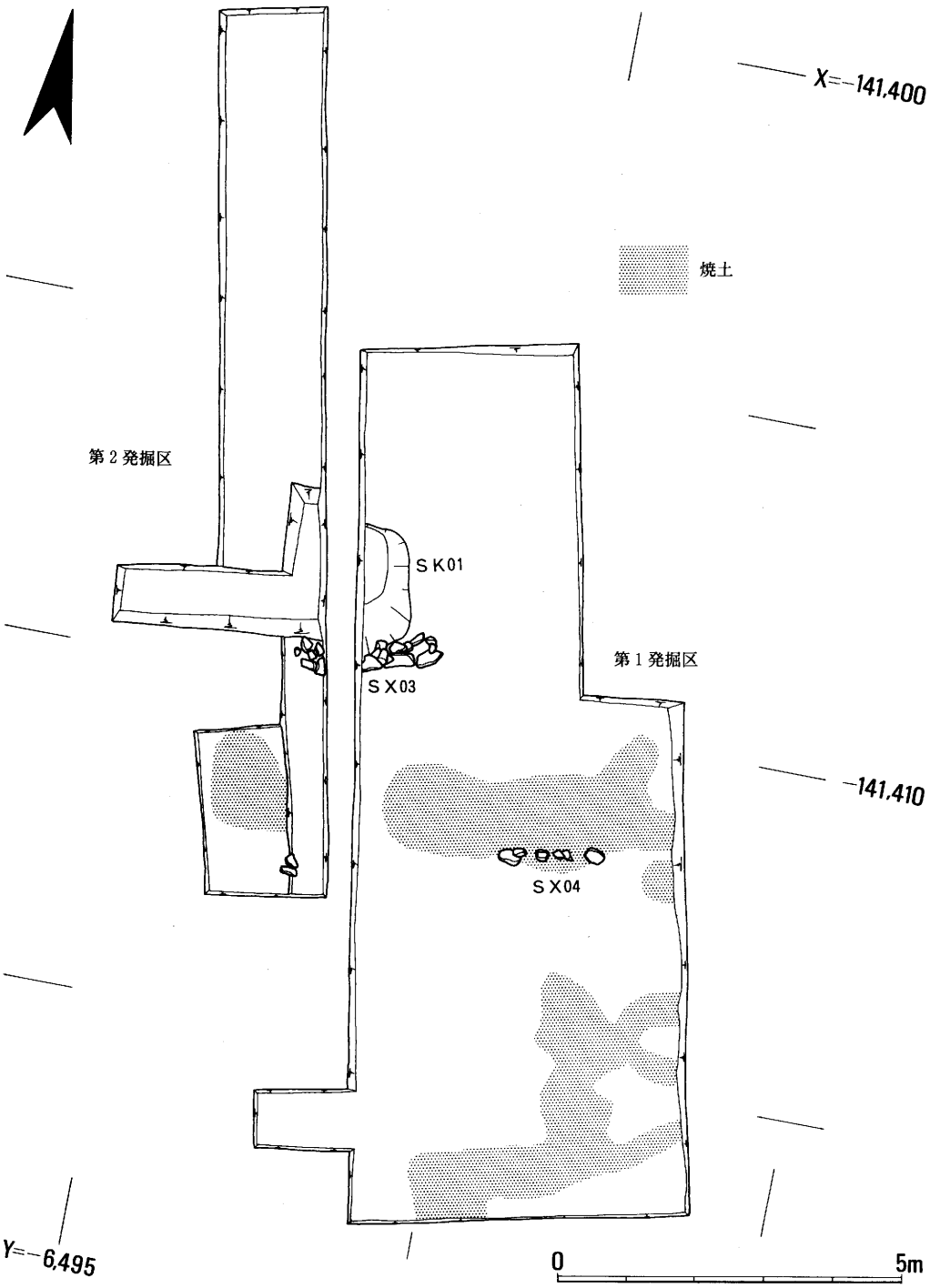
ＳＫ01　第1発掘区で検出した、南北約2.0m、深さ約0.25mの土坑。東半のみ確認したが、おそらく平面楕円形を呈するものと思われる。この周辺には小円礫が多量に散在しており、遺構検出時には墓の可能性が考えられたが、埋土中に遺物はなく、小円礫の混じる土で埋まっていた。遺構の立地状況から考えると本来土壙墓であった可能性があり、それが二次的に掘り返されたのちに周囲の土で埋められたものであろう。

ＳＫ02　第5発掘区で検出した、長径約1.5m、短径約1.0m、深さ約0.2mの平面楕円形を呈する焼成土坑である。埋土は多量に炭の混じる土で、底面は黒色または赤色を呈し硬化していた。埋土から12世紀後半の瓦器椀が出土した。

ＳＸ03　第1発掘区で検出した、長さ約2.0m、幅約0.5mで東西に並ぶ石列である。ＳＫ01の南辺に沿って、人頭大から拳大の角礫が並べられている。ＳＫ01と一連の遺構と考えられるが、尾根の傾斜がこのラインを境に変換していることから、あるいは区画施設の一部であったとも考えられる。

ＳＸ04　第1発掘区中央付近で検出した、長さ約1.5mで東西に並ぶ石列である。両端に人頭大の石を置き、間に4つの拳大の礫が並ぶ。石列としては簡素であるが、このラインを南辺として焼土が広がっていることから人為的なものと判断した。

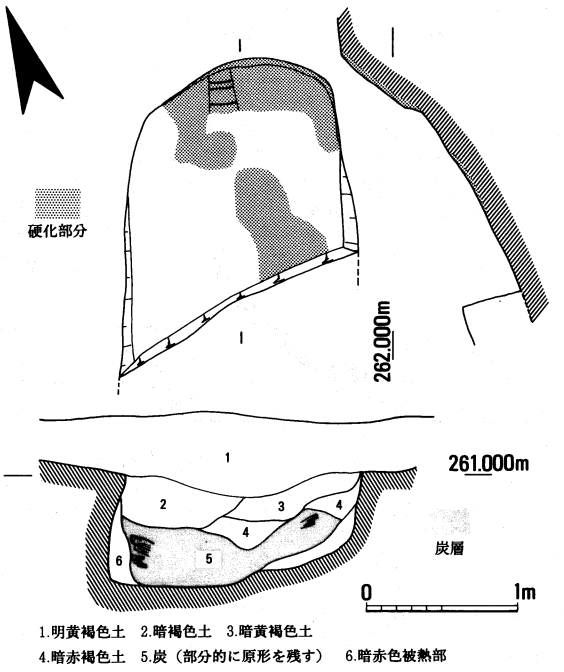
炭窯　工事用道路の切通しで窯の断面を確認したため、その上部斜面に第4発掘区を設けて調査した。窯は幅1.5m、長さ2.0m以上、検出面からの深さ約0.7mで、床面は斜面に沿って約25°傾斜している。焚口部は削平されており、焼成部のみが残る。内面はタールが付着して黒く硬化しており、奥壁の立ち上がり部分には、主軸と若干ずれた位置に浅く壁が掘り込まれた煙道の痕跡が残る。内部には直径5㎝程度の炭が数十本、主軸に直行して並んで残存していた。通常の炭窯では平坦な床面に木を立て並べるが、検出状況ではもとから横に置かれていたと判断され、床面の傾斜から考えても従来見られるものとは異なった生成法が行なわれていたと思われる。最終的には炭を取り出す前に窯が崩壊したため、



藤尾城跡第3次調査　遺構平面図（1／100）

そのまま廃絶したものと思われる。操業時期を推定できる遺物が出土せず、現在炭の分析が済んでいないため年代ついては不明である。

この他、第1発掘区で大きく2箇所の焼土の広がりを確認した。北側のものは長さ7.0m以上（一部途切れる）、幅1.5m前後で東西に長く、発掘区外東へ続く。中央付近の南辺には石列ＳＸ04がある。南側のものは不定形であるが、基本的には東西と南北にＬ字状に広がり、西端ではさらに発掘区外南へ曲がって続いていく。掘り窪めた状態は認められず、上面が熱を受けたものと判断される。



炭窯平面・断面図（1／50）

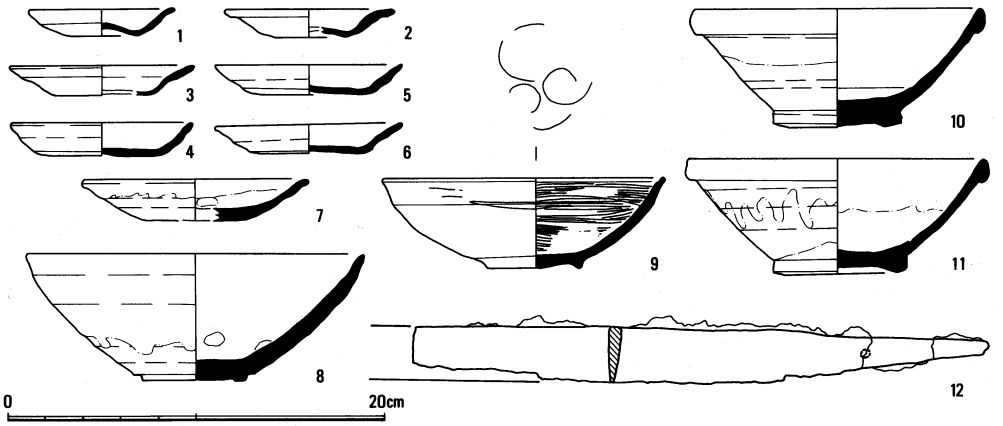
被熱の範囲が限定されていることから考えると、この位置に重複して何らかの上部遺構があったか、意図的にこの範囲で火を使ったものと思われる。

出土遺物

出土遺物のほとんどは土器であり、他に若干の鉄器がある。以下主要なものについて第2次・第3次調査分を一括して述べる。

土器には、土師器、瓦器、瓦質土器、国産陶器、輸入陶磁器がある。大半は室町時代のものである。1～8は第3次調査第2発掘区出土のものである。2・4～6・8は焼土層から、他は表土から出土している。1～6は土師器皿、7・8は瀬戸焼の皿と平茶椀である。土師器皿1～3は赤褐色の胎土のもので、いわゆる「赤土器」である。4～6は明黄灰色の胎土で底が広くやや扁平なもので、口縁部を2段にナデている。後者は奈良市内の盆地部にある同時期の遺跡での出土例は見られず、調査地周辺で作られた在地産の土師器皿と考えられる。瀬戸焼は灰釉を施しており、皿は口縁部内外面のみに、平茶椀は内面と外面上半部に施釉する。いずれも底部に回転糸切り痕が残る。15世紀前半のものと考えられる。9～11は、第2次調査で検出した土壙墓と考えられるＳＫ15出土のもので、瓦器椀（9）と白磁碗（10・11）である。瓦器椀の見込み部には連結輪状の暗文がある。白磁碗はいずれも内面と体部上半に施釉する。釉は発色が悪く淡いオリーブ色で、11は釉の表面に気泡が多い。いずれも粗雑な感が強い。12世紀中頃のものと考えられる。

12は鉄刀で、白磁碗等と共にＳＫ15から出土した。残存長30.5㎝、身の幅3.0㎝、茎の長



出土土器・鉄刀（1／4）

さ10.8cmで、切先部分は欠損している。X線撮影によって茎の中央部に目釘穴が一ヶ所穿たれていることが確認できた。身の反りはなく、茎の長さから推測して、短刀であると思われる。この他鉄鏃とみられるものが一点表土から出土しているが、錆化が著しく詳細は不明である。（中島和彦・松浦五輪美）

まとめ

今回の調査地は尾根上という地理的条件から、堆積土が薄く、遺構が良好な状態で残存していなかった。しかし第2次調査を行なった平坦部及びその近辺では明らかに人為的な開削がなされており、柱穴が認められることからここに構築物があったものと思われる。また炉跡などから推測して、生活の場として継続的に利用されていた時期があったことも考えられる。第3次調査地の尾根頂部では顕著な遺構はないものの、焼土の広がりや石列が認められたことは、ここもなんらかの目的で利用されていたことを示している。

出土遺物からは主に12世紀中頃から13世紀初頭の時期と、15世紀前半頃にこの周辺が利用されていたことが窺える。藤尾城が築かれている尾根の南東端付近でも12世紀末の瓦器が大量に出土しており、この時期には調査地も含め付近の尾根一帯で何らかの活動が行なわれていたと考えられる。当該期の土器が出土した第2次調査の土坑ＳＫ15とも考え合わせると、祭祀に関連したものである可能性があり、本調査地の字名が「薬師堂」ということや、当地から移されたものと伝わる下狭川町中墓寺の薬師如来像が平安時代の作品であるということから、当時ここに寺院があったと考えられる。また16世紀の作品とされる磨崖仏をはじめ石仏や五輪塔が付近に散在することから、この一帯が一貫して寺院もしくは墓地として利用されてきた可能性が強い。今回の調査で、人為的に開削された尾根に何らかの構築物があった痕跡を認めたことや、土壙墓を検出したことによって、この付近に寺院が存在していた可能性がさらに高まった。しかし16世紀後半に同じ山間に築かれることとなる藤尾城との関係については明確にできなかった。（松浦五輪美・武田和哉）

(3)　ヲシヨジ古墳群の調査

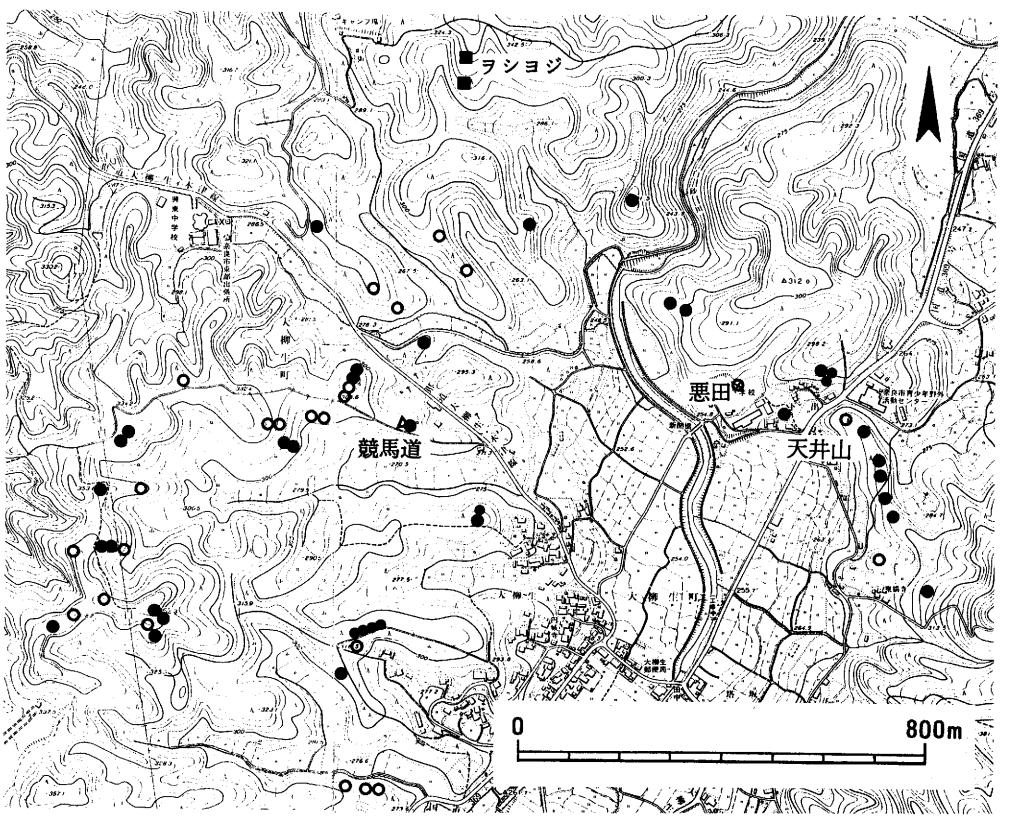
Ⅰ　はじめに

ヲシヨジ古墳群は、奈良市大柳生町字ヲシヨジ4807番地に所在する。丘陵尾根上に立地した2基からなる古墳群で、丘陵先端に近い古墳を1号墳、それよりもさらに尾根を登ったところにある古墳を2号墳とする。今回、発掘調査の対象となったのは1号墳であり、保存を前提とした最小限の発掘調査を実施した。また、2号墳については墳丘測量調査を実施した。

現在の大柳生の集落は、四方を山で囲まれた小盆地にあり、盆地北部の丘陵上には、集落を望むように、競馬道古墳群、天井山古墳群など、古墳時代後期の群集墳がみられる。ヲシヨジ古墳群は、競馬道古墳群のさらに北の丘陵上にあり、あるいはその一支群とも考えられる。古墳の立地する丘陵からの眺望は、尾根と尾根との間からわずかに盆地がうかがえるのみであり、決して見晴らしが良いとはいえない山中にある。

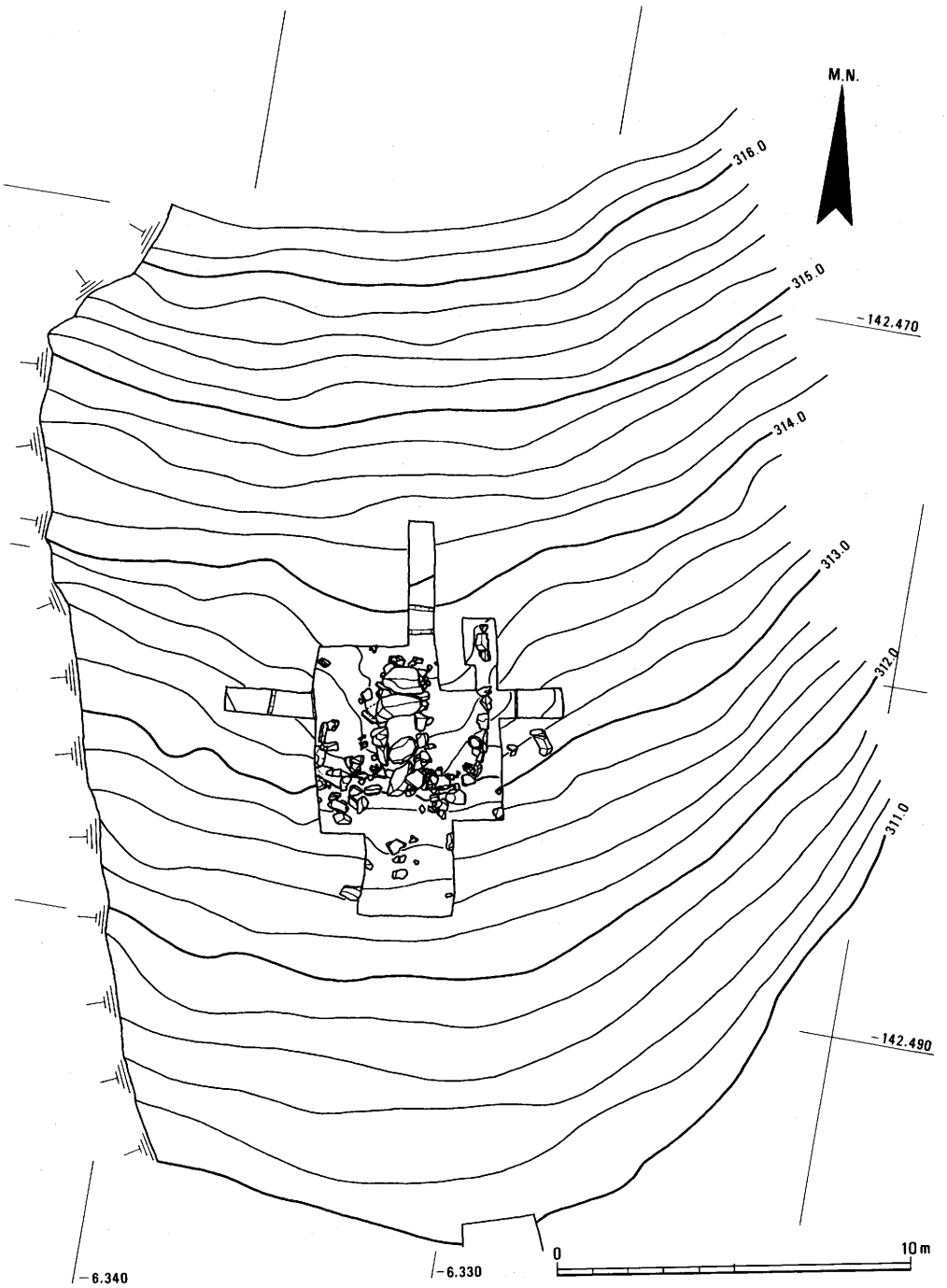
Ⅱ　1号墳

1号墳は、調査前から、墳丘盛土が流失して天井石が露出しており、埋葬施設は横穴式

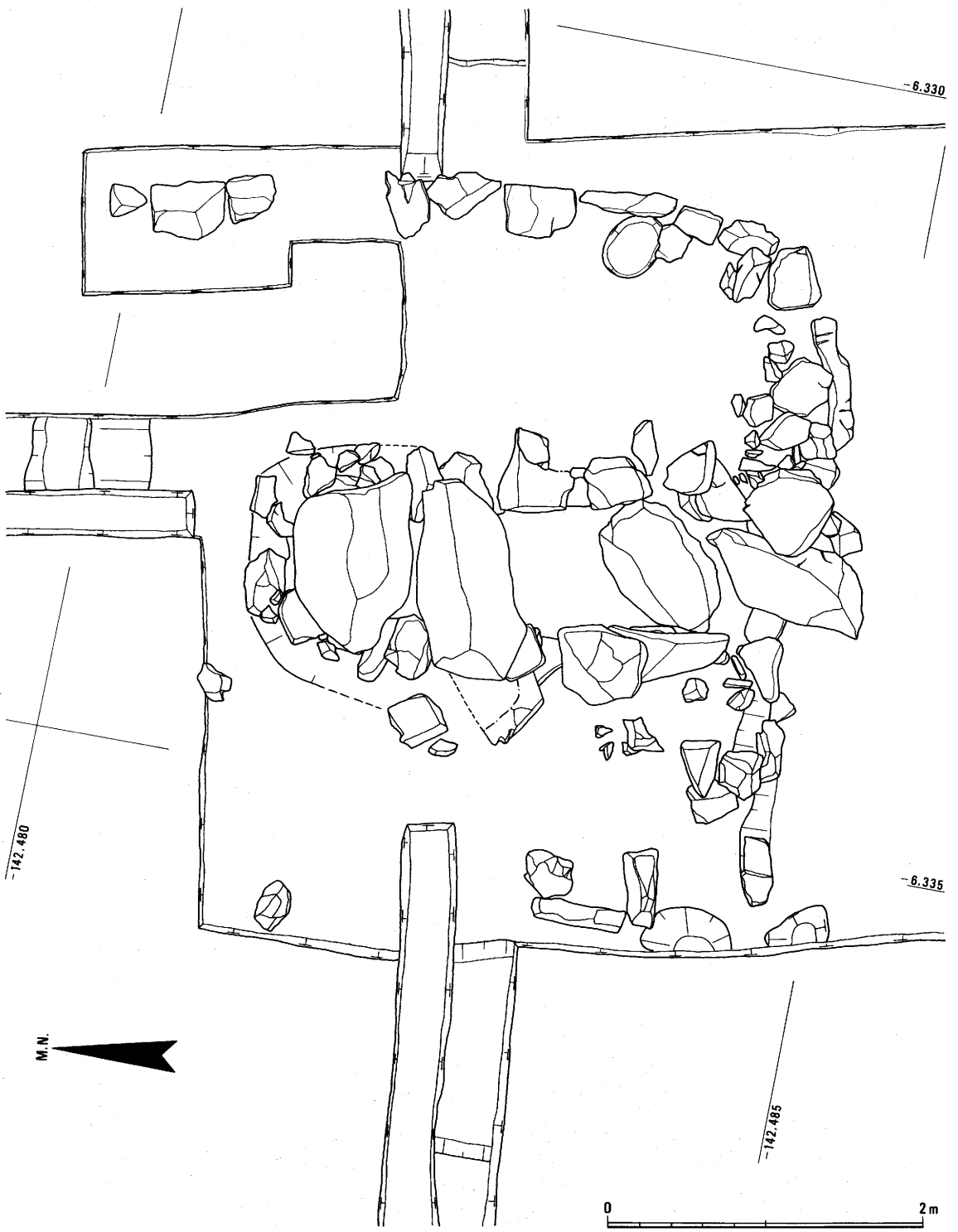


大柳生地域の古墳分布図（1／15,000）●は古墳、○は古墳状隆起、⊗は破壊墳

石室であることがわかっていた。また、墳丘の周囲には部分的に石材が露出しており、墳丘の内外を区画する石積が存在することが推測できた。発掘面積は、墳丘、石室内合わせて約40㎡で、調査期間は平成６年５月12日～同年６月６日である。

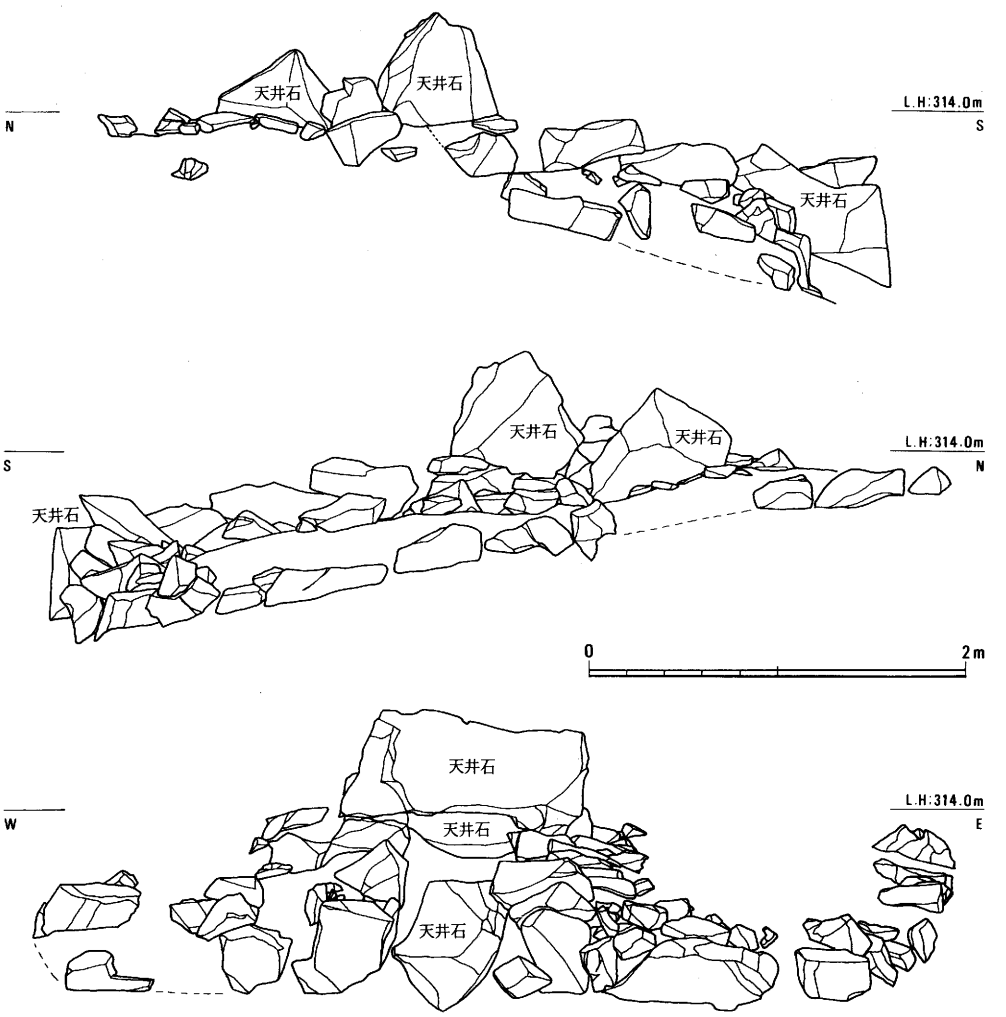


１号墳　墳丘平面図（１／200）



1号墳　墳丘、石室平面図（1／40）

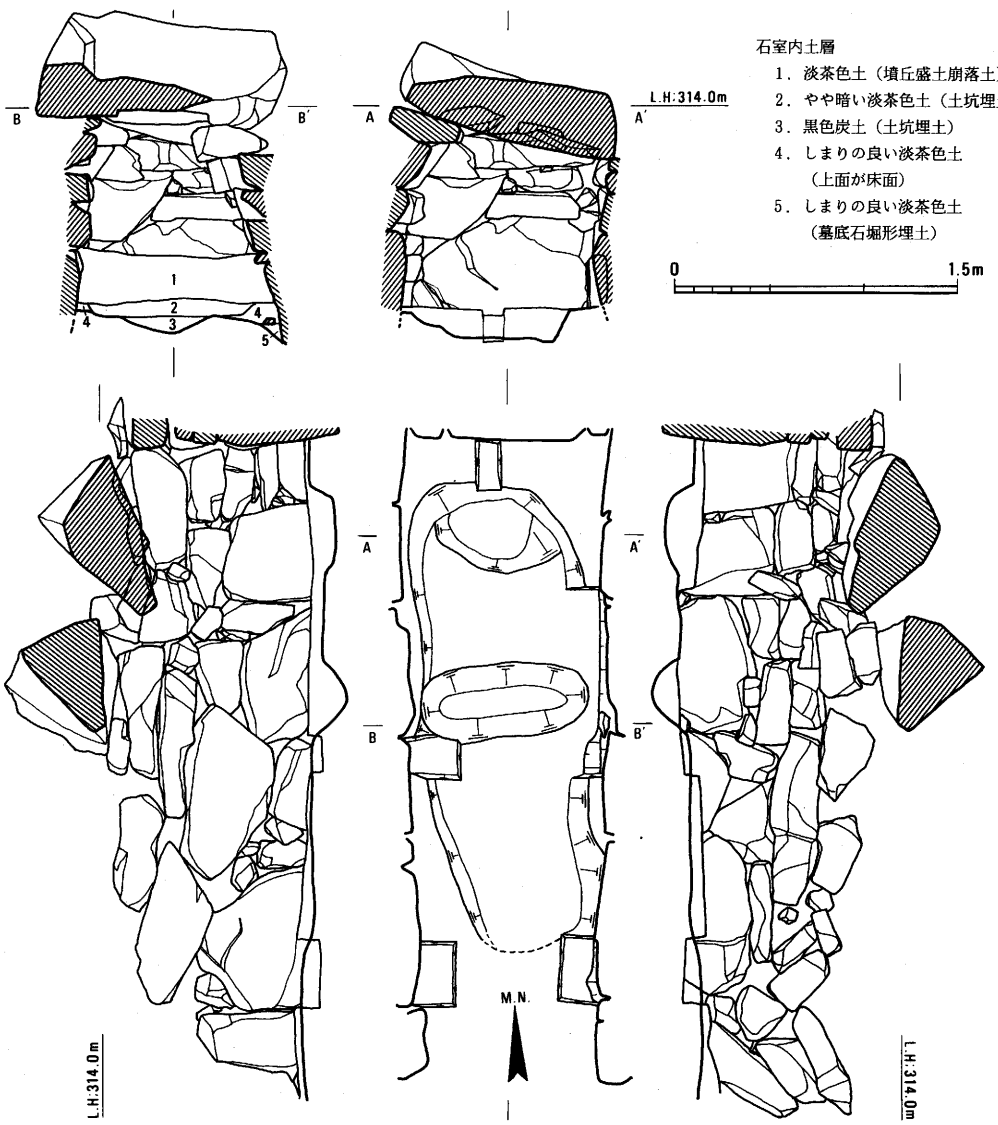
墳丘・外表施設　墳丘は東西南北それぞれ約５ｍの南向きの方墳である。盛土はほとんど流失しており、正確な高さは不明であるが、石室床面から天井石の最高部まで1.6ｍである。北辺を除く三辺に墳丘の内外を区画する石積がある。石室入口にあたる南辺では、基底石を残して石積が崩れ落ちており、おそらく数段が積まれていたものと思われる。東辺、西辺でも基底石を残して石積が崩れていたが、崩落石の状態からみて、石積は南から北にいくにしたがい低くなり、墳丘北半では基底石のみの列石となっていたと思われる。あるいは石積みの上面を揃えていたかもしれない。東辺の石積・列石は、平面的にわずかに弧を描くように据えられている。西辺は、東辺よりも石積・列石の残存状況が良くないが、同様に弧を描いていたものと思われる。石積外側と墳丘北側に周溝と思われる浅い窪みが検出できた。



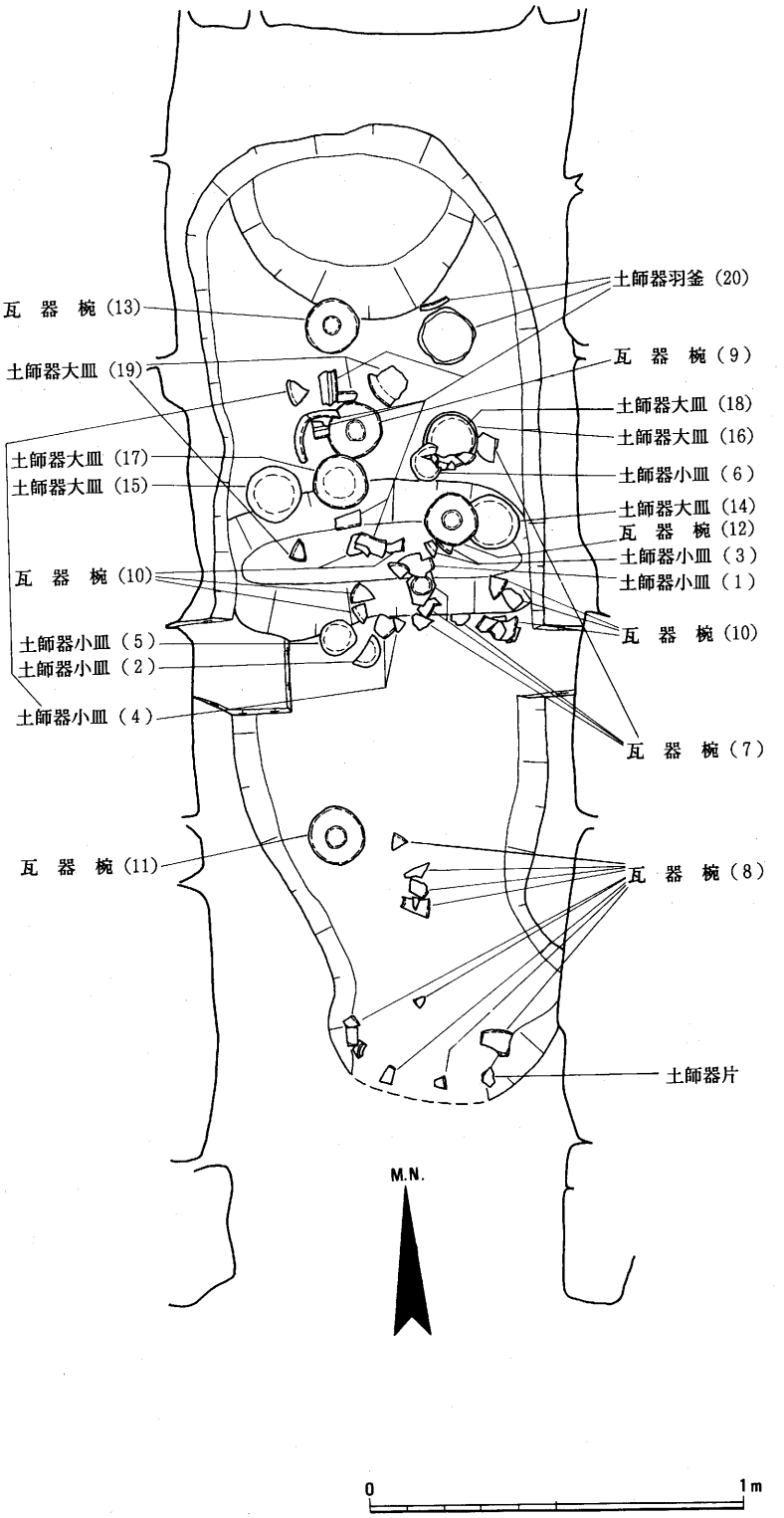
１号墳　石室・外区の石積立面図（１／40）

埋葬施設　ほぼ真南に開口する無袖の横穴式石室である。長さ3.40m、奥壁幅1.05m、入口幅0.90m、高さ1.05mである。天井石は4枚で、奥の2枚は奥壁、側壁の上にかろうじて残っていたが、入口近くの2枚は石室内に崩れ落ちていた。また、側壁の一部も墳丘の崩落土とともに石室内に落ち込んでおり、石室内には厚さ0.30mほどの土が堆積していた。

奥・側壁ともに基底石としてやや大きい石材を立てて置き、その上にやや小さい石材を小口積している。持ち送りは、石室がやや変形しているため原状を知り難いが、緩かったものと思われる。奥壁は、基底部にほぼ幅いっぱいの石材を立て、その上に2～3段の小口積をしている。側壁は、左右いずれも基底部に6個のやや大きな石材を立てており、その上部は、奥からみて左側壁ではやや小さく偏平な石材を2～3段の小口積、また、右側



1号墳　石室図（1／40）

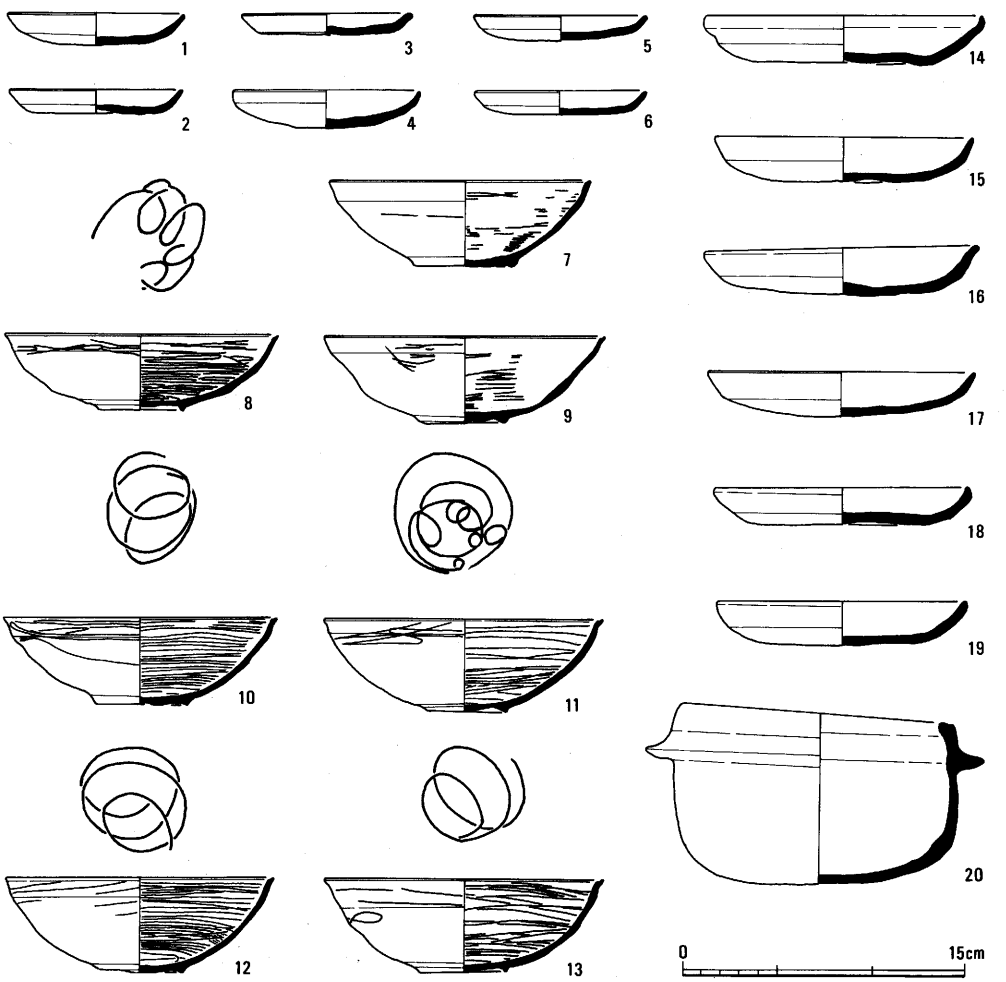


1号墳石室土坑内土器出土状況（1／20）　((　)内番号は次頁の実測図と対応)

壁でも２～３段の小口積をしているが、石材はやや小さく偏平なものに加えて、基底石とほぼ同じ大きさのものも使用している。なお、左右ともに石室入口の基底石は、柱状の石材を立てており、門柱を意識したかと思われる。なお、石材はいずれも花崗岩で、付近で採取できるものである。

床は、地山の上に厚さ約0.05ｍほど淡茶色土を敷き、その上面を床面としている。また、型式からみて埋葬時に伴う可能性のある須恵器は、細片が２点出土したのみであり、埋葬時の状態を保った副葬品などは出土しなかった。鎌倉時代の再利用の際、石室内が撹乱されたためであろう。

石室床面のほぼ全面に、平面楕円形の土坑が掘られている。長径2.6ｍ、短径0.9ｍで、深さは0.05ｍ前後であるが、北端と中央にやや深い部分があり、北端では0.12ｍ、中央では0.20ｍの深さがある。埋土はやや暗い淡茶色土であるが、北端と中央のやや深い部分ではその下層に炭を多く含む黒色土がある。上層から鎌倉時代（12世紀末頃）の土器が21点



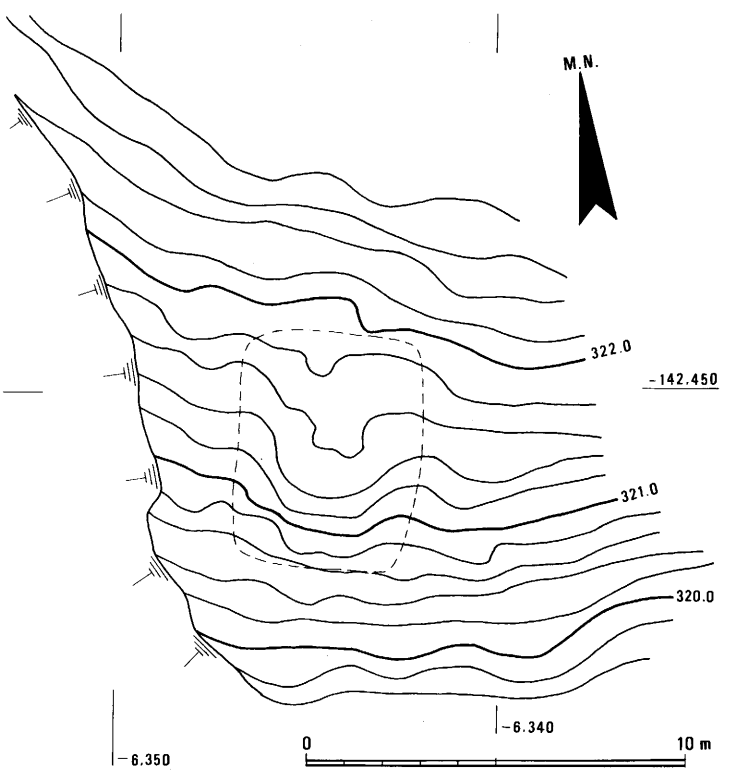
１号墳石室土坑内出土土器（１／４）

出土した。石室側壁の崩落のため、一部は割れ、散乱した状態で出土したが、原状を保っているものもある。その内訳は瓦器椀７点、土師器羽釜１点、土師器大皿６点、土師器小皿６点、器種不明の土師器破片１点である。北半部に集中して出土しており、南半部からは瓦器椀２点のみである。瓦器椀は、割れ散らばったものを除くとすべて口縁を下にして置かれており、土師器羽釜は口縁を上にしている。土師器大皿・小皿は、口縁を下にするものと上にするものとがある。また、土師器大皿には、２枚を重ねて、口縁を上にして置かれているものもある。

なお、石室側壁の崩壊した部分と墳丘の周囲から、石室内の土器と同時期の土師器羽釜、瓦器椀などの破片が出土した。

出土遺物　飛鳥時代、あるいは奈良時代のものと思われる須恵器細片、鎌倉時代（12世紀末頃）の土師器、瓦器がある。このうち、石室内の土坑から出土した鎌倉時代の土器について述べる。

１～６は土師器小皿である。口径9.2～10.0cm、器高1.3～2.0cm。口縁部は外上方へ広がり、端部は丸い。３のみ口縁部がやや厚い。４のみ底部がやや丸い。調整は、口縁部が内外面ともにヨコナデ、底部が内面はナデ、外面は無調整である。14～19は土師器大皿であ



２号墳　墳丘図（１／200）

る。口径13.0～14.8cm、器高2.1 ～2.6cm。口縁部は外上方に広がり、端部は直立するもの(14・18)、そのまま丸くなるもの（15・17・19)、わずかに外傾するもの（16）がある。調整は、口縁部が内外面ともにヨコナデ、底部が内面はナデ、外面は無調整である。20は土師器羽釜である。口径14.4cm、器高は歪みがあるため8.5～9.5cmである。幅1.5cmの鍔を張り付ける。口縁端部は内側に肥厚する。内外面ともにナデ調整である。７～13は瓦器椀である。口径13.7～15.0cm、器高4.0～5.1cm。器壁は薄く、歪みのあるものがある。口縁端部はいずれも外傾し、内側に沈線がみられる。いずれも低い高台がある。内外面ともにミガキがみられるが、粗雑であり、外面では口縁部のみみられる。見込み部の暗文には、連結輪状のもの（８・11）と２～３回転の同心円状のもの（10・12・13）とがあり、また、内面のミガキと連続するもの（11・12）がある。

Ⅲ　２号墳

２号墳は、墳丘測量の結果によると、東西５ｍ、南北6.5ｍの方墳である。南北に長いのは墳丘が流失したためで、あるいは１号墳と同規模の東西南北それぞれ５ｍくらいの方墳であるかもしれない。埋葬施設は１号墳と同様に横穴式石室が想定される。高さは現状で約１ｍだが、おそらく天井石は抜き取られているものと思われる。また、１号墳と同様に墳丘の内外を区画する石積・列石がみられる。

Ⅳ　まとめ

ヲシヨジ古墳群は、丘陵尾根上に造られた方墳２基からなる古墳群である。位置関係からみて、競馬道古墳群の一支群であるとも思われる。大きくみれば、大柳生の集落のある盆地をとり囲むように存在する60余基の古墳を一つの古墳群とみなしたほうが良いかもしれない。１号墳は、埋葬当時の残りの良い副葬品は得られなかったが、わずかな須恵器片や墳丘形態、石室形態からみて７世紀以降の古墳であると思われる。２号墳も、発掘調査は実施していないが、１号墳と類似する点がいくつかみられることから、同時期のものと思われる。競馬道古墳群のなかでも最も奥まった山中にあることや築造時期からみて、おそらく競馬道古墳群の中で、さらに大柳生地区の古墳群の中でも最も新しい支群になると思われる。競馬道古墳群は、横穴式石室が開口している競馬道１号墳が石室形態からみて少なくとも６世紀中頃に遡ると思われることから、６世紀中頃から７世紀にかけての古墳群であると考えられる。

また、中世の石室再利用の一形態が判明した。本来、棺が置かれていたであろう床面に、棺の大きさと同規模と思われる土坑を掘りくぼめており、墓に対する何らかの行為であると思われるが、具体的な行為については、深く掘り込まれている部分が炭を多く含む黒色土で埋まっていることなど、判然としない点があり、さらに検討が必要と思われる。

（森下浩行）

3　東紀寺遺跡の調査　第２次

本調査は奈良市紀寺町567－2において実施した、梅園地区住環境整備事業に伴う事前発掘調査である。今回の調査地は昨年度の第１次調査地の西側に位置する。遺跡は春日山から延びる扇状地に築造された５世紀から６世紀にかけての古墳群を含む遺跡であるが、詳細がわかっておらず、今回の調査目的の一つに遺跡の範囲確認があった。また古墳時代の遺跡とは別に、調査地は中世に興福寺の子院である大乗院領紀寺郷に属すると考えられる地域でもある。調査面積は108㎡、調査期間は平成６年７月18日から８月１日までである。

発掘区内の層序は地表から黒灰色土、暗黄灰色土、淡黄灰色土、淡黄褐色砂質土（地山）の順である。検出した遺構には古墳時代・鎌倉時代・室町時代の各時期の土坑、江戸時代の掘立柱建物がある。

ＳＫ01　平面不整形掘形で南北1.23ｍ、深さ0.3ｍの土坑。東西は調査区外西へ広がり不明。埋土は茶灰色土で５世紀後半の土師器高杯が出土した。

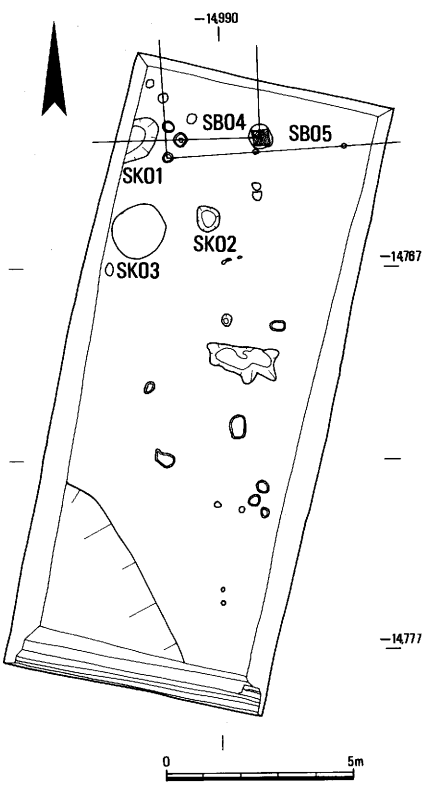
ＳＫ02　平面不整形掘形で径0.6ｍ、深さ0.22ｍの土坑。埋土は茶褐色土で12世紀後半の瓦器が出土した。

ＳＫ03　平面円形掘形で径1.4ｍ、深さ0.32ｍの土坑。埋土は暗茶褐色土で16世紀の土師器羽釜、瓦質土器擂鉢が出土した。

ＳＢ04　東西２間以上、南北１間以上の掘立柱建物である。北東隅の柱穴は江戸時代の五輪塔の台座を逆転して据え、根石としている。

ＳＢ05　桁行２間（2.36ｍ）以上、梁間１間(1.0ｍ）以上の掘立柱建物。柱掘形から江戸時代の陶磁器が出土した。

今回の調査では古墳時代の土坑ＳＫ01を検出し、古墳時代の遺跡が西へさらに広がるこが確認された。また鎌倉時代の土坑ＳＫ02と江戸時代の建物ＳＢ04を検出しており、第１次調査においても鎌倉時代の土坑、江戸時代の井戸、土坑を検出していることから、中近世の遺跡が東紀寺遺跡内に存在することが明確になった。



（秋山成人）　第２次調査　遺構平面図（１／200）

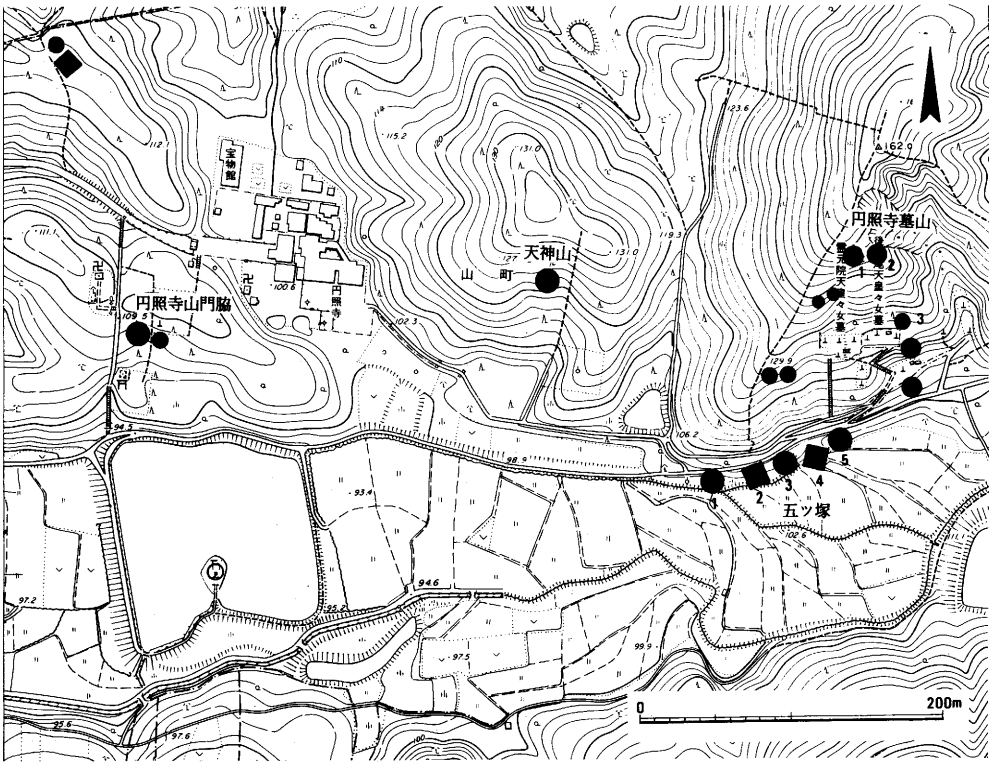
4　五ッ塚古墳群の調査

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市山町989番地で実施した市道南部478号線改良工事に伴う事前発掘調査である。現在の市道南部478号線は、五ッ塚古墳群の一部を削って北側を通っており、これを拡幅するため盛土をすると、墳丘の一部が埋没するため、墳丘範囲確認および石室確認の発掘調査を実施した。また、発掘調査に先立ち、墳丘測量調査を実施した。調査期間は、墳丘測量調査が平成６年12月９日から翌年１月17日まで、発掘調査が平成７年２月１日から３月14日までである。発掘面積は96㎡である。

Ⅱ　調査の所見

五ッ塚古墳群は、奈良盆地北東の、笠置山地（大和高原）から西に派生した、二つの丘陵が形成する谷の入口からやや奥に入ったところに位置する。谷の両側の丘陵のうち、北側の丘陵はやや南に脹らみ、この南斜面には円照寺墓山古墳群がある。五ッ塚古墳群はこの斜面の縁辺部に立地している。五ッ塚古墳群は、その名の通り、５基から成る古墳群で、



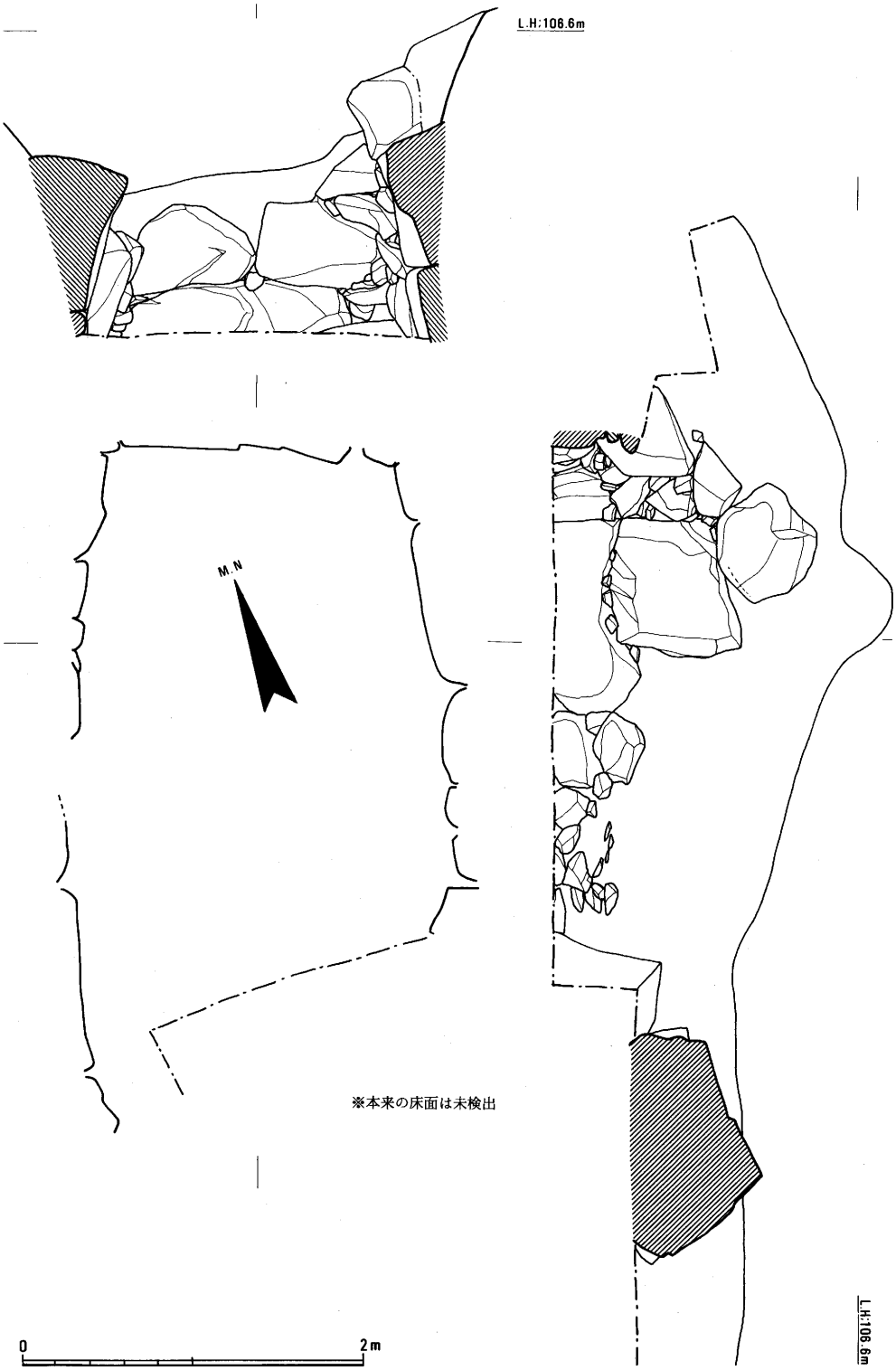
五ッ塚古墳群位置図（１／5,000）

いずれも墳丘後背部を掘削して盛土した、いわゆる山寄せの古墳である。したがって、いずれも山側に周溝があると考えられる。5基の古墳は、北に向かって「W」字形に配置されており、1・3・5号墳が山側に、2・4号墳が谷側にある。これまで、5基の円墳から成る古墳群として知られていたが、測量調査の結果、うち谷側にある2基が方墳であることが判明した。また、埋葬施設はすべて横穴式石室である。1・5号墳は石室が埋没している。2・3・4号墳は、羨道の上部が開口しており、内部を観察することが可能であるが、開口部からかなりの土砂が流入している。また、2・3・4号墳の石室は盗掘された痕跡があり、床面に敷かれていた拳大から人頭大の礫が散乱している。石室の石材は、主に付近で採取できる安山岩のいわゆる割石で、一部花崗岩を使用している。

A　1号墳

石室を確認するために墳頂部に、また、墳丘裾を確認するために北後背部と北東裾部に発掘区を設定した。

1号墳　発掘区平面図（1／200）



1号墳　石室図（1／40）

墳丘　墳頂部は石室が崩れ、窪んでいる。周囲が削平されているが、墳丘東側の等高線からかろうじて円墳であることがわかる。発掘調査によって、北東裾部で墳丘裾を確認した。北後背部では、墳丘裾、周溝は検出できなかった。かって道路をつくる際に削られたものと思われる。墳丘規模は、発掘調査で得られた北東の裾を石室のほぼ中央で折り返し、復元すると、東西約18mとなる。南北は判然としない。南崖面に露出している羨道の東側壁の位置からはかると、約14mほどであるが、削平を受けていることを考えると、さらに大きくなり、おそらく東西方向と同様の18mほどになるだろう。高さは、後背部からは2.7mである。谷側からは、露出している羨道側壁基底からで約3mである。石室天井石が抜き取られていることから、本来はもう少し高かったものと思われる。

石室　墳頂部には天井石が1石のみ残存していた。石室の確認のため、残存している天井石の北側を掘り下げたところ、奥壁、側壁があらわれた。天井石が置かれたと思われる側壁最上段の上面から、1.5mまで掘り下げたが、石室内に奥壁、側壁の石材が落下しており、残存状況は良好でない。奥壁と右側壁は上から2段目から下が残存しており、左側壁は、北側の一部は最上段まで残存しているが、南側の大部分が上から3段目まで崩落している。玄室の天井石は石室内に落下しておらず、後世に抜き取られたものと思われる。掘り下げた面での玄室の長さは、奥壁から残存している天井石までで3.5m、奥壁幅1.7mである。残存している天井石は、他の三石室の玄室長がいずれも4m強であること、玄室側壁最高点と天井石下面の高さの差が1.2mであることから、羨道の最も奥の天井石、あるいはその上に置かれた前壁の石材であると思われる。石室の中軸線は磁北から東へ19°振れており、南南西に開口すると思われる。石材の大きさは、玄室上部のみであるので単純に後述する他の石室との比較は難しいが、2・4号墳石室の石材よりはやや小さいものを使用していると思われる。なお、墳丘南崖面に露出している羨道左側壁と右側壁の石材抜き取り痕跡から、羨道の幅は約1.7mと思われる。

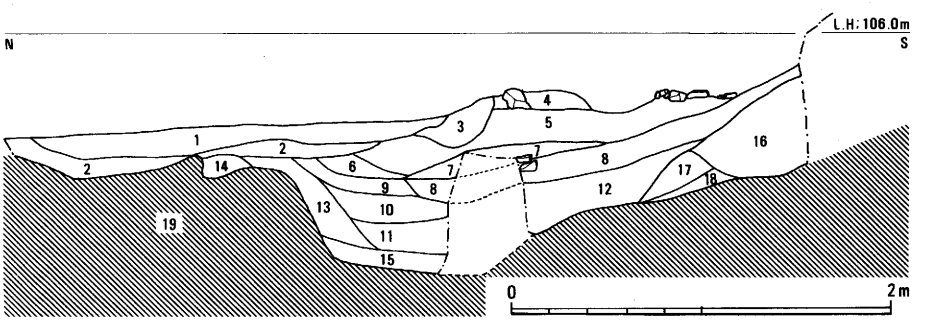
出土遺物　石室内から、土師器・須恵器・磁器と寛永通宝4枚が出土した。土師器は江戸時代の皿を含み、須恵器は古墳時代後期の甕の破片である。遅くとも江戸時代には天井石が抜き取られていたことがわかる。また、北東裾発掘区から土師器・須恵器（奈良時代）が出土した。

B　2号墳

墳丘裾を確認するために、北後背部、北西隅部、北東隅部に発掘区を設定した。

墳丘　四周の等高線が真っすぐにのびることから、北北西－南南東方向に主軸をおく方墳であることが判明した。南辺、西辺と北東隅の一部が後世にやや削られている。発掘調査によって、北後背部発掘区では周溝を、北西隅発掘区では北裾と西裾を、北東隅発掘区では東裾を確認した。北後背部発掘区で検出した周溝の断面は舟底形で、幅は検出面で2.1

m、底で0.8mである。深さは検出面から0.5mである。ところで、北後背部発掘区で検出した周溝と北西隅部で検出した北裾を結ぶ線が墳丘の北辺と考えられるが、この線は墳丘主軸と直交せずに斜行する。したがって、平面形は正確には北辺の斜行する台形を呈す



1 アスファルト（道路）
2 黄褐色土、灰黒色土（道路）
3 表土（黒色土）
4 やや暗い淡茶色土
5 淡茶色土（小礫を含む）
6 暗茶色土
7 暗茶色土（小礫を含む）
8 暗褐色土（腐蝕土）
9 黒色炭土
10 暗茶色土
11 やや淡い暗茶色土
12 やや暗い淡茶色土
13 淡茶色土
14 淡茶色土（精良）
15 淡茶色砂礫土
16 赤味のある茶色土（墳丘盛土）
17 黄褐色土（墳丘盛土）
18 赤味のある淡茶色土（墳丘盛土）
19 黄褐色土（地山）

2号墳　発掘区平面図（上、1／200）北後背部断面土層図（下、1／40）

る。2号墳は、南にのびる丘陵の先端に位置しており、ちょうど北東隅が丘陵の最も南に張り出した部分にあたり、北西隅ではやや緩やかな斜面になる。このため、丘陵の端に沿って北辺が設けられたものと思われる。このため、裾部の標高も、北背部と北東隅部では104.8mであるが、北西隅部では103.8mで、西が1m低い。墳丘規模は、測量と発掘調査の結果からみて、北東－南西方向が15mで、北西－南東方向は判然としないが、短辺で14m、長辺で16mほどであろうか。高さは、北後背部から3.2mで、谷側からは、約5mであろう。なお、墳丘北後背部で集石を検出したが、後背部がかなり埋まった段階のものであり、盛土に含まれた石が墳丘側から転落したものであろう。

石室　両袖式である。中軸線は磁北から西へ35°振れており、南東に開口する。全長は6.3m以上。玄室は、長さ4.3m、奥壁幅2.0m、高さ2.5mである。袖幅は、奥からみて右が0.5m、左が0.25mである。前壁は石積2段と袖から成り、石積の高さは1.35mである。羨道は、現状で長さ2mまで確認でき、幅2.0mである。玄室の天井石は3石である。周壁は全体にやや大きな石材を使用し、ほぼ3回の工程で積まれたものと思われる。袖は、左右ともに大きな石材を立て、その上にそれよりやや小さな石材を1段小口積し、羨道天井石を乗せる。羨道の天井石は奥から2石分が残存している。

出土遺物　墳丘裾埋土から、土師器・須恵器・陶器と、土製円板1、棒状鉄製品1が出土した。須恵器には古墳時代と奈良時代のものがあり、いずれも破片である。

C．3号墳

墳丘裾の確認のため、北後背部、北西裾部、北東裾部に発掘区を設定した。

墳丘　南側と北側の一部が削られている。東側、西側の等高線からは、楕円形の墳形に見えるが、発掘調査によって、北後背部、北西裾、北東裾の発掘区でそれぞれ墳丘の裾を確認し、円墳であると判断した。北後背部では、周溝が検出されると予想していたが、墳丘裾の検出のみにとどまった。したがって、周溝の幅は裾から1.7m以上である。墳丘規模は、直径18mである。高さは、後背部からは2.8mである。谷側からは、5～6mであろう。

石室　両袖式である。中軸線はほぼ磁北と一致しており、真南に開口する。全長は6.8m以上。玄室は、長さ4.6m、奥壁幅1.9m、高さ2.8mである。袖幅は、奥からみて右が0.5m、左が0.2mである。前壁は石積2段から成り、高さは1.05mである。羨道は、現状で長さ2.2mまで確認した。幅1.9mである。玄室の天井石は4石であるが、最も奥壁側の1石は見かけ上、やや小さい。周壁は、2号墳や後述する4号墳の石室よりも全体にやや小さな石材を使用しており、やや古い様相がうかがえる。袖は、左右ともに大きな石材を立て、その上にそれよりやや小さな石材を2段小口積し、羨道天井石を乗せて前壁とする。羨道の天井石は奥から2石が残存している。なお、石室の中心は墳丘の中心からやや西にずれ

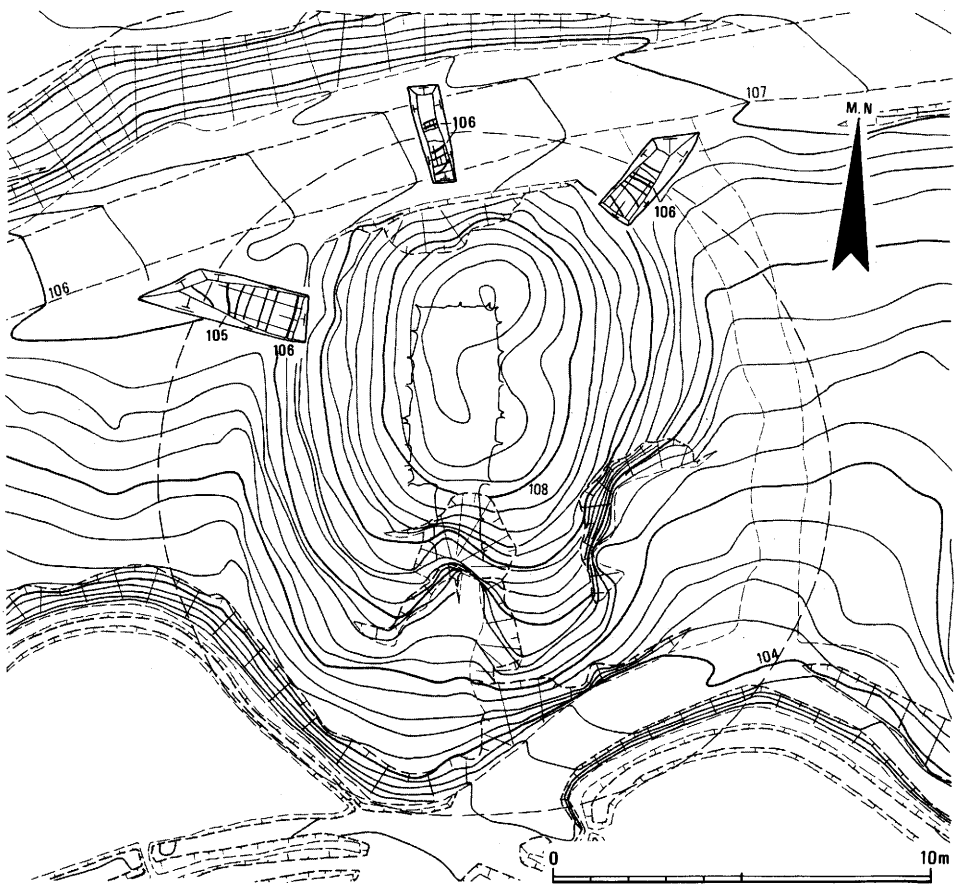
ずれている。

出土遺物　墳丘裾埋土から土師器・須恵器が出土した。いずれも破片であるため時期の特定はできない。

D　4号墳

墳丘裾の確認のため、北後背部と、北西隅部に発掘区を設定した。

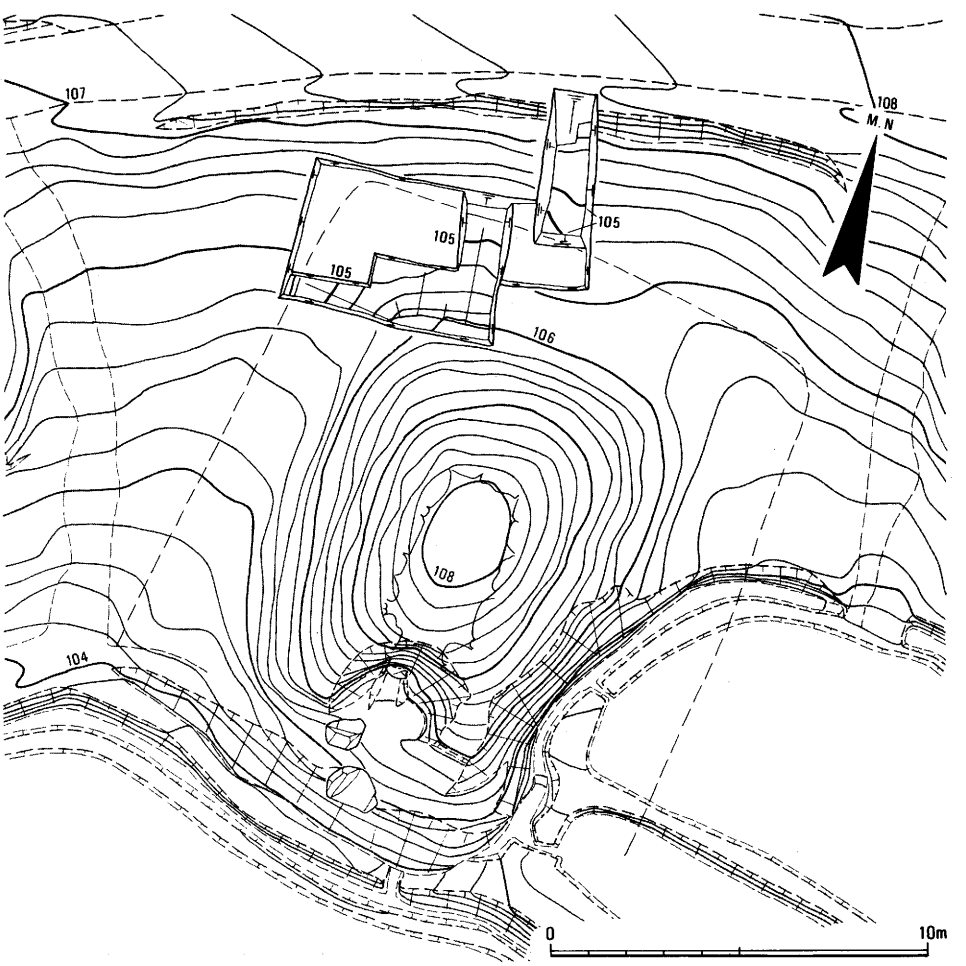
墳丘　墳丘西側、北側の等高線は裾近くでは直線状にのび、やや隅丸になるが、ほぼ直交する。また、墳丘東側は、等高線がやや弧を描くものの、ほぼ直線状である。したがって、北北東－南南西方向に主軸をおく方墳とみられる。発掘調査では、北西隅発掘区で北裾と西裾を確認した。北後背部発掘区では、道路の際まで掘削したが、周溝の規模を確定するまでには至らなかった。したがって、周溝の幅は裾から3m以上である。墳丘規模は、発掘調査の成果では、測量調査の所見よりも一回り大きくなり、東西が14mと推定され、南北は、南辺が判然としないが、16～17mであろうか。高さは、墳丘後背部からは3mで



3号墳　発掘区平面図（1／200）

ある。谷側からは、3～4mであろう。

石室　両袖式である。中軸線は磁北から東へ10°振れており、南南西に開口する。全長は5.8m以上。玄室は、長さ4.4m、奥壁幅1.75m、高さ2.4mである。袖幅は、奥からみて右が0.7mであるが、左は埋もれており、不明である。現状からみて、2号墳、3号墳の石室と同様に、左袖幅はおそらく右袖幅より小さなものであったと思われる。1号墳、5号墳の石室の袖については埋没しているため不明だが、ほかの三石室を見る限り、この古墳群の石室は左袖幅よりも右袖幅が大きいものと思われる。前壁は羨道天井石を兼ねた1石と袖から成り、天井石の高さは0.81mである。羨道は、現状で長さ1.4mまで確認した。幅1.2 mである。玄室の天井石は4石である。周壁は、2号墳と同様に全体にやや大きな石材を使用している。袖は、左右ともに大きな石材を立て、その上にそれよりやや小さな石材を1段小口積し、羨道天井石を乗せて前壁とする。羨道の天井石は前壁を兼ねた1石のみが残存している。



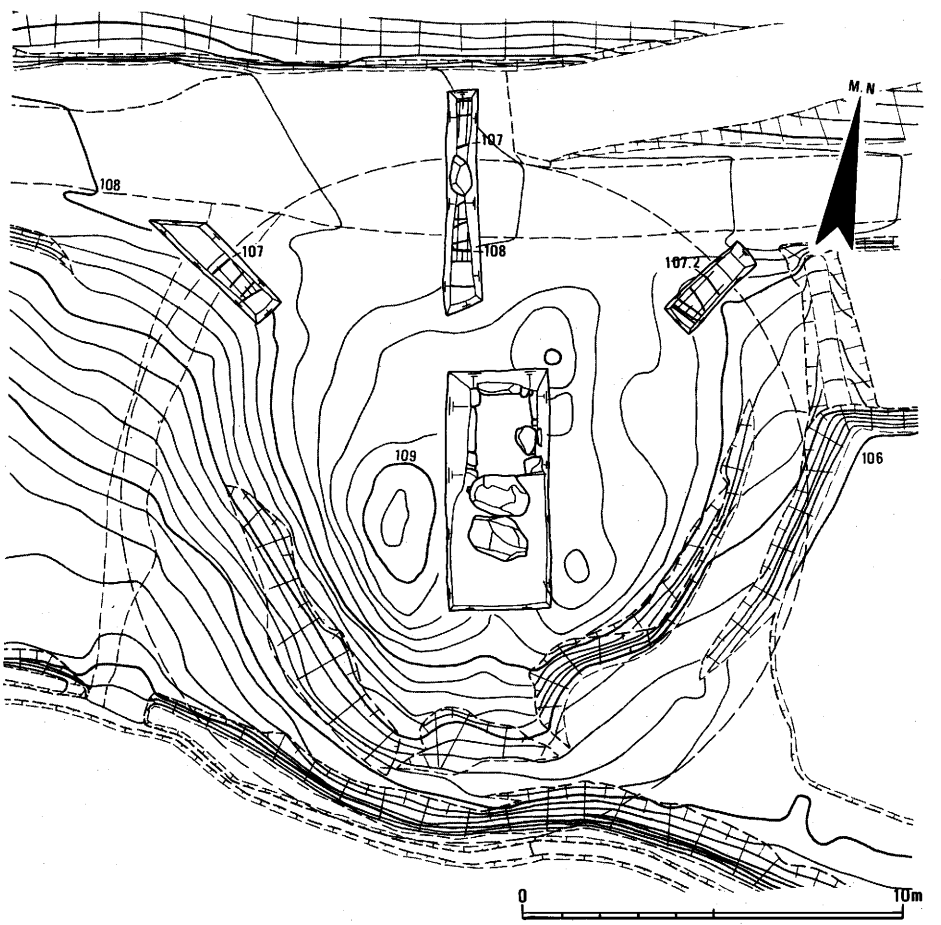
4号墳　発掘区平面図（1／200）

出土遺物　墳丘裾埋土から、土師器・須恵器・磁器が出土した。須恵器には奈良時代の杯がある。また、測量調査の際、石室開口部東脇で、須恵器小片を採集した。

E　5号墳

石室を確認するために墳頂部、古墳の裾の確認のために北後背部、北東裾、北西裾に発掘区を設定した。

墳丘　墳頂部は、石室が崩れ、窪んでいる。周囲が削られているが、北西と東の一部が残存しており、その等高線から円墳であると判断できる。発掘調査では、北後背部、北東裾、北西裾の発掘区で、それぞれ墳裾を確認した。北後背部では、周溝の規模を確定するには至らなかったが、周溝の底の形状は緩く弧を描いていることが判明した。北西裾では地山を確認することができなかった。北西裾が地形的にやや谷地形にあたるため、谷がやや埋まった段階で築造されたためであろう。墳丘規模は、発掘調査の所見から復元すると、東西18mとなる。南北は判然としないがほぼ東西と同規模であろうか。高さは、墳丘後背



5号墳　発掘区平面図（1／200）

部からは2.7mである。なお、北後背部発掘区から、コンクリートが出土した。現在の道路を造る際に埋まったものと思われるが、墳丘北後背部が埋められ、現在の道路が造られたのが、近・現代であることを示している。

石室　天井石２石が残存している。石室の確認のため、残存している天井石の北側を掘り下げたところ、奥壁、側壁があらわれた。天井石が置かれたと思われる側壁最上段の上面から0.8mまで掘り下げた。奥壁、側壁ともに１号墳の石室より残存状態は良好で、両側壁の南側では最上段の石材が残っており、奥壁と両側壁北側では、上から２段目から残っている。天井石は石室内に落下しておらず、玄室北側には天井石を抜き取った痕跡が残っている。掘り下げた面での玄室の長さは、奥壁から残存している天井石までで、2.3m、奥壁幅は1.3mである。残存している天井石は、北側の石は玄室の右側壁の上に置かれていることから、玄室の天井石と思われる。また、南側の石は、他の三石室の玄室の長さが４m強であること、北側の天井石よりもやや下がった位置にあることから、羨道の最も奥の天井石、あるいはその上に置かれる前壁の石材であろう。したがって、残存している両天井石の間が玄室と羨道との境であろう。石室の中軸線は、磁北から東に14°振れており、南南東に開口しているものと思われる。石材の大きさは、玄室の上部のみであるが、１号墳の石室と同程度の大きさと思われる。なお、石室の中心は墳丘の中心からやや東にずれている。

出土遺物　墳丘裾埋土から、中・近世の土師器・須恵器・磁器が出土した。石室上面の天井石抜き取り坑から、江戸時代の陶磁器が出土した。したがって、その頃に天井石が抜き取られたものと思われ、１号墳、５号墳ともに江戸時代までには天井石が抜き取られていたようである。石室内埋土から、土師器・須恵器が出土した。須恵器は古墳時代中期の杯蓋の破片である。

Ⅲ　まとめ

今回の調査の新たな成果は、これまで５基すべてが円墳と思われていたが、うち２基を方墳と確認したことである。５基の古墳は、「W」字形に配置されており、そのうち山側の３基が円墳、谷側の２基が方墳である。また、石室の観察が可能な三石室の形態をみると、使用石材の大きさからみて、３号墳が古く、２号墳、４号墳が新しく位置付けられる。袖部の石材の積み方をみても同様である。また、玄室上部の周壁をみる限り、１号墳、５号墳の石室は２号墳、４号墳の石室より古く思われる。古い石室形態の１号墳、３号墳、５号墳が円墳であり、新しい石室形態の２・４号墳が方墳であることと、円墳と方墳の位置関係からみて、山側の円墳３基が先に造られ、のちに谷側の方墳２基が造られたものと思われる。出土遺物が非常に少ないため、類推の域を免れないが、円墳３基は６世紀後半、方墳２基は７世紀に入って造られたものと思われる。　（森下浩行）

Ⅳ　小規模確認調査・試掘調査・工事立会

1　小規模確認調査・試掘調査

平成６年度は今まで記述してきた発掘調査以外に、奈良県教育委員会文化財保存課、橿原考古学研究所と共に25件の小規模な確認調査と試掘調査を実施した。その結果、良好な遺構が発見された場合には、本調査の実施を届出者と協議した。

なお、調査記録と遺物については、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

番号	調査日	遺跡名	調査地	届出者	工事内容	調査結果
94－1	6・4・22 6・12・8	遺物散布地	富雄北１丁目2763－１	川鉄商事㈱	宅地造成工事	遺構はなく。包含層から鎌倉時代の瓦器、土師器皿が出土。
2	6・5・24	松林苑跡西面築地	山陵町地内	奈良市長 大川靖則	公共下水道工事	西面築地跡を確認。
3	6・17・18	平城京左京五条五坊五坪	西木辻町183－11	㈱大阪エクセルホーム	宅地造成工事	柱穴、溝を検出。建物基礎は遺構面までおよばない。
4	6・7・21	平城京左京六条三坊十三坪	大安寺２丁目23－１	大西一夫	共同住宅２階建	奈良時代の柱穴を検出。基礎は遺構面までおよばない。
5	6・7・28	平城京左京二条三坊十二・十三坪	芝辻町４丁目９－２	東京建物㈱	共同住宅７階建	佐保川の氾濫層を確認。遺構面は削平されていた。
6	6・8・2	平城京右京五条四坊十五坪	五条町１丁目603－１	大西久一	共同住宅２階建	西の京丘陵の谷地形を確認。奈良時代の遺物出土、遺構はない。
7	6・9・1	平城京左京五条四坊九坪	大森西町152－１	泉谷信雄	共同住宅２階建３棟	奈良時代の溝を検出した。基礎は遺構面までおよばない。
8	6・9・6	平城京左京四条三坊十二坪	三条栄町406－５	㈱奈良カネヨシ	倉庫	奈良時代の遺構面を検出。基礎は遺構面までおよばない。
9	6・10・13	平城京一条北大路	西大寺北町１丁目383－４	産双ホーム㈱	共同住宅５階建	奈良時代の遺構はなかった。
10	6・10・18	平城京左京五条二坊一坪	大安寺町553－31	村井一級建築設計事務所	店舗	奈良時代の遺構面を検出。基礎は遺構面までおよばない。
11	6・10・25	平城京西三坊大路	平松１丁目841－１	森田耕太郎	共同住宅２階建	奈良時代の土杭検出。
12	6・10・26	元興寺旧境内	中新屋町２	奈良町物語館	町屋改修	元興寺金堂跡の礎石が町屋の建物の礎石に転用されていた。
13	6・10・27	平城京右京三条四坊十坊	平松１丁目13－１他	森田浩正	共同住宅２階建	古墳時代の溝から円筒埴輪片と家形埴輪が出土。
14	5・11・4	平城京左京八条三坊七坪	杏町字小柳574－１	藤谷房一	共同住宅２階建	奈良時代の遺構面を検出。基礎は遺構面までおよばない。
15	6・11・8	平城京左京九条二坊二坪	西九条町３丁目５－３	㈱ツカサ	倉庫付事務所	奈良時代の遺構面を検出。基礎は遺構面までおよばない。
16	6・11・22	平城京左京二条四坊四坪	芝辻町４丁目１－１１－２	中井正男	店舗付共同住宅７階建	北を流れる佐保川の氾濫層を確認。遺構はなかった。
17	6・11・30	平城京左京五条四坊十一坪	大安寺６丁目758－４・５・６	松本米蔵	共同住宅２階建	奈良時代の遺構面を検出。基礎は遺構面までおよばない。
18	6・12・6	平城京二条大路	法華寺町字五双田242－１	新日本輸送㈱	㈱店舗	東を流れる佐保川の氾濫層を確認。遺構はなかった。
19	6・12・13	平城京左京六条一坊十五坪	柏木町449－１他	㈱ヒラサワ	店舗	奈良時代の柱穴、溝を検出。基礎は遺構面までおよばない。
20	6・12・15	平城京右京七条三坊一坪	六条１丁目2420－１	㈱西ノ京住建	宅地造成	平安時代末の遺構面を検出。工事は遺構面までおよばない。
21	6・12・19	平城京朱雀大路	三条大路３丁目地内	奈良市長 大川靖則	公共下水道工事	奈良時代の遺構面を検出
22	6・12・21	平城京右京北辺三坊	西大寺北町２丁目455－１他	兼松都市開発㈱	共同住宅５階建	古墳時代から奈良時代の建物を検出。本調査平城京第322次調査
23	6・12・26	南紀寺遺跡	南紀寺町３丁目307－１	㈱帝和　アイディーホーム㈱	共同住宅３階建	丘陵の谷部。能登川の旧河道を確認。
24	7・1・23	平城京左京六条二坊二坪	八条町384－１	熊木ツタ子	店舗	奈良時代の溝を検出。基礎は遺構面までおよばない。
25	7・3・28	平城京左京二条七坊二坪	北袋町28	笹田好一 笹田百合子	共同住宅３階建	平安時代末から江戸時代にかけての土杭、井戸を検出。

小規模確認調査、試掘調査一覧

2　工事立会一覧

提出された埋蔵文化財発掘届出書及び現状変更等許可申請書に基づいて、文化庁、奈良県教育委員会から奈良市教育委員会が土木工事の際に立会うようにと指示されたもののうち平成６年度に立会した一覧表である。奈良市教育委員会では162件の立会をおこなった。

番号	調査日	遺跡名	調査地	届出者	工事内容	備考
1	6･4･4	平、右、六、三、十五	六条１丁目793－５	杉森恵治､清水竹子	個人住宅	盛土内におさまる。
2	6･4･4	平、右、八、四、一	七条西町１丁目577－１	富士ｴﾝｼﾞﾆｱﾘﾝｸﾞ㈱	宅地造成	地山面確認遺構遺物なし
3	6･4･4	平、西一坊大路	二条大路南５丁目390－２	水原　彰	個人住宅	盛土内におさまる
4	6･4･6	平、左、六、四、四	大安寺１丁目1229－１	酒井絹子	共同住宅	盛土内におさまる
5	6･4･12	平、右、三、三、十一	菅原町４－１	㈱ベルコ	事務所	盛土内におさまる
6	6･4･13	平、二条大路	芝辻町１丁目77－19	中川勝博	個人住宅	盛土内におさまる
7	6･4･20	平、右、北辺二坊	西大寺新町２丁目90－９	岩下一雄	個人住宅	盛土内におさまる
8	6･4･20	平、左、六・三・十一	大安寺２丁目地内	奈良市長	公共下水道工事	地山面確認遺構遺物なし
9	6･4･21	西大寺旧境内	西大寺本町263－３	協和合板工芸㈱	事務所	奈良時代の柱穴検出
10	6･4･25	平、右、六、三、十五	六条１丁目886	市村公一・好子	個人住宅	地山面確認遺構遺物なし
11	6･4･25	平、左、二、六、十	法蓮町南２丁目 1070－３－３	田矢恵造	個人住宅	佐保川の氾濫層確認
12	6･4･25	平、左、五、四、一	大森西町185－７	大西正純	個人住宅	盛土内におさまる
13	6･4･27	平、左、五、二、三	大安寺町518－１	坂口末子・佳充	個人住宅	盛土内におさまる
14	6･4･27	平、右、七、四、十一	七条西１丁目10－２	風元美知子	個人住宅	盛土内におさまる
15	6･5･6	平、田村第推定地	四条大路１丁目462－67	寺坂弘章	個人住宅	基礎掘削なし
16	6･5･9	平、右、北辺坊	山陵町79－３	松尾幸太郎	農業用倉庫	奈良時代の柱穴検出
17	6･5･10	平、左、二、六、十	法蓮町1080－１	西田二郎	店舗	地山面確認遺構遺物なし
18	6･5･11	不退寺旧境内	法蓮町496－３	村田　昭	個人住宅	遺構面確認遺物出土
19	6･5･12	元興寺旧境内	公納堂町20－１	吉田幸男	個人住宅	盛土内におさまる
20	6･5･12	元興寺旧境内	勝南院19－１	田村秀蔵	個人住宅	盛土内におさまる
21	6･5･16	平、右、六、三、九	六条２丁目964－１	㈱ジュンテンドウ	店舗	遺構面確認　市93－22次
22	6･5･18	平、左、八、一、十三	杏町100－18	豊澤静夫	共同住宅４階建	盛土内におさまる
23	6･5･24	平、左、三、六、六	漢国町６	㈱漢国神社	玉垣築造	盛土内におさまる
24	6･5･31	平、左、二、三、二	法華寺町307－７	高田和典	個人住宅	盛土内におさまる
25	6･6･3	平、左、五、三、十	恋の窪２丁目４－５	西村照雄	個人住宅	盛土内におさまる
26	6･6･6	平、一条北大路	法華寺町1065－２	渡邊延次	個人住宅	遺構面まで達しない
27	6･6･7	平、左、八、二、十二	杏町58－１	山本善久	宅地造成工事	耕土内におさまる
28	6･6･8	平、左、二、六、九	法蓮町1105	加奥禎宏	個人住宅	盛土内におさまる
29	6･6･9	古市城跡	古市町2112－43	南浦幸孝	宅地造成工事	盛土内におさまる
30	6･6･13	平､左､三､六､二・七	油坂町410－１	㈶教行寺	地下駐車場工事	地山面確認遺
31	6･6･14	平、左、一、五、五	法蓮町753－６	奈良市長	広報板設置	盛土内におさまる
32	6･6･15	南紀寺遺跡	南紀寺町３丁目62－13	森岡美喜雄	個人住宅	盛土内におさまる
33	6･6･16	平、右、二、四、六	菅原町323－３	野口宏・三代子	個人住宅	遺構面確認遺物出土
34	6･6･17	平、右、六、三、十六	六条１丁目904－６	岩本久人	個人住宅	地山面確認遺構遺物なし
35	6･6･9～23	史跡大安寺旧境内	大安寺２丁目２－12	増田忠彦	宅地内下水道工事	遺構面まで達しない
36	6･6･24	平、左、七、四、三	東九条町1014－15	石井　穣	個人住宅	盛土内におさまる
37	6･6･27	元興寺旧境内	十輪院町27	㈶十輪院	防災工事	近世墓２基検出
38	6･7･1	平、左、一、四、十一	法蓮町403－４	生駒利彦	共同住宅４階建	盛土内におさまる
39	6･7･1	古市城跡	古市2059－20	半田裕之	個人住宅	地山面確認遺構遺物なし
40	6･7･1	平、右、七、三、一	六条１丁目2420－１	宮城祐正	資材置場造成	盛土工事のみ

工事立会一覧(1)

番号	調査日	遺跡名	調査地	届出者	工事内容	備考
41	6・7・4	平、右、五、四、一	平松３丁目462－９	雨森孝悦	個人住宅	盛土内におさまる
42	6・7・4	平、東二坊坊間路	四条大路南町385－37	大仲五十夫	個人住宅	盛土内におさまる
43	6・7・5	平、右、三、二、一	二条大路南５丁目413－１	寺山保弘	個人住宅	遺構面確認遺物出土
44	6・7・6	薬師寺旧境内	七条１丁目360－２	三上敬太郎	共同住宅	盛土内におさまる
45	6・7・11	平、左、三、四、十一	大宮２丁目149－５	㈱近鉄不動産	共同住宅８階建	県調査済、計画変更部分立会
46	6・7・13	平、右、一、二、七	二条町１丁目42－３	藤田裕太郎	共同住宅	耕作土まで掘削
47	6・7・18	平、左、九、三、十	東九条町420－１	土井伊佐春	倉庫建設	地山面確認遺構遺物なし
48	6・7・20	平、左、二、六、八	法蓮町1086－４	㈱下出商会	ガソリンスタンド改築	河川の堆積確認
49	6・7・20	平、左、三、三、十五	大宮町６丁目２－14	艸香梅治郎	店舗付共同住宅	盛土内におさまる
50	6・7・21	平、左、五、五、十	西木辻町101－６	藤井　清	共同住宅３階	盛土内におさまる
51	6・7・22	平、左、五、六、十	西木辻町346－２	上繁律子	個人住宅	盛土内におさまる
52	6・7・26	平、左、三、五、十三	大宮１丁目26－３	㈱ｱｰﾊﾞﾝﾘｱﾙｴｽﾃｰﾄ	管理仮設事務所	盛土内におさまる
53	6・7・28	平、左、四、一、九	四条大路二丁目５－38	関尾邦宏	個人住宅	耕作土まで掘削
54	6・7・29	平、左、四、六、七	小川町24	学伝香寺学園	幼稚園園舎増築	盛土内におさまる
55	6・7・29	平、左、二、五、十	法蓮立花町271－２	田崎唱子	個人住宅	盛土内におさまる
56	6・8・2	平、右、三、三、七	尼辻北町7305－３	荒木勝治	個人住宅	盛土内におさまる
57	6・8・3	古市城跡	古市町1846－28	武村文子	個人住宅	盛土内におさまる
58	6・8・8	平、左、八、一、十三	杏町145－１	山崎忠志	個人住宅	盛土内におさまる
59	6・8・11	平、左、二、六、十一	西新在家号所町３－１	田中健司・山田文子	個人住宅	地山面確認遺構遺物なし
60	6・8・18	平、左、四、四、一	三条町109－６	㈱ビルド	事務所付共同住宅８階建	地山面確認遺構遺物なし
61	6・8・23	西大寺旧境内	西大寺新田町559－２	宝田陽一	個人住宅	盛土内におさまる
62	6・8・23	平、左、四、六、十一	北風呂町13－１	森田敏夫	個人住宅	盛土内におさまる
63	6・8・26	平、右、七、二、二	六条町113－４	古川暁美	飲食店舗	盛土内におさまる
64	6・8・26	平、右、三、二、十一	三条大路４丁目505－１	杉本忠己	共同住宅	盛土内におさまる
65	6・8・26	平、左、三、六、九	内侍原町８－１	染川美知子	共同住宅	地山面確認
66	6・9・7	平、左、一、四、四	法蓮町556－１	水口佳治	個人住宅	河川の氾濫層確認
67	6・9・7	薬師寺旧境内	六条町278－４	田上栄作	個人住宅	耕作土まで掘削
68	6・9・8～20	成務天皇陵隣接地	山陵町地内	奈良市長	公共下水道工事	地山面確認遺構遺物なし
69	6・9・9	平、左、六、一、十一	柏木町393－14	今西正治	個人住宅	耕作土まで掘削
70	6・9・14	平、左、二、六、一	法蓮中町991	原田　晋	個人住宅	耕作土まで掘削
71	6・9・16	平、左、四、三、十二	三条桧町625－１	松田英志	個人住宅	盛土内におさまる
72	6・9・16	平、右、三、一、三	三条大路４丁目１－１	積水化学工業㈱	簡易エレベーター設置	盛土内におさまる
73	6・9・19	平、左、三、二、四	三条大路１丁目584－17	岡埜和弘	個人住宅	盛土内におさまる
74	6・9・19	西大寺境内	西大寺野神町２丁目1813－８	森元一弥	個人住宅	丘陵の谷地形を確認
75	6・9・20	平、左、二、五、十六	北市町31－１	山本悦生	共同住宅	盛土内におさまる
76	6・9・22	平、左、五、六、七	西木辻町344	郡　誠	個人住宅	地山面確認遺構遺物なし
77	6・9・26	平、左、四、六、七	寺町15－１	吉田嘉・永治	個人住宅	尾花谷川の氾濫層確認
78	6・9・26	平、西四坊大路	西大寺新池町1726	岡本武雄	共同住宅	地山面確認遺構遺物なし
79	6・9・26	平、一条南大路	西大寺芝町１丁目2488－２	奈良市長	道路改良工事	盛土内におさまる
80	6・10・4	元興寺旧境内	高畑町1112－32	財奈良市駐車場公社	事務所新築	地山面確認　鎌倉時代の土師器皿出土
81	6・10・5	西大寺旧境内	若葉台３丁目1895－31	山本孝則	個人住宅	地山面確認遺構遺物なし
82	6・10・5	平、左、五、七、十一	紀寺町638	砂田光子	個人住宅	盛土内におさまる
83	6・10・6	平、左、四、五、十一	杉ケ西町46－１	寺村　章	個人住宅	盛土内におさまる
84	6・10・6	平、左、五、七、十一	築地之内町３	村中十一郎	個人住宅	盛土内におさまる
85	6・10・6	平、左、二、三、三	法華寺町204－１	石井金一	車庫建設	基礎掘削なし
86	6・10・12	紀寺旧境内	西紀寺町23－１	桝田　弘	共同住宅	盛土内におさまる

工事立会一覧(2)

番地	調査日	遺跡名	調査地	届出者	工事内容	備考
87	6•10•12	元興寺旧境内	東寺林町７	㈱車屋	共同住宅４階建	地山面確認遺構遺物なし
88	6•10•13	元興寺旧境内	高畑町1096－11－１	㈱奈良ホテル	看板の設置	遺構面確認､土師器皿出土
89	6•10•14	平、左、六、四、十五	大安寺５丁目977－３	田村　均	個人住宅	盛土内におさまる
90	6•10•17	平、左、六、三、十四	大安寺二丁目１－４	藤本明美	個人住宅	盛土内におさまる
91	6•10•17	平、左、四、五、十一	杉ヶ町39－２	㈱公誠	事務所ビル７階建	地山面確認遺構遺物なし
92	6•10•20	平、右、五、四、十一	平松４丁目402－21	山口明人・晴美	個人住宅	耕土内におさまる
93	6•10•18	平、五条大路	大安寺町127－１	武野義男	共同住宅４階建	盛土内におさまる
94	6•10•21	平、左、一、三、六	法華寺町1278－８	㈱筒井工務店	分譲住宅２戸	基礎掘削なし
95	6•10•24	平、田村第推定地	四条大路１丁目　1000－120	谷　恒男	個人住宅	盛土内におさまる
96	6•10•24	平､左､九､四､九・十六	東九条町251	中谷保治	共同住宅	盛土内におさまる
97	6•10•24	東紀寺遺跡	東紀寺町２丁目721－36	㈱トップ	学習塾建設	旧溜池を確認
98	6•10•24	平、左、四、四、十	三条宮前町272－３	井上正・道子	個人住宅	盛土内におさまる
99	6•10•27	菅原寺旧境内	菅原町432－９	原田重男	個人住宅	盛土内におさまる
100	6•10•28	平、田村第推定地	四条大路南町575－９	杉本種男	個人住宅	盛土内におさまる
101	6•10•28	平、左、四、四、八	三条添川町63－１	八尾谷一雄	共同住宅	耕土内におさまる
102	6•10•31	平、左、八、二、十二	杏町57	柳　正雄	共同住宅	地山面確認遺構遺物なし
103	6•11•1	古市城跡	古市町1991－６	藤田秀紀・智子	個人住宅	盛土内におさまる
104	6•11•4	平、左、四、五、十二	杉ヶ町13－２	中村喜美子	個人住宅	盛土内におさまる
105	6•11•7	平、左、六、三、十五	大安寺３丁目83－３	徳本義憲	共同住宅	遺構面まで達しない
106	6•11•7	平、右、六、三、九	六条１丁目664－１	㈱日生工務店	個人住宅	掘削しない
107	6•11•7	平、左、一、三、六	法華寺町1281	中　暢良	共同住宅	耕土内におさまる
108	6•11•11	平、右、五、三、一	五条１丁目451－10	池田卓也	個人住宅	地山面確認遺構遺物なし
109	6•11•15	平、右、六、四、十二	六条３丁目1172－４	西澤　勉	個人住宅	地山面確認
110	6•11•18	平、右、北辺三坊	西大寺新町１丁目130－11	誠産業㈱	個人住宅	地山確認遺構遺物なし
111	6•11•24	平、東七坊大路	福智院町44－１	㈲魚新水産	店舗付住宅	室町時代の石組円形井戸検出
112	6•11•24	史跡大安寺旧境内	大安寺４丁目１－26	中川常和	宅地内下水道工事	盛土内におさまる
113	6•11•25	平、右、五、三、九	平松２丁目254－１	辰堅　治	共同住宅	地山面確認土器出土
114	6•11•29	西大寺旧境内	西大寺竜王町１丁目1594－５	岡田明・笠井克数	個人住宅	盛土内におさまる
115	6•11•30	薬師寺旧境内	西ノ京町415－６	堀内和幸	個人住宅	掘削しない
116	6•12•2	平、左、二、六、一	法蓮町985－６	㈲高円住建	建売住宅	古墳時代中期の溝検出
117	6•12•5	平、左、五、六、七	西木辻町312－１	加幡一男	個人住宅	地山面確認遺構遺物なし
118	6•12•5	興福寺旧境内	元林院町15	㈱岡田酒店	倉庫建設	盛土内におさまる
119	6•12•6	平、右、二、二、十四	横領町337－６	植原一雄	共同住宅	盛土内におさまる
120	6•12•6	平、左、五、四、二	大安寺７丁目717	泉谷幸男	個人住宅	盛土内におさまる
121	6•12•12	西大寺旧境内	西大寺新町512－６	岩松　正	個人住宅	掘削しない
122	6•12•13	山村城跡	山町590	中村善隆	個人住宅	地山面確認土器出土
123	6•12•13	平、左、三、五、十一	大宮町１丁目１－36	田村俊三	事務所建設	盛土内におさまる
124	6•12•14	平城宮北方遺跡	佐紀町地内	奈良市長	公共下水道工事	地山面確認遺構遺物なし
125	6•12•19	平、左、五、五、七	西木辻町40－４	植村健治	個人住宅	盛土内におさまる
126	6•12•19	平、左、九、四、二	東九条町331－１	医康仁会	看護婦寮建設	市調査済・計画変更部分立会
127	6•12•20	平、左、一、六、四	法蓮町956－６	神殿義一	個人住宅	地山面確認遺構遺物なし
128	7•1•9	興福寺旧境内	登大路町37－５	豊住勝郎	個人住宅	遺構面確認､土師器皿出土
129	7•1•9	平、左、五、四、四	大安寺町891－１	木村重之	個人住宅	盛土内におさまる
130	7•1•10	平、左、四、五、四	三条本町256－３	日本通運㈱奈良支店	事務所建設	盛土内におさまる
131	7•1•10	平、東二坊大路	西九条町２丁目10－６	宮野（株）	事務所建設	耕土内におさまる
132	7•1•10	平、左、三、四、十六	芝辻町２丁目144－１	西田　嗣	共同住宅	耕土内におさまる

工事立会一覧(3)

番号	調査日	遺跡名	調査地	届出者	工事内容	備考
133	7・1・10	平、左、四、二、五	四条大路1丁目459－9	川端雅夫	個人住宅	盛土内におさまる
134	7・1・10	平、左、一、三、十二	法華寺町1267－1	鈴木シヅヲ	共同住宅	塀壁工事部分で奈良時代溝検出
135	7・1・17	平、東二坊大路	大安寺3丁目96－1	武野正義	共同住宅	耕土内におさまる
136	7・1・17	史跡東大寺旧境内	雑司町97	奈良市長	鼓阪小学校塀の改修	地山面確認土器出土
137	7・1・17	平、左、五、六、十四	北京終町31－10	稲田　実	個人住宅	地山面確認遺構遺物なし
138	7・1・17	史跡大安寺旧境内	大安寺2丁目1－1	奈良市長	旧大安寺連絡所解体	遺構面まで達しない
139	7・1・25	平、左、二、七、十二	南半田東町8	駒田真澄	共同住宅	盛土内におさまる
140	7・1・30	平、左、五、三、十一	恋の窪2丁目230－18	荒地富亀	個人住宅	盛土内におさまる
141	7・1・31	平、二条大路	菅原町392－15	野口昌生	個人住宅	地山面確認遺構遺物なし
142	7・2・3	西大寺旧境内	西大寺小坊町地内	奈良市長	公共下水道工事	地山面確認遺構遺物なし
143	7・2・7	平、左、四、一、十六	四条大路2丁目822－11	木村　檜	個人住宅	盛土内におさまる
144	7・2・7	平、左、四、二、十二	四条大路1丁目1000－73	簡野重雄	個人住宅	地山面確認
145	7・2・9	平、左、四、三、六	三条桧町170－3	ナカライテクス㈱	事務所建設	遺構面まで達しない
146	7・2・10	平、五条条間路	大安寺7丁目145－3	奈良市長	ポンプ格納庫	地山面確認遺構遺物なし
147	7・2・16	平、右、三、一、八	二条大路南四丁目地内	奈良市長	道路改良工事	遺構面まで達しない
148	7・2・17	平、右、五、六、十三	京終地方東側町4－7	㈱ダイビシ	共同住宅9階建	地山確認　市93－15次
149	7・2・24	西大寺旧境内	若葉台3丁目1948－3	松田匡史・景子	個人住宅	地山面確認遺構遺物なし
150	7・2・28	平、左、二、六、十五	北袋町28	笹田好一・百合子	共同住宅	地山面確認　市94－25次
151	7・3・6	平、左、五、四、十二	大安寺6丁目813－1	岩井和子	事務所建設	地山面確認遺構遺物なし
152	7・3・9	吉備塚古墳	高畑町内	奈良教育大学	吉備塚顕彰碑設置	遺構面まで達しない
153	7・3・14	史跡大安寺旧境内	大安寺2丁目地内	奈良市長	公共下水道工事	遺構面まで達しない
154	7・3・14	平、二条大路	芝辻町2丁目172－10	㈱富士住建	共同住宅	盛土内におさまる
155	7・3・14	平、田村第推定地	四条大路1丁目462－33	植田正義・啓	個人住宅	盛土内におさまる
156	7・3・19	平、右、北辺坊、	西大寺赤田町1丁目659－7	原口頼網	個人住宅	遺構面まで達しない
157	7・3・22	平、左、一、三、十二	法華寺町1351	奈良市長	一条高校防球ネット設置	遺構面まで達しない
158	7・3・22	平、左、四、一、三	四条大路3丁目990－5	㈱ウツミ	建売住宅建設	盛土内におさまる
159	7・3・24	平、左、六、二、十四	八条町637	㈱済生会病院	ＭＲ検査室増設	盛土内におさまる
160	7・3・28	史跡大安寺旧境内	大安寺町1128	奈良市消防本部	消防団詰所の解体	遺構面まで達しない
161	7・3・29	平、左、一、二、二	法華寺町地内	奈良市長	河川改修工事	地山面確認遺構遺物なし
162	7・3・31	平、右、七、四、五	七条西町1丁目627－87	浅見博史	個人住宅	旧造成で削平されている

工事立会一覧(4)

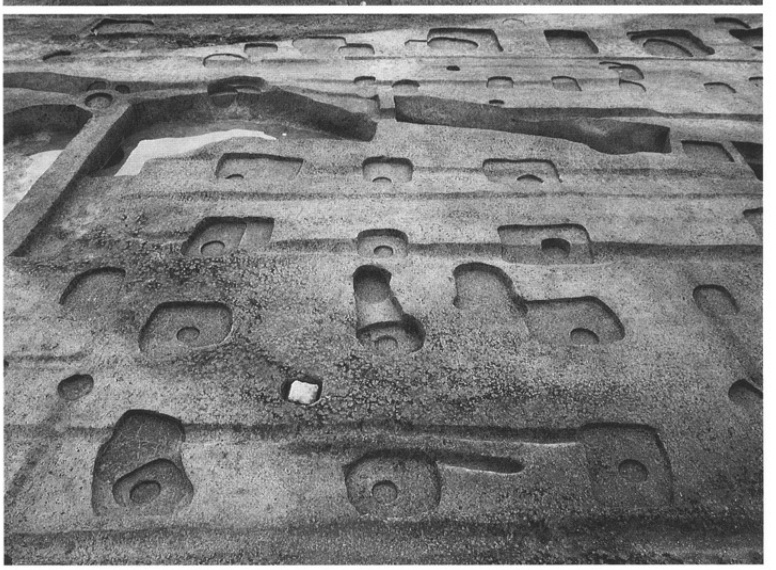
※遺跡名の平、右、七、四、五・六は平城京右京七条四坊五・六坪を表す。

図　　版

1　発掘区全景（右が北）

2　建物ＳＢ257（西から）

3　建物ＳＢ263（北から）



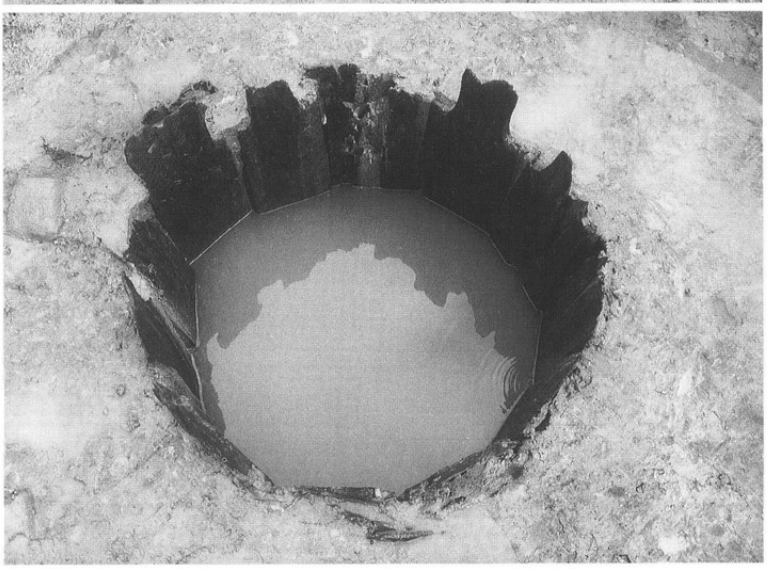
4　建物ＳＢ261（北から）

5　井戸ＳＥ509（西から）

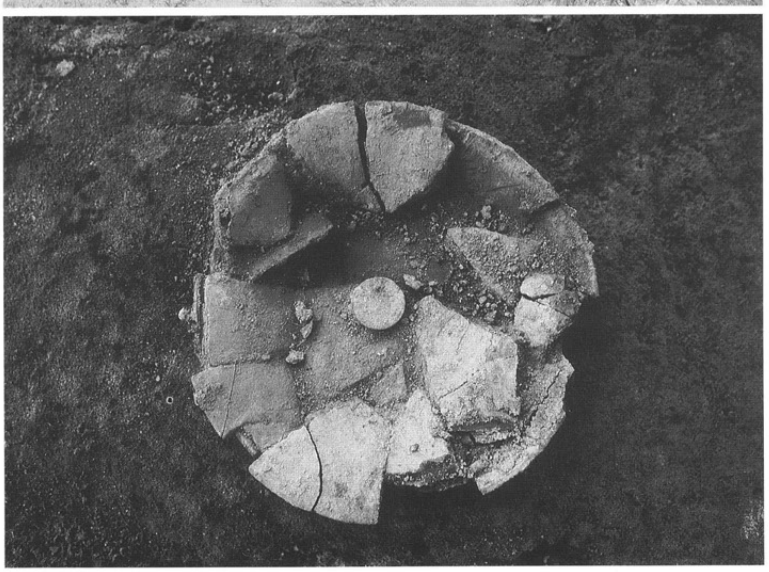
6　井戸ＳＥ509（南から）

7　井戸ＳＥ509（東から）
（枠材取上後の状況）

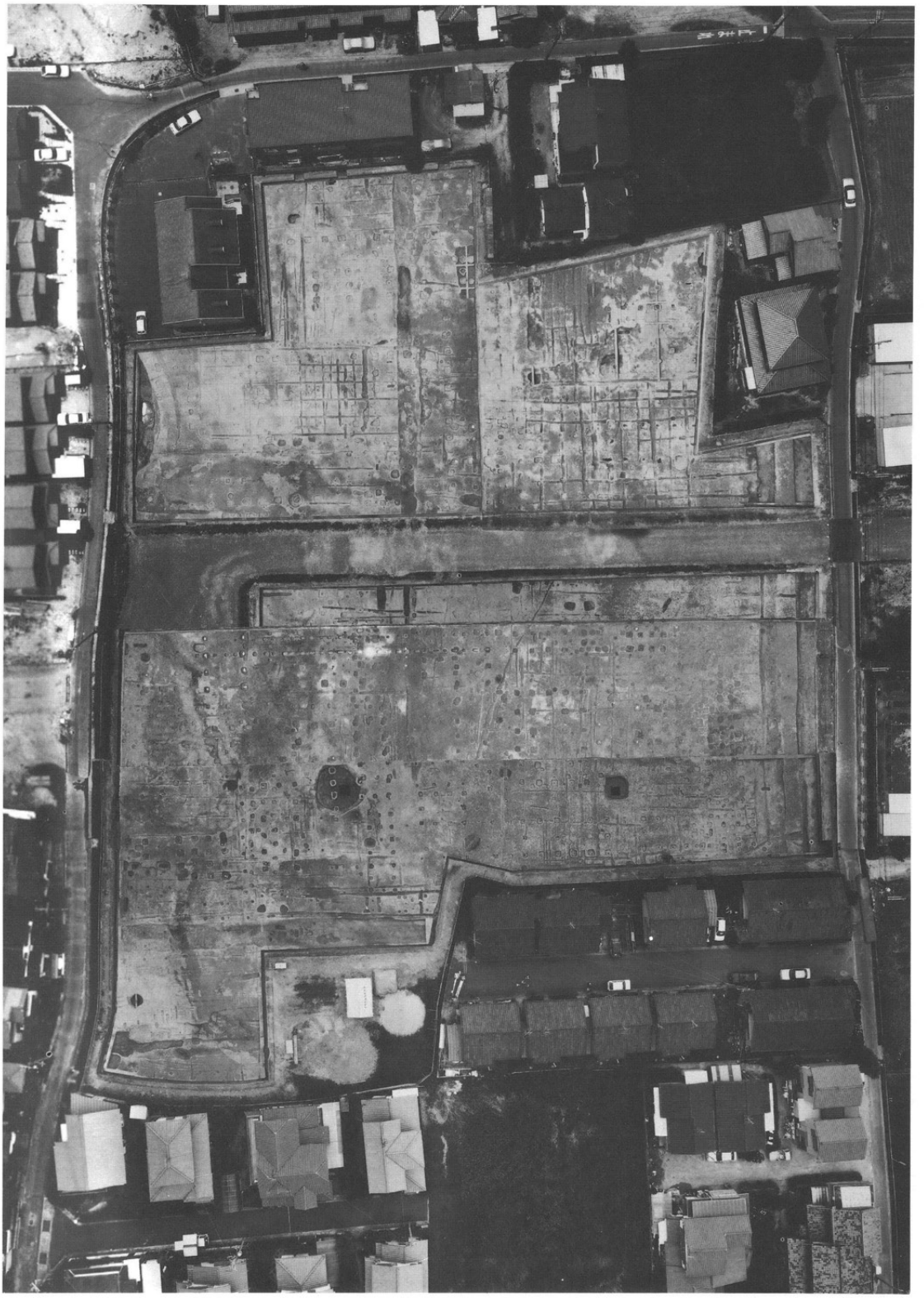
8　井戸ＳＥ508（西から）



9　井戸ＳＥ507(西南から)



10　土器埋納遺構ＳＸ803
（東から）



1　発掘区全景（北が左）